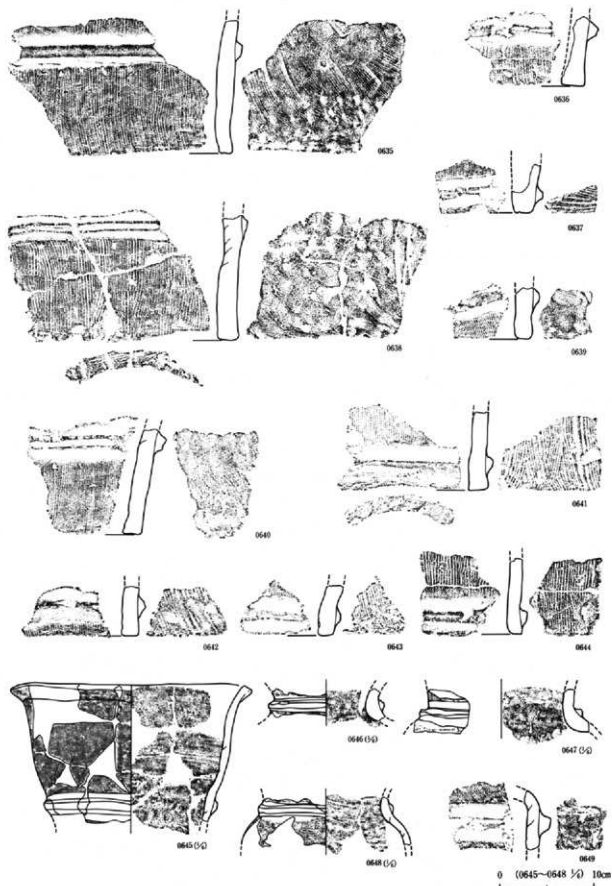
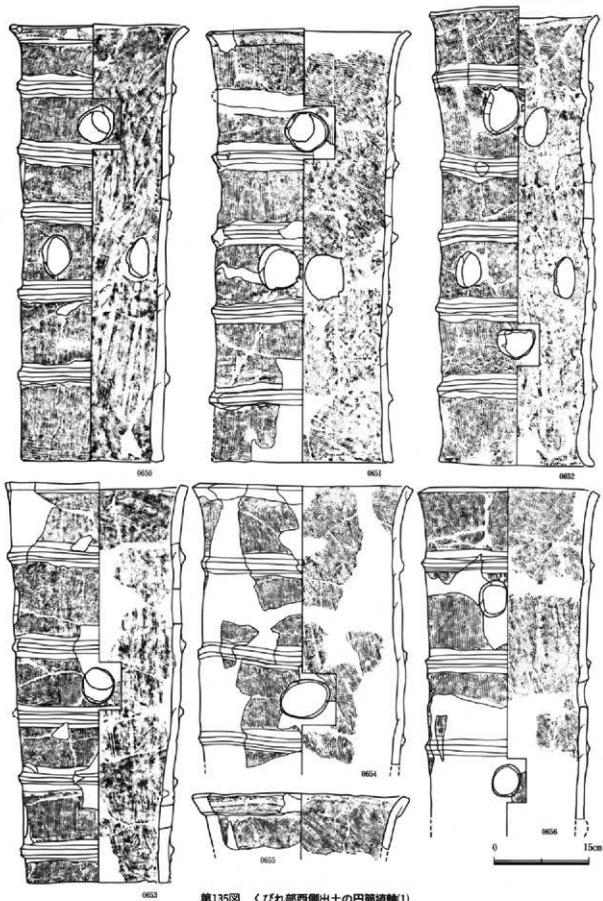


第133図 後円部西側出土の円筒埴輪(5)

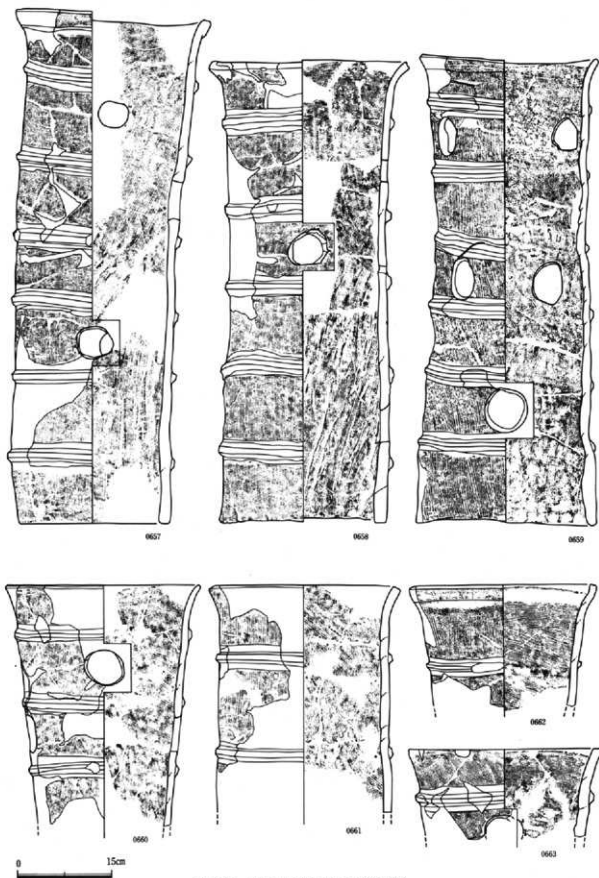
第4章 出土遺物について



第134図 後円部西側出土の円筒埴輪(6)

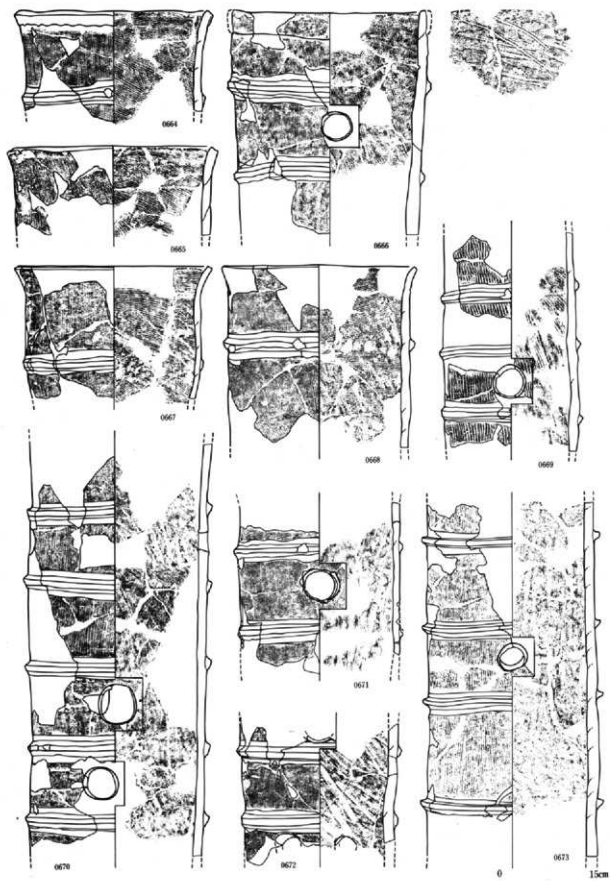


第135図 くびれ部西側出土の円筒埴輪(1)

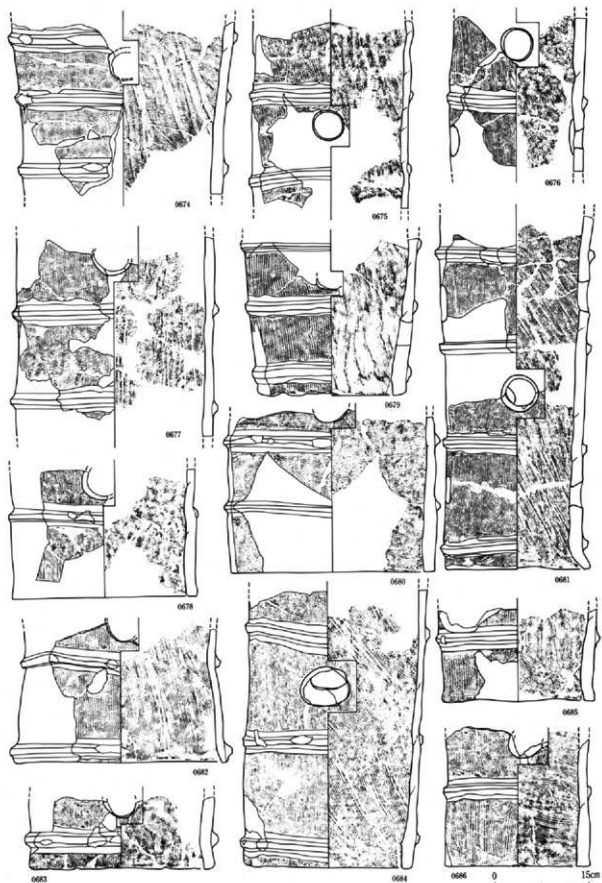


第136図 くびれ部西側出土の円筒埴輪(2)

1. 埴輪

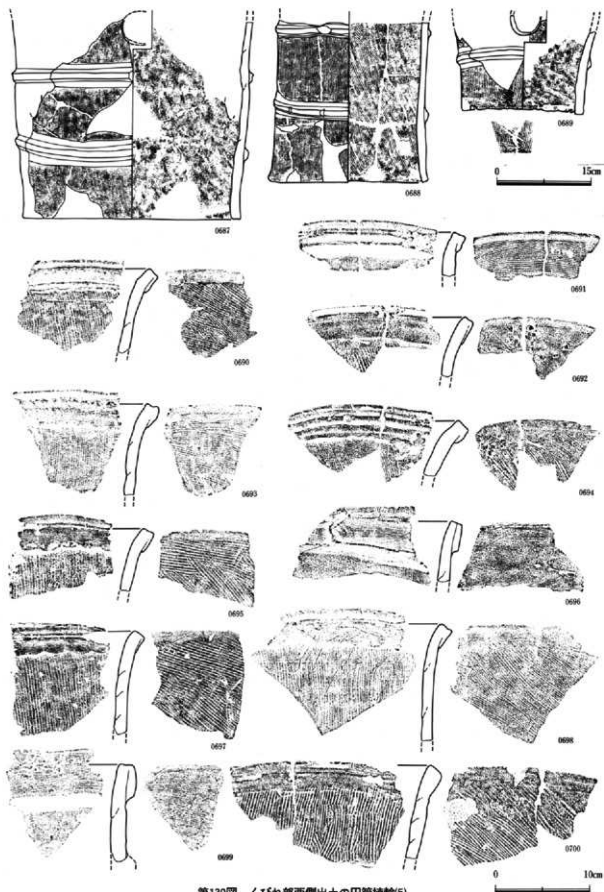


第137図 くびれ部西側出土の円筒埴輪(3)

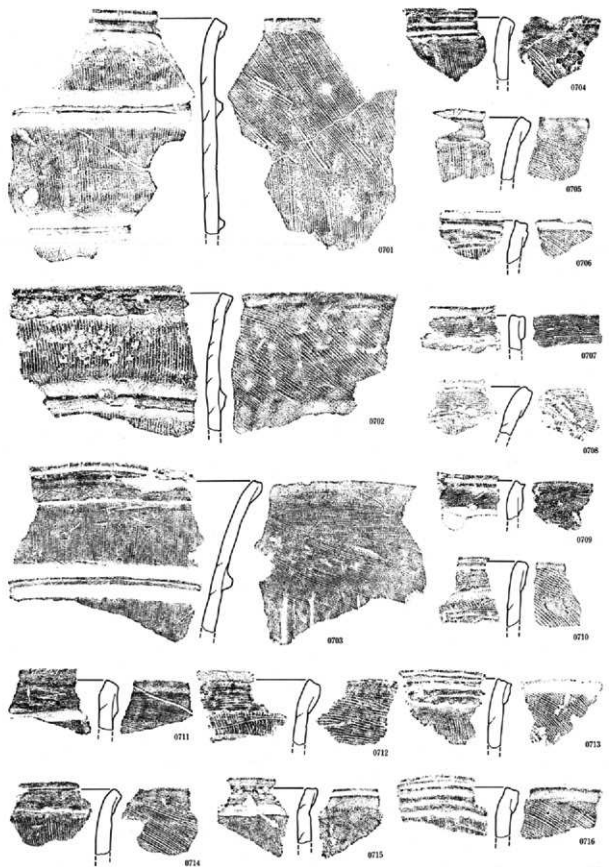


第138図 くびれ部西側出土の円筒埴輪(4)

1. 埴輪

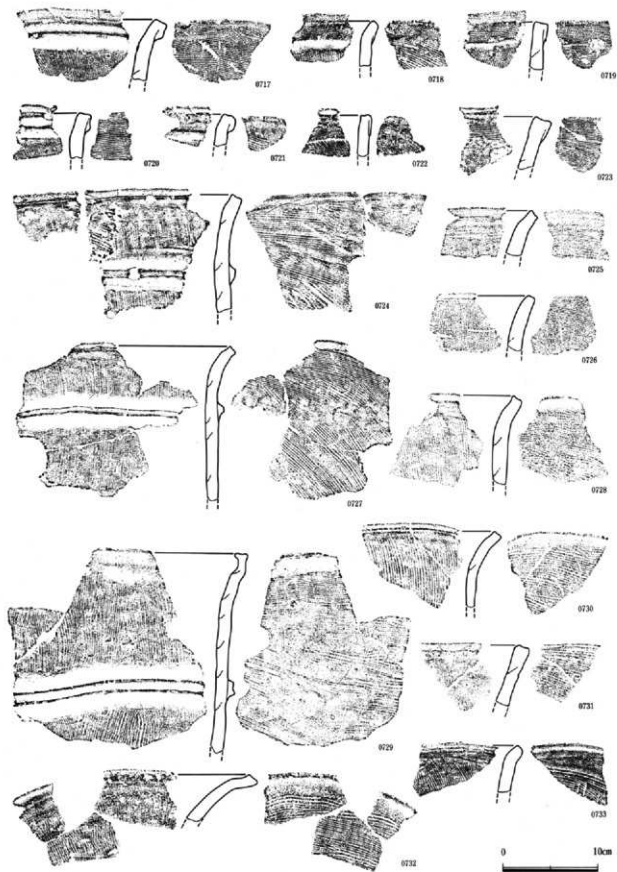


第139図 くびれ部西側出土の円筒埴輪(5)



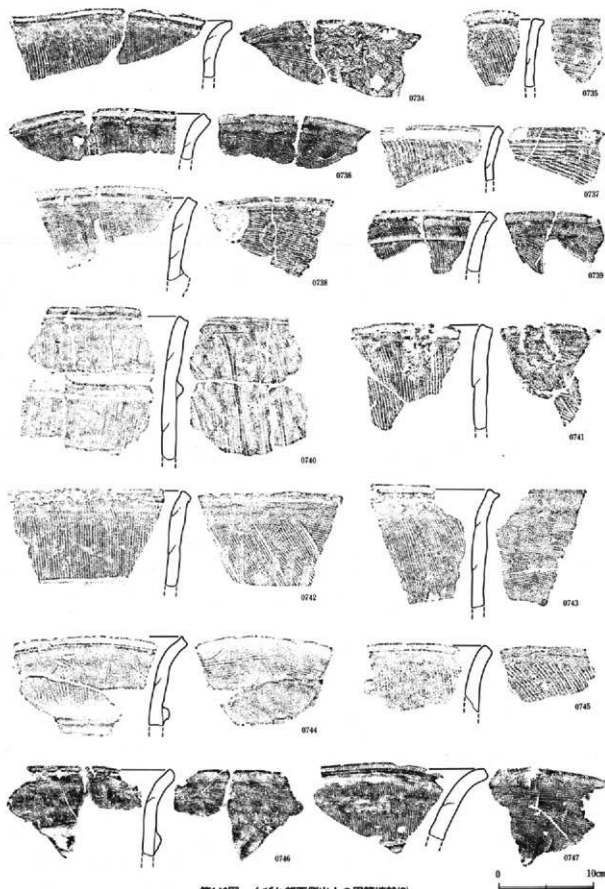
第140図 くびれ部西側出土の円筒埴輪(6)

1. 埴輪



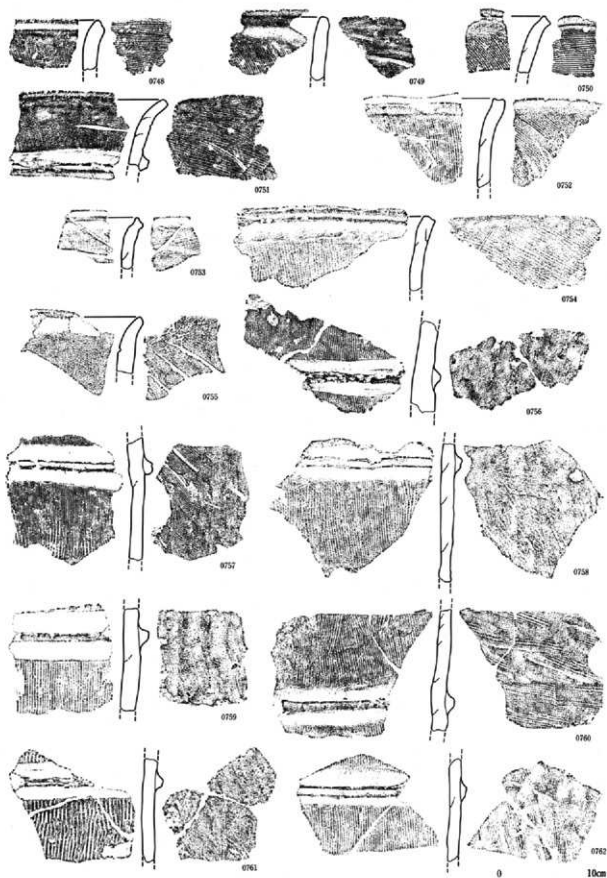
第141回 くびれ部西側出土の円筒埴輪(7)

第4章 出土遺物について

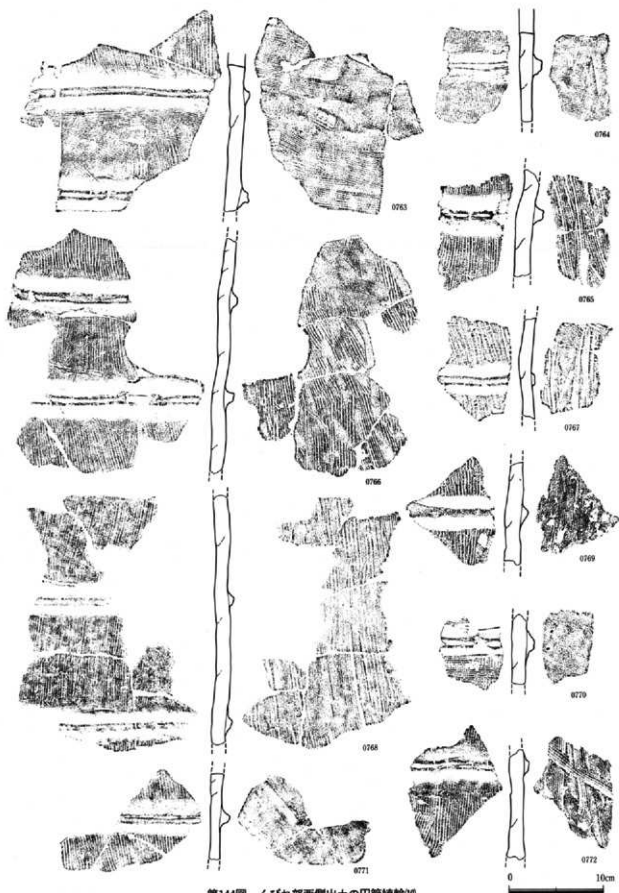


第142図 くびれ部西側出土の円筒埴輪⑧

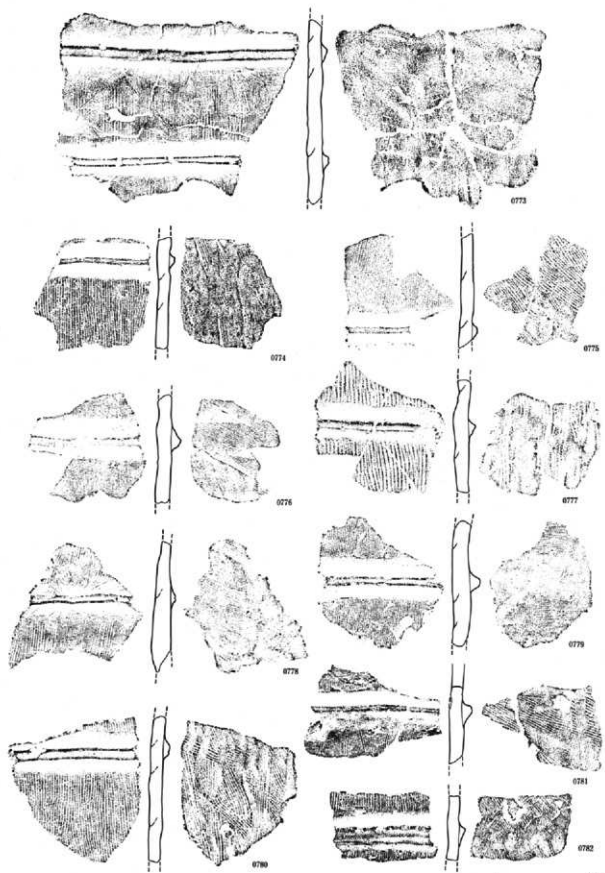
1. 埴輪



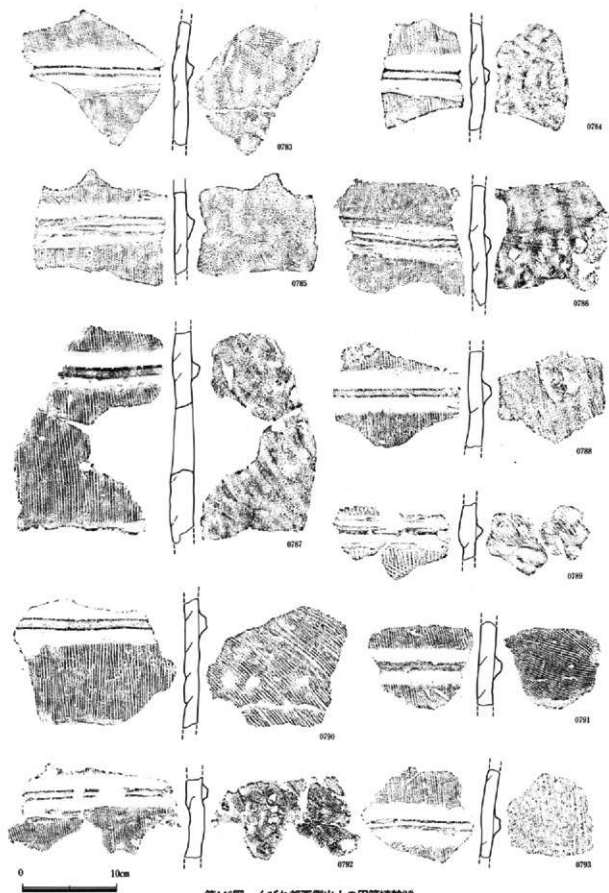
第143図 くびれ部西側出土の円筒埴輪(9)



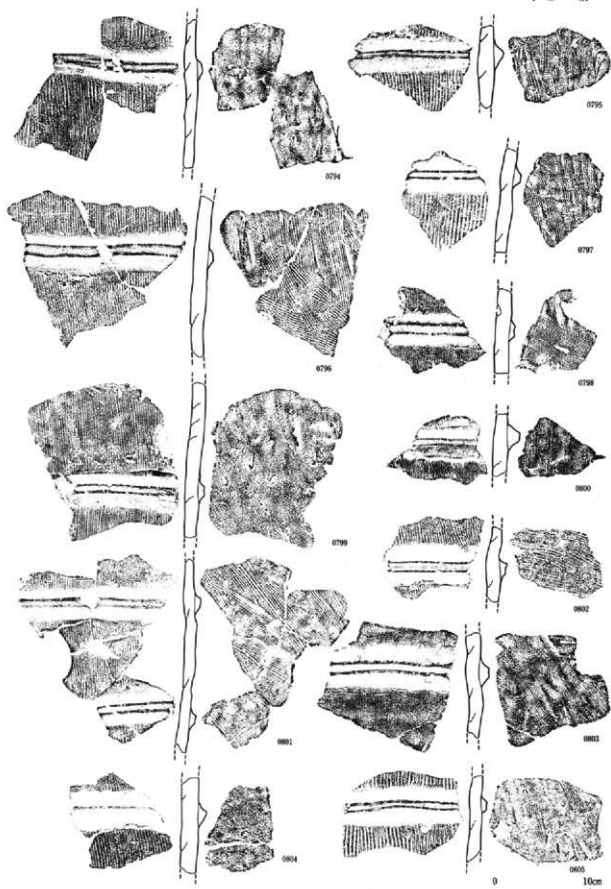
第144図 くびれ部西側出土の円筒埴輪⑩



第145図 くびれ部西側出土の円筒埴輪(II)

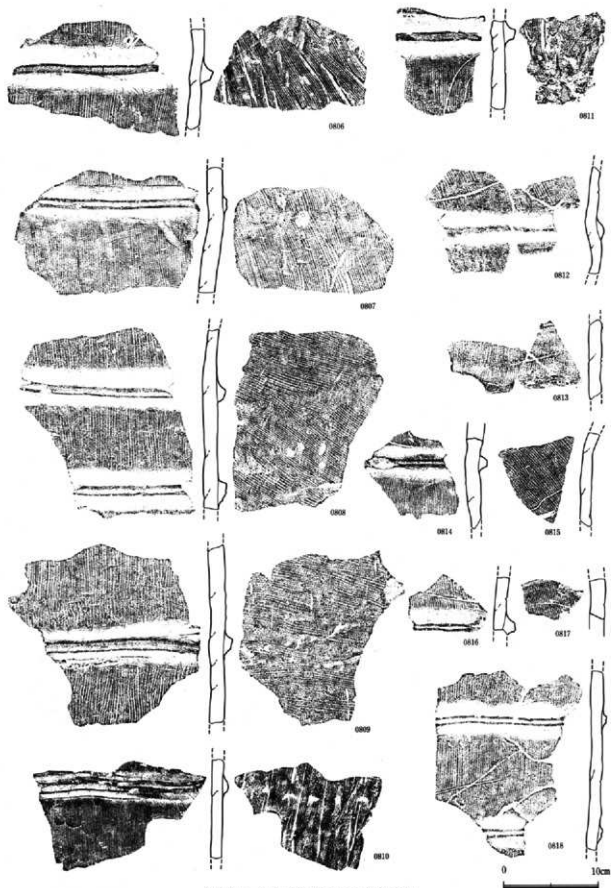


第146図 くびれ部西側出土の円筒埴輪20

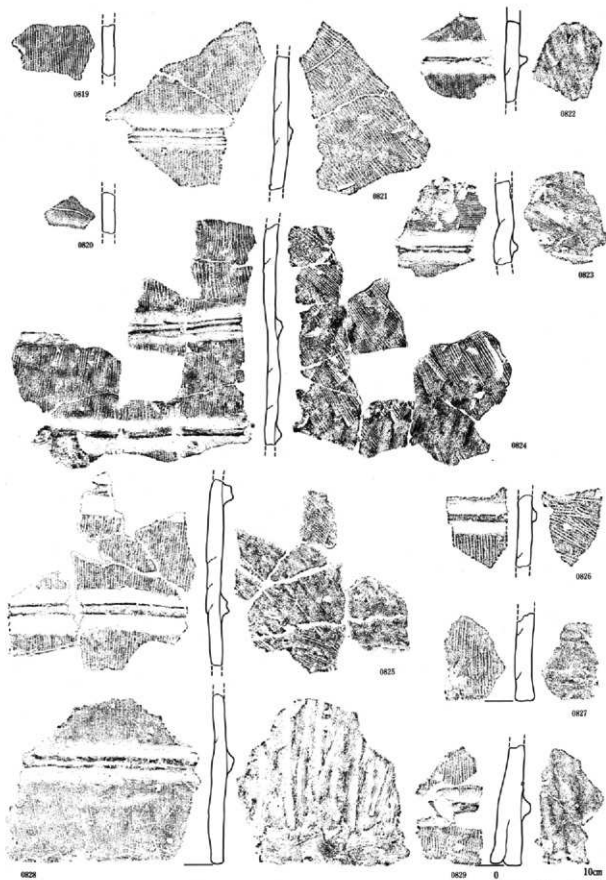


第147図 くびれ部西側出土の円筒埴輪13

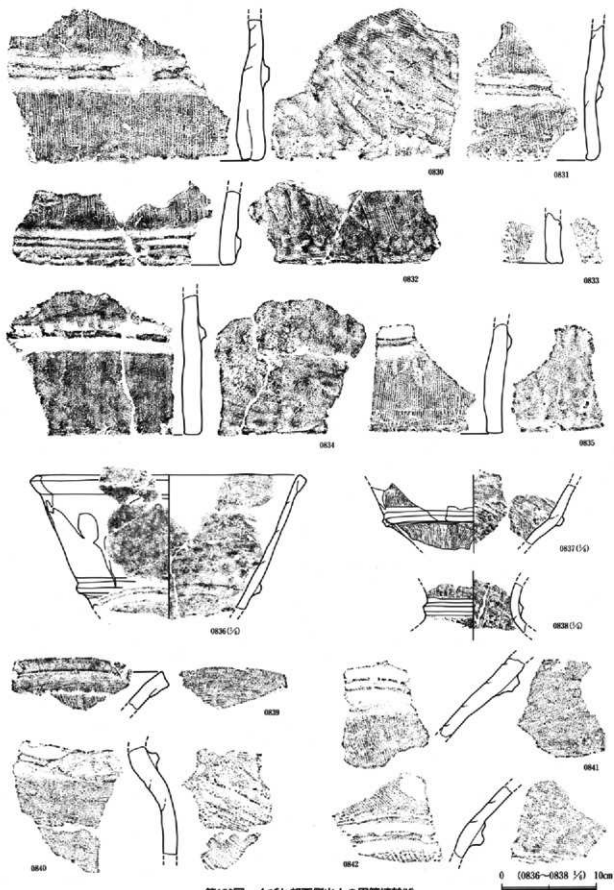
第4章 出土遺物について



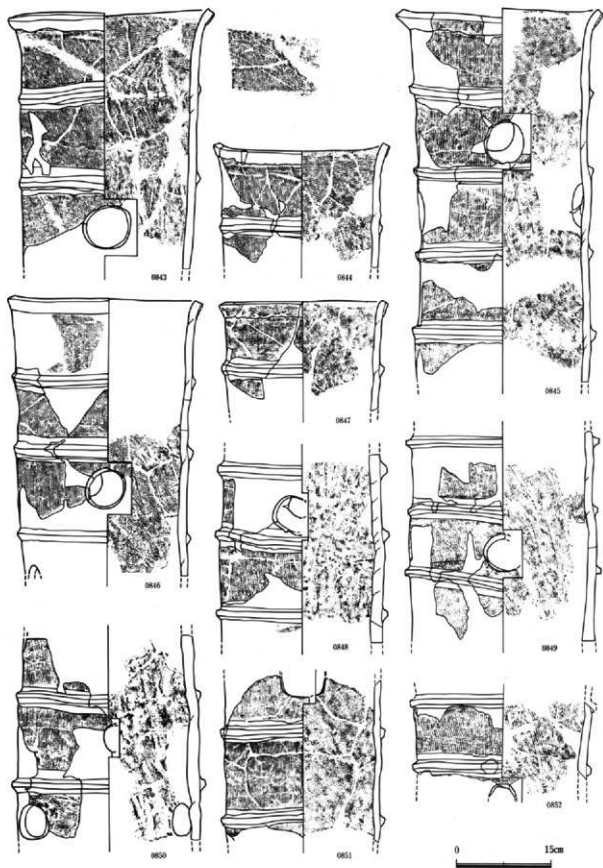
第148図 くびれ部西側出土の円高埴輪16



第149図 くびれ部西側出土の円筒埴輪19

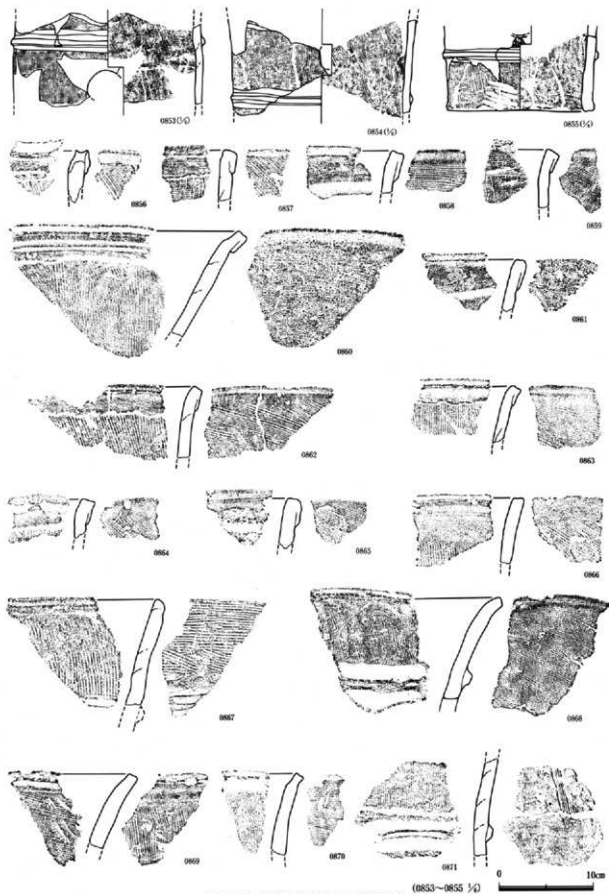


第150図 くびれ部西側出土の円筒埴輪片



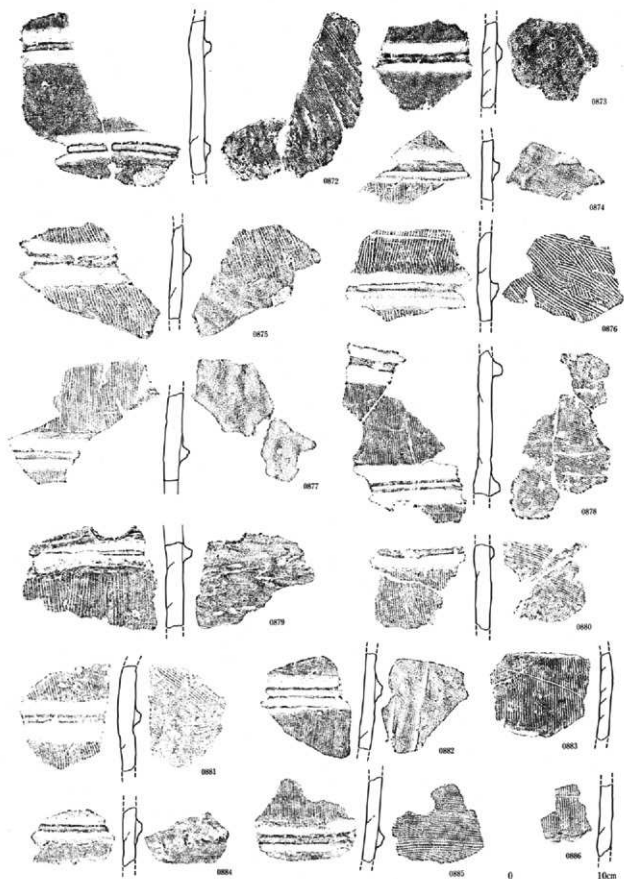
第151図 前方部西側出土の円筒埴輪(1)

第4章 出土遺物について

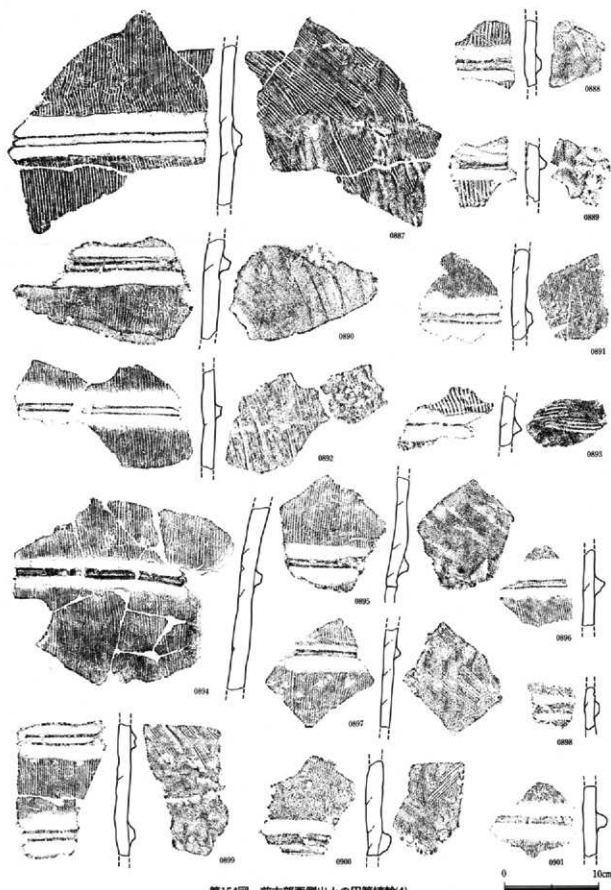


第152図 前方部西側出土の円筒埴輪2

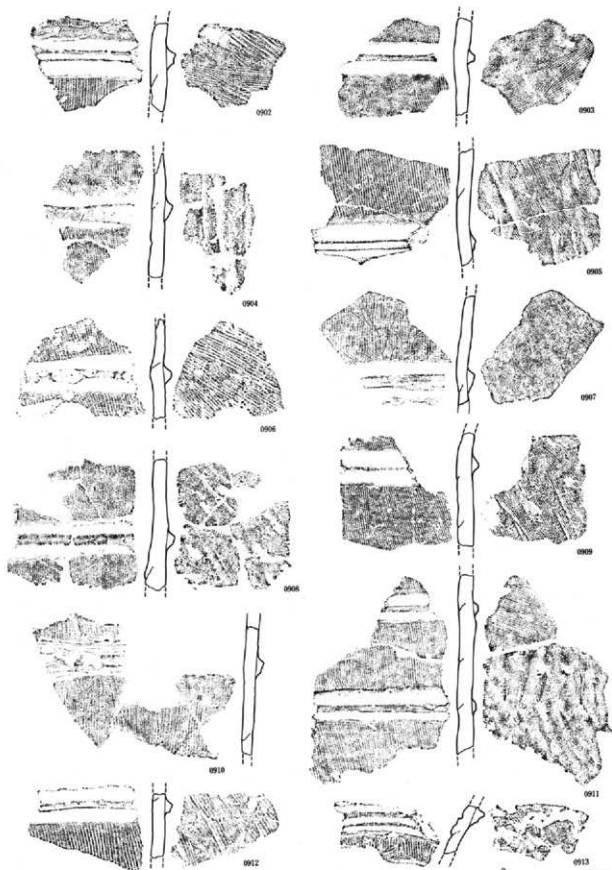
1. 埴輪



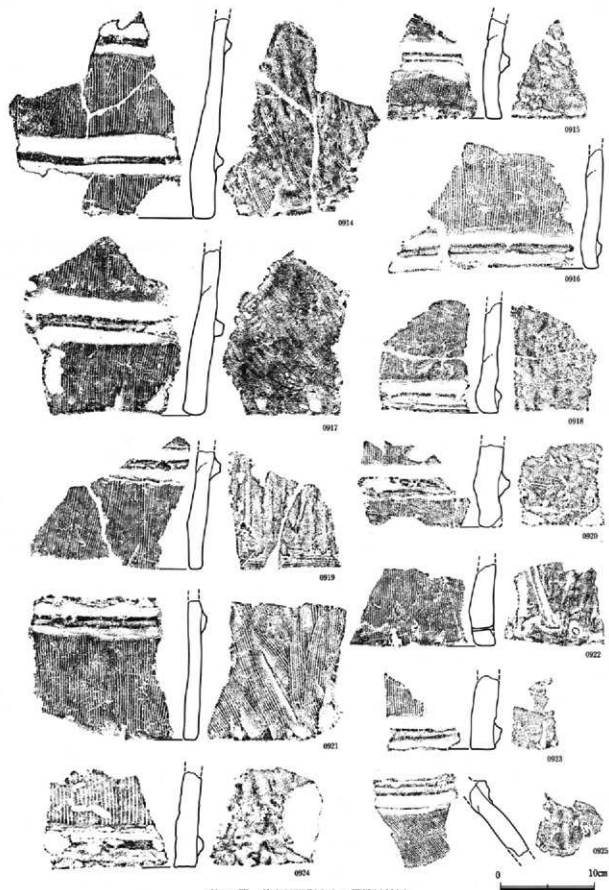
第153図 前方部西側出土の円筒埴輪(3)



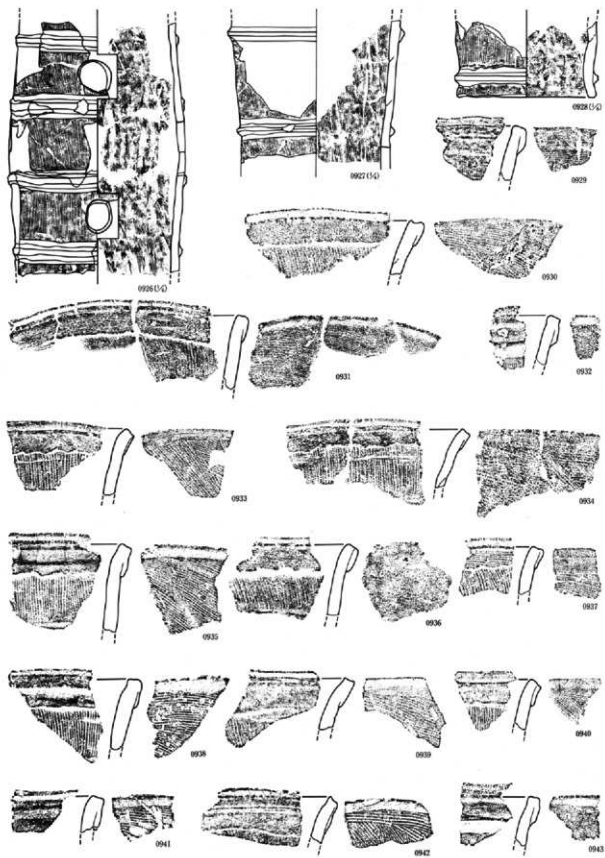
第154図 前方部西側出土の円筒輪4)



第155図 前方部西側出土の円筒埴輪(5)

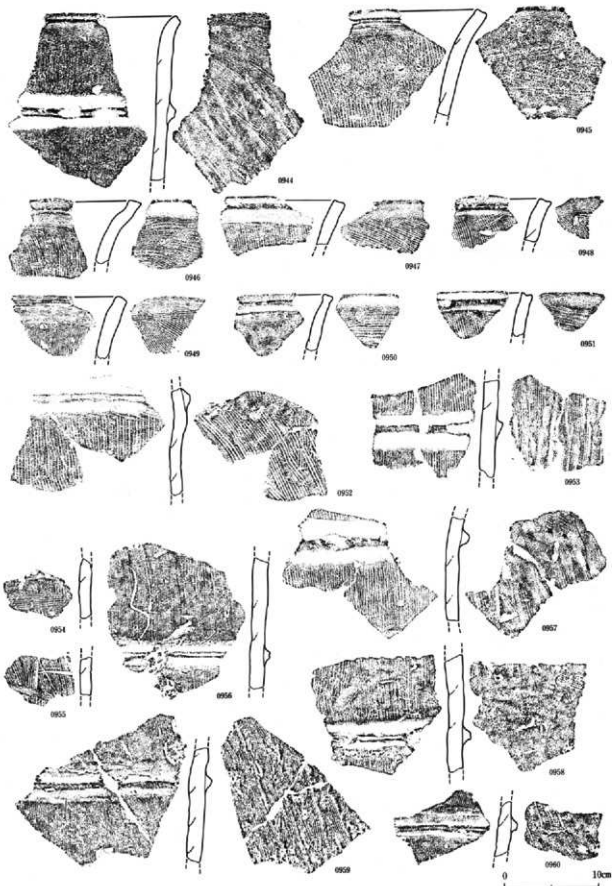


第156図 前方部西側出土の円筒埴輪(6)

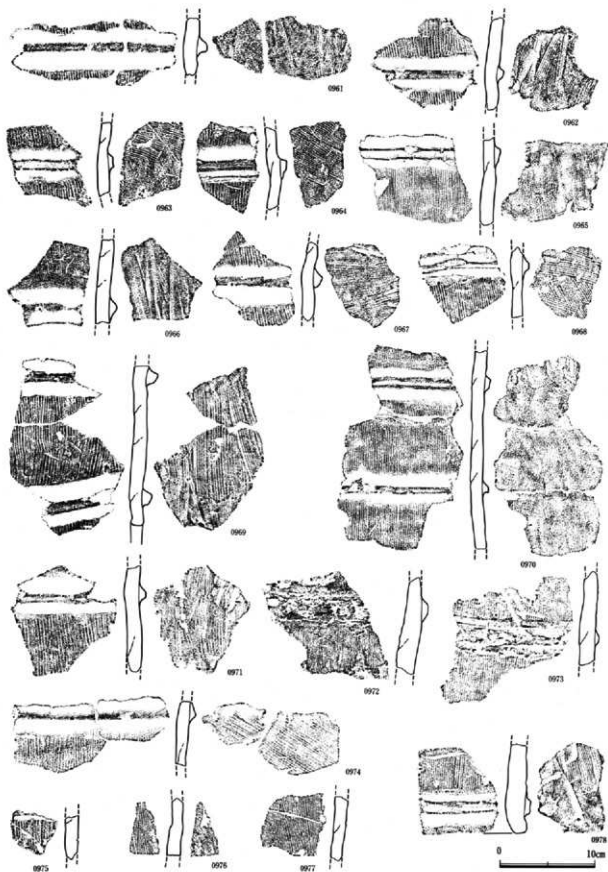


第157図 前方部西北隅出土の円筒埴輪(1)

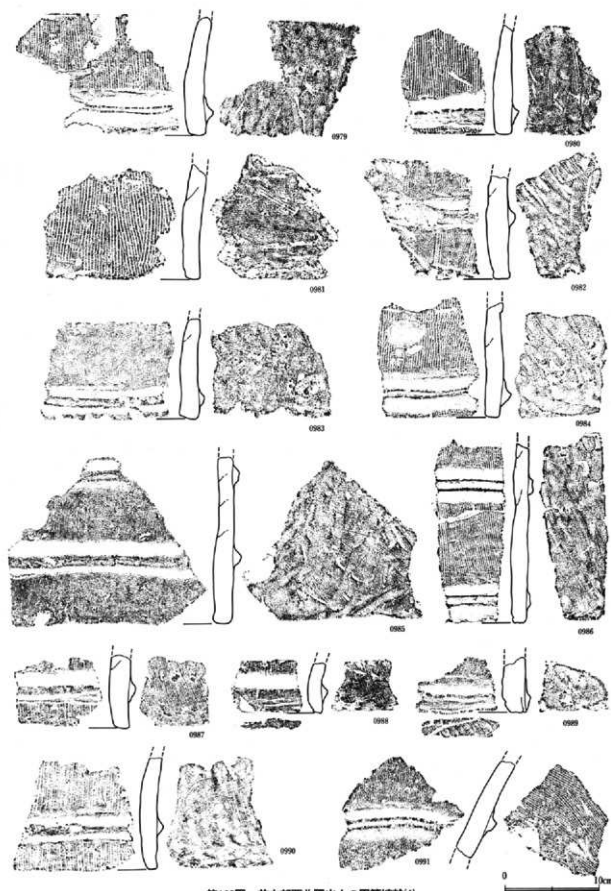
0 (0926~0928) 1/2 10cm



第158図 前方部西北隅出土の円筒埴輪②

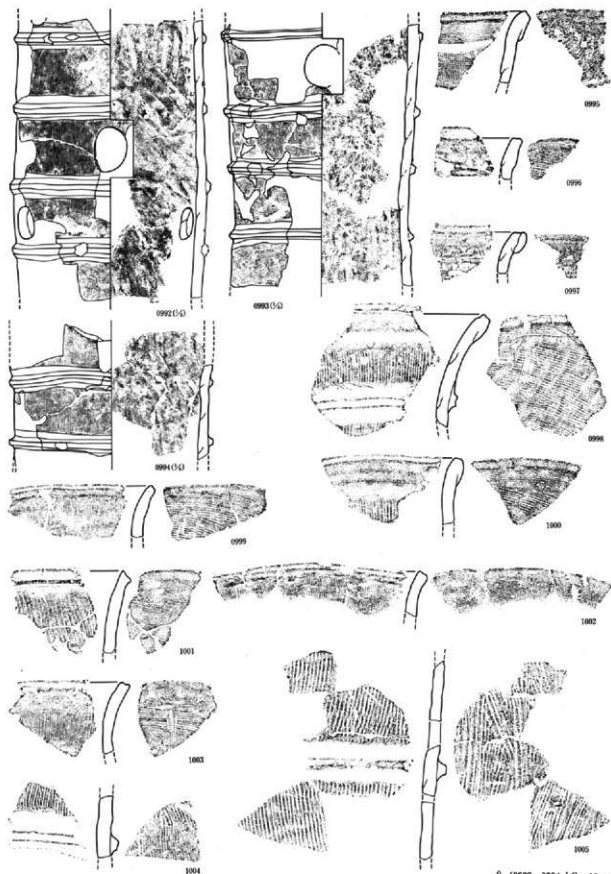


第159図 前方部西北隅出土の円筒埴輪(3)

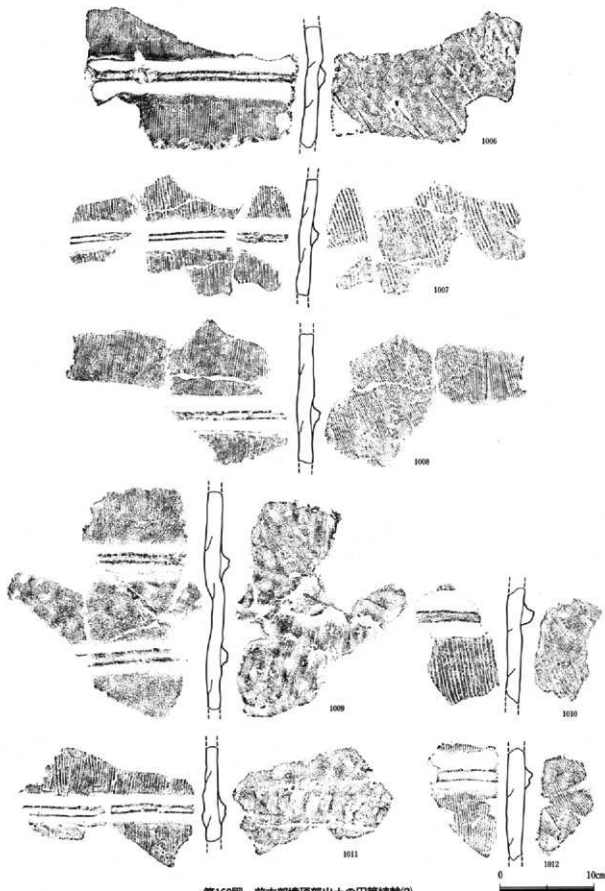


第160図 前方部西北隅出土の円筒埴輪(4)

1. 埴輪

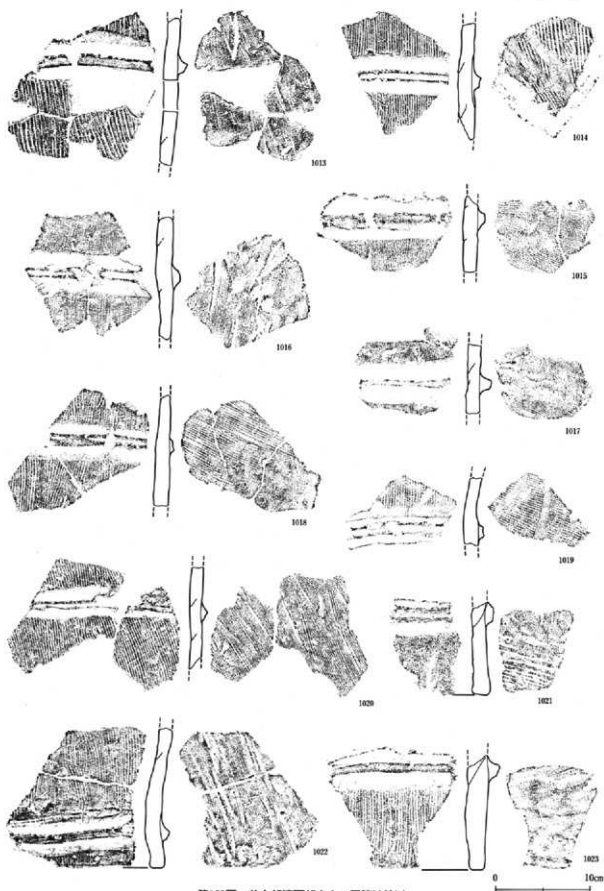


第161図 前方部墳頂部出土の円筒埴輪[1]

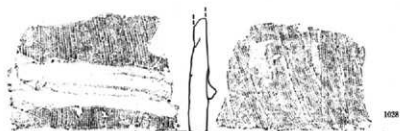
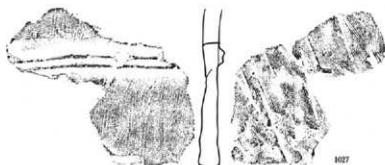
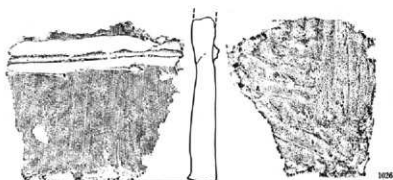
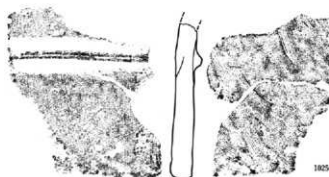
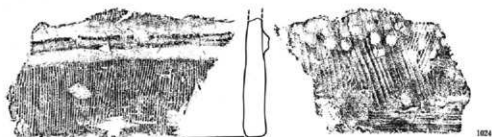


第162図 前方部墳頂部出土の円筒埴輪②

1. 埴輪

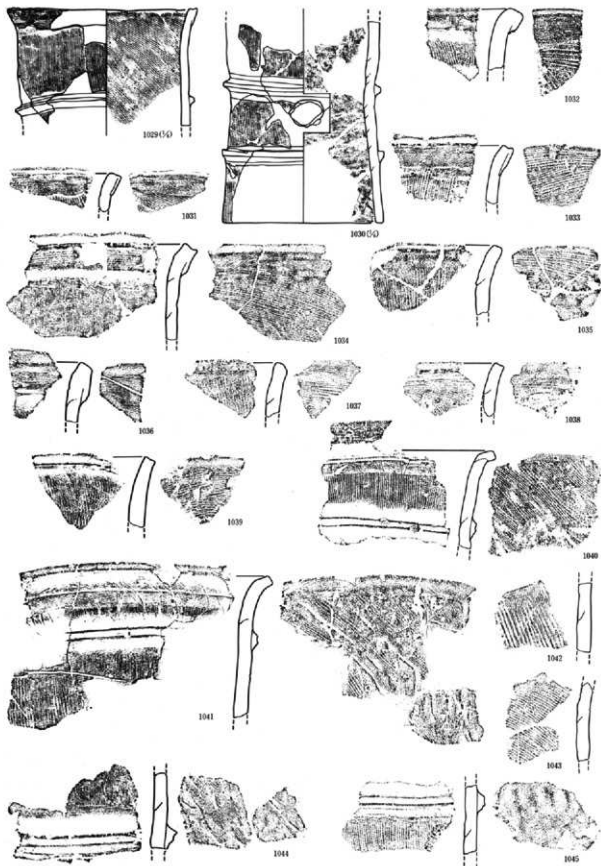


第163図 前方部墳頂部出土の円筒埴輪(3)



第164図 前方形墳頂部出土の円筒埴輪(4)

1. 埴輪

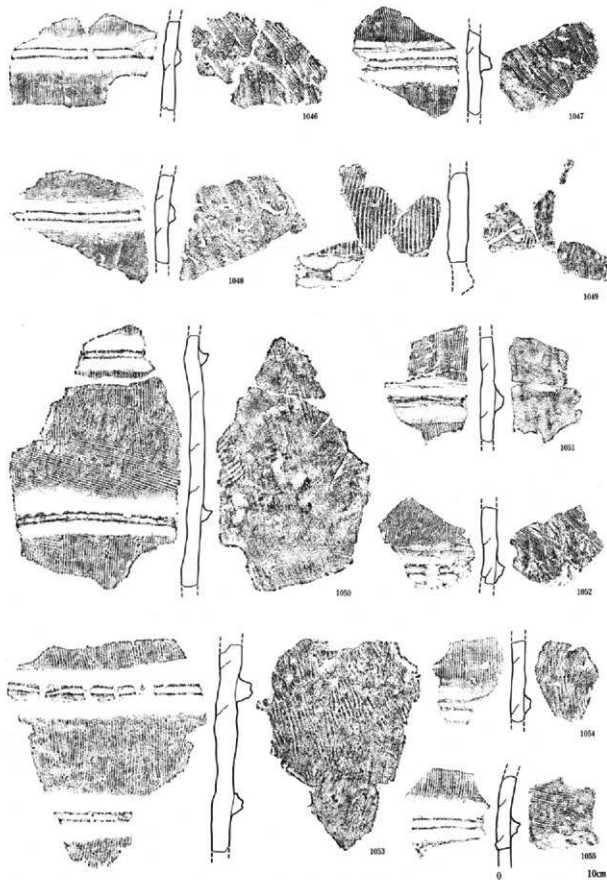


第165図 鞍部墳頂部出土の円筒埴輪(1)

(1029~1030 1/2)

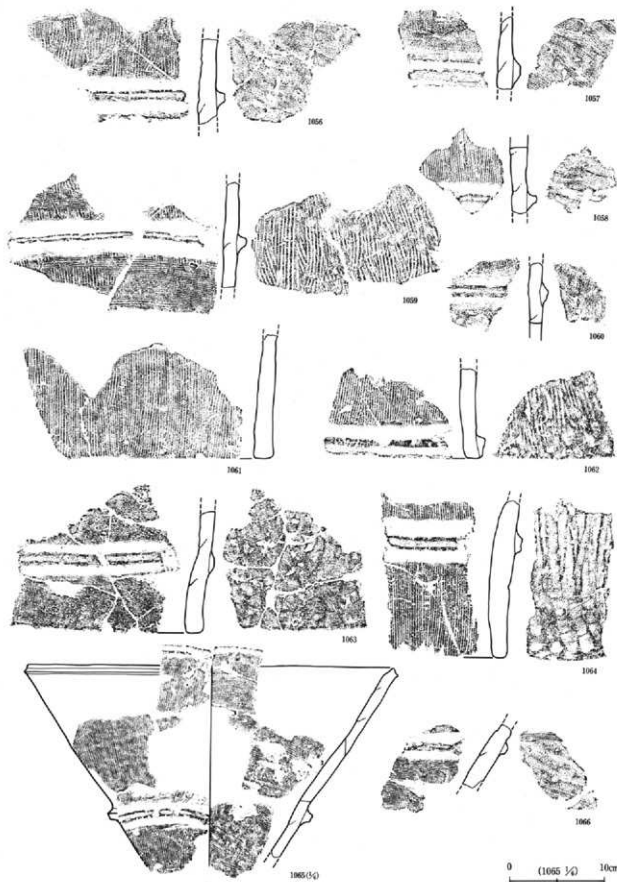
0 10cm

第4章 出土遺物について



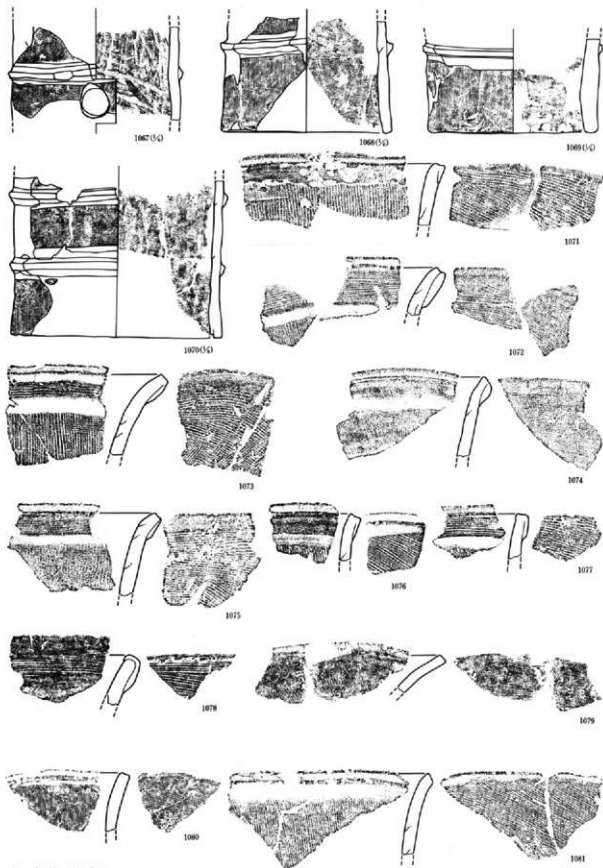
第166図 鞍部墳頂部出土の円筒埴輪2

1. 埴輪



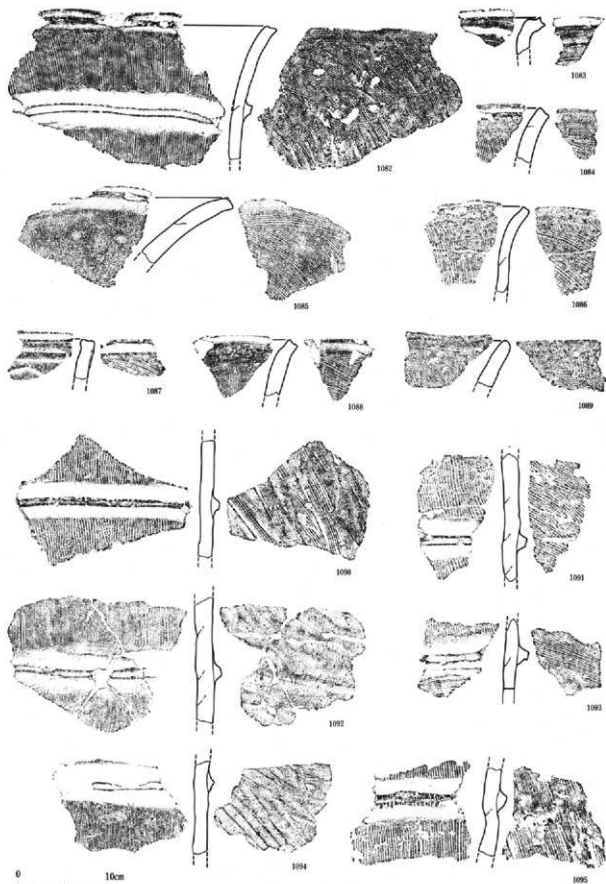
第167図 鞍部墳頂部出土の円筒埴輪(3)

第4章 出土遺物について

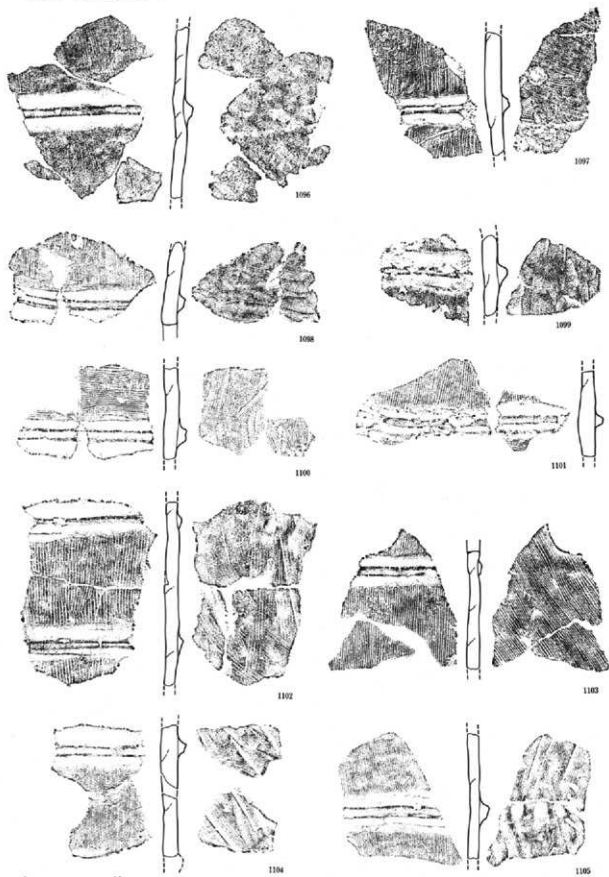


第168図 後円部墳頂部～上段出土の円筒埴輪(1)

1. 埴輪

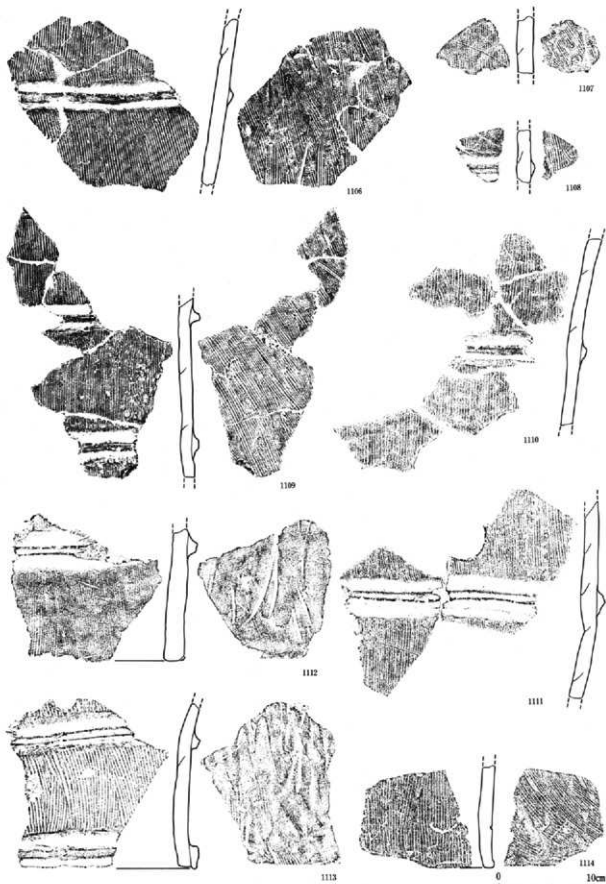


第169図 後円部埴頂部～上段出土の円筒埴輪(2)



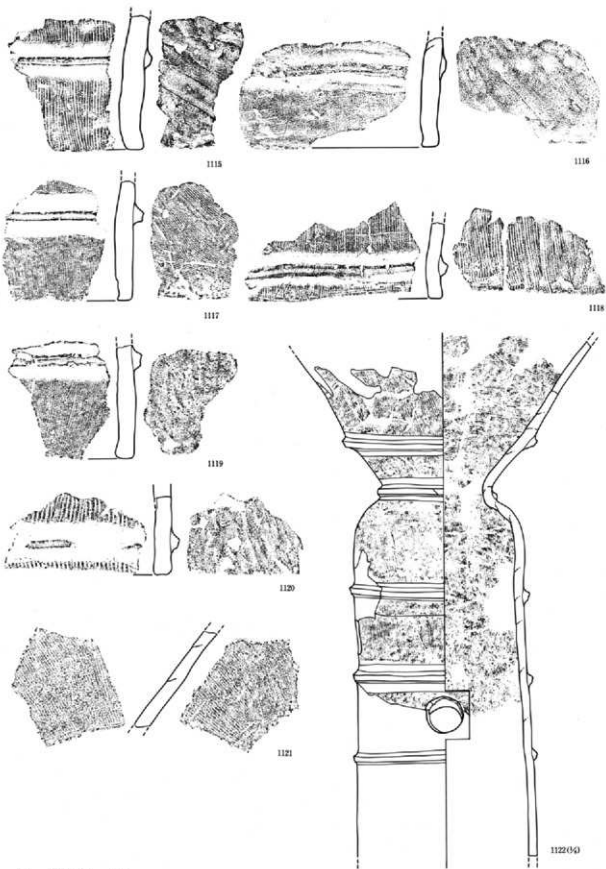
第170図 後円部墳頂部～上段出土の円筒埴輪(3)

1. 埴輪

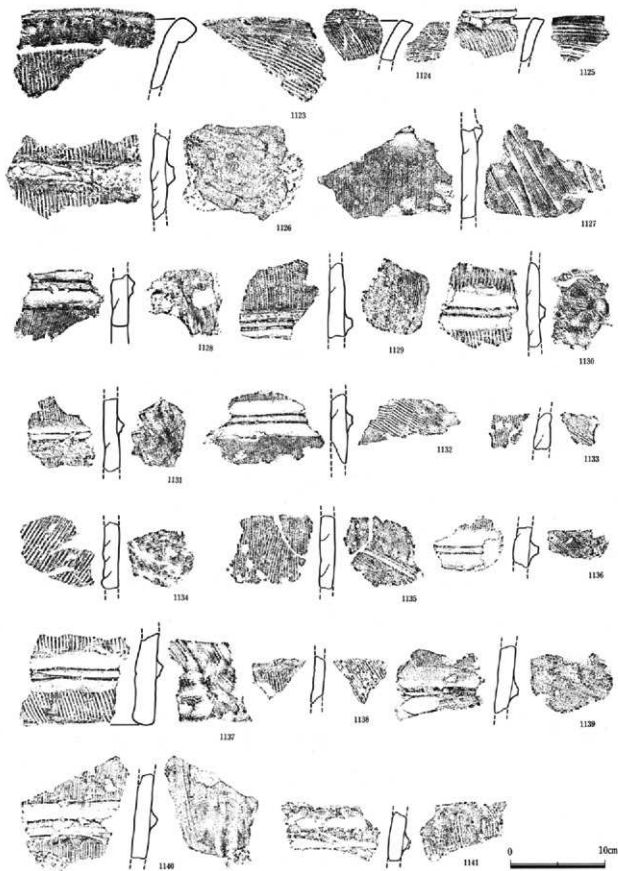


第171図 後円部墳頂部～上段出土の円筒埴輪(4)

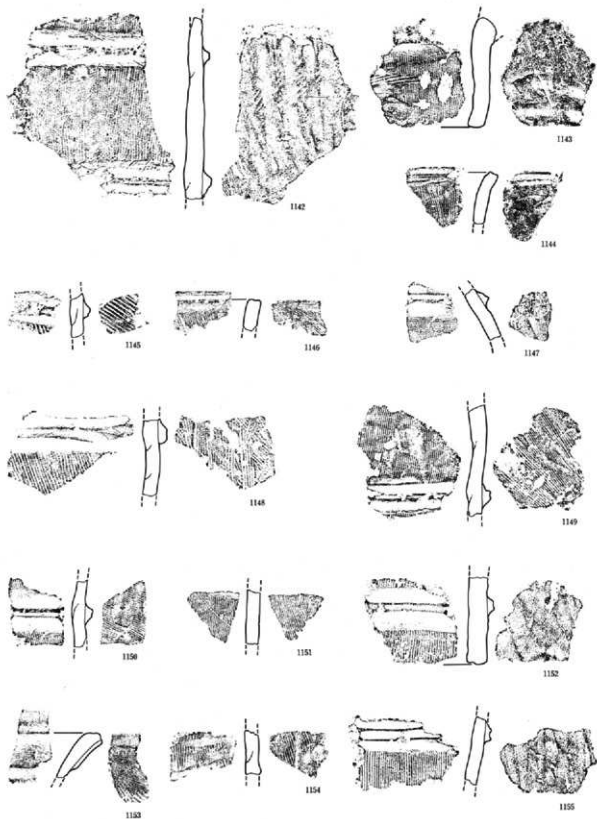
第4章 出土遺物について



第172図 後円部墳頂部～上段出土の円筒埴輪(5)



第173図 周墳出土の円筒埴輪(1)



0 10cm

第174図 周堀出土の円筒埴輪(2)

(2) 形象埴輪

本古墳から出土した形象埴輪の種類は、家形埴輪、器財埴輪、人物埴輪、動物埴輪がある。器財埴輪は盾、瓢、大刀、帽子の存在を確認した。動物埴輪には馬、鳥、鶏を確認した。人物埴輪の中には盾持ち人も含まれている。本項ではこれらについて順次掲載し、観察内容を記述している。この他に器財埴輪や人物埴輪の基台部を構成していたと考えられるが本体の欠損によりその種類を確定するに至らなかった資料を形象埴輪の基台部とし、種類を確定し得なかった資料を器種不明の形象埴輪として掲載した。資料に付した番号は円筒埴輪からの通番である。また、出土位置として記した古墳の部位は、円筒埴輪の項目で提示した第7表の内容と同様である。

① 家形埴輪

家形埴輪の出土状況

第3章3(2)で記したよう家形埴輪の樹立は、前方形部墳頂部と後円部墳頂部にその原位置があり、その2箇所から墳丘各所に破片が移動・転落したものと考えられる。前方形部墳頂部出土の個体は、入母屋造家形埴輪(1156)の他に、破片資料の検討から2個体以上の存在が想定される。後円部墳頂部からは1188~1240の破片資料を主体として構成される家形埴輪の他に4個体以上の存在が想定される。

家形埴輪(1156)

前方形部の墳頂部平坦とその周辺から出土した。

入母屋造で、上屋根と、下屋根から四柱部が分割成形・焼成されたものと考えられる。高さ166.5cm、最大幅82.4cm、奥行36cmに復元された。四柱部(壁体と基台の区別は明確でない)の平面形は長方形を意識しているが、壁面は各辺の中央部で外側に張り出している。基底面における計測値は平側62.4cm、妻側28cmである。高さは大型破片の部位を確認しながら作業を進めた結果、79.5cmに復元できた。

四隅は、縦位に粘土を突帯状に貼り付けることにより隅部を強調している。この隅の平側には2本1単位のへら描きによる山形文が6~9単位配され、区画内には赤彩が施されている。

平側の壁面の上位、中央には直線による切り込みの一部分がみられ、窓あるいは入り口部分の表現があったことが想定される。もう1片、同様の切り込みの残存する破片があることから反対側の壁面にも同様の透孔が配されていたものと考えられる。

妻側の壁面、中央には、基底から上方10.5cmの位置に径の大きさが、縦3.9cm、横3.0cmの小孔が穿つてある。また、下屋根との接続点に近い壁面上位にも径縦6.9cm、横6.7cmほどを復元することができる円形の透孔が配されている。

器面は、四隅部分にナブ調整を施す他は各面ともハケメを充填している。ハケメは妻側の一部を除きタテ方向である。

下屋根部分の残存は極めて悪く、屋根の軒先部分1点と、後部分の破片1点のみを確認するにとどまり、他に分割焼成した上屋根を支える受け部と考えられる破片を4点確認した。軒先部分は平側を65.6cm、妻側を41.6cm、高さを22.6cmで復元したが、軒の傾斜や受け部への移行部分は今後検討する余地を多く残している。受け部は上面を平坦に成形していたと考えられるが、上屋根を受けるための筒状のかえり部分の存在を確認することはできなかった。

下屋根の軒先部分は外面に幅3.0cmほどに粘土帯を貼り肥厚させ、ここにも壁体部分の隅と同様、2本1単位のへら描きによる山形文を配している。四隅の稜をなす部分も軒先同様に粘土帯の貼付し、文様配置をおこなっていたことが残存破片からうかがい知ることができる。

上屋根は高さ63.6cm、最大幅82.4cmを測る。下側の幅は前後面で大きく異なる。前面は47.8cm、後面は56.4cmである。流れの傾斜は約13度と極めて強く、妻側からは視覚的にみて極めて扁平に映る形状である。平側からの形状は、両側部の端が下位に向かって内側に傾斜する逆台形状を呈している。

流れの上半部には幅3.0~4.0cmの格子状棟飾りが貼り付く。横方向の2段の粘土板は12.0cmの間隔を保ち、垂直方向の5本の粘土板と交差する部分には縦長棒状の突起を貼り付けている。上段のこの突起

第4章 出土遺物について

の直下には径1.0cmの穿孔が配されている。流れの下半部は残存が極めて悪いが、ヘラ描きによる蕨手文が配されていたと考えられる。

破風は流れの妻側の端部を外側に折り返したもので上位ほどその幅が大きい。先端、他の事例の千木にあたる部分は扇字形に粘土板を取り付け、横位に3.0cm前後小径の穿孔を2個配置している。妻側には壁体部と同様の山形文を6単位配して区画内に赤色塗彩を施している。

上屋根の成形は、流れの中央部分を大きな粘土板で成形し、その後、小口の破風寄りに三角形の粘土板を接合している。中央部分の成形は、粘土紐の積み上げによると考えられるが、その後の調整によりその痕跡は識別が困難になっている。斜上方向にハケメが残っているので横方向の粘土また中央板を接合したのであろうか。または中央部分を小口部分に合わせ箱状に成形後、三角形の粘土板部分を延ばした可能性もある。流れ部分の成形後、棟部分を上にのせて上方を閉じている。この部分は外面横方向の飾り板の上段部分に相当する位置より上位である。アーチ状に粘土紐をわたしている接合痕がみられる。破風および妻側上端の部分が棟部分のあとに連結される。

器面調整は流れの部分はハケメである。中央はタテ方向に近いハケメを下位から上位に向けて重ねている。上位に行くにつれてハケメの方向にヨコ方向に近くなっている。内面、破風寄りには内側から破風の方向に向かってヨコ方向のハケメを施している。破風部分は上、下方向の調整である。棟部分はヨコ方向のナデが加えられているが接合痕の残る部分もある。

前部出土の家形埴輪 (1157~1168・1170)

前部出土の墳丘各所から出土した資料である。上屋根部分から、基台部に向けて順次掲載した。

1157は東北隅から出土した入母屋造上屋根の大型破片である。流れから破風の部分が残存する。流れには格子状板飾りが付けられていた痕跡がみられる。破風の妻側には縦方向に板状の突起が付く。1156

の破風にはこの突起は認められない。1158・1159は前部墳頂部出土、1161は前部東側出土の上屋根の破風の破片である。流れから短く屈曲する。1158にはヘラ描きによる2本1単位の鋸歯文が配される。1159は破風にヘラ描きの鋸歯文を、流れに二重の円弧あるいは蕨手文が配されている。1161も流れから破風の破片である。流れには横方向の格子状板飾りが破風には2本1単位の鋸歯文が施される。

1160は前部西側出土で上位、棟部分の破片である。鋸歯文の構成は1156と1158・1161に共通性がみられるが個体の識別は困難である。

1162は前部墳頂部出土の上屋根下端の破片である。破風の表現はない。下端に粘土帯を貼り肥厚させるがヘラ描きでくの字状の文様が配される点が1156と異なる。

1164は幅4.3cmの粘土板で、上屋根の上位に位置する格子状板飾りの一部である。1156のそれよりもやや幅が狭い。1163は西北隅、1165は前部西側、1167は墳頂部の出土である。いずれも板状を呈し、1163・1165は外面にヘラ描き文が配される。

1168は墳頂部出土の破片で、上位に径を細めながら立ち上がる。分割成形技法で製作される下屋根の一部として上屋根を受ける部分の可能性が考えられる。

1170は墳頂部出土の下屋根の破片と考えられる。1156と同一個体の可能性が考えられる。外面にヘラ描きによる蕨手状文が施されている。

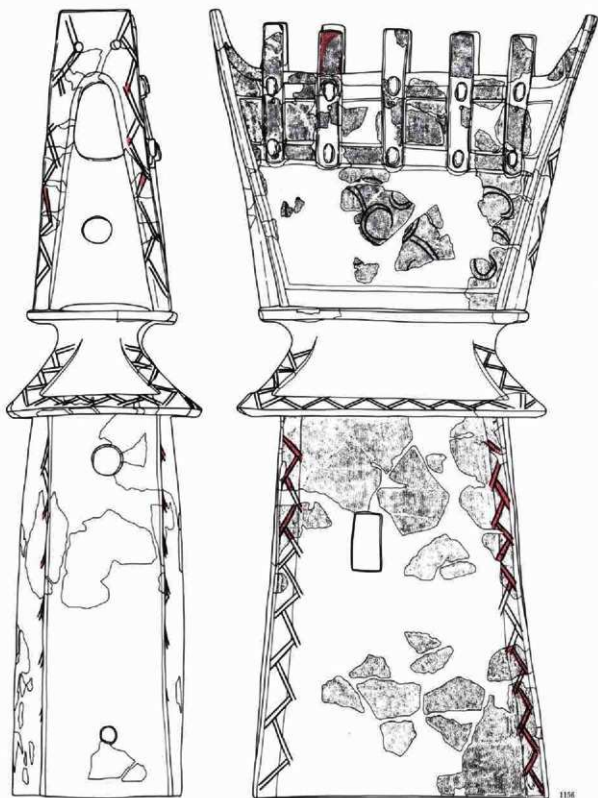
以上の出土状態と個体の様相から、前部出土の家形埴輪は、全体の復元をした1156の他に2個体以上の存在が考えられる。

鞍部・くびれ部出土の家形埴輪

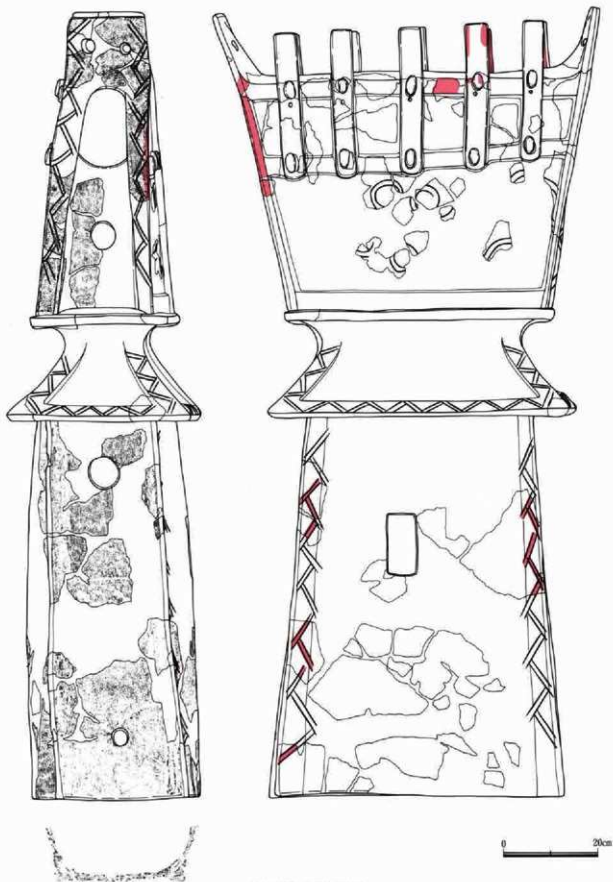
(1169・1171~1187ただし1184は除く)

鞍部墳頂部と、東西のくびれ部に設定した調査区から出土した資料である。いずれも原位置出土とは考え難く、前部墳頂部、あるいは後部墳頂部出土のものが転落・移動したものと考えられる。

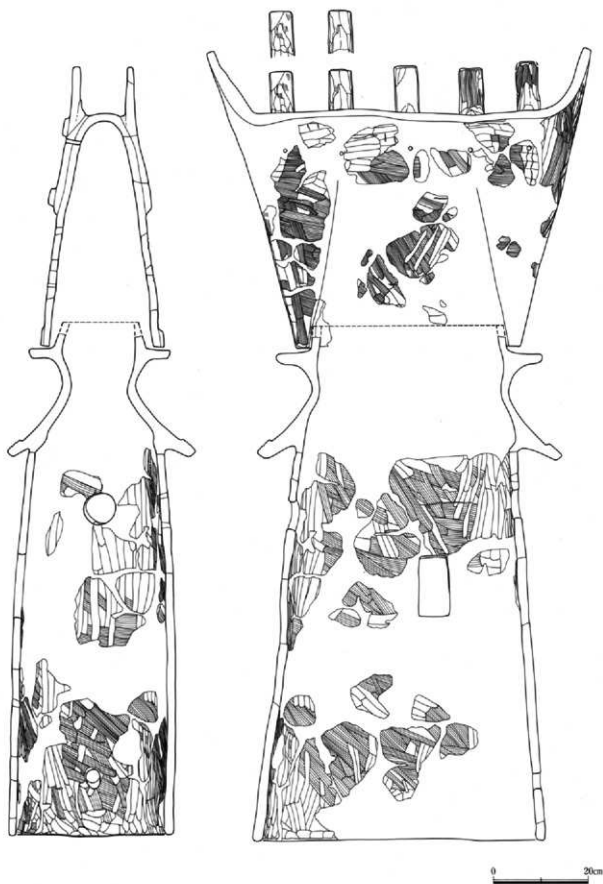
1171・1172・1173は上屋根の流れの破片である。1172は破風が短くかえる。文様は2本1単位のヘラ



第175図 冢形埴輪1)

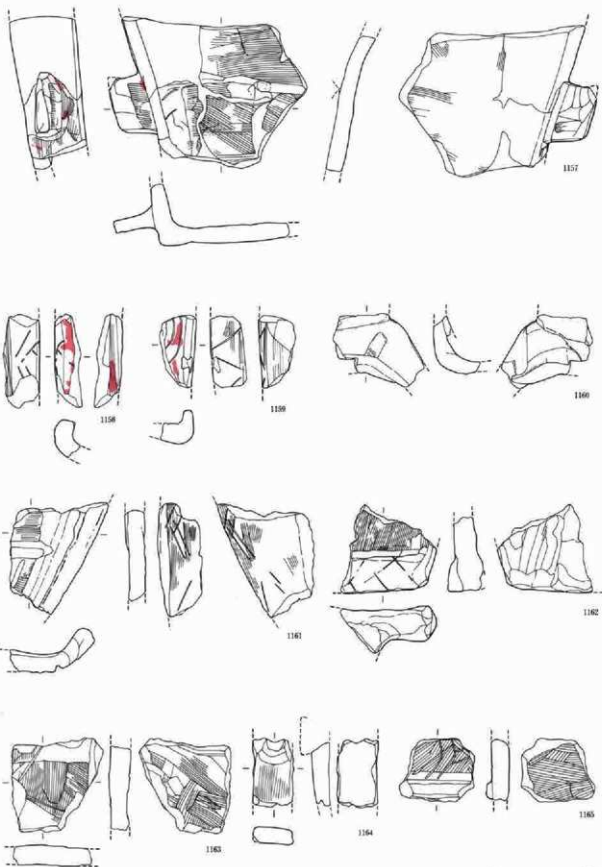


第176図 家形埴輪(2)

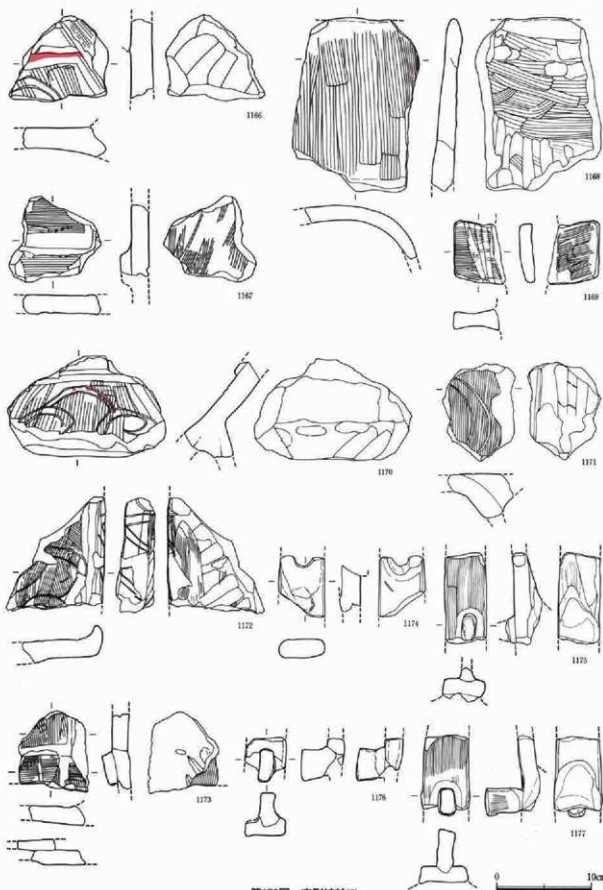


第177図 家形埴輪(3)

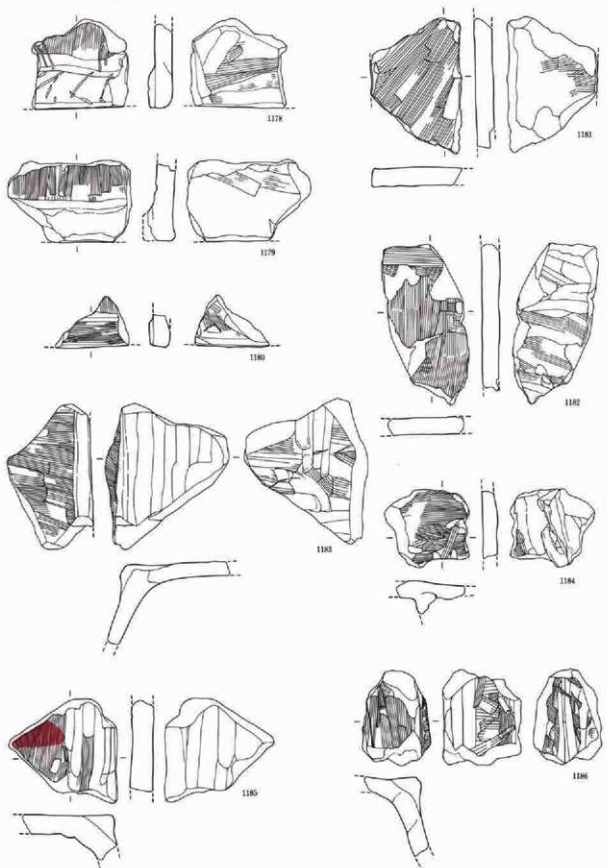
第4章 出土遺物について



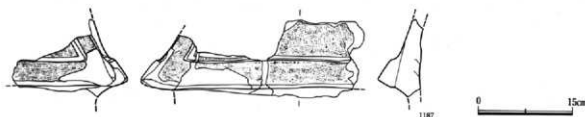
第178図 家形埴輪(4)



第179図 家形埴輪(5)



第180図 家形埴輪(6)



第181図 家形埴輪(7)

描きで流れに弧線を、破風に鋸歯文を施す。1173は縦横に格子状板飾りが交差する。1169は1157同様、破風から突出する板状部品である。1174～1177は、いずれも格子状板飾りの破片で、外面に縦長棒状の突起が付く。1175・1177は裏面に横と接合されていたことを示す剝離痕が認められる。1178～1180は下屋根の流れ下端部破片である。下端外面には粘土帯を貼り肥厚させている。1178は、2本1単位のヘラ描きにより弧線、くの字状の文様を描いている。1181～1186は、四柱造の壁体あるいは基台部の破片である。1181には直線的な切り込みがあり、窓あるいは入口部の破片と考えられる。1187は、入母屋造の下屋根あるいは寄棟造の屋根の破片である。稜と軒先に粘土帯を貼り付けている。

家形埴輪 (1188～1240)

後円部埴頂部～上段に設定された調査区から出土した資料である。全体形状、規模、個々の破片の個体識別が完結しているとはいいがたいが、入母屋造あるいは寄棟造で高床構造の建物を想定した。以下、部位ごとに順次記述を進める。

1188・1189は屋根本体の大型破片である。1188は、残高24.7cmで、入母屋造であれば下屋根、寄棟造であれば屋根の一隅である。作図中の正面は、一辺の残長21.6cm、側面は、長さ16.5cmで原形面が切り込みのように延びる。隅の内面部分を見ると長辺10.8cm、短辺8.0cmの柱の基部が残存しており、この屋根が角柱で支えられていたことが確認できる。この四角形の中空部分は小孔をなし、上方に抜けている。調整は外面にタテ方向のハケメを施し、稜の周辺にはナデを重ねている。

1189も1188と同様の形状で、屋根の隅部と考えら

れる。作図中の正面の残長34.3cm、側面の長さ27.6cm、残高27.5cmである。内面には粘土板の貼り付けとその接折痕があり、下位に角柱が接合するものと考えられる。また、作図中の正面図、残存上端の外面には剝離痕が認められ器面に付属の粘土板が貼り付いていたと思われる。外面はタテ方向のハケメが充満され、一部にナデが重ねられていた。内面はハケメ後器面を不定方向にナデている。

1190～1197・1205は板状の大型破片である。1188・1189の屋根本体、あるいは床部分に接合する軒先、あるいは床面の裾廻部分と考えられる。1190は長さ15.8cm、横方向の残長29.0cmで大きく反り返っている。厚さは2.4cmである。外面にはヘラ描きによる沈線が9本平行する。区画内に赤色塗彩が施されている。内裏面には断面長方形の棒状粘土が接合された痕跡が認められる。ここには屋根本体を支える角柱が接合されていたものと考えられる。

1191も1190と同様の成・整形が施されている。軒先および、側部の2方向に縁部を残している。外面にはヘラ描きによる平行沈線が8本施されている。屋根本体側の割れ口近くにハケメを残す部分は他と器面の色調が異なり、ここが付属品で覆われていた可能性が考えられる。1192は残存幅18.2cmである。強く反り返る破片である。裏面に1190同様の接合痕および、剝離痕が認められる。1193は板状の破片で方形の隅部をなしている。1194も隅部をなす板状破片である。外面にヘラ描きによる平行線が5本認められる。裏面に残る円形の剝離痕は1190にあった突起状の粘土にその大きさが等しい。1195・1196も隅部の破片である。1195の外面には放射状にヘラ描きの沈線が、1196では隅部に向かってナメ方向の沈線

第4章 出土遺物について

が施されている。1197では平行の沈線に綾杉状の文様が重なっている。1205も小破片であるが平行沈線が認められる。

1206は板状の小破片であるが、付属品として本体の器面を覆う部分を形づくっていたと思われ、裏面は黒灰色をおび半還元状態である。

1198～1204は断面長円形の棒状品である。現状では色調、焼成の状態が個々に異なるものの、断面形、棒の曲がり具合、端部の剝離面にみられる本体との接合状態などが共通している。

1207～1215・1218は器肉0.9～1.6cmとやや薄手である。いずれも、やや鈍角の隅をなし、角柱状を呈していたと考えられる。外面はタテ方向のハケメ、内面にはナデが施される。1207は側面に切り込みが施されている。1208は残存部上端にヨコ方向のナデがみられ、他と接合関係にあった痕跡が認められる。

1216～1219・1220～1224は、L字状に屈曲し、外面に稜をもつ板状品である。ただし、器面、屈曲の度合、外面の文様構成のいずれも異なっている。文様はヘラ描き沈線による横線、鋸歯文から構成される。1222・1224は、単本線による鋸歯文が施されている。1219・1220・1221は2本1単位のヘラ描き沈線による。1221は、横線により上下に2分し、上段は斜格子目文を、下段には鋸歯文を描いている。1219は小破片であるが1221と同様のモチーフである。1223は3本1単位の鋸歯文を重線で2分割している。

1225・1226・1228・1230・1231・1240は板状の破片である。1230は34.3×24.8cmの大型破片である。水平の板状を呈し、下面に径14.0cm、厚さ1.2cmの円筒が接続する。上面にも剝離痕が認められ、付属品が接続していたと考えられる。中央に径3.7cmの円形の透孔が穿たれている。1226・1240も同様の板状品で円筒状の付属品が接合する痕跡が認められる。1232～1235・1237～1239は小径の円筒状を呈する破片である。1234・1239は端部基底面を有する。径は6.0～7.0cmである。いずれも外面にはタテ方向のハケメを施し、内面にはタテ方向のナデを主体的に施している。

後円部出土の家形埴輪 (1241～1283)

1241～1283は、後円部埴輪頂部～上段、および、その周辺から出土した家形埴輪の破片である。原位置は後円部埴輪頂部にあつたと考えられるが、いずれも樹立時の状態を保持していた資料は無い。以下、部位ごとに概要を記しておく。

1241～1243は板状の破片である。いずれも後円部埴輪頂部周辺からの出土である。1186同様、上屋根の頂部に付く格子状棟飾りの一部と考えたい。ただし、1241が幅8.0cm、1242が幅7.0cmとやや幅広である点がやや気になる。出土位置から器財埴輪の大刀の勾金の一部とみることも必要であろうか。1243は幅6.3cm、調線に沿って赤色塗彩が施されている。

1244～1246は、入母屋造の上屋根の部分をなすと考えられる。1245・1246は、半筒状の棟頂部の直下にヨコ方向の棟飾りがつけられている。1247ではこの飾りに直交する板が格子状に付けられ、器面はヘラ描きの文様と赤色塗彩により加飾されている。

1248～1251は上屋根の破風から流れの部分の破片である。流れに板状の面をあわせて角をなしている。1248は、接合部分がやや丸みをなすのに対し、1249・1250は折り返っている。1249は大型品の一部と考えられる。破風にヘラ描きの斜格子文を配し、これに赤色塗彩を重ねている。流れには円筒を重ねた文様が描かれている。1250の破風は短く、ヘラ描きによる2本1単位の鋸歯文で飾られている。1251は上屋根下位の破片で、内面に妻側の壁面を接合した痕跡が認められる。破風はとりつけ部分から剝落している。流れには重瓦文がヘラ描きされている。1249と同一個体である。

1252は上屋根の棟に近い部分の破風の破片である。色調は明赤褐色で、他に類例をみない資料であった。2本1単位のヘラ描き沈線による文様とその区画内に施された赤色塗彩により加飾されている。

1253・1256も上屋根の破風の破片である。1253は破風に縦6.4cm、幅1.3cmほどの突起が付いており、この周辺および、破風の端部面に赤色塗彩が施されている。1256の破風にはこの突起が剝落した痕跡が

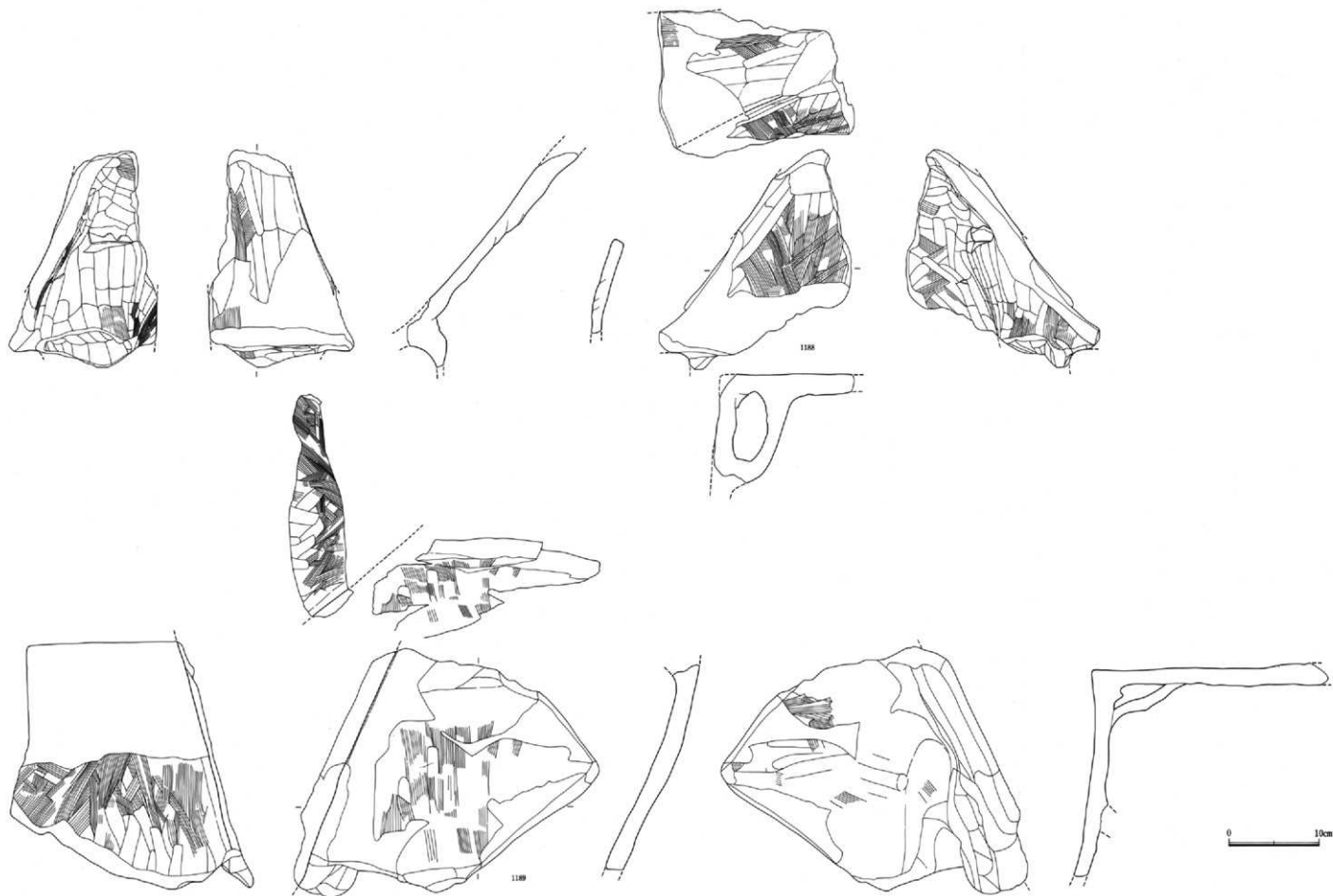
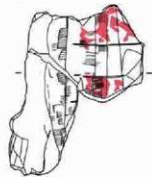
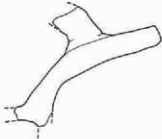
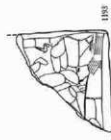
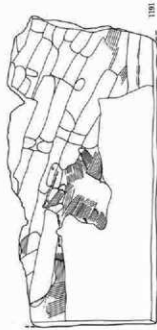
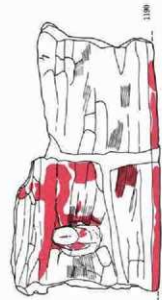
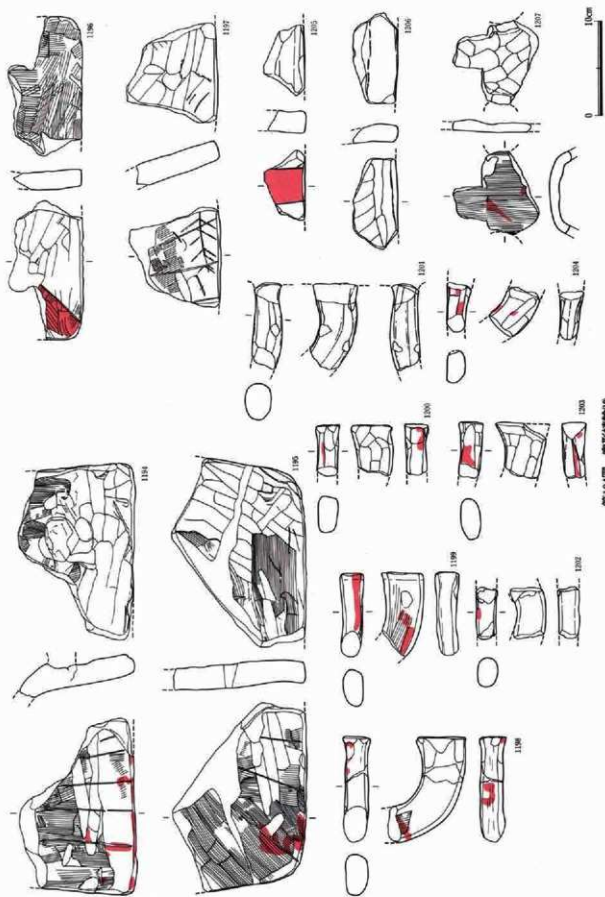


圖182 家形埴輪(3)

1. 埴輪

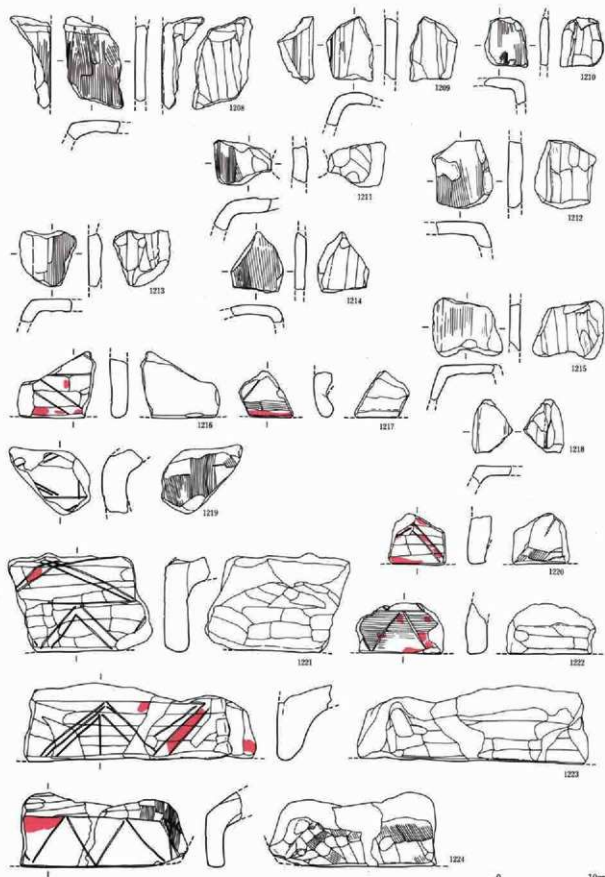


第183図 家形埴輪(9)

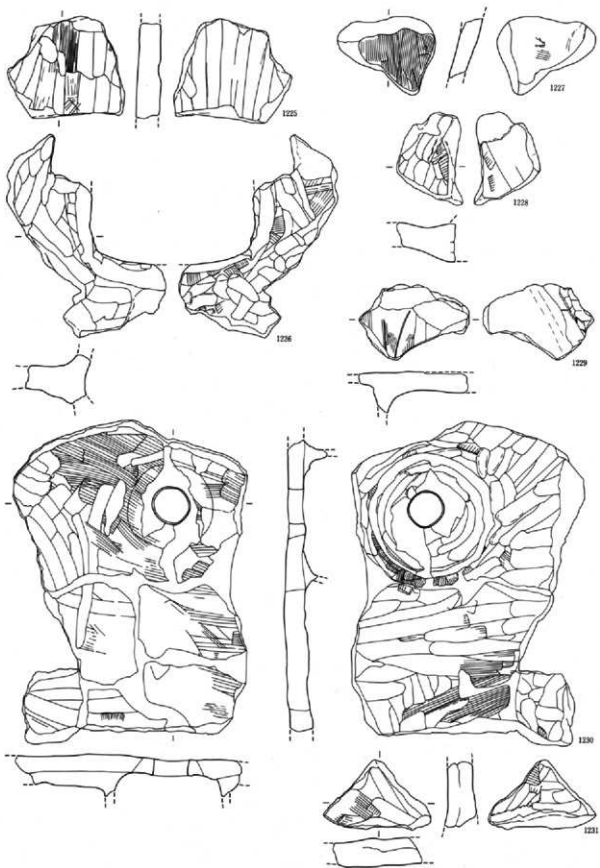


第184図 家形砂器破片

1. 埴輪

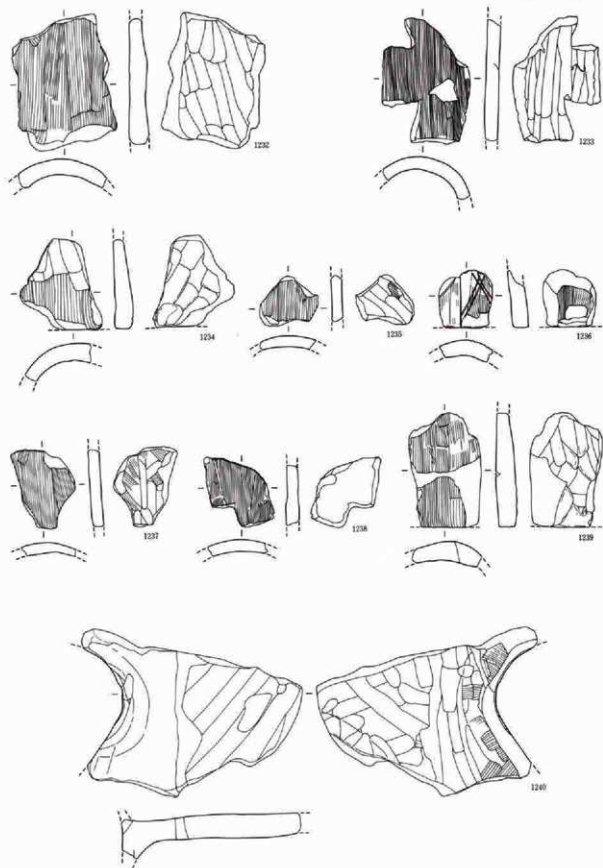


第185(四) 家形埴輪(1)



第186図 家形埴輪②

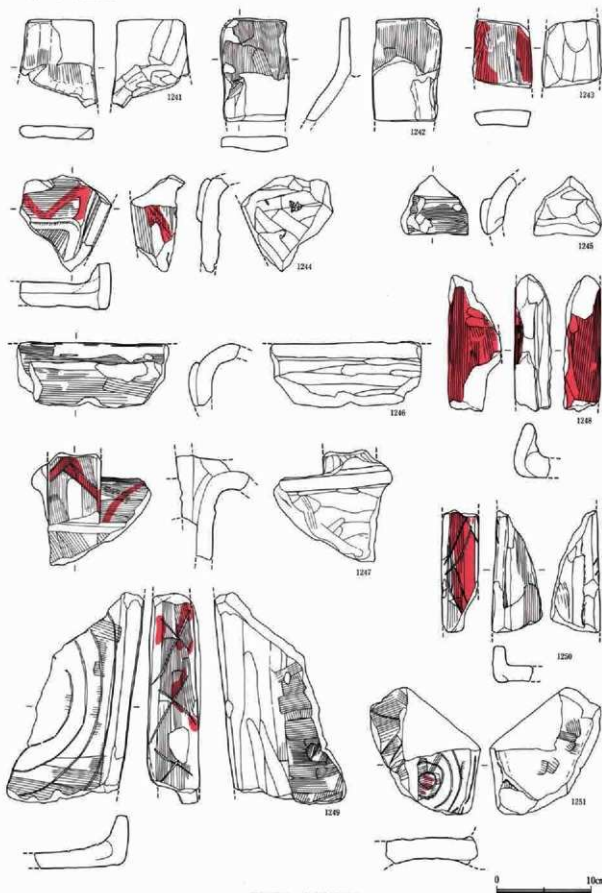
1. 埴輪



第187図 家形埴輪(13)

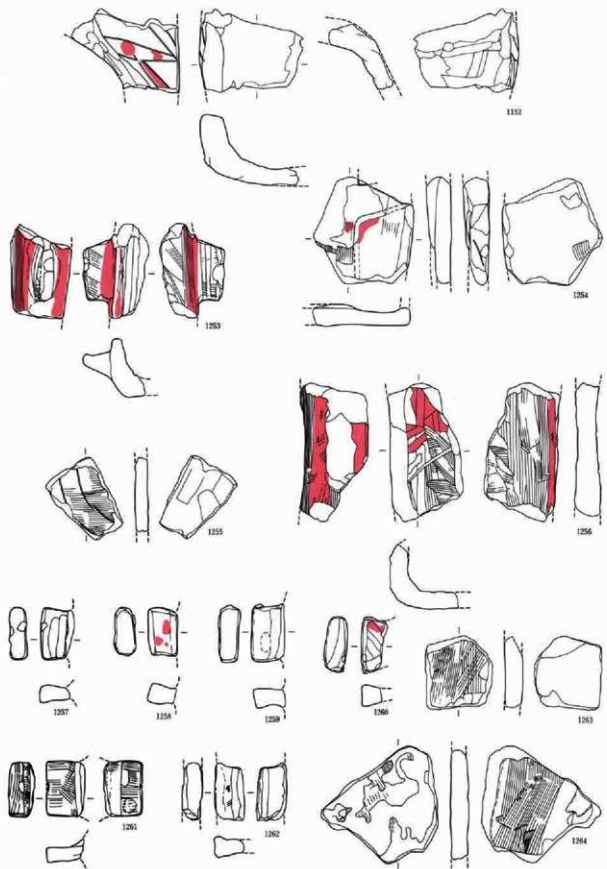
0 10cm

第4章 出土遺物について

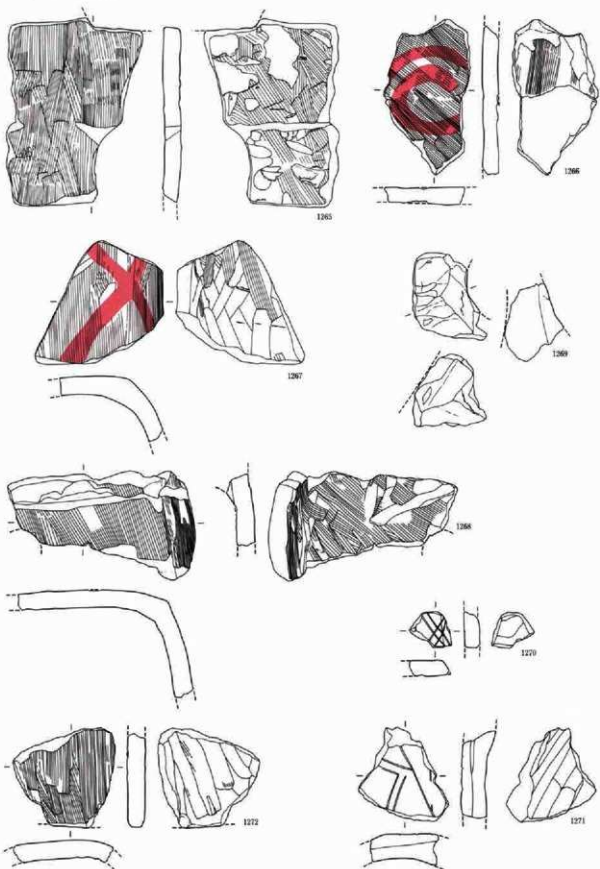


第188図 家形埴輪14

1. 埴輪

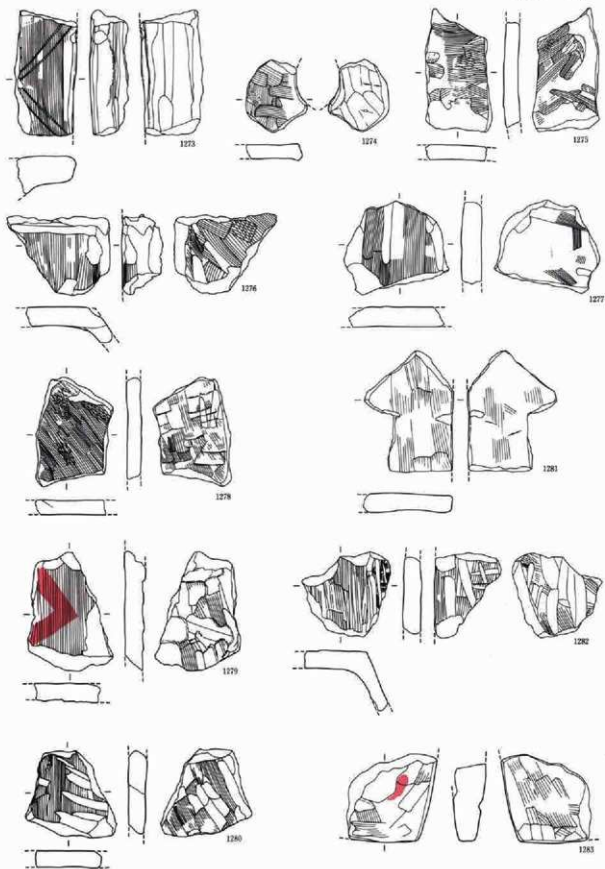


第189図 家形埴輪15

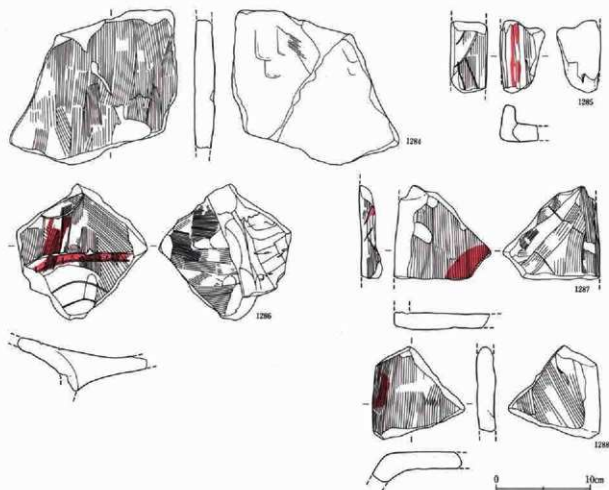


第190図 家形埴輪⑩

1. 埴輪



第191図 家形埴輪(17)



第192図 家形埴輪00

認められる。

1257～1262は、1253の破風に付けられた突起状の付属品である。破風から突出した横木を表現すると考えられる。1257は、縦5.5cm、幅1.8cm、破風から3.2cmの長さでとび出ている。1257～1260、1262は、器面を丁寧にナデしているのに対し、1261は、いずれの面にもハケメを残している点が異なる。

1254・1255は流れの破片である。1254には破風の文様と流れの格子状板飾りが、1255には流れに施されたへら描き文様が認められる。

1263～1268・1272・1274～1280は壁体から基台部の破片である。1263・1264は板状を呈し、外面にハケメを施している。1265は残存部上端に直線的な切り込みが認められる。入口、あるいは窓を形成する透孔の一部と考えられる。1266は外面のハケメの上に赤色塗彩による文様が描かれている。1267・1268・

1272・1276・1282は、壁体の隅を構成する破片である。隅は鈍角を形成する。1267は、外面に×字状に交わる赤色塗彩による文様が施されている。1268は残存上位は屋根部分との接合点間近と思われる。1276も同様の破片である。1274は円形の透孔の一部が残存する。1279には赤色塗彩による文様が描かれている。その他もいずれも外面にハケメを施した板状品である。

1269は入母屋造の下屋根、あるいは寄棟造の屋根部先端、軒の破片である。

1270・1271は外面にへら描きによる文様が配されている。1273も2本1単位のへら描きによる鋸歯文が配されている。1283は板状破片で隅部を残している。組み合わせ式の家形の下屋根上位に付き、上屋根を支える受部の破片ではないか。後円部からは、1188～1240の高床構造の隅体をはじめとした4個体

以上付家形埴輪の樹立が想定される。

出土地不明の家形埴輪 (1284~1288)

出土地点を確認することができないが前方部あるいは後門部の墳頂部に原位置を有すると考えられる。

1284は板状の大型破片で埴体をなしていたと考えられる。

1285・1286は入母屋造の上屋根の破風部分の破片である。ともに破風は短く折り返る。1285は破風に2本1単位のヘラ描きによる鋸歯文が配され、区画内に赤色塗彩が施される。折り返しの端面にも赤色がみられる。1287は破風に鋸歯文をヘラ描きし、流れ部分の円弧とともに赤色塗彩を施している。

1288は埴体の一部を構成していたと考えられる。壁面の接合は鈍角をなす。外面はタテ方向のハケメを施し、赤色塗彩による文様が描かれる。

1286は本体から翼状に板状粘土が延びている。外面にヘラ描きによる文様が描かれるが全体構成は不明である。器種の特定は困難であるが、家形埴輪の上屋根の一部にならないか。

② 盾形埴輪

盾形埴輪 (1289)

前方部西側中段面、形象埴輪列の内側、上段墳丘寄りから盾面を上にして横倒して出土した。原位置は保たれていないと考えられる。

残高98.3cm、最大幅推定41.2cmを測る。残存は盾面右側(盾に向かって左側)のヒレ状部分、盾面の後面、基台部の後面部分で、その他は後補である。基台下端も欠損している。

盾面の規模は高さ61.5cm、上位の幅40.5cm、下端の幅41.2cmが推定される。形状は縦長の長方形で、中央がややくびれ、側辺は弧状をなしている。上辺は山形に弧を描き、半円形の両端は跳ねるように外反している。

器面は、正面の全面にハケメが施されている。円筒部分はタテ方向、側面のヒレ状部分はヨコ方向である。後面は上寄りの3分の1ほどに粗雑なナデが施され、その他はハケメ調整である。

器面の調整後、正面には2本を1単位とするヘラ

描き沈線による文様が描かれている。上寄りの山形半円形部分と長方形部分の境には横線が引かれる。長方形部分は、円筒部分とヒレ状部分の境に沿って内彎する弧線により区画がなされ、外区のヒレ状部分には鋸歯文が施される。鋸歯文は外向する区画2区画、内向する区画3区画から構成されている。また周辺とも端部は1本のヘラ描きにより縁取りされている。半円形部分は斜行線により扇形状に3分画し、その中程を弧線、直線を組み合わせて更に細分している。長方形部分同様端部は縁取りされている。

赤色顔料は、盾、正面の長方形部分に描かれたヘラ描き文様の区画内に施され、鋸歯文を縁取りしているようにみえる。上寄りの半円形部分にも塗彩されていたと考えられるが現在では確認できない。

この盾面は、下端で径19.3cmの円筒部を先に成形し、その後、左右の側部にヒレ状の粘土板を縦位に取り付けて、接合部分には表裏面から粘土を貼りだし、補強をしている。このヒレ状部分の成形、接合方法は本古墳の盾形埴輪の製作技法として共通した技法である。

基台部は、断面台形の突帯により盾面と区分される。長さは他の資料と比較するとと10.0cmほど下端が加わるものと考えられ、これによる全体の復元高は110cm前後と推定される。直径は21.0cmの円形で、35.7cmが残存する。右側部のやや正面寄りに円形の透孔が残存する。

最後に成形について記しておく。円筒部の成形は粘土紐巻き上げによりなされ、接合痕はタテ方向のナデにより消されている。作業単位は、器面の粗れも加わり判然としませんが、器面の凸凹から基台部に2箇所、本体胴部に2箇所ほどを指摘できる。基台部と胴部の間には乾燥期間があったのか大きな作業単位の区切りが認められる。

上半の成形は、盾面の山形部分の下位までは筒状の本体を巻き上げにより成形し、その後、表側の盾面を板状に成形、積み上げ後に、裏側に半筒状に粘土紐をわたして筒部分を延長している様子が見られた。この部分の粘土紐の接合には粗雑なナデ、押圧

が加えられている。上端は幅5.4cmほどの孔が開き、開放している。

盾形埴輪 (1290・1291)

くびれ部西側中段面に設置されたC-5の調査区から出土した。原位置は不明であり、墳頂部から転落した可能性が考えられる。

法量から他の器財埴輪、あるいは盾持ち人の基台部を想定できなくもないが、1290は盾面の長方形部

分、1291は基台部の下半と考えた。2つは直接の接合点をもたないものの、胎土・器面の色調に強い共通性が認められ、出土位置も同一調査区内であることから同一個体の可能性がきわめて強い。

1290は、複数の破片から盾面の長方形部分の主に左側を復元した。残存長は56.8cm、復元幅40.0cmである。成形は、1289と同様で、円筒部にヒレ状部分を接合したものである。上辺部は、欠損するが半円



第193図 盾形埴輪(1)

形部分が成形されていたものと考えられる。

盾面の文様は、2本1単位のヘラ描き沈線と、列点状の刺突文からなる。円筒部は、上辺部との間に刺突文を伴う横線2本を配し区画を大きく分けている。盾面はヒレ状部分に2本1単位のヘラ描き沈線からなる波状文（鋸歯文の頂部が丸みをおびたようにも見える）を配すると思われ、外向する頂部が2単位確認できる。側部を縁取る糜取の沈線の外側に

は刺突文が充填される。下辺の端部には刺突文のみが横方向にみられる。円筒部は横線により3段に区分され、上、中の2段には内彎して対向する弧線が配されている。

ヘラ描き沈線の区画内および、縁部には赤色塗彩が施されている。

器面の調整は、正面には全面にわたってハケメが施されている。円筒部はタテ方向、ヒレ状部分はヨコ、あるいはナメタテ方向

を基本としているようである。内面は成形の作業単位にあわせてタテ、あるいはヨコ方向にナデが施されていたようである。

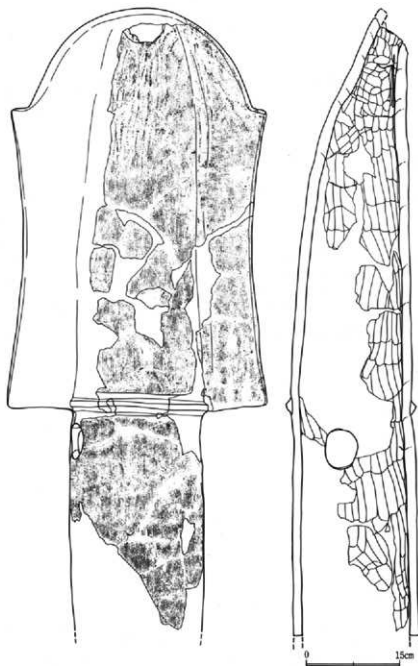
基台部との境には近接して2条の突帯を貼り付けている。

1291は、残存高29.1cmを測る。底面の直径は24.2cmを復元できる。器面は全体に粗れている。外面にはタテ方向のハケメが底面間近から施されている。ハケメは重複が著しく何度も施されたようで、部分的に上から下方向の工具の動きも認められる。ハケメは2cmに11・12本の割合である。内面は下端に粘土板作成時の押圧痕が残存する他はタテ方向のナデが充填される。

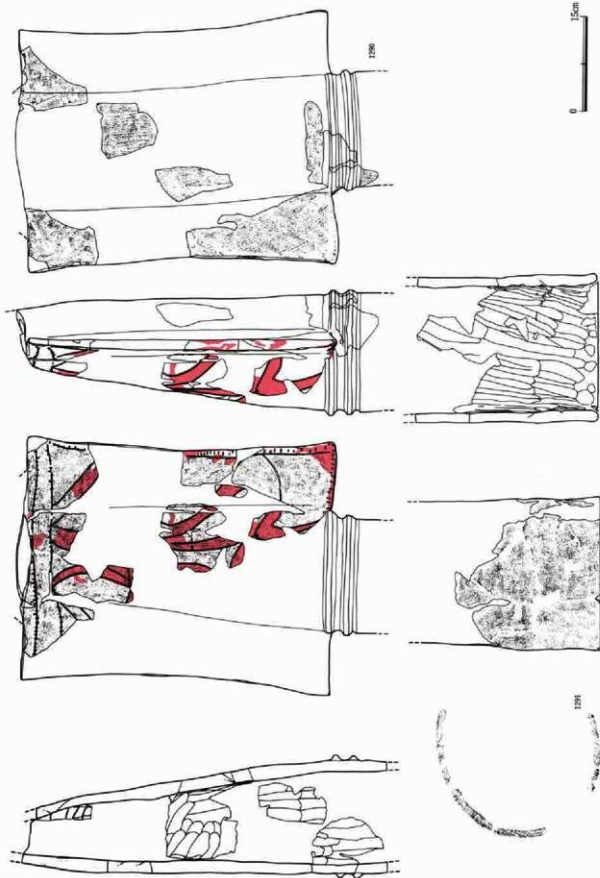
底面の器肉は1.7cmと薄い。

盾形埴輪 (1292~1294)

前方部西側中段面から出土した。1294は中段面に樹立された原位置からの出土である。1292・1293も1294



第194図 盾形埴輪(2)



第195図 甕形埴輪3

に近接して出土している。復元作業の途上では、1294の出土場所の確定に手間取ったこと、1292・1293の上寄り、半円形部分の下端の跳ねる形状が異なることから3点を別個体と考えたが、出土記録の状況から1292～1294は同一個体と考えられる。

1292は、盾面の右側、ヒレ状部分を含む大型破片である。残存長は46.6cm、残存幅14.2cmである。

盾面上は丸く山形を呈すと思われる、端部には小さな突起を作る。側部は緩やかにくびれる。上辺部はヘラ描きの沈線により山形に内外区を2分、周縁にも沈線をめぐらせている。外区は2本1単位の沈線で細分されている。山形部分と、以下の長方形部分の盾面は刺突文を伴う横位の沈線で分画される。側部のヒレ状部分は2本1単位の沈線で鋸歯文を表出している。外向する鋸歯文は2単位確認でき、沈線内の器面には赤色塗彩が施される。

器面には正面、後面ともヨコ、あるいはナナムヨコ方向のハケメを施し、縁辺部には強いナダを重ねている。

1293は盾面の左側部分の大型破片である。

盾面は円筒部とそこから翼状に張り出すヒレ状部分からなる。上辺は山形を呈し、下端は小さく跳ねて突起する。

盾面の正面は、全体にハケメを施した後、2本1単位のヘラ描き沈線による文様構成がなされている。上辺部とそれ以下の長方形部分は刺突を伴う横位の沈線により2分される。上辺部は縁辺部に沿って1条の沈線で縁取りされている。さらに内部には2本1単位の沈線が外縁の形状に沿って施され、この外区をナナム方向の沈線で細分している。長方形部分は、円筒部分とヒレ状部分の接合点から出発する弧状の沈線により内外に2分される。内区、円筒部分は中位に横線を配し、上下に2分、さらにその中に1条の斜行線で上向の鋸歯状文様を配している。外区は2本1単位の沈線で鋸歯文を配しており外向する鋸歯2単位の配置が確認できる。

ヒレ状部分の下端には鋸歯文の割り付けの失敗を修正した痕跡が認められ、沈線の一部が残存してい

た。

赤色塗彩は2本1単位のヘラ描き沈線の内側に原則として塗布している他、上辺部の縁辺部にも塗布が認められる。

器面の調整は、正面、後面とも外面に2cm幅に12本の割合のハケメが施されている。盾面では上辺の山形部分は放射状にナナム方向のハケメが施される。長方形部分は、円筒部分がタテ方向、ヒレ状部分がヨコ方向のハケメである。円筒部とヒレ状部分の接合部はタテ方向のナダが施され、器面が丁寧に整えられている。

ヒレ状部分の側縁部はヘラで切り落としたようにシャープな面が形成され、これをナダている。

円筒部内面は長方形部分の上半が一部残存していたが、タテあるいはナナム方向に短いナダが施されていた。

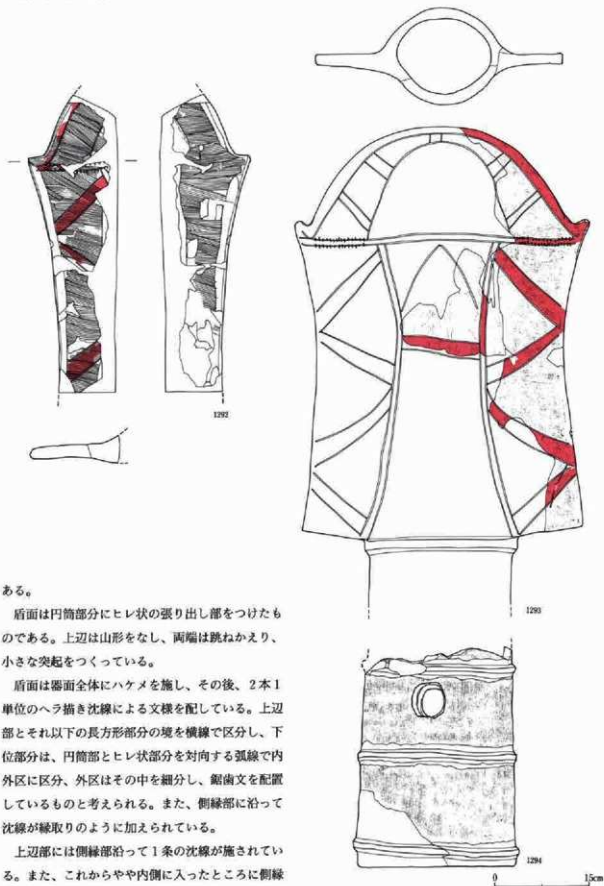
1294は1292・1293の盾面の基台部と考えられる。残存高37.9cm、基底面の直径24.9cmを測る。外面は、基底面から3.8cmの位置に第1突帯を配し、その上位に14.0cm、13.7cmとほぼ等間隔に第2、第3突帯をめぐらしている。透孔は、第2突帯と第3突帯の間の胴部に縦5.6cm、横5.0cmの円形の孔一対を対向させている。器面の調整は、外面に2cm幅に12本の割合のタテハケを施す。内面は最下端に基部粘土板成形時に生じたと思われる指頭圧痕を残し、これより上位にはタテ方向のナダを器面全体に施している。

盾面と接合するには残存部の上位にもう一段分円筒部が存在していたと考えられる。

盾形埴輪 (1295)

後円部西側の中段面上、BトレンチI区からの出土であるが原位置出土ではない。

残存状態は良好とはいえない。盾面の正面は、上辺寄りの山形部分を中心に残存するが他は復元作業による後補である。これに対し、後面は円筒部分がほぼ完全に残存していた。基台部は確認できず全て欠損していた。盾面との境に位置する突帯も含めて全て後補である。残存長62.2cm、横幅の復元値は、36.1cm、盾面の下端、円筒部分の復元径は18.3cmで



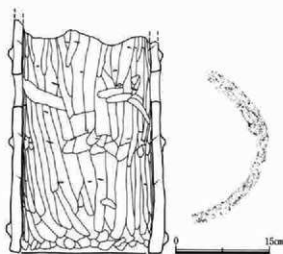
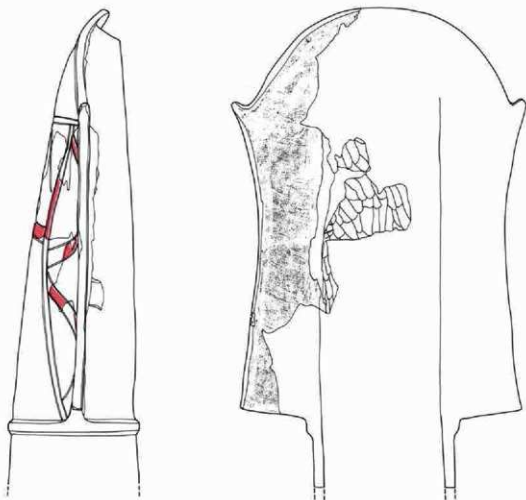
ある。

盾面は円筒部分にヒレ状の張り出し部をつけたものである。上辺は山形をなし、両端は跳ねかえり、小さな突起をつくっている。

盾面は器面全体にハケメを施し、その後、2本1単位のヘラ抜き沈線による文様を配している。上辺部とそれ以下の長方形部分の境を横線で区分し、下位部分は、円筒部とヒレ状部分を対向する弧線で内外区に区分、外区はその中を細分し、鋸歯文を配置しているものと考えられる。また、側縁部に沿って沈線が縁取りのように加えられている。

上辺部には側縁部沿って1条の沈線が施されている。また、これからやや内側に入ったところに側縁部の形状に側して半円形に沈線を配し内外に2分、

第196図 盾形埴輪(4)

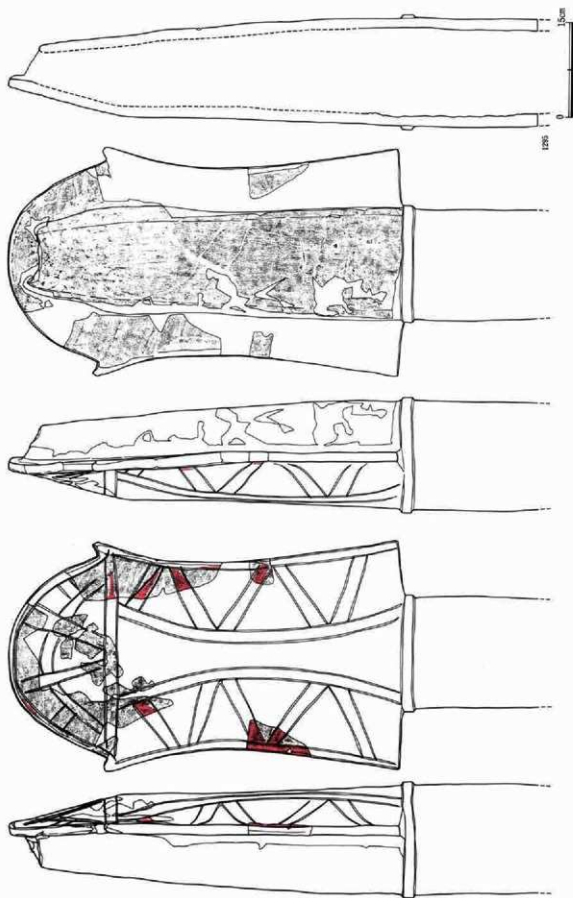


第197図 盾形埴輪(S)

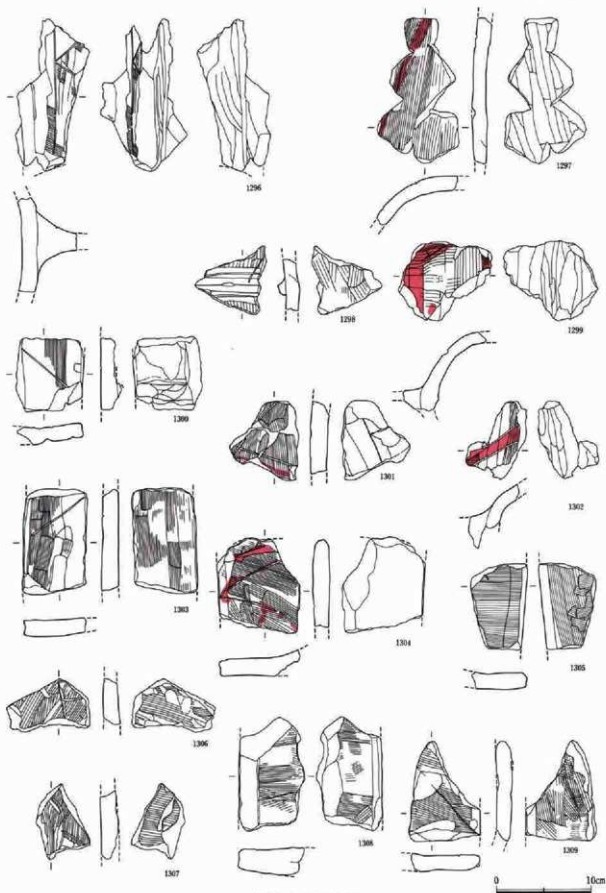
両区とも斜行する沈線により細分している。赤色塗彩は退色が著しいが上辺とそれ以下の長方形部分を区分する沈線内と、ヒレ状部分に構成された鋸歯文を区画する斜行線の区画内側に痕跡が認められる。

後面の器面調整は円筒部分の上端にタテ方向の粗雑なナデが施されている。それ以下にはタテ方向のハケメを、ヒレ状部分はヨコ方向のハケメを施している。ハケメは2cm幅に14本の間隔である。

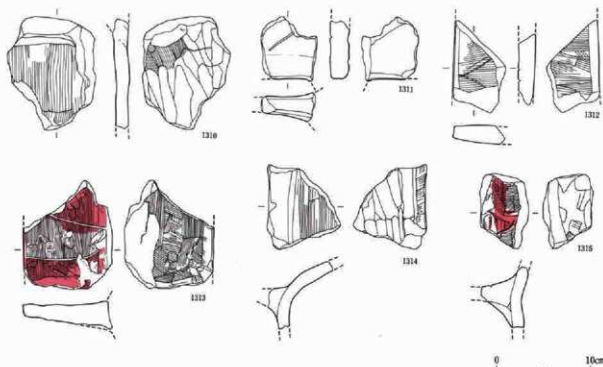
成形の方法は1289と基本的に同様である。盾面中央の円筒部分は基台部から継続して粘土紐を巻き上げている。下位から中位はこの円筒部の側部にヒレ状部分の粘土を板状に接合しているが、上辺の山形部分は、盾面の長方形部分の上に先に盾面をのせ、その後、後方から半筒状に粘土紐をわたして、盾面



第198図 盾形銅鐘(6)



第199図 盾形埴輪(7)



第200図 盾形埴輪(8)

を支えている。円筒部分の上端は開放している。

前方部出土の盾形埴輪 (1296～1315)

前方部からは前述の1289・1292～1294などの大型破片の他に破片資料が多数出土している。1296～1302は、前方部西側の各調査区から出土した資料で、いずれも埴丘中段あるいは下段丘から周堀にかけて出土したものである。

1296は、盾面の円筒状部分とヒレ状部分の一部である。ハケメを施した器面にはヘラ描き沈線による、縦方向の直線と鋸歯文の組み合わせが認められる。1297は、盾面の円筒状部分の破片である。2本1単位の弧線がみられる。円筒状部分とヒレ状部分を内外に2分するものと考えられる。1298は、盾面と基台部との境をなす突帯部分である。弧状のヘラ描き沈線の一部が残存する。

1299は、円筒状部分とそれから横に張り出すヒレ状部分の一部である。ヘラ描き沈線とそれに沿って施された赤色塗彩が認められる。

1302も円筒状部分を主体とした破片である。2本1単位のヘラ描き沈線による鋸歯文の一部が残存する。

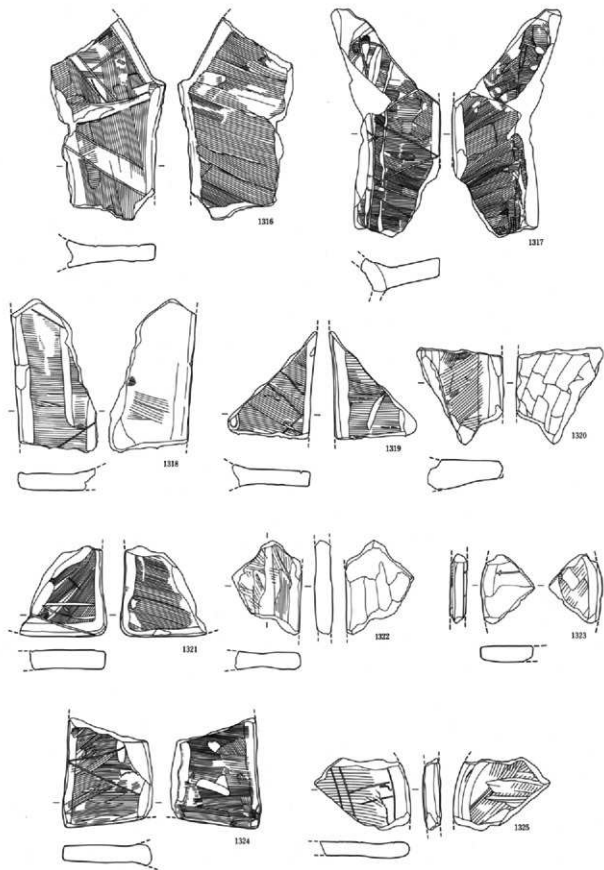
1300と1301は、盾の可能性が考えられる破片資料である。1300は板状の破片である。ナナメ方向の沈線により鋸歯文が構成されていた。裏面に粘土紐状の貼付が認められる点が盾と断定しがたい点である。1301はヘラ描きの鋸歯文が施されている。

1303～1309は、前方部西北端の調査区から出土した資料である。いずれも中段面から下段埴丘出土である。盾面の中位から下位、円筒状部分から張り出すヒレ状部分で板状を呈する。

1303は、縁辺に沿ったヘラ描き沈線とこれに接するナナメ方向の沈線が施されている。1304は、2本1単位の沈線による鋸歯文が配され、沈線に沿って赤色塗彩が認められる。1305は、盾面の左側ヒレ状部分の破片である。1309は、ハケメ後ヘラ描き沈線による鋸歯文が描かれている。1306～1308は、器財埴輪の破片と思われ、盾形埴輪の一部と考えたい資料である。1306・1307は、小破片で弧状のヘラ描き沈線による文様が描かれている。1308も、ヒレ状部分の破片に類するが、やや器肉が厚い。縁辺部に沿ってヘラ描き沈線が施されている。

1310～1312は、前方部中央（前面）出土の破片で

1. 埴輪



第201图 盾形埴輪(9)

0 10cm

ある。1311は、盾面右側のヒレ状部分の破片である。下端は帯状に肥厚している。ナメ方向のヘラ描き沈線の一部が残存する。1312にもヘラ描きによる鋸歯文が描かれている。

1313~1315は、前方部東北隅出土の破片資料である。1313はヒレ状部分、1314・1315は、円筒状部分の一部が残存する。1313・1315は、1条のヘラ描き沈線による鋸歯文が描かれている。

くびれ部出土の盾形遺物

1316~1331はくびれ部西側、あるいは鞍部西側に設定された調査区出土の資料である。

1316は盾面上位の大形破片である。上辺部は山形を呈し、端部はわずかに跳ねて小さな突起をつくる。器面はハケメ調整を施した後、上辺部とそれ以下を2本1単位のヘラ描き沈線により2分している。上辺部は、縁に沿って1本の沈線で縁取り、中央部分に2本1単位の弧線を描き、内外区に分画、外区は斜行線で細分している。ヒレ状部分には2本1単位の沈線による鋸歯文が配されていたと思われるが、上辺部にみられた縁の沈線は施されていない。

1317は、本体から板状部分がヒレ状に突出することから盾形遺物と考えたが、文様構成は他とやや異なった資料であり、他種の器財遺物となる余地もある。ヒレ状部分に1条のヘラ描き沈線からなる鋸歯文が配されるが、この内側にもう1段、鋸歯文頂部の存在が確認できる。

1318~1322・1324・1327・1329・1330は、盾面側部のヒレ状部分の破片と考えられるが器面の調整などからやや疑問視されるものも含まれる。1320・1322は後面がナデ調整である。1318は大型の鋸歯文を配している。1319の鋸歯文は2本1単位の沈線により構成される。1321・1324は、盾面の下端の破片である。下縁辺部は特別に肥厚せず板状を呈する。ともに、1条の沈線による鋸歯文の表現がなされている。1325は盾面上辺部の破片である。ヘラ描き沈線による文様は1316と類似した構成をなしている。1322も盾面上辺部破片と考えたが、器面にナデ調整が施されている点か他の資料と異なることから他種の器財

遺物の可能性も考えられる。

1326・1331は盾面の円筒部の破片である。1326は鞍部頂部からの出土資料である。ヒレ状部分との接合部分に沿ってタテ方向に沈線を描き、その内側に鋸歯文を配している。1331は円筒部に2本1単位の沈線を横的に配して区画を上下に分けている。

1328は、基台部の破片である。盾面との境は断面三角形の突帯が2条めぐる。基台部には小径の透孔が配されている。

1332・1334~1336は、くびれ部東側の調査区出土資料である。いずれも盾面のヒレ状部分の破片である。1336は盾面右下位の大形破片である。前面の下端部縁辺は粘土帯を貼り肥厚させている。器面にはハケメ調整後、1条の沈線による鋸歯文を配している。

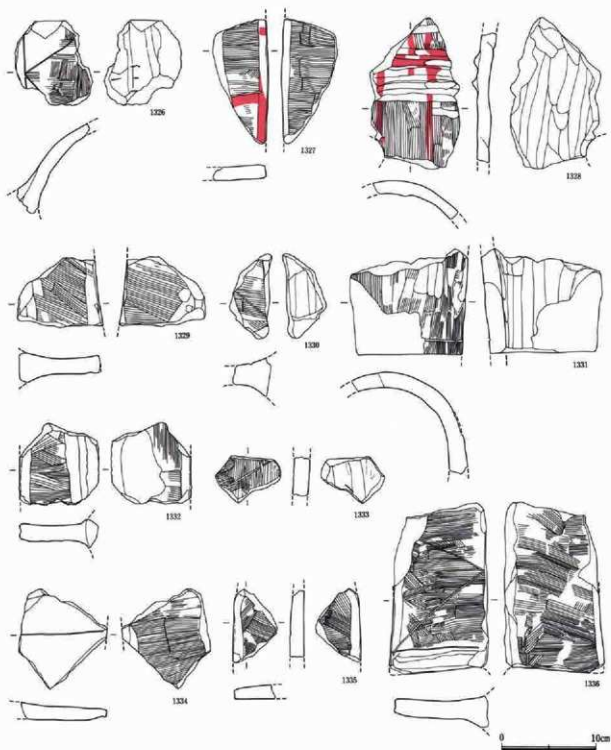
後円部出土の盾形遺物

1337~1371は、後円部の各所に設定された調査区から出土した資料である（1357は前方部東側の出土）。

いずれも原位置出土の個体はなく、その多くが墳頂部平坦面に樹立されていたものが、広範囲に移動分布したものと考えられる。1359を除くといずれも小破片である。板状の破片を盾面のヒレ状部分と理解したが、他器種の器財遺物となる個体も含まれている可能性が強い。

1337~1342は、後円部墳頂部から上位段丘の調査区から出土している。1337は2本1単位の沈線からなる鋸歯文の一部が残る。1338は円筒部からヒレ状部分の付け根の破片である。ナメ方向に延びるヘラ描き沈線がみられる。1342も板状品で端部を有することから盾面のヒレ状部分と考えた。1399・1340は板状ヘラ描き沈線による文様が配されている。

1343~1345・1347は、くびれ部東側から後円部東側の調査区から出土した資料である。1343・1347は、史跡整備時の17トレンチ出土でくびれ部寄りからの出土である。1343は盾面の円筒部分の破片と考えられ、ヘラ描き沈線による鋸歯文が構成されていたと思われる。1347は盾面上位の小破片である。上辺部の半円形部分で、下端は跳ね、突起状をなしてい



第202図 盾形埴輪10

る。ヘラ描き沈線による文様が描かれている。

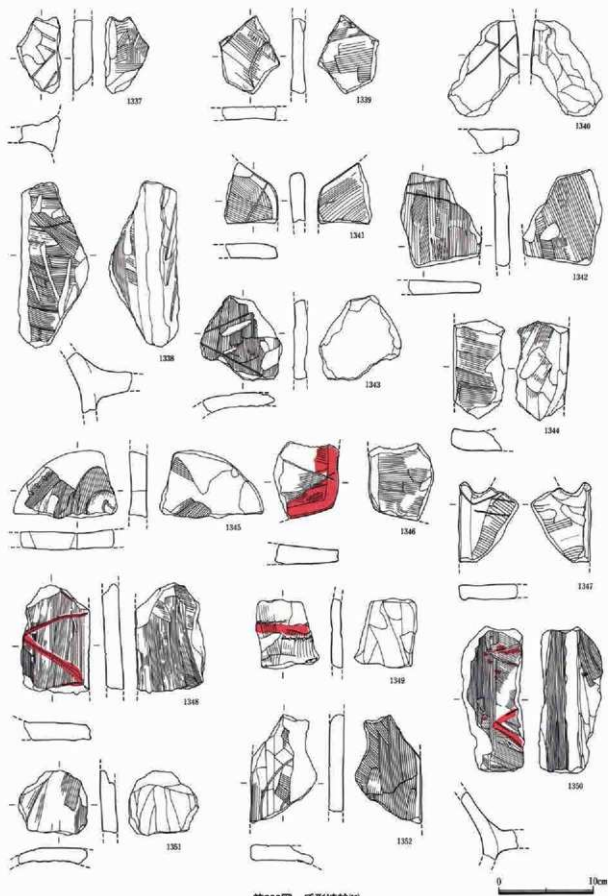
1346・1348・1350は、後円部南側のトレンチ出土資料である。いずれも盾面のヒレ状部分にヘラ描き沈線による鋸歯文が描かれている。1346は内行する鋸歯文内に、1348・1350は、沈線に沿って赤色塗彩

が施される。

1351～1371は後円部の西側を中心に南側寄りからくびれ部西側寄りの調査区から出土した資料である。

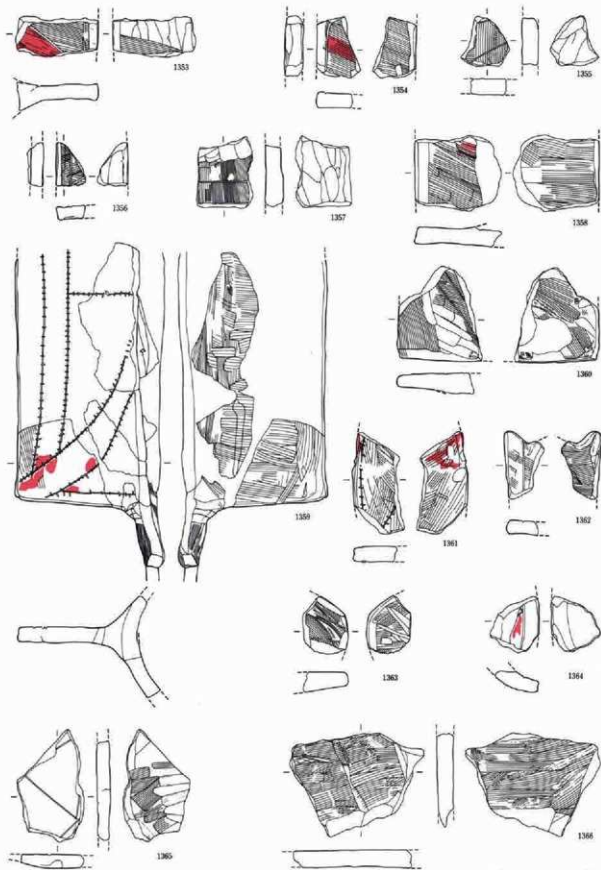
1359は、盾面右下半部から基台部が残存している

第4章 出土遺物について

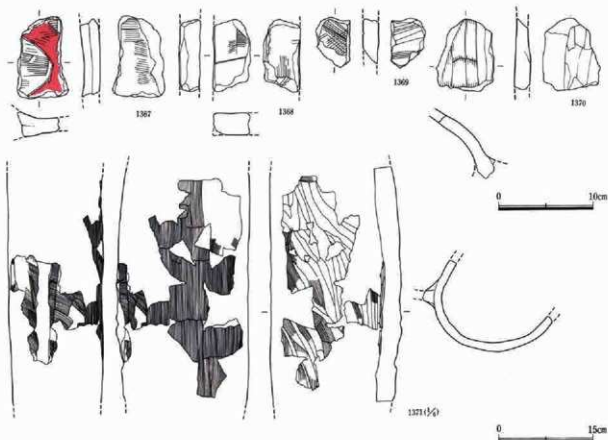


第203図 扇形埴輪11

1. 埴輪



第204图 盾形埴輪12



第205図 盾形埴輪13

4片の破片が接合した。盾面は下端隅から上位に向かって内彎する2条のヘラ描き沈線により内外の2区に2分されていると考えられる。沈線には刺突が重ねられている。盾面のヒレ状部分には他の多数の資料の場合割歯文で構成されているのに対し、縁辺部に沿って2条の沈線が垂下し、中央と下端には横位の沈線が施されている。1361も板状の破片で器埴輪の一部と考えられる刺突を伴うヘラ描き沈線が施されており、施文方法は1359に類似する。

1371は、後円部後方、下段丘面からの出土である。盾面の円筒部分が残存していた。器面にはタテ方向のハケメが施されている。文様はほとんど残存しないが、ヒレ状部分に移行する部分にヘラ描き沈線の一部が確認できる。靱形埴輪の矢筒部分の可能性も考えたい。

1352～1356・1358・1361～1368は板状の破片で盾面の一部をなしていたと考えられる。1362は上辺部下端の突起状の部分である。1352・1357は2本1単

位の弧線が沈線によって描かれている。1353・1354・1356・1362は、縁辺部に沿って沈線が垂下している。1351・1370は盾面、円筒部分の小破片である。

③ 靱形埴輪

1372～1377は、靱形埴輪、あるいはその可能性が考えられる資料である。1372・1375は残存部の特徴から靱と断定できるものである。鞍部墳頂部の調査区から出土したもので、厳密な意味での原位置出土ではないが、出土位置に近接する墳頂部に樹立していた可能性が強い。1377は器埴輪の破片と考えられる。

1372は、残高23.4cm、残存幅22.6cmである。矢筒部上半の一部と奴舩形を呈していたと考えられる背板の右側の一部が残存していた。全体の形状を推定することは困難であるが、盾形埴輪盾面の円筒部分の成形と比較するところの方がやや小型であろうと推測される。矢筒部は円筒形の基台部の製作技法を延長させて成形が施されたものと考えられる。残

存部下端は横断面形が左右に長い円形を呈し、径9.4×14.5cmに復元できた。この円筒部は、上位に行くにつれすぼまり、最上位はその器面上に鎌を表現したであろう幅10cmの方形板を間に挟みこんで閉塞している。方形板は、矢筒内にその端部が6.3cmほど残存していた。

矢筒の上端には幅2.5cmの薄い粘土帯を貼付し、この上に鋸留め表現を意味するの径1.2cmの粘土粒を1段に3箇所を2段、合計6箇所重ねている。また、上端の隅から矢筒本体の中心に向かって、幅2.5cmの粘土帯を貼付している。これは靱を背負うための紐を表現したものと考えられ、帯の交差部分には径5.5cmの円形板が重ねられている。上端とこの粘土帯により区画された下向する三角形の区内には2本1単位のへら描き沈線による文様が充填されている。粘土粒列の直下に横線が、その下に蕨手状の曲線が描かれている。

背板は、矢筒本体の側面に板状の粘土板を貼付し、翼状に張り出していたと考えられるが、右側が幅12.0cmほど残存していただけで全体の様相は把握できない。

矢筒本体の成形は、他の形象埴輪と同様に粘土紐を積み上げており、内面には粘土紐の接合痕を一部残しながらもタテ方向に粗いナデが施されている。外面の調整は、正面がナデ調整を施しているのに対し、後面は、矢筒本体がタテ方向、背板部分がヨコ方向にハケメを施しているのが対照的である。

後面、矢筒上端から下方8.0cmの位置に径2.0cmの円形の透孔を配している。また、この透孔から上端にいたる中央部分には粘土が貼りたされている。これは鎌を表現した方形板の接合を安定させるため後面から補強した痕跡一部とも考えられる。

1375は、矢筒本体の前面の破片である。器面には幅1.5cmの薄い粘土帯を貼付し、靱を背負うための紐が表現されている。紐の結び目は縄々結びに表現されており、粘土帯にはへらによる線刻が施されている。矢筒の規模は、1372と比較してやや大型と思われる。場合によっては大刀の鞘刀身部分に下がる下

げ緒を表現した可能性もあるが判然としない。

1373・1374・1376は、背板の一部である可能性を考えた。1373は、板状粘土を薄い粘土板で包みこむように覆っている。残存部上位と下端に刺突文が施されている。1374も下端部が斜め上方に延びることが予想されることから翼状を呈するものと考えられる。ともに前面にはナデ調整が施される。1376は、残存部左側に本体からの剝離痕が認められる。前面の下端は幅3.0cmほどの粘土帯を貼付し側縁部を縁取っている。区画内鋸歯文を構成したと考えられるへら描き沈線が認められる。

④ 大刀形埴輪

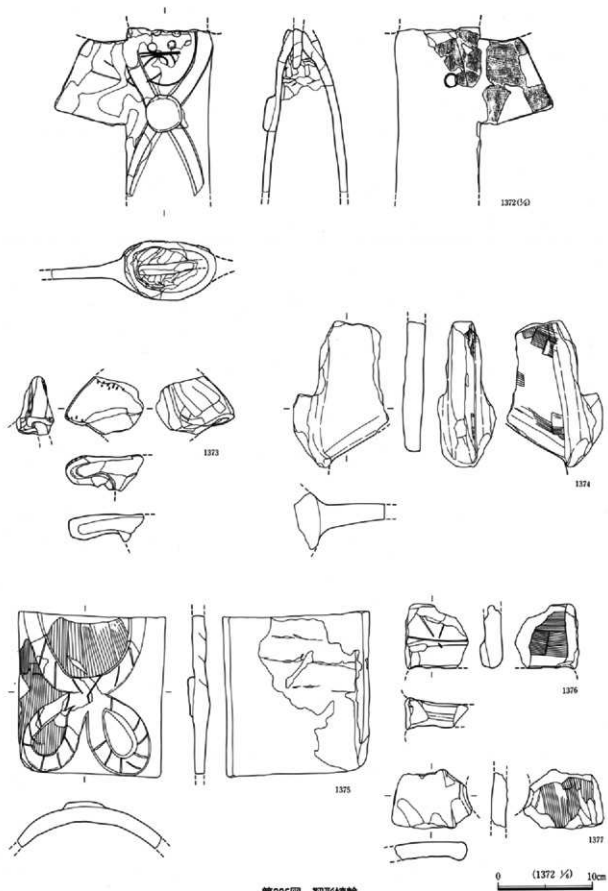
1378～1386は、大刀形埴輪の破片と考えられる資料である。幅の狭小な板状品を集めたが確実性の高いものは1378・1383・1386で他は他器種の器財埴輪等の可能性を多分に含んでいる。

1378は、後円部に近くびれ部東側の調査区出土資料で原位置は後円部墳頂と考えられる。大刀の柄頭に付属する勾金である。柄頭本体との接合状態から下端の一部と考えたい。横幅は9.5cm、厚さ1.0cmを測る。下端は山形を呈している。外面には三輪玉の装着を表現している。三輪玉は、中央に径4.0cmの半球形粘土を、その両端に半截状の粘土を貼付している。三輪玉には中央部分を中心に赤色塗彩が施されている。

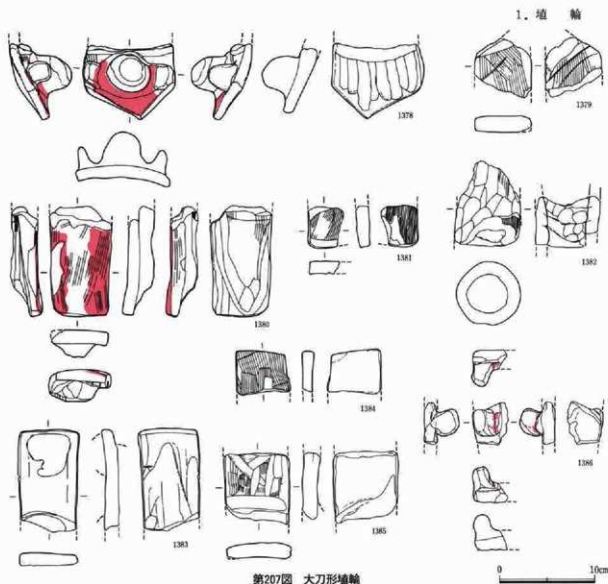
1383は勾金の一部と考えられる。幅6.3cmの板状を呈する。表面に2箇所、付属物の剝離痕がある。裏面にも広範囲にわたり剝離痕がある。

1386は厚さ1.1cmの板状粘土板に、指頭状の粘土塊が貼付されたものである。1378同様、三輪玉で装飾された勾金の一部と考えられる。

1379は、幅6.0cmの板状品で、端部が斜行する縁辺部を有している。表面にはへら描き沈線が、裏面には帯状の赤色塗彩が斜行して施されている点が大刀と断定しがたい点である。1380は、幅6.4cm、残長11.5cmを測る。裏面には粘土が貼られ補強が図られている。両側縁部に沿って赤色塗彩が施されている。家形埴輪の上屋根に付属する部品の可能性も考えられ



第206図 初形埴輪



第207図 大刀形埴輪

る。1382は筒状を呈する。柄頭上端部の破片の可能性を考えてみた。1385は幅6.8cmの帯状を呈する粘土板である。両端は欠損しているが表面に剝離痕やそれに沿うナデが認められる。勾金の一部と考えた。

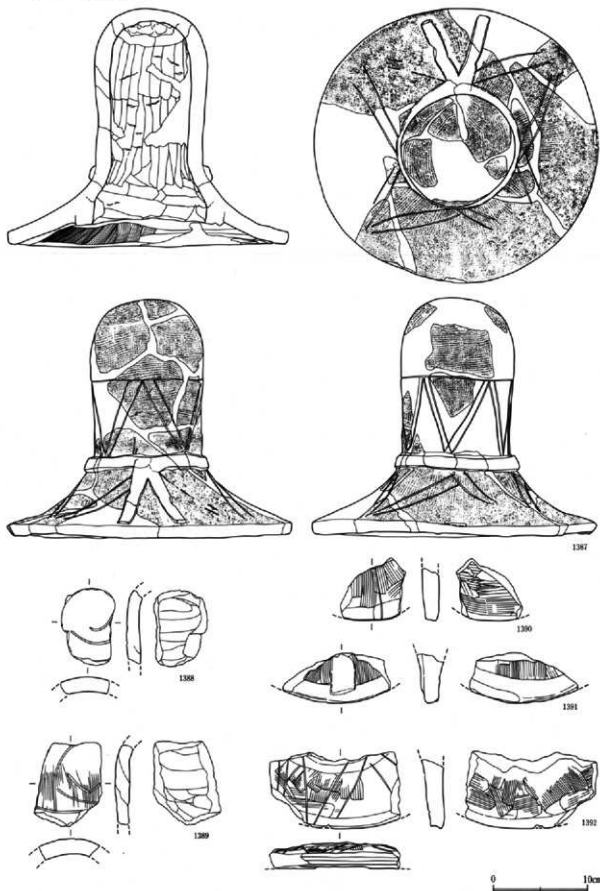
⑤ 帽子形埴輪

1387～1393は、帽子形埴輪である。1387は前方部西側中段面からの出土である。深みのある山高帽状を呈し、幅広の鈔がつく。本体部分は約半分、鈔部分は4分の3ほどの残存である。残高25.3cm、鈔の径30.4cmである。中位に幅1.5cmの粘土帯をめぐらし、飾り紐を表現している。この紐は八の字状に鈔に下がっている。帽子本体の径は12.2cm、器面にはタテハケの上にヨコハケを重ねる調整をおこなっている。中位に横行するヘラ描き沈線により上下二段

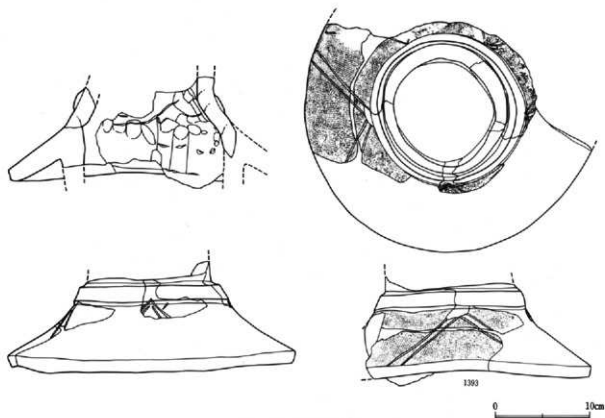
の構成に分け、下段には2本1単位の鋸歯文を10単位配していたと想定される。鈔部分にはやはり2本1単位の沈線による鋸歯文を4単位配している。

内面には基台部との接合痕が認められる。これによると、鈔部分は、基台部に引き続き、帽子本体の部分を筒状に成形した後に輪状に粘土板を付接させていることが理解される。本体の上端は、粘土紐を積み上げていった最後に粘土板を当て、開放部分を閉塞している。内面の調整は、鈔部分にハケメを残す他はタテ方向にナデを加え粘土紐の接合痕を良く消している。

1388・1389は、鞍部墳頂部から出土した破片で同一個体をなすと思われる。小径で、残存上位に向かって閉塞する様子がみられることから帽子本体の一部



第208図 帽子形埴輪(1)



第209図 帽子形埴輪(2)

と考えた。ヘラ描き沈線は、横線の上位に2本1単位の蕨手文を構成していたと想定される。

1390～1392は、端部が円弧をなす板状破片である。1390は後門部西側中段面の出土である。外面にヘラ描きの沈線が施される。1391は前方部西側中段面の出土である。幅2.2cmの薄い粘土帯を貼付している。1392は端部の直径が28.0cmを推定できる破片で、ヘラ描き沈線による鋸歯文が2単位確認できた。この個体は鞍部墳頂部からの出土である。

1393はくびれ部西側中段面の出土である。人物埴輪列よりも上段墳丘寄りの出土である。形状は1387に類似し、中位に幅2.3cmの粘土帯をめぐらし帽子本体と鈿の部分とを区画している。鈿の部分は端部の径30.0cmが想定され外面には2本1単位のヘラ描き沈線により5単位の鋸歯文が配されている。出土位置から人物埴輪の一部とも考えられるが、分量から人物の付属品ではなく、単体の器財埴輪と判断したい。

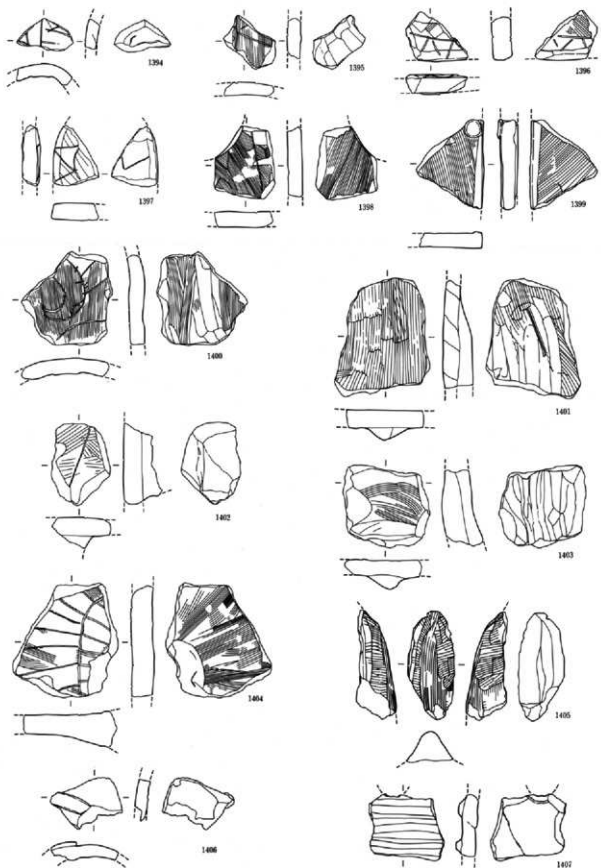
⑥ 器種不明の器財埴輪

1394～1414は、器種を特定できないが器財埴輪の

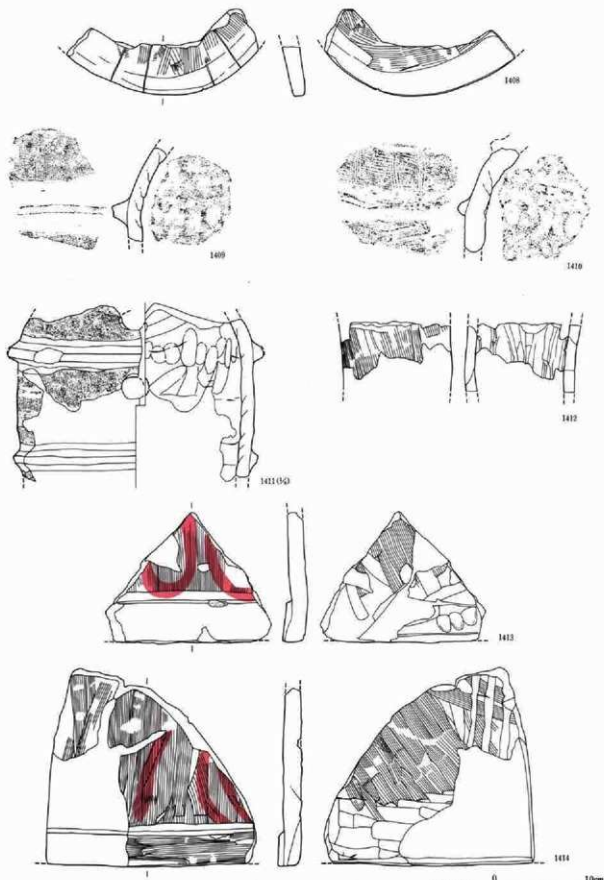
一部破片と考えられる個体を羅列した。1394～1398は、器面に沈線文が施されている。1396・1397は、前方部の調査区出土の小破片である。表裏両面に文様が施されている。側縁部から2.0cmほど内側を弧線で区画し、その間隙に一辺2.5cmほどの鋸歯文を充填している。1398は円形の透孔の一部が残存している。

1399は板状の破片で器面にはハケメが施される。側縁部寄りに円形の粘土粒が貼付される。1400はやや彎曲する器面にヘラ描き沈線による蕨手文が描かれている。1401・1403は平坦な器面にハケメ調整が施された破片であるが裏面には粘土の貼付がなされ、器面に起伏がみられる。1405も、前2者同様、器面に貼付された部分であろうか。1402は、平坦な器面にヘラ描き沈線が施されている。1404は、部分的に器内の厚さが異なる板状破片である。前面にヘラ描き沈線により放射状の文様が構成されている。一部に赤色塗彩が施される。後門部西側調査区の出土であるので後門部墳頂部出土の家形埴輪の破片との類似性が認められる。1406は小径の本体に幅

第4章 出土遺物について



第210図 器財遺物(1)



第211図 器財埴輪②

(1411 1/3) 0 10cm

1.5cmの粘土帯が貼り付く。1407は近接して突帯が2条めぐる資料である。透孔の一部が残存する。

1408は側縁部が円形を呈している。2本1単位のへら描き沈線により、放射状の区画文が施されていると考えられる。

1409～1411は後円部西側の調査区から出土した破片で、同一個体の可能性が高い。残存上位に向かって内彎して立ち上がり、朝顔形埴輪の肩部の形状に類似する。外形の変換点には突帯がめぐる。1411ではこれから9.5cmの間隔を開けて、もう1条突帯が貼付されている。外面はタテハケを施し調整されているが1410・1411はこれにヨコハケが重なっている。内面は粗雑なナデ調整で、一部に指頭圧痕が認められる。1411には突帯を挟んで小径の円形透孔が配されている。また、上位段には透孔と同じ高さの位置に刺突文が施されている。

1412は円筒状を呈する破片である。径は11.7cmと小径で、形状も不均等である。外面にはタテハケが施されている。

1413・1414は大型の板状破片である。1413は残高13.7cm、後円部頂部の調査区出土である。下端は幅4.5cmほどに粘土帯が貼付され肥厚している。外面はハケメ調整後赤色塗彩により円弧状の文様を描いている。1414は後円部西側中段面の出土である。下端は1413同様粘土帯が貼付されている。外面は肥厚部分も含めハケメが施されている。ともに家形埴輪の屋根の一部になろうか。

⑦ 人物埴輪

第212図の1415から第251図1533までは形状の復元ができた個体を中心に観察内容を記載した。第1次調査から第3次調査の際、原位置を保って出土した資料が大半である。

第252図以降は第7表に墳丘の部位ごとに出土資料を集成、後円部西側の調査出土資料から順次掲載している。

男子人物 (1415～1426)

背中に鞆を負ったと考えられる半身像の男子人物である。同様の形状をした人物埴輪が合計3体出土

している。これらは横穴式石室開口部左側、後円部西側中段面の狭い範囲から細片状態で出土している。頭部、腕、鞆、基台部など主要な破片がいずれも3個体ずつ出土していることから、これらの人物が3体であることは確実である。形状、調整、色調、胎土の特徴とそれを相違を検討し、1415から1426を同一個体を構成していた破片と考えた。整理作業に努めたが、困難性が高く時間的制約もあり今回は破片資料として個々を提示する。量量は他の人物埴輪と比較してやや小型であったと想定される。

頭部、被物、首部～胸部、左手、右手肩部、弓、背に負う鞆、腰部から基台部が残存する。被物は1415～1418の破片状態で確認された。1437と同様と考えられる。

顔は、右目から右耳、鼻、顎にかけてと左目周辺が残存する。顔面は、頭部に向かってやや開きぎみで、目の切り込みの上位は若干隆起する。鼻梁はとおり、鼻孔は刺突により表現される。耳は、円形に粘土紐を貼って縁から耳たぶを表現し、中心を工具で刺突、穿孔している。左右とも下端に径5cmの粘土紐を丸くあわせた耳環をつけている。首には丸玉を一連つけている。

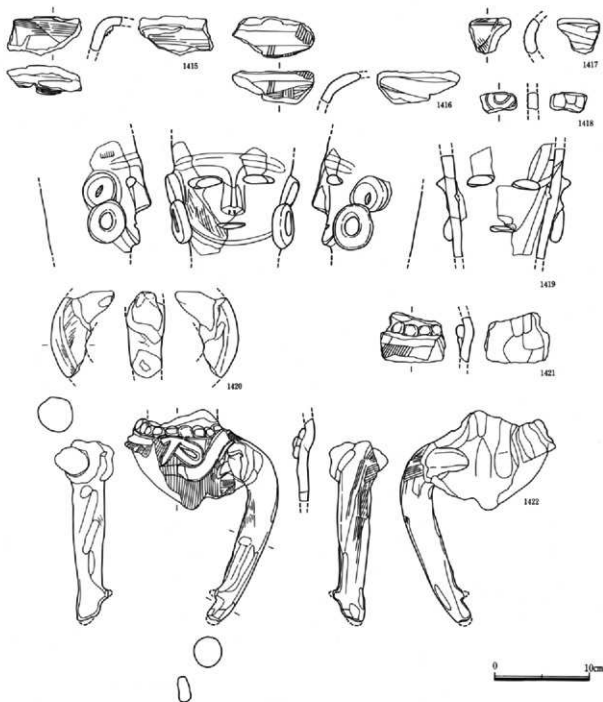
着衣は、腰のやや下に裾部を持つと考えられる。襟元はいわゆる盤領である。合わせは表現されていないが、襟元に粘土紐を花結に付けている。その下に付けられた幅広の粘土紐は鞆を背負うための帯紐を表現したと考えられる。この他に袖口をはじめとした着衣の細かな表現はなく、器面上にはハケメが施されているだけである。

左手は上腕で曲がり、腰近くで弓の下端を持つように下がっていたと考えられる。指は親指を単独で表現し、他の4本はミトン状に合体している。右手は上腕部までで欠損する。

弓は丸木弓で正面に弦を向けて表現している。上下2折になっており、上片20.4cm、下片16.4cm、直径2.1cmを測る。本弰部に3箇所、末弰部に6箇所、粘土粒を貼り付け装飾のための両頭金具が表現されている。中央部分は左胸にそえられている。

背に負う物は板状で立体感は失われている。全体形状は奴瓶のようである。矢筒は中位に横方向の粘土帯を貼り付け上下に2分している。上半部には刺突文を伴うへら描き沈線による三角形文が配されている。下半部にも内行する弧線がへら描きされる。下端には軀留を表現したと思われる粘土粒が貼り付いている。上半部の左右には翼状の背板が表現され、

二重の弧線がへら描きされている。矢は鎌を上に向け3本がへら描き表現されている。上端には軀留を表現したと考えられる3箇所の粘土粒とその両端に爪状の粘土粒が貼られている。中位に花結にされている粘土紐は人物の胸部からまわる背負いの帯紐を表現したと考えられる。結の下位に穿たれた小孔は内面まで貫通している。



第212図 人物埴輪(1)

第4章 出土遺物について

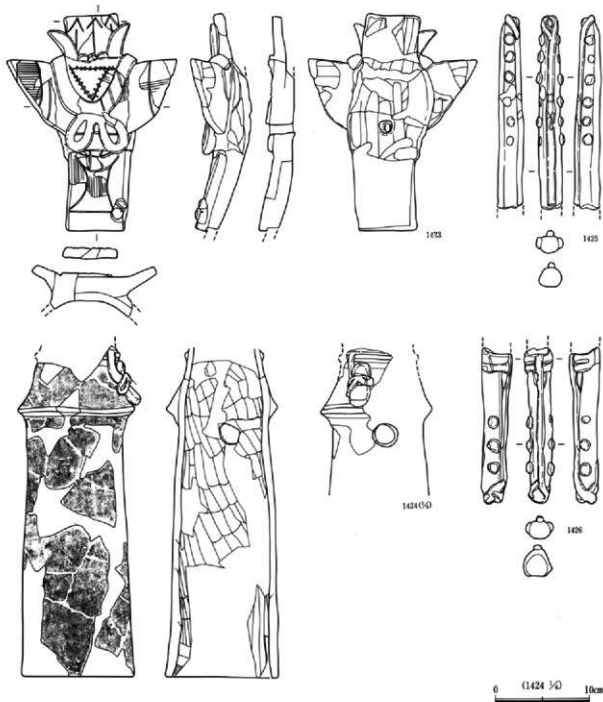
着衣の裾部は、円筒本体に断面三角形の粘土紐を貼り成形、裾のひろがり表現している。外面にはタテハケを施す。腰部には突帯がめぐり、細い紐状の帯を表現したものと考えられる。

腰部には皮袋が下がる。腰帯からの紐が中央で花結になっている。皮袋の口は工具による刺突が加えられ端部が表現されている。

基台部分は、高さ43.5cm、底径17.8cmである。基底面から徐々に径を狭める円筒で裾端の直下に円形の透孔を穿っている。外面にはタテハケ、内面にはタテ方向のナデが全面に施されている。

男子人物 (1427~1436)

背中に鞆を背負った男子人物である。顔面の一部、右腕、左腕上腕部、首部の一部、胴部の一部、鞆、



第213図 人物輪軸②

大刀(刀子か)、腰部から基台部上半が残存する。

1428は、本体に貼り付いた幅3.7cmの粘土帯で、帯の外面にはヘラ描きによる斜格子状の文様が配されている。被物の残存部と考えた。

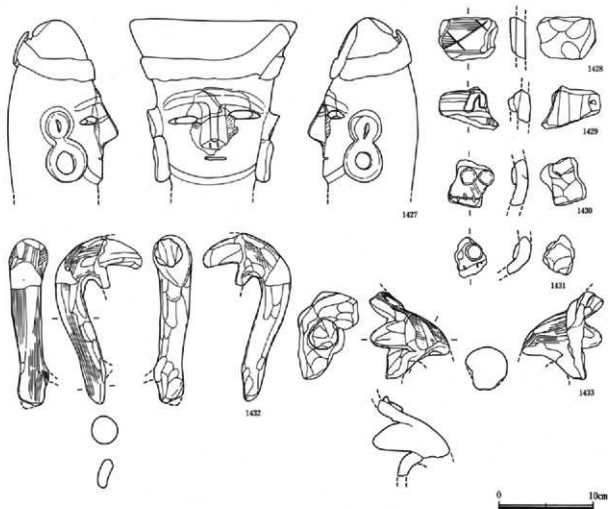
顔面は、両目の目頭と鼻梁の周辺のみが残存する。鼻孔は、刺突により表現される。襟元には一連の首飾りが表現されており、1430や1431のように径1.5cmとやや大粒の粘土粒をつけた破片がみられた。また、1429の突帯状の高まりは襟元を表現したものと思われる。垂下する粘土紐は着衣の重ねの紐、あるいは飾り紐と考えられる。

右手は上腕で彎曲し、下方へ延びている。指は親指だけ独立して表現されている。左手は肩口で欠損している。いずれも柄状に成形した端部を胴部に差し込んで接合している。左手に持つと考えられる弓

は、両端とも頸部分を欠損するが弦がはられ、未頸には粘土粒の貼り付けによる両頭金具が3箇所表現されている。

背に負う鞆は1423と同様の形状である。矢箱は中位に横方向に貼り付けられた粘土帯を境に上下2段に区分され、上半には翼状の背板が延び、それには二重の弧状のヘラ描きが施されている。また、人物本体から延びる粘土紐により背負の紐が中位で交差し、花結されている様子が表現されている。花結の中心には小孔が貫通している。下段にはヘラ描きによる鋸歯文が配されている。下端の両脇からは人物の胴部へ延びる帯が付く。背板の上位にはヘラ描きにより上方を向いた数本が描かれ、その両側に瓜状および鋸歯状の粘土粒を並べている。

下半部の残存状態も不良で、人物の腰部から基台



第214図 人物埴輪(3)

第4章 出土遺物について

部の上半の1/2ほどにとどまった。

着衣の裾部は他の2資料と比較してやや外反強く、下方に延びている。外面は粗いハケメを、内面はナデをタテ方向に施す。裾部の直下に円形の透孔が配されていた。

男子人物 (1437~1448)

背中に鞆を背負う男子人物である。

頭部~顔面、首部の一部、両腕、弓、鞆、刀、皮袋などが細片となっ

て残存していた。

頭部は全体が残存している。残存高19.2cm、最大幅19.0cmである。頭巾状の被物をしている。幅2.5cmの粘土帯は鉢巻あるいは被物の端部を表現したものであろうか。額上を横切り、後頭部の上位で交差している。被物には曲線のヘラ描きによる文様が配される。額の帯には斜方向の刻みを加えられている。

額の長さは9.5cm、幅はこめかみあた



第215図 人物埴輪(4)

りで12.0cmである。小づくりで、頸は、本体に粘土を薄く貼り足して輪郭を形造っている。目は、横長に切りこまれ、弱く眼窩上突起を伴う。鼻筋は通り、刺突により鼻孔が表現されている。口は、横一文字に切り込まれている。

耳は、円板状の粘土の縁を整え、中央を工具により刺突し、穿孔を施している。下端には径5.0cmの耳環を垂下している。後頭部をはじめ器面の多くにタテ方向のハケメが施される。

着衣の全体像を想定することは困難であるが、1438~1440など一連の粘土粒による首飾り部分の破片からは襟元に盤顔を思わせる粘土の肥厚が認められる。

左右の腕はともに同様の造作をしており、特段、着衣の袖口表現などはみられない。手は親指のみ



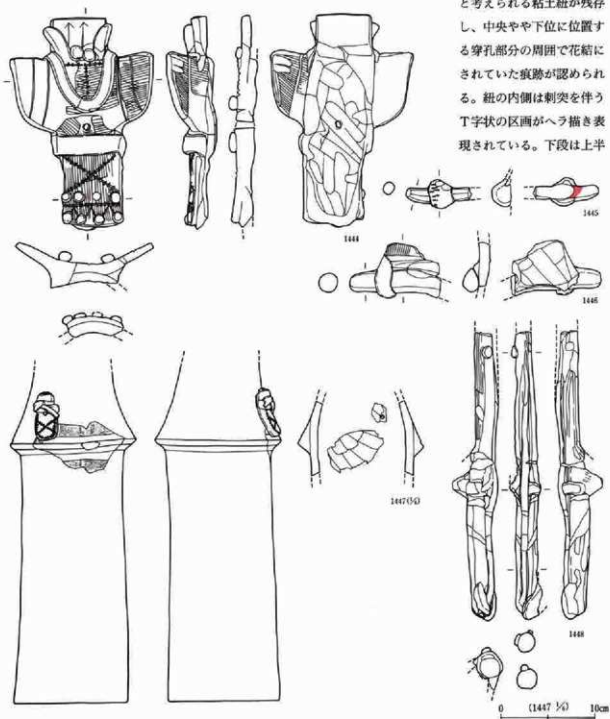
第216図 人物埴輪(5)

が独立している。右腕は胴部に密着する状況が想定される。

弓は、本弦部分に左手がそえられている。末弦部分は欠損するが1箇所に粘土粒の貼付が残存し、両頭金具の表現があったことが知れる。弦など細部にわたりその表現は丁寧である。

鞆は他の2資料と同様である。上位の鎌の部分はほとんど欠損し、わずかに一本、ヘラ描き表現の痕跡が残存するだけである。矢筒の部分は中位の粘土帯により上下2段に分けられ、上段は翼状の背板が左右延びている。翼状部分は二重弧線により区画が施されている。また、背負のための帯紐を表現した

と考えられる粘土紐が残存し、中央やや下位に位置する穿孔部分の周囲で花結にされていた痕跡が認められる。紐の内側は刺突を伴うT字状の区画がヘラ描き表現されている。下段は上半



第217図 人物挿繪(6)

に×字状のヘラ描きが、下半には鋸歯文とその上下端に4個ずつ、2列、粘土粒が配されている。

人物の腰部は、ほとんど残存しないが1446の破片の存在から刀を佩用していたことが理解される。これは径2.0cmの棒状粘土を貼り、本体とし、更にその上に粘土帯を重ねて、鐙、鞘口付近を表現している。1445も同様の表現をされた破片である。1446よりも小型であることから、刀子であろうか。鞘口部分には刺突を伴っている。

上衣の裾部は緩やかに外反、あまり突出しない形状である。外面に貼り付く皮袋は腰帯から紐で下げられていたと考えられ、中央や上に横位の粘土紐とその上に花結された房の一部が残存する。袋の口には工具による刺突痕がなされる。下半の外面にも刺突を伴うヘラ描きの文様が配されている。粘土紐の交点の下位には人物本体を貫通する小孔が穿つてある。

男子人物 (1449)

円形の台座の上にあぐらを組んで座る男子人物である。後円部西側中段面から出土した。先述の鞆を背負う男子人物3体は、本資料の背後に位置していた。また、対面する位置に女子人物(1450)が、左斜め前に女子人物(1451)が樹立されて、一群をなしている。

基台部の下端、基底面は変形が著しく、そのまま墳丘上に設置したとすると人物像は右側に大きく傾くことになる。このための作因では人物の顔、帯、上衣の裾端などの平行関係を調整し、基台部下端の右側部分を3.0cmほど上方にもち上げて実測をおこなっている。図上の復元高は114.0cmである。人物の高さは71.6cmとなった。

頭部に被る帽子の鐙から上方は後補である。復元にあたっては赤堀町下触出土の男子人物が被る帽子の形状が参考にされた。鐙の後ろに双脚輪状文形の装飾がついている。径は23.1cm、双脚輪状文を含む前後の幅は26.4cmである。鐙の上位に横行するヘラ描き沈線により上下に2分される。上位は沈線で弧状の文様が配され区画内に赤色が塗彩されている

が、その全体構成は不明である。鐙には幅1・2cmに区画された短冊状の文様が配されている。

頭部は、後頭部の大半が後補である。顔の長さは、帽子の鐙の下から顎の先端までが13.2cm、こめかみあたりの幅が最大で14.7cmである。眼は木の葉状に切り込み、口は、横一文字に切られている。鼻は幅狭く、鼻筋がとどまっている。鼻孔は刺突により表現されている。髪は左右に2分し、顔の両側に美豆良を肩口まで垂らしている。左側の上半は後補である。美豆良は太さ4.0cm、長さ13.5cmの棒状粘土で表現されている。下端は前方にややかえり、その幅を増している。飾り紐で束ねられ外側に花結が貼り付く。紐には赤色塗彩が施されている。下げ美豆良の下には耳環を付けているが、耳の表現はみられない。耳環にも赤色塗彩を施している。

後頭部は、残存状態が悪いが、髪分け目がきちんと表現され、左右に二分された髪を美豆良に束ねた様子が良く理解できる。器面に施されたハケメにはウェーブがかかっており、髪の流れを表現したものである。

首には径2.0cm弱の扁平な粘土粒を貼付し、一連の首飾りの装着を表現している。

胴部は後面、肩から背中部分の大半が後補である。上衣の下半は前面から左側面の残存状態が不良であった。器面も全体に荒れ気味で、各所に施された赤色塗彩も多くが剥落していた。

両腕は体の前方で曲げられ、顎の前で手のひらを合掌するようにあわせている。親指をはじめとした各指の先端は欠損している。手に何かを持っていたのか否かの判断は現状では困難である。

上腕の外側、片口寄りには小さな刺突が両腕に各1箇所認められる。成形に伴うものであろうか。

下腕の太さは、径4.2cm、手首の上、肘寄りには幅6.0cmの籠手を巻き、両端を区画する沈線と×字状の文様には刺突を伴う。手の甲には粘土紐により手甲が表現されている。

着衣は腰まで延びた上衣を着て、腰に幅広の帯をしめている。粘土を貼って厚みをもたせた合わせは

第4章 出土遺物について

いわゆる左疋で、ヘラ描きによる刻みを加えている。襟元にはその端部に沿って横線による区画がなされ、内部に刻みが配されている。襟元と帯近くの2箇所に合わせて結びの紐が表現されている。上衣は腰から上位を横行する2本のヘラ描き沈線により3段に区分し、下の2段はこの横線内をさらに2本1単位の斜行する沈線により小区分し鋸歯文を割り付けている。背中では4段構成で、下位3段に文様が配されている。帯よりも下位の部分も横線で2段に分割し、さらにこれを2本1単位の縦位の沈線で細分している。裾部は幅2.0cmの粘土帯を貼り肥厚させ、矢羽根状の文様をヘラ描き、鈴を貼り付けている。原状では10箇所構成であったと考えられる。

帯は、幅6.0cmにわたり粘土を貼り付けて表現するいわゆる大帯である。鋸歯文2段から構成される文様を配し、横線には刺突を重ねている。中位に4箇所、鈴が付いている。鈴は、直径2.5cm前後で鈴口を真横に刻んでいる。

腰の前面には大刀を佩びている。上端を欠損するが幅2.9cm、残長14.4cmの粘土板には柄頭および鞘尻を表現したと思われる粘土紐の貼付が認められ、鞘口部分には刺突が鞘部分にはヘラ描き文様により装飾が施されている。

左腰には2本1単位の棒状品が垂下し、上端は粘土紐で合わせられている。刀子を表現したものであろうか。またこの付属品の上位、やや正面寄りにも帯から垂下する粘土紐が貼り付いている。

足は左足の先端の一部のみの残存である。爪先に向かって細くなる粘土塊は表面が刺突を伴うヘラ描き文で飾られている。

着衣の前面は裾部にウェーブがかかり、台座から大きく離れている。この状況から着衣の下位には両足が表現されていたと考えられ、なおかつ、裾部のウェーブから胡座、あぐらを組んでいた可能性が強く、他の人物埴輪の諸例を参考に復元を試みた。なお、上衣の裾部、左足の膝頭がおさまった位置には径5mm弱の刺突孔が認められる。右足部分は後補のため孔の存在は確認できなかったが一對をなしてい

た可能性が考えられる。

上衣の赤色塗彩が残る部分は、合わせの結びの紐、上半部分の鋸歯文を構成する2本1単位の斜行線の内側、下半の短冊状の区画内、裾部の肥厚部分、そしてそこに装着された鈴の各所である。

また、上衣の他に籠手・帯にも赤色塗彩の痕跡が残る。

人物の座る台座の平面形は横長の円形を呈するもので、横幅51.0cm、奥行46.0cmを測る。端部の厚さ2.0前後cmの粘土板が平面四角形の基台部から6.0~7.0cmほど水平方向に張り出している。

これを受ける基台部は、平面四角形を意識して成形されたものの四隅は隅丸をおび、ここに縦方向に突帯状の粘土を貼り付けて四角形を強調している。正面部分は残存状態が極めて不良で大半が後補である。下端、基底面における法量は横幅37.2cm、奥行39.0cm、台座部下位までの高さ42.1cmである。前後2面では台座の直下に縦6.3cm、幅3.6cmの板状を呈する粘土板が各2箇所貼られている。加飾のために施されたものであろうか。透孔は、円形のもの側面に一對、前後面ではそれよりやや下位の位置に一對穿たれている。後面の孔径は6.3cm、左側面のそれは縦5.1cm、横5.7cmである。

成形は基台部を製作後、人物の腰部に向けて粘土紐を積み上げ、その径を細めていったと考えられる。両側面、後面ではこの部分が直接上衣の下半となる。その後、台座の粘土板を水平方向に突出するよう成形、前面ではあぐらを組んだ足部分をこれに合わせて置き、胴部の形状に則して上衣部分の粘土でその上を覆うように造作したものと考えられる。

器面の調整は基台部外面がタテハケである。内面はナメ方向のハケメに一部ナデが残っている。人物胴部は下半部分では大半がナデ、帯から上位がヨコあるいはタテ方向のハケメが確認できる。

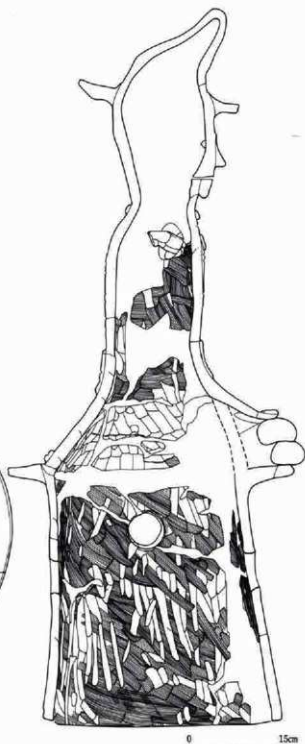
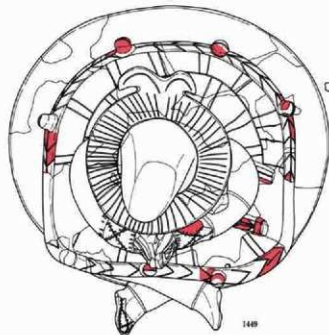
女子人物 (1450)

平面円形の台座に正座する女子人物像である。両手を顔の前にあげている。後円部西側中段面からの出土である。

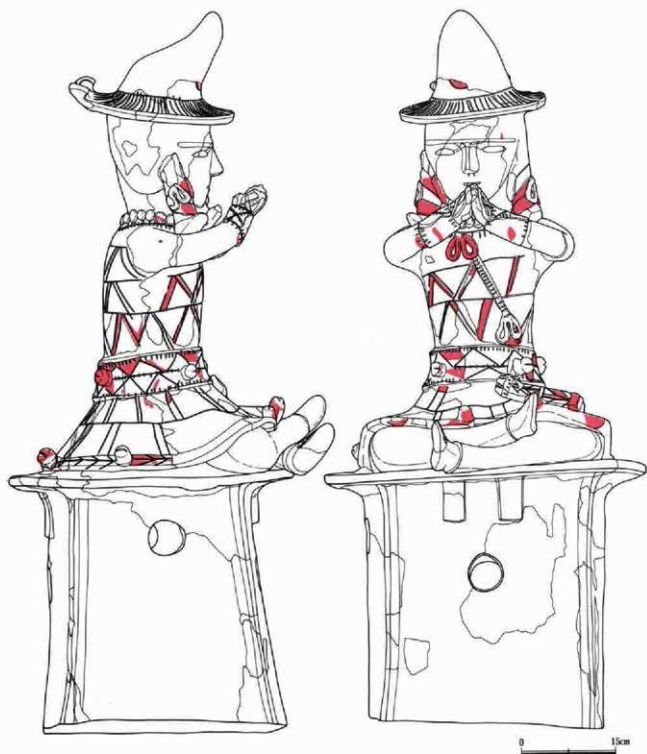
全高101.4cm、人物部分の高さ60.6cmを測る。頭部は額を広く出し髪をつぶし島田髷に結っている。その形状は平面形が分銅形を呈し、最大横幅21.0cm、前後幅18.3cmである。髪は折り返しに丸みをもたせ立体感のある造作にしている。頭頂部には3.0cm前後の粘土帯を貼り付け髪を結んだ紐を表現し、端部を側方にたらしめている。額は丁寧になでられ、幅4.4cm、Uの字状の粘土板による櫛を貼り付けている。櫛歯5本のヘラ描き沈線によって表現されている。縁辺には小径の粘土粒を付けて加飾している。後頭部にはタテ方向のハケメを施してある。髪を表現したのであろうか。

顔は頭部本体に粘土板を貼り付けている。下半部の粘土をより厚くし、顎骨部分を表現した成形である。顔の長さは額の髪のはえぎわから顎の先までが18.9cm、最大幅は耳の位置にあり、12.9cmである。目は木の葉状に切り込まれ、眼窩上突起により眉を表現したものと思われる。鼻は下端の幅が狭く鼻筋がとった美形である。刺突により鼻孔を表現する。口は欠損しており後補である。右耳は粘土紐をリング状に貼り付け耳たぶを表現するが耳孔はあけられ

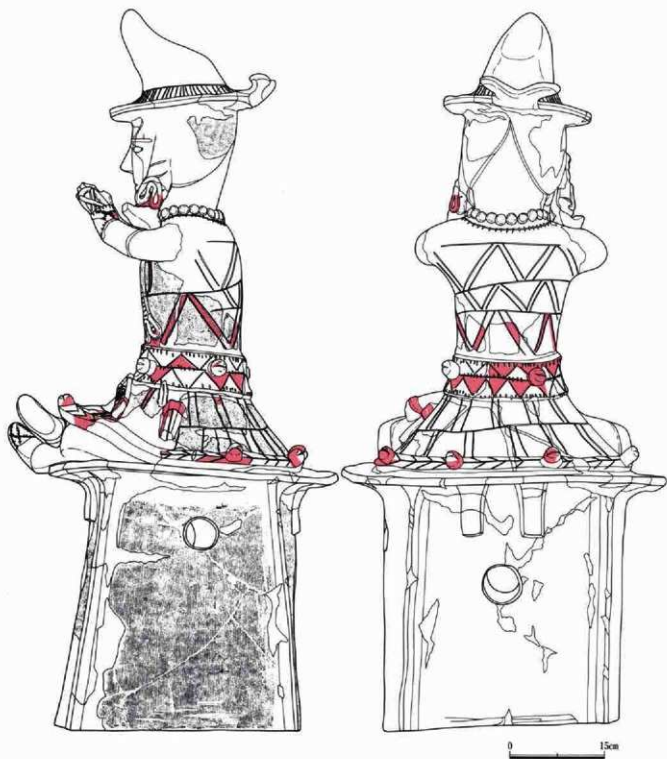
ていない。耳たぶの下半には粘土粒の貼り付けによる耳玉が表現されている。耳の直下には径4.9cmの耳環が垂下する。左耳は欠損するが右側と同様と考えられる。首には一部に径1.8cm前後と比較的大粒の粘土粒の貼り付けが認められ、一連の首飾りが巻かれ、



第218図 人物埴輪(7)



第219図 人物埴輪8



第220図 人物埴輪9)

第4章 出土遺物について

背中ではその一部が下方に垂下していた様子が確認できる。

両腕は、からだの前で大きく曲げられ、手のひらは顔の前で左手を前に重ねられている。その太さは上腕部で約5.0cm、下腕部で約4.0cmである。中実である。指は5本の指を個別に棒状粘土で表現し、手のひらと接合している。内彎ぎみに曲がる右の手のひらには剝離痕が認められ、この女子が外形に曲面を有する何らかの付属品を手に持っていたことが想像される。

左右の両手首には2連の手玉と一連の釦がそれぞれ径1.0cmの粘土粒、粘土紐により表現されている。

胸は粘土塊を貼り付けて乳房のふくらみが表現されていた痕跡が認められた。女子人物1459と同様の様相が想定できる。

着衣は膝上まで延びるやや長めの上衣とスカート状の裳が表現されている。上衣は一部に認められた残存状況から右前合わせで、合わせ部分に粘土を貼り肥厚させた上に刻みを加えている。結び紐の痕跡と考えられる粘土紐の剝離痕が左乳房の下とウエストのくびれのやや下位のところに残存する。合わせの標元は、特に肥厚させることなく、ヘラ描き沈線とその上に垂直方向に加えられた刻み目により端部を表現している。袖口は、腕本体に薄く粘土を貼り、筒袖状に弱い段をつくり、端部に刻みを加えている。右腕は、肘からやや手首寄りに2本、沈線がリング状にめぐらる。

胴部は胸部から緩やかにくびれ、ここから正座する膝頭に上衣がゆったりとひろがった様子が造作されている。裾端は裳との重なり部分で1.0~1.5cmほどの段をなし、縁部に刻みを一周させている。

上衣の文様は前面がヘラ描きによる1条の横線と2条1単位の斜行線による鋸歯文を4段配している。なお、2段目の下端を画する横線には合わせの端部同様に刺突が伴い胴部を一周している。前端部の1段は2本1単位の直向する沈線による細分がなされている。

前面にみられる文様の段構成は両脇の下あたりの

側面に変換し、背面では前面の最上位にあたる区画は表現されていない。また、裾部はその端部まで鋸歯文により区画されている。

裳は台座の上にふわりと広がった状況にあり、正座する足の動きにあわせ、膝や下肢のふくらみを立体的に表現している。ただし、足は裳にくるまれ一切表現されていない。裳の裾部の横幅は40.5cm、奥行46.8cmを測る。裾部は、台座の上に半円形の端部が造作されている。後方からみると幅広の粘土紐の接合状況が半載された材木の年輪をみるようにみえる。着衣を幾重にも重ねたことを表現したものであろうか。その中央、台座と接する部分には径6.0cmの透孔が穿ってある。

裳の文様もヘラ描き沈線によるもので、上衣の裾部と接する部分に幅の狭い文様帯を一段はさみ、その下位は前面で垂直方向に、側面から後面では水平方向に短冊状に区画している。側面にはこれと交差し、垂下する2本1単位の沈線が左側で3単位、右側で4単位みられる。

赤色塗彩は、顔面の眼下、頬の一部と、上衣に配された鋸歯文の2本1単位の斜行線の内側、裾の端部にその痕跡が認められる。裳は、短冊状の区画内を1段おきに彩色している。特に、前面の残存が良好である。以前は、この赤色の間の区画に白色の塗彩が施されていたことが確認されているが、現在は全く剝落し識別できない。

台座の規模は、横幅47.7cm、奥行50.7cmである。

人物を受ける基台部の平面形は隅丸方形を呈する。下端、基底面の横幅37.6cm、奥行37.8cmで、高さ40.0cm弱である。外面は全面にタテ方向のハケメを施している。底面間近に断面台形の突帯をめぐらしている。透孔は、径5.5cm前後の円形の孔を台座近くに前後に一对に、左右に一对を穿ってあるが前後方向の孔が高位位置にある。

また、基台部と台座との接合部分には幅3.7~4.7cm、長さ8.0~9.0cm前後の板状品が前・後面各2箇所、左右の側面に各1箇所、合計6箇所に貼り付けられている。

成形は、基台部を製作後、胴部のウェスト部分の径をめざして輪積みの径を減じている。その後、水平方向に約8.0cmほど粘土板を突出させ、台座を製作していると考えられる。膝と袋の下端部分のふくらみは台座の粘土板に載せて、本体の輪積みの外側をそれぞれもう1枚ずつ粘土板で覆うことにより造り出されている。袋の下端面に開く透孔、膝頭の位置に2箇所にみられる径0.3cmの小孔は成形・焼成にかかわるものと考えられる。

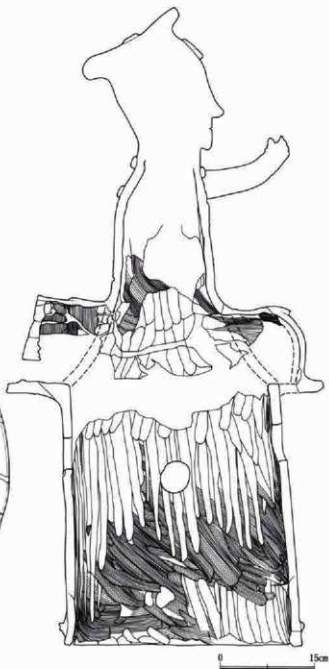
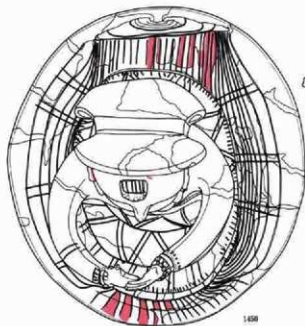
1451~1455は、厚さ1.1~1.2cmの板状の付属品である。上半部は本体の形状に合わせて、外側に彎曲する。長さ9.2~10.9cm、幅4.5~5.1cmを測る。外面はタテ方向のハケメを施している。接合関係が生じないので確定できない。いずれも後円部西側中段面から出土していることから、直接の接合点を確認できなかったが前述の男子人物(1449)、あるいは女子人物(1450)の基台部上位に付属する可能性が高い。

1456は、女子人物(1449)の顔面頸部分の可能性があるが直接の接点を確認できなかった。頭部本体から剥落した粘土板の一部であろう。口の切り込みは横一文字に短く開けられている。

1457は人物の耳環の一部と考えられる。径4.4cmに復元できる。出土位置から女子人物(1449)に付属する可能性も考えられるが断定するにはいたらなかった。

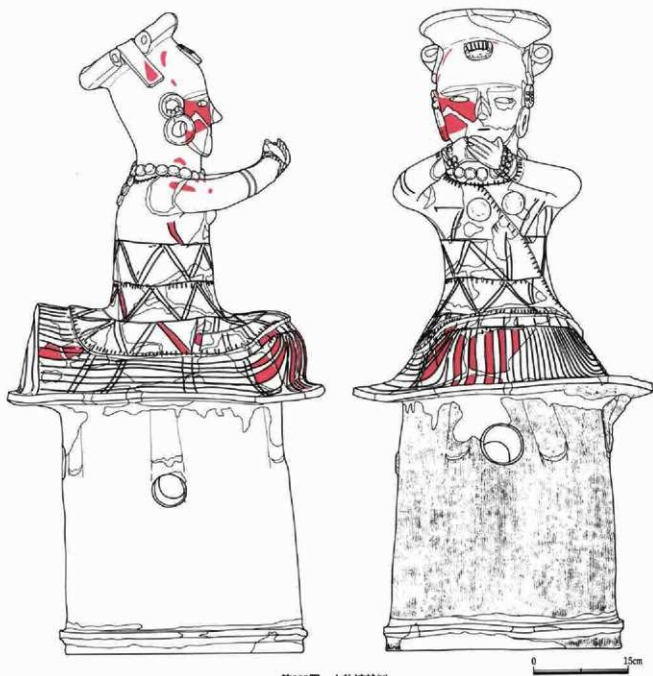
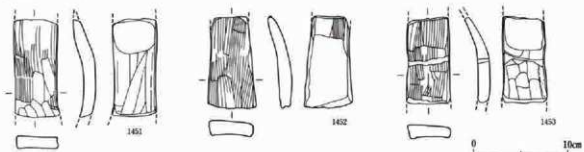
女子人物(1458)

長円形をした一つの台座の上に正座する3人の女子人物である。近接して出土した男子人物(1449)や女子人物(1450)と比較して、人物が小柄に表現・



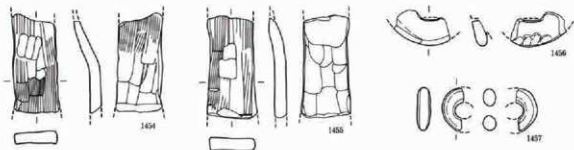
第221図 人物埴輪10

第4章 出土遺物について

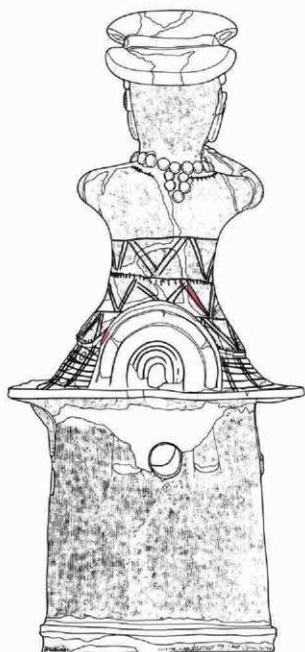


第222図 人物埴輪11

1. 埴輪



0 10cm



第223图 人物埴輪切

第4章 出土遺物について

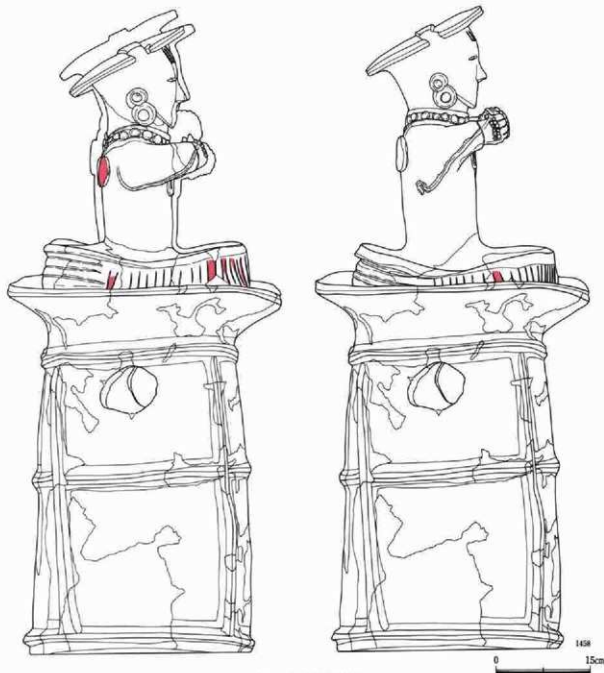
製作されている。最大高は、中央の女子の髷の先端部分にあり、復元高は101.4cmである。最大幅は、台座の横幅にあたり、83.4cmである。奥行きも台座部分に求められ、44.1cmを測った。

3体の女子像は、同様の所作が表現されている。埴輪に向かって左側の人物（以下右側人物）は、台座上の高さが41.4cmである。胴部の残存状態は比較的良好であるが、髷・顔面・左手のひら・裳の部分

に後補が多い。

髪形はいわゆるつぶし島田で、結びの紐が幅3.0cmの板状に表現されている。髷は、前後21.0cmの円板状を呈し、女子人物（1450）のような立体感はない。左右の側面に小さなくりこみがつくれ、髪束の束の境を表現している。後頭部には特段毛髪表現は施されていない。

額の櫛は線刻により表現される。外縁はやや横長



第224図 人物埴輪(3)

のU字状を呈し、その内側を4ないし5本に細分し、櫛歯を表現している。顎は薄い粘土板を貼りたしており、両手を胸におく女子(1462)と共通した成形がみられる。身体全体と比較して頭部の割合が大きな造作である。顔面は丸みのある人物の顔を模したのか幅広で13.2cmに復元できた。

目は、幅狭く切れ長である。眉あるいは眼窩上突起は、特別に強調されていない。鼻は、下幅が広く、

やや低い。鼻孔の表現はなされていない。口は、横長に刺突されるが内面に貫通していない。耳は、粘土紐をリング状に貼り付け、孔は穿たれていない。耳たぶには耳環が付されている。

首には2連の紐とその間に玉を運ねた意匠がなされ、下位の紐は背中側で垂下し、末端に玉が付いている。背中には肩胛骨のあたりに左右2個、径5.0cmの円盤が貼り付く。この器面には赤色塗彩が施されている。



第225図 人物埴輪14

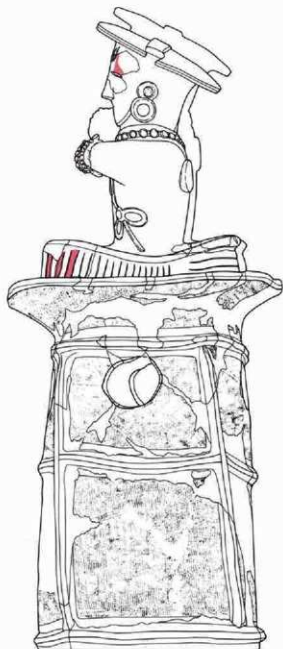
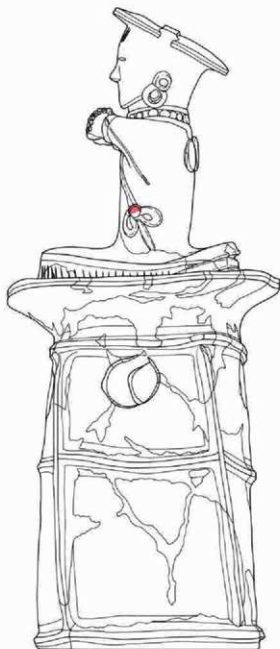
第4章 出土遺物について

両手は水平方向に肘を張り、胸の前で指先を丸く曲げ、その先端をつき合わせている。残存する右手は指先を区別し立体感をもたせた表現をしているが、爪までは表現されていない。親指は上方に立っていたようである。

両手首には小さな玉が2連書かれた表現があるが、実際に粘土粒が貼り付くのは手の甲側だけである。粘土粒の大きさは、径0.8cm前後である。

背面から盆の下には、肘を通り手の甲、親指と人差し指の間に達する細い粘土紐が付されている。

上衣は、下腕の外側側に粘土を紐状に貼りだし、筒袖状の表現をしている。また、襟元中央から左腰にかけて斜めに粘土班を貼り付け、着衣のあわせを表現している。襟元と腹部の2箇所に結び目を付け、ボタン状の粘土を重ねて留めている。上衣の下半は、正座した膝上に大きく広がり、裾部を肥厚させ、下



0 15cm

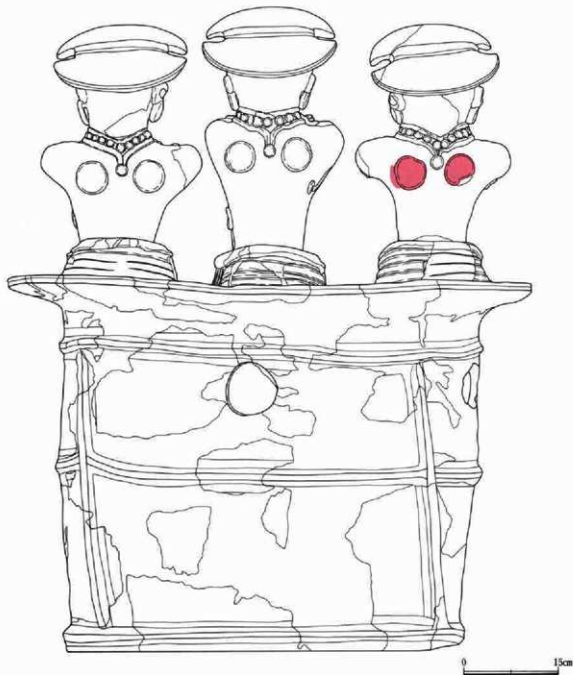
第226図 人物埴輪⑬

衣との重ねを強調している。また、その裾部には袷の文様と合わせるように刺突がめぐっている。上衣のそれ以外には文様等の表現はなされず、器面は背中の一部にタテハクを残す他は丁寧なナデが施されている。

下衣は袷を表現しており、足は全てこれに覆われて表現されていない。前面にはタテ方向に幅1.2cmほどの短冊状の線刻がなされ、縦縞の文様が描かれて

いる。現状では剥落が著しく認別が困難であるが1単位おきに赤色顔料を塗彩している。後側は粘土紐の重なりをそのまま残している。

袷の成形は、胴部を台座から継続して積み上げた後、これをとり巻くように粘土紐を積み上げている。前後とも5本の粘土紐が確認できるが前方側は外面の接合痕を消して器面を整形し、前述のようなヘラ描きを加えているのに対し、後方は、粘土紐の接合痕を



第227図 人物埴輪⑩

第4章 出土遺物について

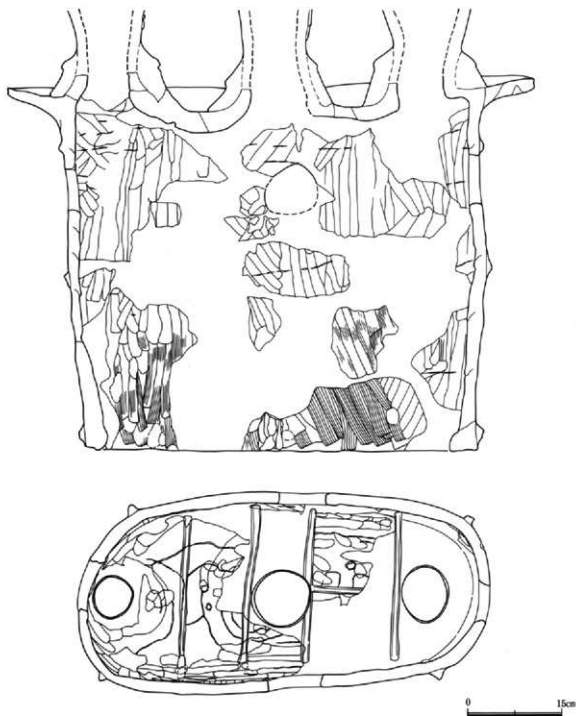
内外面とも残すことにより裳の裾部の布の重なりを表現しようとする意図が反映しているようである。

胴部内面の調整は、粘土の接合痕を背中側に若干残しながらもタテ方向に丁寧なナデをくり返している。

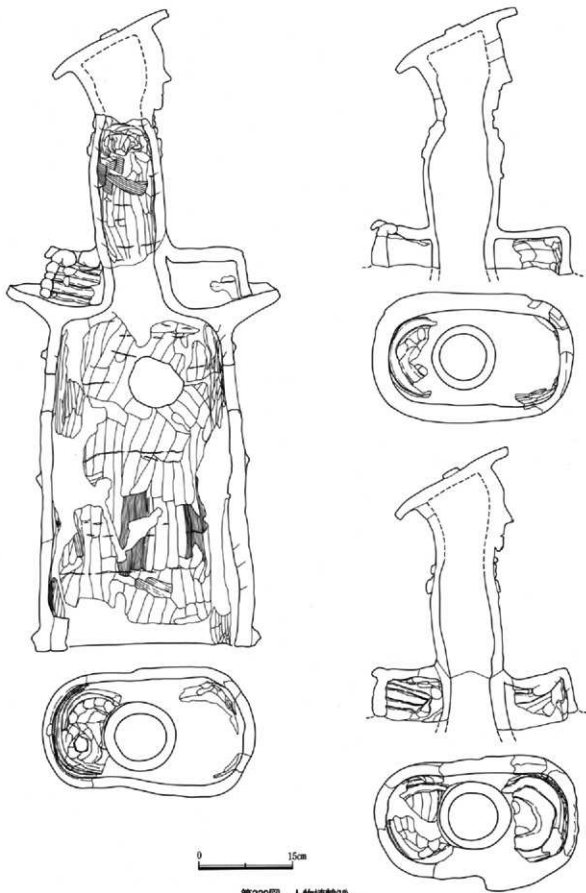
中央人物は、頭部を欠損しており全てが後補である。

る。下衣の裳の部分もその多くが欠損している。台座からの復元高は47.5cmである。首の位置は左右の人物よりも2.5cmほど高い。また、台座の中央がくぼみ低くなる分、胴部を長く作り、左右の人物と高さのバランスを図っている。

残存部分の比較から手の動作や着衣の表現は概ね



第228図 人物埴輪跡



第229図 人物埴輪10

左右の女子と同様である。首には径1.2cm前後の粘土粒を貼りめぐらし首飾りを表現している。胴部には襟元から左腰にかけて粘土紐を貼り着衣のあわせを表現、結び目も付けている。両手の指は両方からつきあわせるようにし、先端をやや曲げている。手首には径0.8cmの粘土粒を貼り、2連の手玉がめぐっている。脇から腕、指先へと続く粘土紐は一部が剥落しているものの、幅0.8cmほどの粘土紐を貼り付けた痕跡は、胴部器面上に明瞭に残存している。背中には径5.0cmの円板を2箇所貼り付けている。

台座との接合方法、胴体と下衣の接合など基本的な造作は右側の女子と同様である。胴部内面は前面、背面ともに粘土の接合痕を残しながらナメ方向にナデを加えている。中位、腹部から胸部に移行するあたりに一部ハケメを残している。中実の腕の接合は腕の彎曲にあわせ、真横でなく、前方から後方に向けて斜めに肩口に差し込まれている。

裳の部分の造作は右側の女子と同様であるが、3体のうちこの人物にのみ、胴部の斜め左後方に径3.2cmの焼成前の小孔が配されている。焼成との関係であろうか。

左側人物は、高さ44.2cmに復元できた。この人物も残存部分が少なく、頭部は、顔面の両目周辺および、右耳周辺以外は後補である。腕は、右手肩から指先、左手の手首から手の甲までが残存していた。胴部も後補で、裳の前面および、後部のそれぞれ一部が残存していたにすぎなかった。

目や耳の造作は右側人物と同様である。櫛の表現は線刻で施され、内側に6本の刻みが認められる。

両手首には2連の手玉が装着されていたことが表現されていた。甲側のみ粘土粒を貼ることは他の2体と同様であるが、他の2体の手玉が、玉と玉の間隔をやや保って貼り付けているのに対し、この人物の場合は間隔なく、玉と玉とが重なりあった状態にある。上衣の前面は裾部の肥厚部分の粘土が剥落している。ヘラ描き沈線による裳の縦縞模様には1単位おきに赤色塗彩を施していたものと考えられる。

基台部は横幅66.0cm、奥行31.8cmを測る。平面形



第230図 人物埴輪19

は前後にやや平坦な面を形造るものの、側面は弧状をなし、全体的には長円形に近い形状である。断面形は前後面が直立ぎみに立ち上がり、上半がやや内傾、高さ約50.0cmの位置に変換点をもって大きく外反し、台座部に至っている。

これに対し、側面は、各面とも台座部および、その上に置かれた3人の人物の重量の影響が器面に大きな起伏が生じるとともに、中位が胴張り状に膨らんで、全体のバランスをやや欠いている。

外面には基底面に接する位置および、基底面から約27.0cmと、約47.0cmの位置の合計3箇所に突帯を横位にめぐらし、全体を上下3段に区画している。前後面から側面への変換点には縦方向の突帯が貼られ、横方向の第2段目の突帯と交差している。突帯は縦、横ともに断面三角形を呈している。

外面の調整には全体的にタテ方向のハケメが多用されているが、第2突帯以上の器面にはナデ調整が加えられており、第3段目の突帯以上は比較的丁寧なナデ調整が施されている。

中段の区画内、下方から第3段目の突帯の直下には径9.0cm前後の円形を意識した透孔が前後面に一対、左右側面に一対ずつ各面のほぼ中央に配されている。

基台部の成形は、他の形象壇輪と同様に、高さ12.0cmほどの粘土板により基部を作り、その上に幅3.0～4.0cmの粘土紐の積み上げて行く方法が取られている。基底面には粘土板の重ねが1箇所認められる。内面には器形に歪みが生じることを防止するために前・後面のほぼ中央には幅3.5cm、高さ25.0cmの棒状粘土を補強材として縦方向に貼り付けている。

内面の調整は、下半部、第2段の突帯の位置あたりまでがタテ、あるいはナメタテ方向のハケメ調整である。これより上位はタテ、あるいはナメ方向のナデ調整が施されている。粘土紐の接合痕は比較的丁寧に消されているが、透孔の位置から台座部への変換点まではナデの下に水平方向の接合痕が残存している。

台座部の外縁は、基台部から立ち上がった器面が大きく外反し、斜上方に張り出し、ステージ状をなしている。横幅83.4cm、奥行44.1cm、後面中央部分の先端は底面から約58.5cmの高さにある。

台座部分の製作は、中央の開放部分に天井をかけるように粘土紐を渡して閉塞させていくとともに、3人の人物の胴部は基台部から筒抜けの状態、成形が維持されている。

この台座部の上に3体の女子人物は正座をした状態で置かれている。人物の置かれた間隙は基台部に天井をかけるように閉塞されている。

台座部は中央の人物の位置する部分を最下点とし緩やかに下がっており、この位置は台座部縁より3.5cmも低くなっている。

内面の観察からは台座部内面に棒状の痕跡が前後方向に幅15cm前後の間隔で4本、左右方向に1本確認できる。中央人物の右側内面に位置する痕跡の先端は前・後面の壁面内にくいこんでいる。このことは基台部成形時に台座部分を成形するにあたって、籬状の材料で枠組みをし、それを支えに台座部の粘土を貼っていったものと考えられる。これは上位の3体の女子人物の重量を支え、台座部の形状を維持することを目的とした工夫であることが想定できる。

台座部の成形は、右側人物部分が欠損しているの

で不明な点が多いが、それぞれの人物の胴部成形の基礎になる粘土を、両端の人物はその外側を基部側面にのせかけるように丸くおき、次にそれらを接続するよう側部前、後面に沿って左右方向に粘土紐をわたし、最後は小さな隙間に前後方向の粘土を置いて閉塞している。

人物が据えられた間の台座部器面上には前後方向に並ぶ径1.0～1.3cmの小孔が2個ずつ、2箇所、合計4個、焼成前に開けられている。2箇所とも後方に位置する孔が完存しているが、ナメ方向に外面から内面に向かって台座部を貫通している。

一方、人物の胴部の基部は通例と同様に粘土を重ね、上位に製作が進行するに従って、その径を細めている。

台座部の上面には3体の裳の形状に則して前後方向に長軸をおく、長円形の痕跡が残り、器面が完全に酸化していない状況がみられる。残された剝離痕からは裳の前後の固定は比較的簡易で、側面の端部で台座部との接合が図られていたようである。

また、裳の痕跡からは、裳の成形が人物の大きさのバランスをとるとともに、台座にかかる人物の重量が直接台座に負担をかけるのではなく、その下の基台部側面にかかるようになっていることがわかる。

女子人物 (1459)

女子の半身像である。後円部西側中段面から出土している。両手に皮袋を捧げ持つ所作が表現されている。頭部は髻、後頸部、顔面の一部が欠損している。1450の女子を参考に髻を復元した。その復元高は全長109.2cmである。そのうち、上半身の高さは60.5cmを測る。

顔面は頭部本体に粘土板を貼り、髪骨を成形している。目は、木の葉状に切り込まれているが目尻がやや下がっている。口は、外側から工具で押し、小さく横一文字に開けている。鼻は、下幅が狭く鼻筋のおとった形状である。耳は、粘土紐を径3.3cmほどのリング状に貼り付けて耳たぶを表現、粘土粒を連ねて耳玉を表現している。耳孔は貫通していない。耳の直下には耳環を装着した痕跡が認められるが、

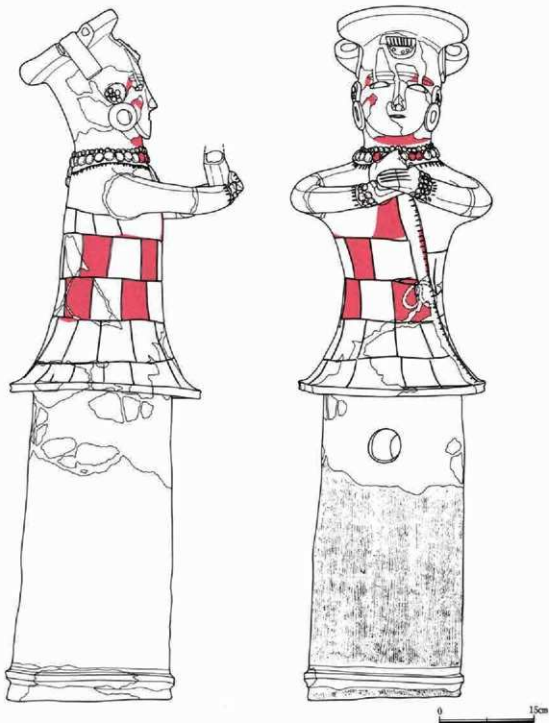
第4章 出土遺物について

現在は両側とも欠落している。眉、喉、頬の一部に赤色塗彩の痕跡が認められる。

首には大小の粘土粒を並べた2連の首飾りがなされている。大粒の粘土粒は、径1.6cm前後、小粒のそれは0.8cm前後である。大粒の首飾りは、1450の女子と同様に背中で端部が垂下していた痕跡が認められ

る。大型の玉には赤色が塗彩されているのが確認できる。

両腕は胸の前で水平にあげられ大きく曲がる。右手は手のひらを上に向けて容器を捧げ持っている。指は親指だけ独立して造られ、あとの4本はミトン状に一括され、ヘラ描きで区別されている。左手も



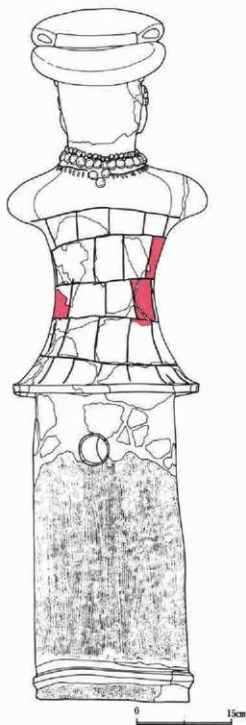
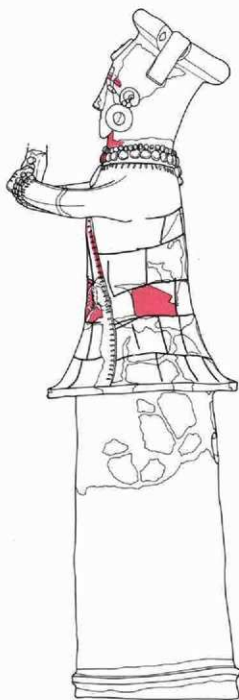
第231図 人物埴輪20

1. 埴輪

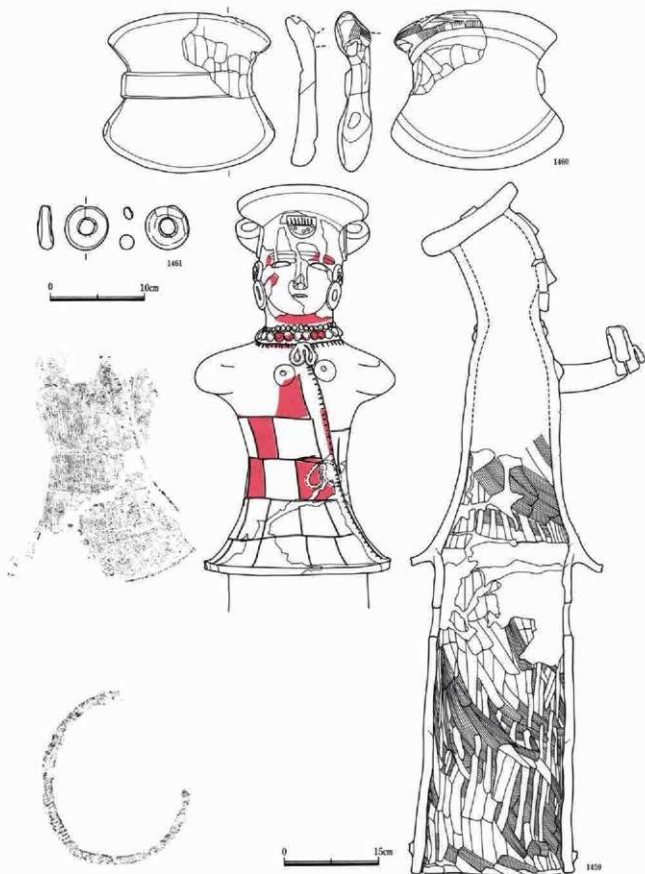
手のひらを横にして容器に添えられている。容器は、口縁部が欠損しているが高さ6.6cm以上を測る。左右の幅は6.3cmで、偏平な形状を呈するところから皮袋を模したものと考えられている。手のひらと容器の底部には両者を貫通する径2mmの焼成前の穿孔が認められる。

手首には粘土粒により手玉の装着が表現されている。右手は2連、左手は3連である。2連の玉の径は約1.3cm、3連の玉の径は約1.0cmである。

胸は、半球形の小さな粘土塊を貼り付けて乳房のふくらみを表現している。胴部に着衣の表現がみられるにもかかわらず乳頭の表現もなされている。



第232図 人物埴輪(1)



第233図 人物埴輪(2)

胴部は正、後面からみると手の動作の為、肩を張り、ウエストが細くくびれてみえるが、側面からみると下端から首に向かって緩やかに続くラインが表現されている。胴部は胸、肩部分を除いて器面にハケメ調整が施されている。

着衣は、上衣のみの表現で、腰の部分までをおおひ、端部は外反する。首飾りの下にはヘラによる刻みを伴う横線が周回し、襟元を表現している。着衣は右前合わせで、合わせ目には粘土を貼り付け肥厚させ、ヘラによる刻みを重ね、その端部を表現している。襟元には粘土紐が花結びされており、腰のくびれ部分にも同様のものと考えられる粘土の剝離痕が一部認められる。裾部は大きく外反し、同一高の位置の基台部の径が22.0cmであるのに対し、約30.0cmの径を有している。

着衣の文様は、前面を4本、後面を5本の横線で分割、この中を縦位の辻線で互目状に細分する構成で、各段とも一つおきに区内に赤色塗彩を施している。赤色は、着衣の合わせ目にも施されている。袖口は手首本体に粘土を貼り足し、筒袖状に仕上げ、端部に刻みを加えている。

基台部は高さ49.2cmである。底面に最大径をもち、横幅24.3cm、奥行26.1cmの平面円形を呈している。上方に向けて、徐々に径を減している。

器面の調整は外面はタテハケ、内面はタテ方向にハケメを施し、一部これを消すようにナデを重ねている。底面から約2.5cm上位に断面台形の突帯を1条めぐらせている。また、形象部との接続部分から7.5cm下位の前後面に円形の透孔一対が穿たれている。径は約5.0cmと推定される。

全体の成形は、基台部底面から人物のウエスト部分に向かって、一定の高さで粘土紐の積み上げをくり返しながらか、その径を細めている。こうして本体部分を製作した後に着衣の裾部を帽子の髷を付けるように貼り付け成形していることが確認できる。

女子人物 (1460・1461)

両者とも後円部西側中段からの出土である。1460は島田髷の側部から端部の破片である。端部は粘土

を肥厚させ髪のリボンの立体感を表現している。裏面には頭頂部との接合痕が観察できる。1461は本体から剥落した耳環であるがその帰属は確認できなかった。径1.5cmの粘土紐を環状に成形したものである。

女子人物 (1462)

髷を欠失するが女子人物像である。後円部西側中段の1459の女子人物に近接して出土している。

頭部から胴上半部を中心に残存していた。半身像と考えられるが胴下半から基台部の破片は得られなかった。残存高は46.0cmである。顔面は左側の遺存状態が悪く、後補である。頭部は頭頂部を解放したまま粘土の積み上げを終了、ここに髷をのせて閉塞している。後頭部にはタテハケを施しており、髪を表現したことも考えられる。顔面は本体の成形後粘土を貼り足し、顎の張りを強調している。顎には柳の剝離痕がみられる。目は大きく切り込まれていた可能性がある。口は小さく、横一文字に、ヘラ状工具で外側から刺すようにして開けられている。鼻は欠損しているが残存する剝離痕から幅広い形状が想定され、1458の女子人物のそれに類似するものと考えられる。耳は粘土をリング状に貼り中央の小孔が貫通している。耳の直下には耳環の剝離痕が認められる。

首には粘土粒が2点残存することから丸玉を模した一連の首飾りが巻かれていたと考えられる。

両腕は彎曲し、手のひらを胸の下にあてている。両手とも指先が下方を向きからだに接している。手の成形は、親指を独立し、他の4本はミトン状につくり特徴個別の表現をしていない。左右の手首には丸玉を2連巻いている。

上衣の表現は右前合わせで、重ねあわせの端部には粘土を薄く貼って肥厚させ、上向の矢羽根状文様をヘラ描きで刻んでいる。襟元近くには円板状の付属品が貼り付き、これに房状の粘土紐2条がヨコ方向に取り付け痕跡が認められ、上衣の合わせを留める表現と思われる。襟元は首飾りの下位に粘土を貼り弱い稜をなしている。これに刺突を伴うヘラ描きによる鋸歯文を配し上衣の端部を表現している。胸

第4章 出土遺物について

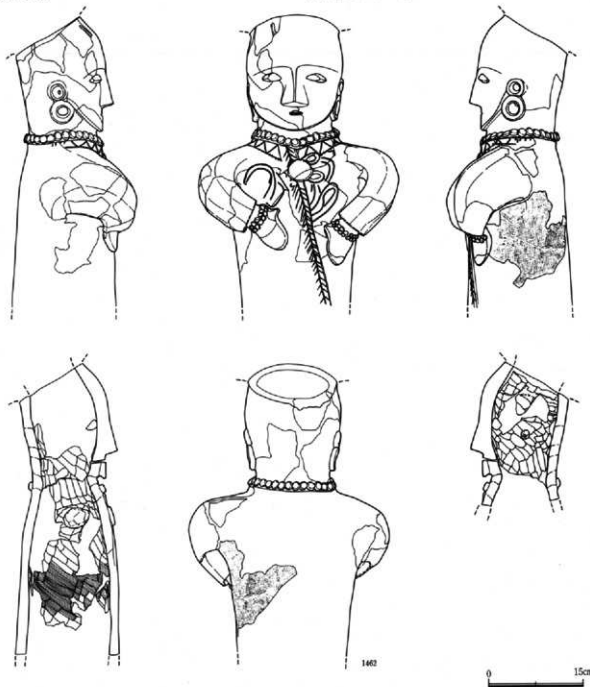
の部分には蕨手状の曲線を組み合わせた文様が配される。

袖は上腕の部分にはゆるみがみられ、全体にゆったりとした表現がなされている。袖口は、筒袖状に粘土を貼り、手首より一回り太く表現している。

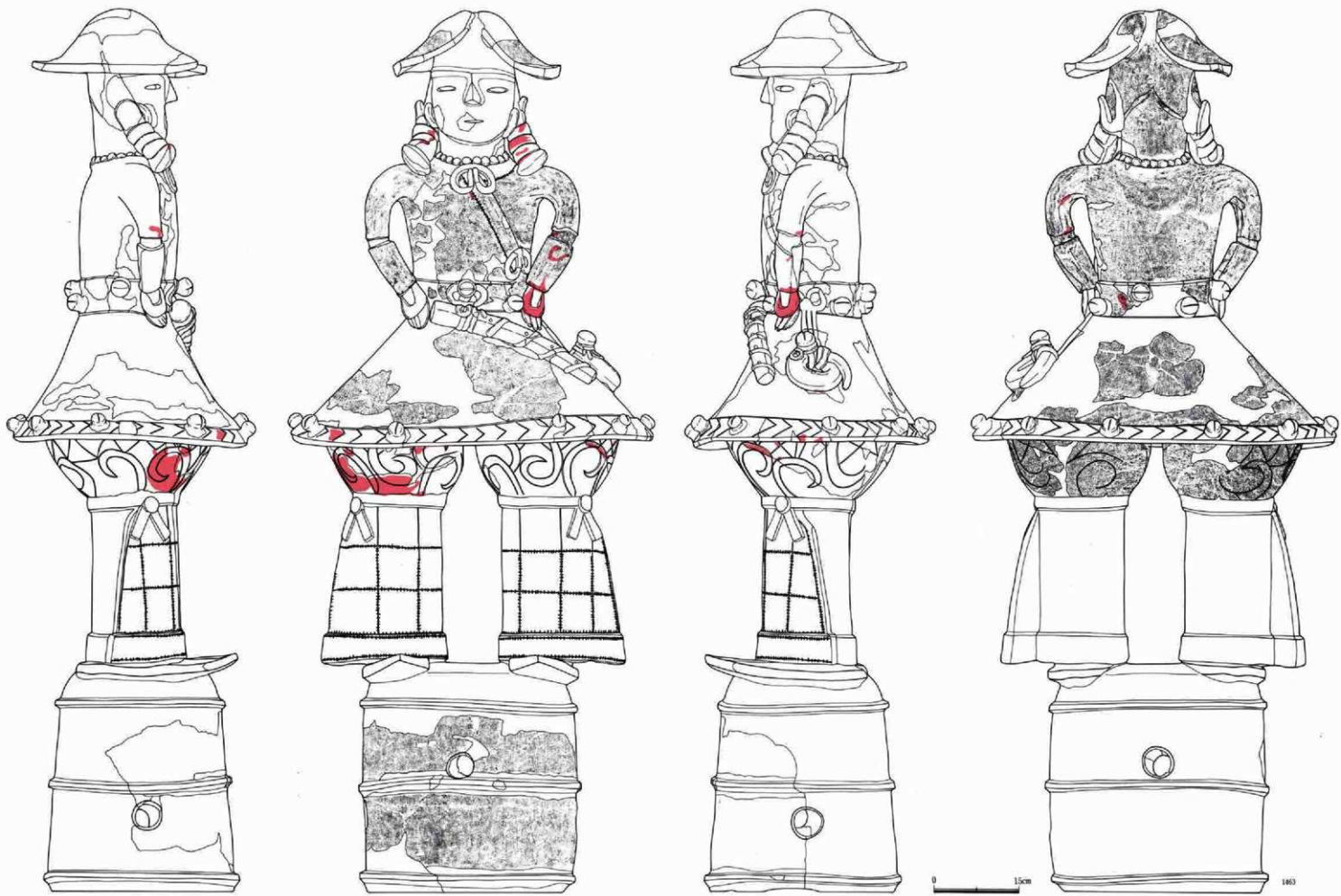
成形の面では、頭部内面は粘土の接合痕を明瞭に残しながらその上をタテ方向にナデていることが観察できた。

頸の部分は円筒状の頭部本体に粘土板を貼り付けて造作している。増補された粘土板は徐々に厚みを減じ、目のあたりで本体に取り付いている。

胴部外面の調整は両腕から肩にかけて丁寧にナデられている。胸の文様部分はナメ方向のハケメ、脇の下から背中中はタテ方向のハケメを施す。内面は下半にハケメが上半にナデが、ともにナメタテ方向に施されていた。



第234図 人物壺輪四



第235图 人物俑轴24

男子人物 (1463)

盛装の男子人物像で双脚が表現されている。後円部からくびれ部西側の中段面から出土した。上半身の遺存状態は比較的良好であるが、禪の脚下部～基台部までは後補である。全高155.5cm、基台部天井部の高さ40.2cmで復元した。

頭部は、髪を真中から左右に分ける振り分け髪で、側頭部に貼り付けた長方形の粘土板が大きく外反する。髪分け目は頭頂部で浅い溝状をなし、丁寧にナダられている。側頭部下位の髪は左右に束ね、下げ美豆良にして肩口近くにたらしめている。下端は前後に弱く突出し、折り返した髪をふくらみを表現する。幅1.9cmの粘土板を3段巻き付け髪を縛る飾り紐を表現している。美豆良の太さは左側の中位で5.0×5.0cmである。

顔は縦長で大きく、造作は良く整っており盛観な顔立ちである。頭頂部から顎先までの長さは23.0cmである。目は、大きく切り込まれ、口は、横一文字である。両目の長さは4.5cm前後である。眉あるいは眼窩上突起は横位に粘土を貼り付け強調されている。鼻は、鼻梁が欠損して後補であるが、付け根の残存状態から端正な作りであったことが想定される。

美豆良の下にはこれに隠れるように径6.0cm弱の耳環が左右装着されている。

首には丸玉を表現したと思われる径1.5～1.7cmの粘土粒を隙間なく並べ、一連の首飾りを表現する。

肩は横に大きく張り、胴上半部は腰部に向かって徐々に細くなっている。胴まわりは59.0cmである。両腕は、径5.0cm前後の棒状を呈し、長く、手のひらを腰部やや前面にあてている。左手の指は棒状粘土で1本1本が個別に表現されている。

上衣は腰部までを覆う丈の長いもので、右前に合わせ、その上に帯をまわしている。襟元と合わせ目を粘土の貼り付けで表現し、それぞれ端部に沿って刺突を伴うヘラ描き沈線を描いている。ただし合わせ目は帯より上位にしか表現されていない。襟元と胴部、帯より上位の2箇所結び紐が付けられている。

上衣の裾まわりは73.0cmを測る。裾部は端部の幅

3.0cmに粘土を貼り肥厚させている。この部分には合計10箇所径3.0cm弱の鈴が付き、その間をヘラ描きの山形文で充填させ装飾している。その他の器面は腕の部分等をナダる他はハケメ調整が施され、特段の文様等は認められない。

袖は上腕部から肘までを隠す。袖口は弱い稜をなす。手首から肘にかけては幅9.5cmの粘土板を腕本体に巻き付け籠手の装束を表現している。また、手の甲に粘土紐をU字状に貼付、手甲を表現している。

帯は幅5.4cmを測り、いわゆる大帯を表現している。腹部側に結びの表現がみられる。背の中側の上端寄りに鈴が残存しており、剝痕とあわせ、上下2段に6あるいは7箇所鈴が貼付されていたと考えられる。

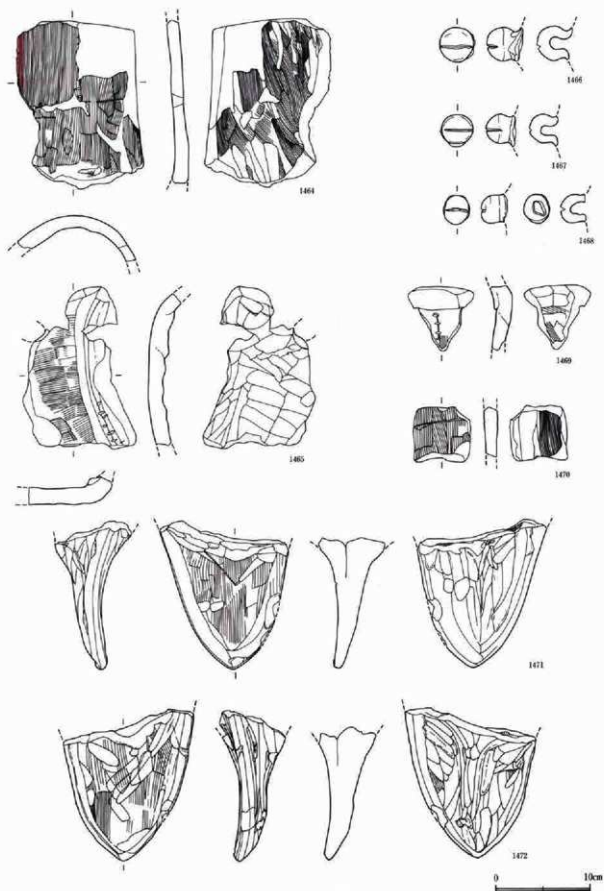
腰部の前面には靱尻を斜め下に向け大刀を佩用している。靱尻を欠損するが全長31.0cmを測ったものと思われる。柄頭断面は円形であるが、靱部分のそれはやや扁平化し、長円形となる。柄頭寄りの位置に3本の粘土紐が巻かれ、この上に花結が重ねられる。帯の紐が表現されたものか。靱部分にも斜め方向に間隔を置いて巻かれた粘土紐が3本残存し、この間に径0.7cmの小孔が刺突される。

腰部の左側部には靱が3本の紐により吊り下げられている。靱は径11.4cm、鈴と花結の紐で飾られている。2箇所に大刀に施されたのと同様の円形の刺突が加えられている。帯には靱を下げる下緒の花結が表現されている。

下半身は膝上部が大きく半球形に丸く膨らむ形状をなしている。これに小径の円柱状の膝下部が続き基台部に立っていたと考えられる。下半身の着衣は禪表現で、膝上部はハケメ調整の上に、下半部に2本1単位のヘラ描き沈線による蹠手文を配し、これと上衣との接点との間には鋸歯文を充填させている。

基台部は前面がくびれ部西側中段面上の原位置から検出されたものである。これには基底面附近にめぐむものを含め3条の突帯が貼り付けられていたと考えられ、下位2段が残存する。残存状態は不良で、

第4章 出土遺物について



第236図 人物埴輪25

中位から下位の前面から両側面にいたる約1/2から1/3が残存しているにすぎない。基底面の形状は隅丸の長方形が意識されており、横34.2cm、奥行32.1cmの規模が推定される。突帯の断面形は上下の稜の突出がほぼ等しい形状である。下段の側面に一対、上段の前後面に一対、円形の透孔が配されている。

1464から1472は、男子人物(1463)と類似する破片資料である。出土位置も1463と同一調査区内であるが、1463との接合箇所を確認することはできなかった。1464は脚下部の一部と考えられる。円柱状を呈する破片は径約15.0cmに復元できる。残存部下端は基台部に接近した位置にあらうか。外面はタテハケ後、ヘラ描きにより一辺7.0cmほどの格子目文様を表現し、部分的に刺突文を重ねている。

1465は基台部天井部分の破片である。双脚間に小孔が穿たれている。脚部との接合部分に粘土紐がめぐり小さな段が形成されている。その稜部分に刺突文が重ねられている。

1466~1468は鈴である。1463の帯、あるいは上衣の裾部に装着された可能性が高い。中空の造作である。

1469、1470は襪の一部と考えられる。

1471は人物の足部で右側の履を表現している。平面三角形の粘土板は頂点に向かって緩やかに膨らみをもつカーブを描いている。側面的には爪先がやや反り返るように台部に取り付けられていたと考えられる。残長は15.6cm、最大幅は13.6cmを測る。上面はハケメ後周縁部にナデを重ねている。また、爪先方向に頂部をもつ山形文がヘラ描きされている。裏面は中央部を補強するように粘土を肥厚させている。振り分け髪男子と大きき的にはつりあっている。

1472は左側の履を表現している。残長15.9cm、最大幅13.8cmと規模、成形、調整とも1471と類似し、これとともに同一人物の足部の一対をなしていたと考えられる。

男子人物(1473・1474)

1473・1474および、1475~1488は、埴丘西側の中段面、後円部からくびれ部に移行する位置から出土した男子人物の個体資料である。

1473は、顔から腰部付近までを復元できたが、後補の部分が大半である。残存部分は顔面の下半、首部から背面の一部、両腕、腹部から腰部の一部である。

顔面は、筒状の頭部本体に顎の張りを表現するための粘土板を貼り付け成形している。端正な顔立ちであったと想像されるが、目の切り込みの下端まででこれより上位は欠損している。口は、横一文字で外面から工具を刺突しているが、一部がやっと裏面に貫通しているだけである。鼻は高く、鼻孔は刺突により表現されている。

首には径1.2cmの粘土粒を密着させた首飾りを一連巻いている。上衣の襟元は粘土で肥厚させた、いわゆる盤領を表現している。両腕は長く、手のひらを腰部のやや前面にあてており、胴部破片にその痕跡がみられた。肘のやや上に袖口を表現した段差をなす。肩口には花結の粘土紐が貼り付いていた剥落痕がある。背中側にも赤色塗彩や粘土の剥離痕が認められる。腕の成形は中実で、上腕中位の径は3.8cmを測る。肩口に差し込んで胴部と接合されている。

下腕には手首から肘にかけて粘土板を巻き、籠手の着用が表現されている。タテ方向のハケメを施し、中位に2箇所、全体をほぼ3等分する位置に2本1単位のヘラ描き沈線がめぐり、内区に赤色塗彩が施される。籠手の両端に施されたものと合わせ4本が縞状に配されている。上下両端の区画内には、3箇所ずつ、径2.0cmの円形の剥離痕が認められる。鈴あるいはボタン状の付属品が付いていたのであろうか。このような装飾は胴部側は一斉省略されている。手の甲には粘土紐により手甲が表現されている。指先は欠損している。

腰部には幅9.0cmと幅広の帯が巻かれており、内側には上下2段にわたり刺突を伴う歯歯文が連続する。

背中側の破片は中位に円形の剥離痕があり、鈴などの装飾が施されていたものと考えられる。また、帯の前面中央部分には縦位に2箇所、小孔が穿孔されている。付属品の接合と関係した成形であろうか。

1474は、人物の下半部とこれに乗せる基台部であ

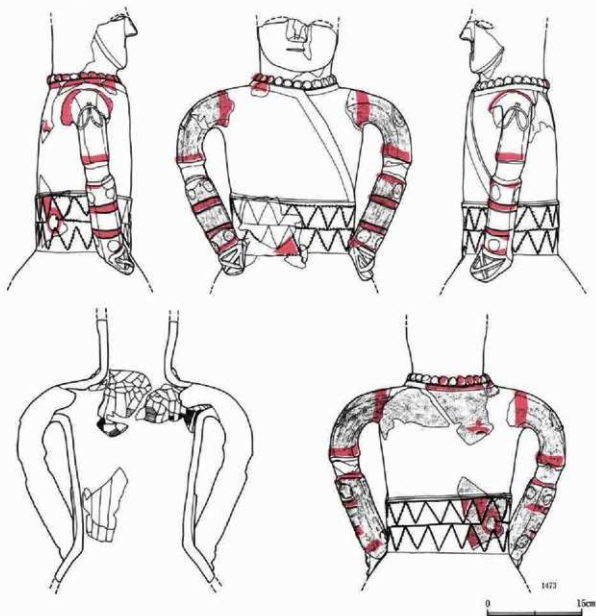
第4章 出土遺物について

る。残存状態は、上衣部分は右側面とそれに続く裾部を中心に残されており、その他は後補である。脚部は上半の前面部分が後補である。履の表現は左側の踵のみが現存である。基台部も上位に後補の部分が多数ある。全体の残高は98.4cm、人物の残高は61.9cmに復元できた。最大幅は上衣の裾部にあり、56.1cmである。

上衣は、1463の男子人物同様、裾部が大きく外反する。裾まわりは156.0cmに復元できる。端部の幅4.2cmは帯状に粘土を貼り、肥厚させ、鈴を装着したと考えられるが、現存するものは無く、12.0cm前後の

間隔を保って径2.0cm程の円形の刺離痕を残している。また、この部分は刺突文を付加した一辺4.0cm程の鋸歯文により区画、充填されている。このうち下向する三角形は、その内側に赤色塗彩が施され装飾されている。施文は鈴の装着後行われている。

上衣本体部分には刺突を付加した二重円文が上下2段に千鳥状に配されていたものと想定される。円文内には赤色塗彩が施されている。左側面には幅3.9cmの板状粘土が貼り付けられており、鈴の刺離した痕跡が認められる。垂下した腰紐を表現したものであろうか。



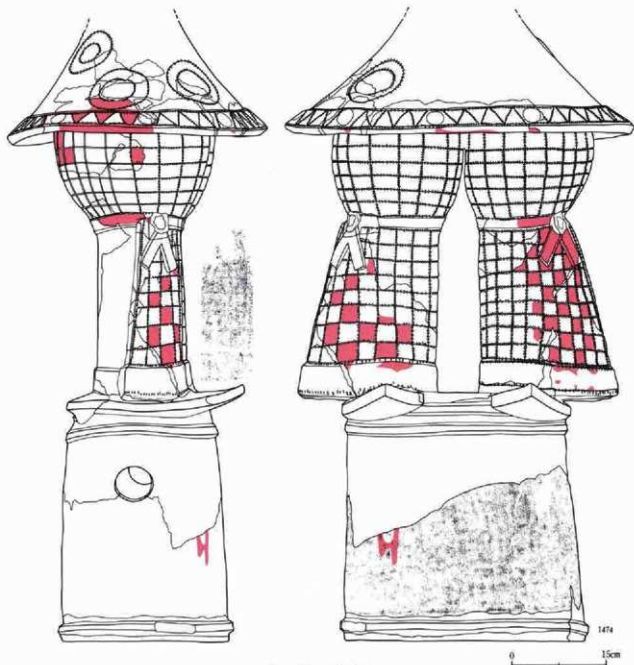
第237図 人物埴輪29

腰部は全長約41.0cm、襷表現がなされており、膝上は結紐の上位から丸みをもち、ゆったりと張り出している。膝下は径14.0cm前後の円柱状を呈し、裾部には三角板状の粘土板を接合している。襷は全体をとおしてヘラ描き沈線により格子目状に施文され、これに刺突が加えられている。ただし、膝上部の後面の格子目文には刺突の付加はなく、膝下後面には施文そのものが施されていない。格子目文には市松文様状に赤色塗彩が行われている。足結は幅3.

0cmの粘土を薄くまわし、側面寄りにハの字に紐の端部を表現する。円形の剝離痕には鈴が装着されていたものと考えられる。全体に赤色塗彩が施される。

履は欠損しており、左側の踵部分が残存していただけである。基台部にめぐる突帯の上に粘土板を重ねて成形を始めている。

基台部は、高さ39.3cmに復元できた。基底面は幅38.4cm、奥行26.4cmの楕円形に近い平面形状である。外形は上方、脚下部に向けて徐々に径を狭めている。



第238図 人物埴輪(7)

第4章 出土遺物について

下端には断面台形の突帯が粗雑に貼り付けられている。上端にも2.5cmの間隔をおいて突出度の弱い突帯が2条めぐっている。

透孔は、側面の下端から約25.0cmの位置に、径約6.0cmの円孔が対向して穿たれており、後面にも一箇所存在が確認できる。

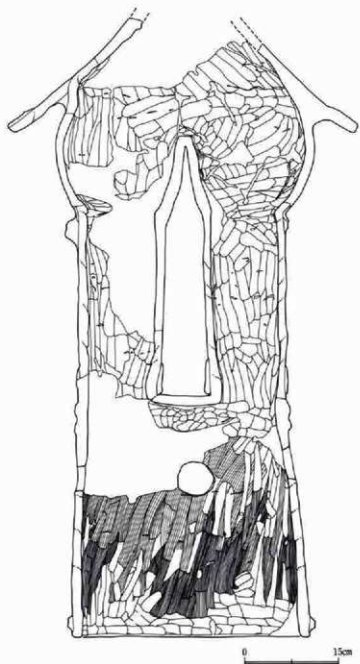
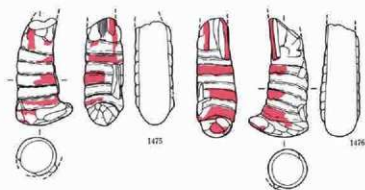
次に、成形および調整についてみる。基台部は幅8.0～10.0cmの粘土帯2枚をつないで基部を成形している。この上に粘土紐を積み上げ、上端まで

を3工程で製作している。人物の双脚部とは筒抜けの状態にて接合、両脚の隙間に粘土をわたし、基台部の天井としている。器面の調整の具合から、基底部と脚部の接合は右足から左足に向かって進行したようである。基底部の側面は外面がタナ方向のハケを充填させているのに対し、内面は下位にナデの部分を残している。基底部と脚部の接合部分の内面にはナデ、押圧を加え器面調整を行っている。脚上部は丸みをもって張り出すが、成形は脚下部から粘土紐



第239図 人物埴輪②

1. 埴輪



第240図 人物埴輪29

の巻き上げが継続されており、最大径の部分で両脚が接合される。上衣の裾部は腰部からスカート状に突出して接合され、突出部と脚部の隙間には所々に粘土塊がさしこまれ補強がなされていた。

1475～1488は、出土位置が1473・1474の男子人物と同一、あるいは近接の調査区出土の破片資料である。接合関係が確認できなかったものの1473・1474と同一個体を成す可能性が高い。

1475・1476は美豆良である。器面の剥離痕から1475が頭部の右側、1476が左側に位置し一対をなしたのと考えられた。下端のややふくらむ棒状粘土に粘土紐を貼り、一連の筋り紐でしばった様子を表現している。赤色塗彩を縦横に施している。1477は頭部上位の破片で、鈔のある帽子の破片と考えたが天地の確定にやや不安が残る。1478～1481は中実の鈴である。宝珠形に近い形状で、径26～31mmの大きさである。1482の髭は、1473の男子人物の腰に装着したものとほぼ同規模で、人物に付属するものである。舌状のいわゆる手と呼ばれる部分は、数字の6と同じ重なりで作られ、重ねの上に鈴を装着、花結びの紐が表現されている。器面には刺突を伴うヘラ描きの格子文は革の縫い合わせを意識したかのである。1483～1485は胴部の破片と考えられる。

1486～1488は履である。いずれも人物本体の脚部付根から剥落したもので1486は踵部である。1487は履の爪先右側である。残長11.6cm、幅9.9cm、圭頭状の粘土板で、やや爪先上がりに反り返っている。甲側の周縁に粘土を薄く

貼付し肥厚させ、刺突文で飾っている。側面に赤色塗彩が施されている。1488は爪先右側である。残長12.4cm、幅9.9cmで1487と同形、同様の成整形であることから一対を成していたと考えられる。

男子人物 (1489～1507)

くびれ部西側中段面に、1507の基台部を原位置にとどめていた個体である。全体形状を復元することは困難であったが1463同様の双脚立像の男子人物と考えられる。

頭部から顔の破片は確認できなかったが、1490は下げ美豆良の片方である。残長11.3cmの下端に径を増す棒状粘土に、幅0.6cmの粘土紐を密に11条まわし、髪を束ねた紐の表現をしている。

1489は首部の小破片であるが、これから粘土粒の貼付による首飾り表現がなされていたことが確認できる。上衣の上端には刺突を重ねたへら描き線が施されている。1491・1492は胴上部の破片で、細くしぼられた上衣の表現が認められる。1492は上衣の重ねが粘土の貼り付けの肥厚により表現され、これに平行して刺突を伴うへら描きがそっている。残存部上端には花結び状の粘土紐の貼り付けが残存する。1491同様、1492にも上衣の重ねが表現されている。重ねの左側には花結状の粘土紐が、右側には環状の粘土紐の剝離がみられる。

1493は右腕、1494・1495は左腕上腕の残存破片である。1493は、残存28.5cm、肩口に柄状に差し込まれていたことが確認できる。径4.9cmの粘土棒による。上腕は肥厚し着衣の表現がなされ、肩口には花結び状の粘土紐が貼付される。籠手には刺突を伴う鋸歯文2段により装飾されている。手指は親指のみ分離し表現される。他の指の表現はやや不明瞭で判断できない。手甲は粘土紐が×字に貼り付き、刺突、赤色塗彩が加装される。1494は左上腕部の破片で1493と同様の成整形が加えられている。1495は左手甲の部分の破片である。1496は腰部に廻る帯の結び目から垂下する帯の端部であろうか。外面に鈴と思われる円形の剝離が認められる。

1497・1498は、腰部に佩用した大刀の一部と考え

られる。径3.5cmの棒状粘土が用いられている。1497は柄頭から鞘部中位の破片である。粘土の肥厚は鞘口金具、あるいは佩用のための帯を表現したものであろうか。1498は、鞘尻金具を表現したのか端部に粘土板が重ねられ肥厚している。

1499・1500は上先端部の破片である。1499は彎曲が強いことから原体側面の一部を成していたと想定される。外面は端部が幅4.0cmにわたり厚さ0.6cmほど肥厚している。肥厚部分はへら状工具により鋸歯文が構成されている。1500は刺突を伴う。残存部の西端には円形の剝離痕がみられ、本資料も1463や1474の男子人物同様、鈴による装飾が加えられていたと考えられる。1503・1504も上衣の小破片と考えられる。1503は二重円弧がへら描きされている。1504も同様の二重円に刺突が重ねられている。

1501・1502・1505は脚部の破片である。1502は脚上位の大型破片である。上半身との接合に合わせその径を膨らませている。左右の確認は困難であった。1505は左脚の下端破片である。径11.4cmの円筒状を呈し、下端は幅4.0cmほど肥厚している。側面に縦位の剝離痕がみられ、禪の裾部が接合されていたことが知れる。1501は禪の裾部破片である。三角形の板状を呈し、下端が肥厚している。これら3点はいずれも器面にタテ方向のハケメを施した後へら描きにより刺突を伴う格子目状の文様を加えている。格子目内には市松文様状に赤色塗彩が施されている。

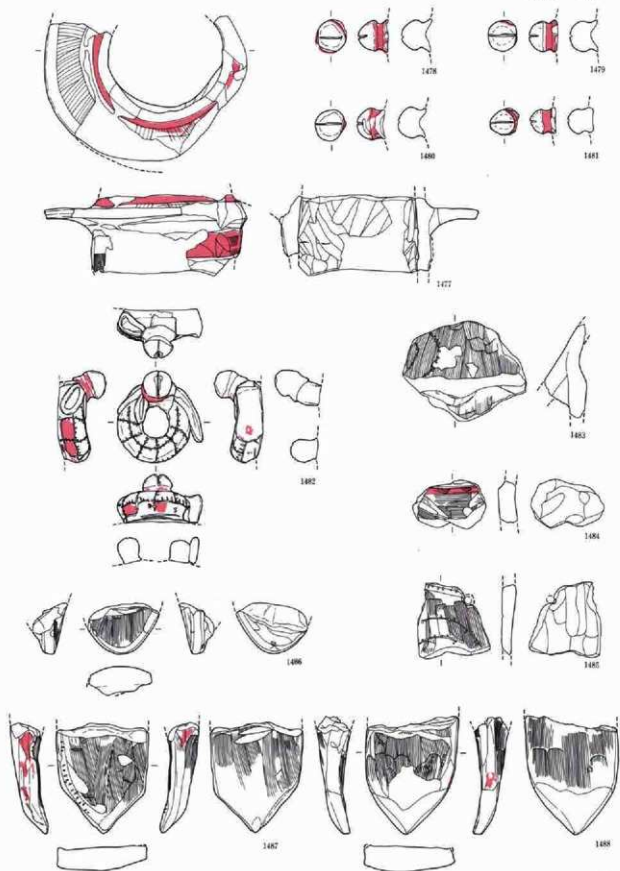
1506は履の爪先である。平面形は残存長9.0cm、最大幅9.0cmの圭頭状を呈する。爪先に向かって反り返る。甲側の器面は一方にハケメが施されている。

1507は基台下半の破片である。残存部から平面形は長円形を呈すると考えられる。下端に突帯がめぐり、底面から約11cmの位置で割れ口に円形の透孔の一部が確認できる。器面は外面がタテ方向のハケメ、内面がタテ方向のナデを充填している。

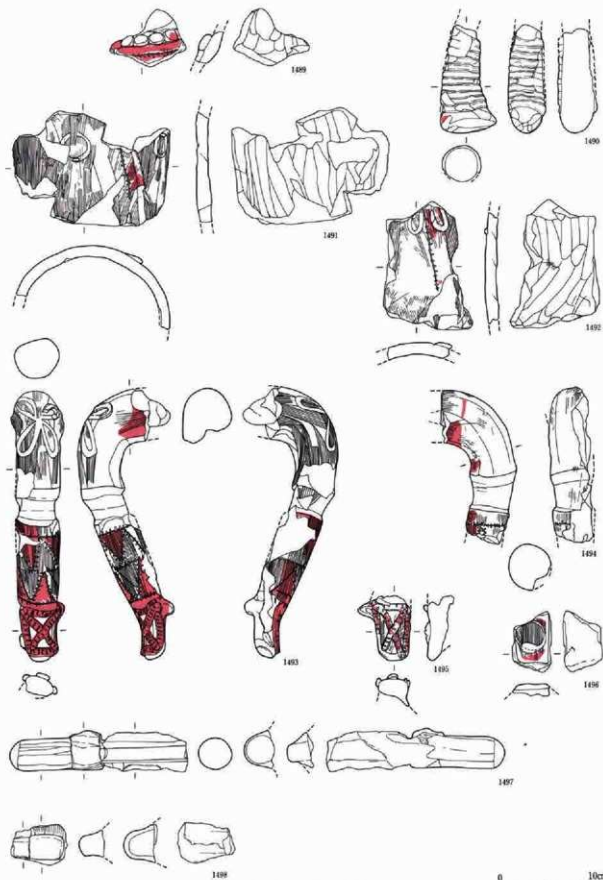
男子人物 (1508～1514)

1514を基台部とする同一個体の破片と考えられ、くびれ部西側の中段面から出土している。人物の顔をはじめとした詳細な全体像を把握することは困難

1. 埴輪

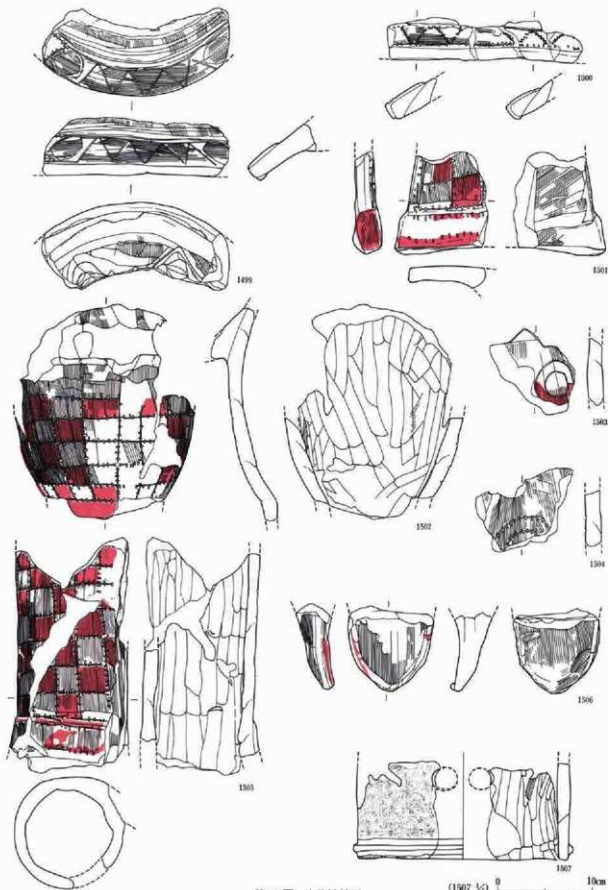


第241圖 人物埴輪30



第242図 人物埴輪30

1. 埴輪



第243図 人物埴輪32

(1507 1/2) 0 10cm

第4章 出土遺物について

であったが1463と同様、同規模の双脚立像が樹立されていたことは確実である。1508・1509は大きく開く上衣の裾部分の破片である。下端の幅3.0cmほどが外面に粘土を帯状に貼付し肥厚している。この肥厚部分はヘラ描きによる鋸歯文が区画され赤色塗彩が施されている。これより上位の外面は、ハケメが充填される中に一部ヘラ描き沈線が施されていることがわかり、他の個体同様の円弧を図柄とした文様が配置されていたものと考えられる。1509は、端部のなす曲線が強く弧を描くことから、側面を構成していた破片と考えられる。肥厚部分に円形の刺離痕が残り、鈴による加飾が施されていたと推定される。1510・1511は、その裾部に貼付されていた鈴と考えられる。径3.9cmを測る。直接の接合関係は無く、出土位置から同一個体の可能性を推定しているだけである。共に中実で、ヘラ切りにより鈴口を表現している。

1512・1513は履の爪先である。1512が同一個体の右側、1513が左側を構成していたと考えられる。規模は1512が残存長10.3cm、最大幅9.8cm、1513は残存長8.2cm、最大幅9.0cmとほぼ同様である。器内は脚寄りが厚く、側面からみると甲側は爪先に向かって弱く反っている。器面の調整は甲側にハケメを施し、側面をナデている。

1514は基台部中位の残存である。横幅34.0cm、奥行き17.5cmのやや扁平な長円形の平面形を有する。器面はタテ方向のハケメが充填され、内面はタテ方向にハケとナデが混在している。中位の前後面に円形の透孔が一对穿たれている。側面にもこれらより高位置にやはり円形の透孔が配されている。

男子人物 (1515)

くびれ部西側中段から出土した。挂甲を身につけている。頭部・首部と胴下半以下の部分に直接の接点は無く、その間は後補であるが、出土位置、胎土等から同一個体と断定される。背中部分も後補であるが鞆を背負っているように復元されている。復元高は136.5cmである。人物の復元高は113.5cmである。最大幅は上衣の裾部にあり47.9cm、奥行30.0cmであ

る。

頭部には眉庇付冑を装着している。目は、木の葉状に切り込んでいる。口は短く、横一文字で外面から工具により刺突しているが内面まで貫通していない。鼻の幅は、狭いが高く、鼻筋が良く通っている。眼窩上の突起は弱い眉を表現している。顔面は、顎部分に粘土を貼りだし、顎の張り出しを表現している。器面は全体を丁寧にナデ、輪郭に沿って眉から顎にかけて赤色塗彩を施す。

冑は、庇の小さいキャップ状を呈する。鉢部の頂部は高さ5.9cm、径7.2cmの筒状で、内側に三角形の粘土板を左右に振り分けて貼り付けている。何らかの飾りを表現したものと考えられる。上端および基部に赤色塗彩が施されている。鉢の最上位置から履の下端までは29.4cm、頬当部分の最大幅が18.6cm、庇の先端から後頭部までの奥行が19.5cmである。

鉢部にはヘラ描き沈線による文様を配している。その構成は、左前方部上位を始点として分岐する2本の沈線が渦巻状をなすもので、その間隔を徐々に増している。沈線間には上位に頂部をもつ幹状の区画が描かれ、区画内を赤色塗彩している。

頬当は下端の尖る三日月状の粘土板で顎の下までを包み込んでいる。器面は縦位の沈線2本で細分され、周縁に赤色塗彩が施されている。後頭部の履部分は横線で上下に2分し、その中を鉢部分と同様の幹状の文様が配される。区画内を赤色塗彩していることも同様である。

冑は、頭部本体に粘土を貼って成形しており、粘土の重ねから後頭部、頬当、鉢本体と庇、鉢頂部の順に成形したことが確認できる。庇の内面には顎との隙間に粘土塊を差し込み、庇が粘土の自重で変形することを防止している。

挂甲の表現は、胴部の長側部分が2段残存する。それより上位は後補である。1段の長さは4.5cmで、ヘラ描きにより幅1.5～2.0cmの短冊状に区画し、小札の緘、綴を表現している。合わせは正面でなく、右脇寄りに0.8cmほどの粘土の段差を設け、左側を上に乗ねる状態が表現されている。側縁部は幅2.0cmの

1. 埴輪



1508

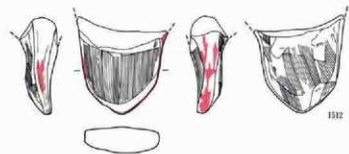


1509

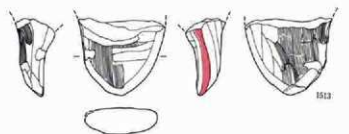


1510

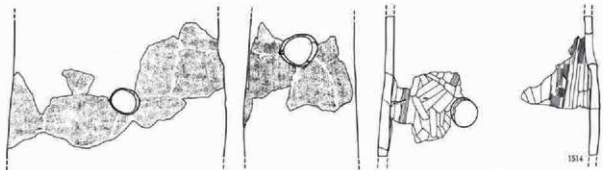
1511



1512



1513



1514

(1514) 1/4 0 10cm

部分に上向の山形文がヘラ描きで連なっている。

腰部は内彎する腰札が表現され、長側との接続部分は弱い稜で表現される。小札表現の上には幅1.0cmの粘土紐が巻かれ、帯を締めていたことを表現したものと考えられる。

草摺は裾部に向かって大きく外反する。胴まわりは57.0cm、裾まわりは127.0cmである。草摺は長側と同様にヘラ描きによる小札表現が3段配されている。各段のバランスはやや不均等で特に側面にかけての横線の配分は乱れている。端部の腰札にあたる部分は横線区画内に左向する山形文を並べている。合わせ目は胴部と同位置に同様の粘土の重ねにより表現されているが側縁部の文様は上向の矢羽根状になっている。

腰部の前面には大刀を佩用している。径2.8cmの棒状表現で残長は18.0cm、鞘尻は欠損している。柄頭端部から4.8cmのところを平行して施された2本のヘラ描き沈線は帯袂を表現したものと考えられる。また、鞘部分には斜行する沈

第244図 人物埴輪33

線が3本認められる。赤色塗彩が施されている。

腕は左手の下腕のみが残存している。径4.2cmの中実で、手には径3.3cmの棒状品を握りこれが胴部に接していた。この棒状品については今回の作業でもこれに接合する資料はみられず、この部位の内容を特定できるような破片の検出にはいたらなかった。ゆえに、既成の所見を踏襲して弓を復元した。

手首にかけては幅7.5cmにわたり薄い粘土板を巻き付け籠手の着用を表現している。両端は列状の刺突文で区画している。手首寄りには平行する2本のヘラ描き沈線が加えられている。手の甲には縁辺部をヘラ描き沈線で録取った手甲が付けられ、ここから指の方向に粘土紐が貼り付く。指は親指のみ独立して表現される。

脚部は後補の部分が多く、脚上部の後面、左足脚下部の後面、右足の大部分は復元によるものである。

脚上部は丸く膨らみをもって胴部へ移行するものと考えられるが、残存状態は不良である。両脚とも本体前面にU字形の粘土板を貼っている。これは器面の表現から襷の上に着用した膝甲と考えられる。横位のヘラ描き沈線により3段に区画し、さらにその内部を短冊状に細分して小札を表している。縁部に沿って沈線に沿わせ、その外側には刺突文を施す。これは覆輪とその縞を表現したものであろうか。

脚下部は高さ19.0cm、最大幅15.0cm前後の円筒状を呈している。ハケメ調整後横位のヘラ描き沈線により全体を4段に区画、内部を短冊状に細分している。その幅は胴部よりもやや狭く1.0cm前後を測る。いわゆる小札使用の脚当を表現したのか。両足とも外側部に粘土を重ねた段差が想定され、端部の重ね合わせ目の表現がされたものであろうか。脚上部とは狭小であるが突出度の高い突帯を境にこれに移行するが、右足の外側部では突帯の下位に粘土の剝離と考えられる痕跡がみられ、破片資料の様子とも考え合わせると突帯は足結の紐を表現し、外側部に花結が付けられていたものと想定できる。

挂甲表現は、胴部から脚下部の脚当に至るまでの小札に赤色塗彩が認められる。原則は1つおきであ

るが所々乱れた箇所も存在する。

履物は、円筒状をなす脚本体の前後に、粘土板を水平に貼って表現する。爪先側は右足で長さ7.5cmを測る。上面からの形状は杵葉を呈する。甲部分には薄い粘土板を貼り重ね、短冊状の文様を3段ヘラ描きし、1つおきに赤色塗彩を施している。指先にあたる部分には粘土紐を房状に各4本貼っている。踵側にも半月形の粘土を貼っている。下面は中央部分に粘土塊を貼り基部部への接合を補強している。

基部部は高さ27.0cm、底面の幅34.3cm、奥行23.7cmを測った。天井部は他の双脚立像のそれと比較して曲面の強い形状である。正、後両側の基底面真近に弧状の折り込みが施されている。基底面から4.0cmと17.0cmの位置の2箇所に突帯がめぐっている。突帯間に前後、左右に一对一ずつほぼ同位置に径4.0～5.0cmの円形の透孔が穿たれている。左側面の透孔は、周辺に焼成前に生じた亀裂を補修するために粗雑に粘土を塗り重ねている。

1516は、人物の右手へ下腕部の破片である。籠手を装着していたが上半は剝落し、中実の腕本体がむき出しになっている。指は五指とも分けて表現され、手甲をあてている。1515の右腕とも考えられるが左側と表現の相異が大きすぎることから今回は類似資料とするととどめた。

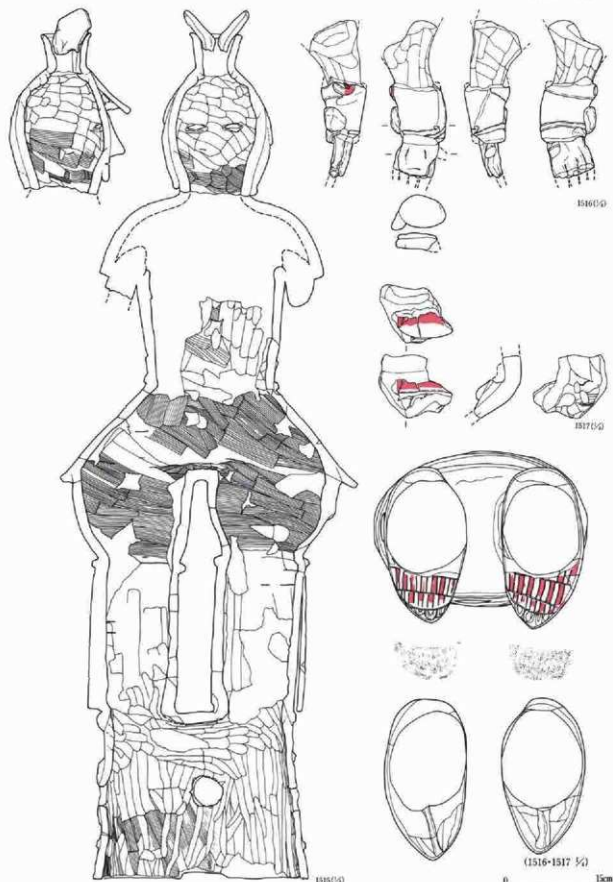
1517～1529は、ヘラ描き沈線により小札状の文様が施された破片資料である。1517は中位で屈曲して立ち上がる破片で本体に厚さ5～8mmの粘土板を重ねている。挂甲装着時の首から肩部分を表現した可能性があろうか。断定に至らなかった。1518は突帯の上に粘土紐を重ねている。1519は板状の破片でヘラ描き沈線文の上に結紐状の粘土紐が重なっている。1523は強く反り返っている。1525・1527は脚部中位の破片で後面をなしていたものと考えられる。

1528・1529も小破片でヘラ描き沈線による文様が描かれている。

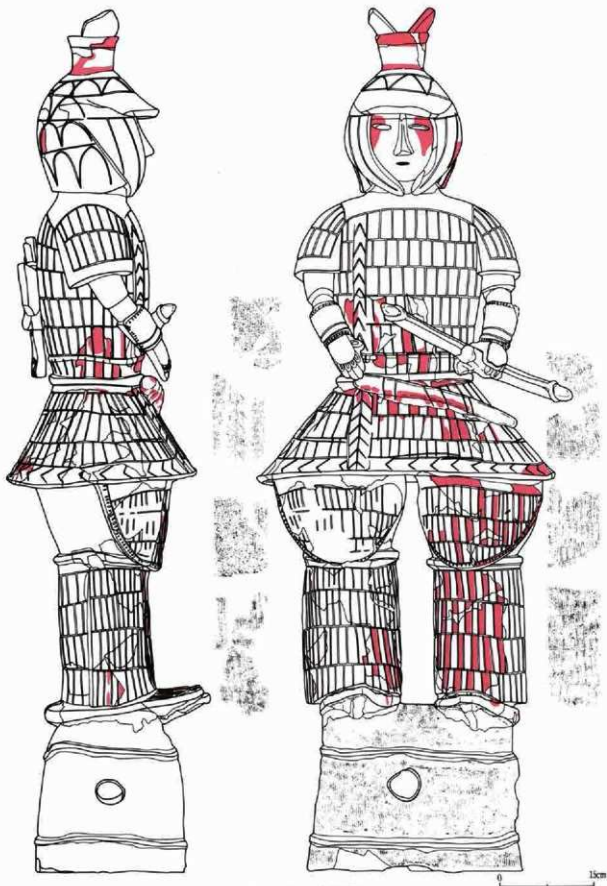
男子人物 (1530)

くびれ部西側から出土した。頭部および、右手を欠損するが男子人物の半身像と考えられる。中位に

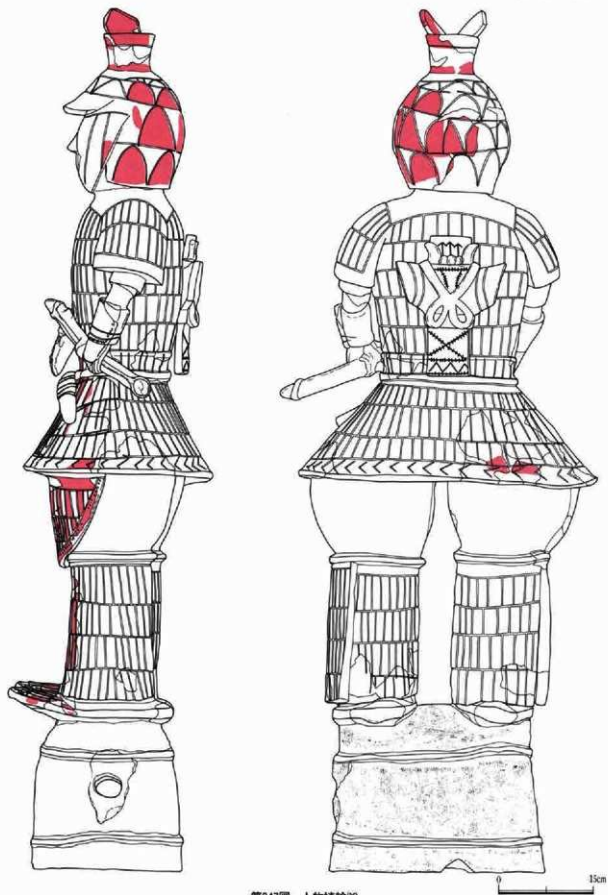
1. 埴輪



第245圖 人物埴輪34

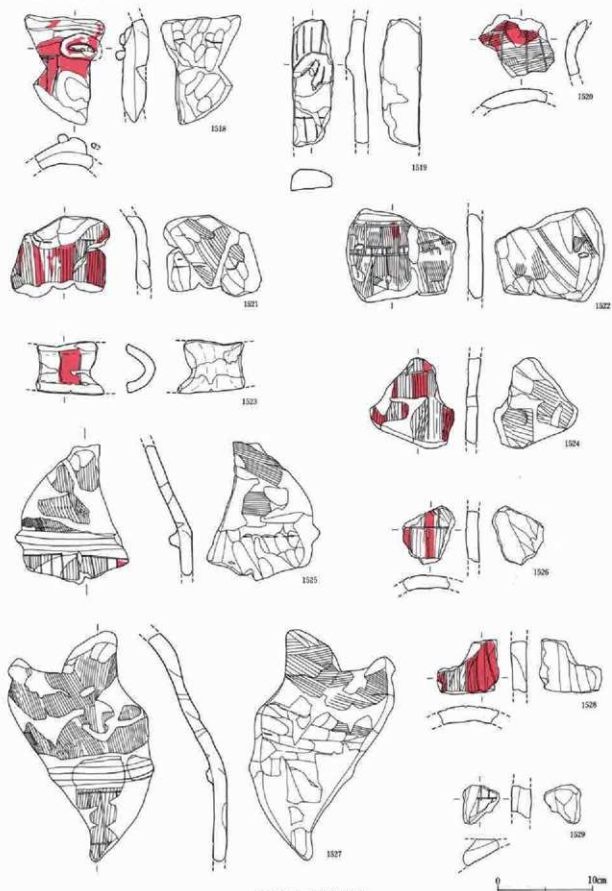


第246図 人物埴輪39



第247図 人物埴輪36

第4章 出土遺物について



第248図 人物埴輪(3)

めぐる2条の突帯のうち、下段までが人物胴部の表現で以下は基台部を構成している。残存高は78.9cm、胴部中位の幅は17.9cm、奥行は17.1cmを測る。

右手は、肩口で欠損、一部に胸の接合状況を観察するにとどまった。左腕は大きく肘を曲げている。下腕は、肩口近くの胸に接し、手のひらで肩に担いだ鍬の柄を握っている。胸の成形は中実である。

手は、親指を独立させるが、他の4指は一体に作り指先の区別を線刻により表現している。

鍬は残長7.0cm、幅2.4cmのやや先端の幅が狭くなる板状粘土からなり、外面に刻みを施している。柄は長さ6.0cmである。

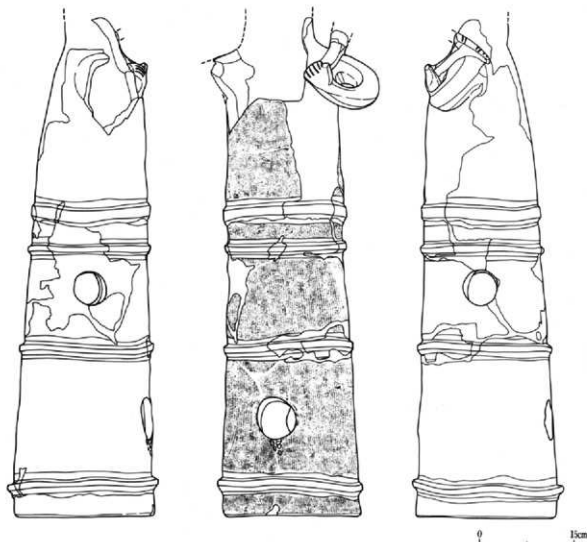
胴部外面はタテ方向のハケメが施されるだけで特に着衣の表現はみられなかった。ただし、ハケメの

施文具は基台部が2cm幅に8本であるのに対し、胴部は2cm幅に13本と細かなハケメが施されていた。

胴部の突帯は下幅2.5cmで、紐状の帯をしめていたことを現している。腰にある剝離痕は男子人物(1643)同様に帯に鎌をさしていたことを想定させる。

基台部の高さは43.0cmである。胴部との境をなす突帯の他に、基底面から5.0cm、27.2cmの位置に突帯がめぐり、突帯間には、上段の側面、下段の前後面に対向する一对の透孔が配置される。いずれも直径6.0cm前後の円形を呈している。

基台部は、底径22.1cm、幅10.0cmほどの粘土板を基部として成形を始め、上位に向けて徐々にその径を狭めている。内面には板状の工具、あるいは手のひらによると思われる押圧痕を下端に残し、それよ



第249図 人物埴輪(3)

り上位にナナメヨコ方向のハケメを施している。

成形は、3回の作業をくり返し、基台部の成形終え、その後、人物の首部までを4回に分けて粘土紐を積み上げていることが内面に残された粘土紐の接合痕、あるいはナナメ方向に施されたナダの単位から観察できる。基台部から胴部への移行部分では内面に明瞭な段が、胴部中途の外形には大きなウェーブがそれぞれみられ、そこが作業上の変換点であったことを充分うかがわせている。

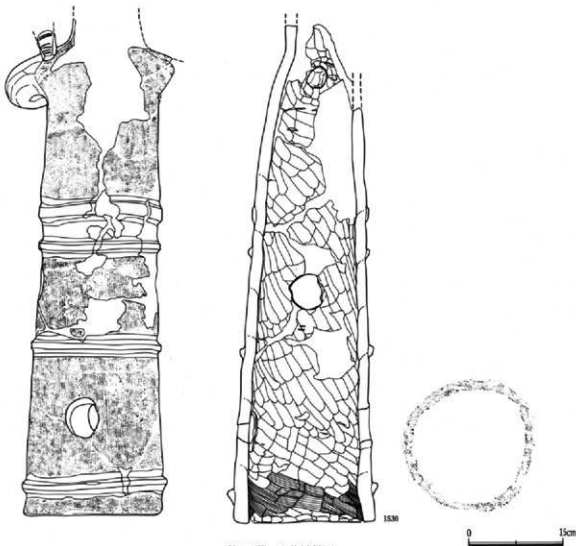
また、基底部正面、下位の透孔は、下縁から底面に向かって焼成前にひび割れが生じたようである。器面にこの亀裂を修復した工具による粗雑な刺突痕が残存している。

男子人物 (1531)

右肩に鎌を担ぐ男子である。顔面と胴上半の一部のみの残存である。残存高は34.5cmである。

顔は左半分が残存しており、全体に端正な顔立ちであったことが想像される。目は、木の葉状に切り込まれ、眼窩上突起は弱い。口は、横一文字に外面から工具で刺突するように開けられている。鼻の幅は、狭いが鼻筋は通っており、鼻孔は表現されない。顔面は丁寧にナダられており、額の調整も同様である。本体に粘土板を貼り、顎を表現している。

首には径1.2cmの粘土粒を貼付した一連の首飾りが付けられている。胴部はハケメ後、前面をはじめ器面にナダ調整が加えられているが、特段、着衣の表現はない。



第250図 人物埴輪39

残存する右腕は大きく曲げられ、脇の下近くの胴部に近づいている。鎌の刃部は先端が欠損している。断面四角形の棒状を呈するが背中側は厚さを減じている。柄も途中で欠損しているが、胴部の器面に貼付痕が認められ、手のひら近くまで延びていたことが知られる。

成形は、幅2.0cmほどの粘土紐を重ねている。脇の下の高さで作業工程の単位が区切られたのか内面に明瞭な接合痕が観察できる。胴部成形は中実の腕を差し込んだ後も粘土紐の巻き上げが続けられ、首部へと移行している。内面の調整はタテ方向のナデで、胴部ではやや斜度を増している。

くびれ部西側出土の人物埴輪 (1532・1533)

男子人物 (1531) の出土位置に近接して出土している。色調・胎土が類似することから同一個体として考えられようか。

1532は、半身像の人物の上衣の裾部である。裾部は径25.0cm、円筒状の本体から3.0cmほど張り出している。器面はハケム調整後、周縁部にナデを施している。粘土の剝離痕があることから腰に付属品を備えていた可能性がある。

1533は、形象埴輪の基台部、下位の部分の残存である。径は残存中では基底面に最大径をもち、径25.0cmである。上位に向かって徐々にその数値を減じている。外面はタテハケ、内面はナナメあるいはタテ方向にナデを施す。底面から4.3cmの位置に断面台形の特帯をめぐらす。特帯の下端近くに2箇所、焼成前穿孔の径1.4cmの小孔が貫通している。

後円部西側出土の人物埴輪 (1534~1551)

後円部西側中段面出土の破片である。

1534~1537は女子の髻の破片である。1534は、頭頂部を中心に約3分の2が残存したことから髻全体の大きさを想定できるものとなった。円板状を呈し、両側部には半円形の刺り込みをもうけ、前後に髪束の束ねが分られていることを表現している。また、両者の刺り込みを結んで結緒を表現する幅2.5cmの帯状の粘土が貼付されている。中央には径2.6cmの小孔が開かれている。復元値は前後で24.0cm、最大幅22.0

cmが見込まれる。開放した頭部に皿で蓋をするように接合しており、頭部の径からは4cmほど張り出している。内面には指頭によるナデがくりかえしなされている。前後については不明である。

1535も1534同様の形状で、両側縁に刺り込みがみられるが本資料の方がやや大きさが小径である。1536は短く突出している。図左側部は原形面である。1537は側縁の粘土の重ねに立体感をもたせ、髪を折り曲げて束ねていることを表現することに努めている。

1538は胴部本体に紐状の粘土を貼りだし、上衣の合わせの重ねを表現した小破片である。縁に平行してヘラ描きの区画を行い、この内側を刺突している。一部残存するヘラ描きの横線は着衣全体にわたる文様構成があったことを想定させる。

1539は小破片で断定しがたいが、外面の器面にのみヘラ描きの区画線が描かれている。帽子の髯の一部とも考えてみた。

1540~1544は弧状あるいは環状の粘土紐である。1544は、横径の径4.5cmを測る。粘土紐の両端を丸め環状に成形し耳環を表現している。裏面の剝離痕は人物顔面との接合痕であろう。出土位置は1450や1458などの女子人物が樹立されていた地点と考えられるがいずれの個体とも接合関係を特定することは困難であった。1543も1544とほぼ同形を呈する耳環である。1541・1542も耳環と考えられるが、1540は他と比較してやや粘土紐の径が細く、弧の状態もやや開きぎみである点、断面形がやや偏平であることが他とやや異なる。

1545は、くびれ部西側から出土した。耳の一部を表現した小破片である。付着する3個の粘土粒はガラス小玉からなる耳玉を表現したものと考えられる。

1546は人物の肩に付属する鍬で、本体から剝離して単独で出土したものである。柄の幅3.4cm、肩の丸みにあわせて貼り付けられている。右肩に装着されたものであるか。

1547は人物胴部の着衣を表現した破片である。ヘラ描きによる鋸歯文が配置されていたようで、文様構成は1449の男子人物の胴部表現と共通しているが

第4章 出土遺物について

同一個体と認定するに至らなかった。1548・1549も人物の着衣の一部を成す小破片であろう。

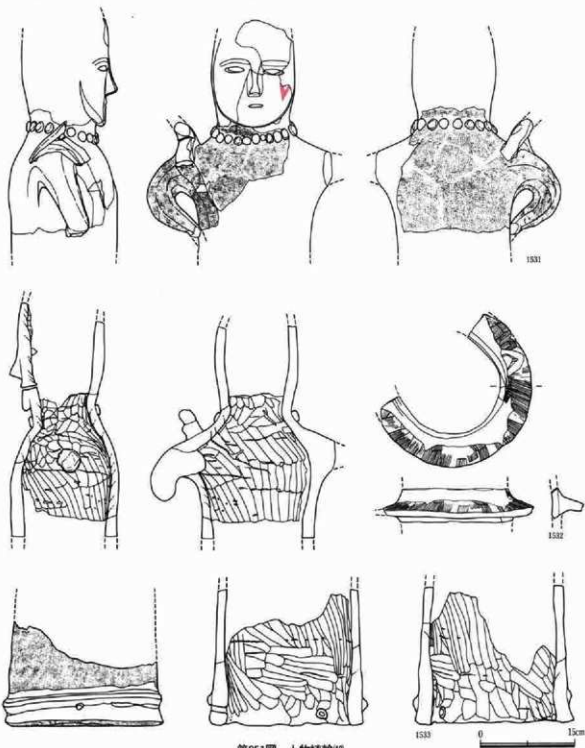
1550は、突帯2条が近接して平行する小破片である。人物の基台部の破片と考えられないであろうか。

1551は、1462の女子人物に近接して出土した人物の着衣裾部分である。円筒形の基台部の上にある半

身像の一部である。残高16.4cm、裾端部径25.0cmである。着衣の裾部はごくわずかに張り出して外反する。外面はタテハケを、内面にはナナメタテ方向のナデ、ハケメを施している。

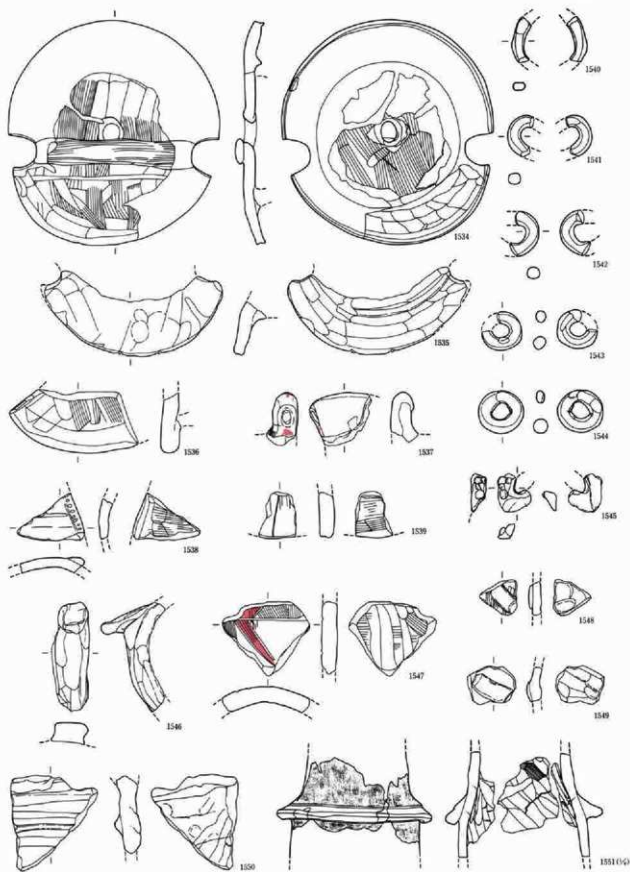
くびれ部西側出土の人物埴輪 (1552~1566)

くびれ部西側の調査区から出土した破片で人物埴

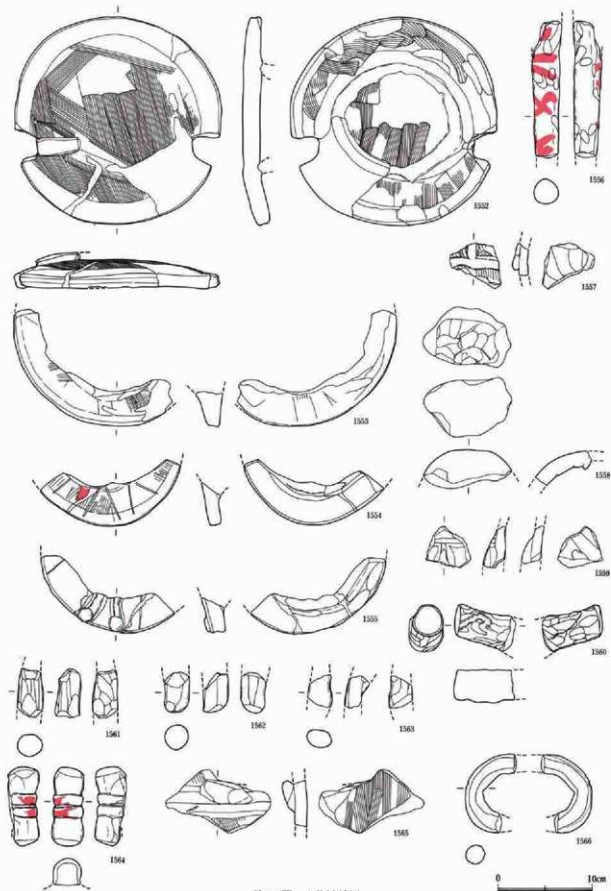


第251図 人物埴輪40

1. 埴輪



第252図 人物埴輪(4)



第253図 人物埴輪42

輪の一部を構成していたものと思われる。

1552は女子人物の髻である。一部に後補があるが縦22.0cm、最大横幅22.1cmの円板状を呈する。両側縁部の中央よりやや後方に寄った位置に半円形の切り込みを有する。器面に幅1.8cmの粘土紐を貼り結紐を表現している。裏面には頭部との接合痕が明瞭に認められる。

1555は、小径ではあるが人物の被っていた帽子の一部で、鈿は短く弱く突出する形状が想定される。ヘラ描き沈線により鈿の内部を区画し、縁辺には赤色塗彩を施している。2条の粘土紐は飾りの紐を表現したものと考えられ、先端に円形の粘土粒を貼付している。

1554も帽子の鈿と考えられ、本体から水平方向に張り出している。器面は、ヘラ描き沈線による鋸歯文が割付られている。

1557は、本体に細い粘土紐が逆T字状に貼付された小破片である。帽子の一部と考えられまいか。1558は弧状に彎曲する。頭頂部の破片と考えたい。1559は、顔面、鼻梁の付け根の破片である。眉・あるいは眼窩上隆起を表現した粘土紐貼付の微隆起が水平に延びている。1560は棒状粘土で、断面3.5×3.0cmの長円形である。側面に細い粘土紐が貼付され加飾がなされている。盾持ち人の箕帽の一部の可能性を考えたい。

1561～1564は、美豆良、あるいは美豆良の可能性が考えられる破片である。1564は縦8.0cm、径3.0cm前後の棒状粘土である。上げ美豆良と考えられ、側面の一方に頭部本体からの剝離痕が認められる。中央部分をややしぼり、ここに2条の粘土紐を貼付し、結紐を表現、赤色塗彩も施している。他の3点も棒状粘土の破片である。1562は下げ美豆良の下端か。

1556は、残存長14.5cm、径2.5cm前後の棒状粘土である。斜格子状に赤色塗彩が施されている。両端が欠損しており断定できないが人物に付属する大刀の一部か。あるいは下げ美豆良を表現した可能性もあろう。

1565は人物の腰部破片である。横位に廻る断面三

角形の突帯は腰紐を表現したもので、これに刀子を表現したと考えられる粘土塊を貼付している。

1566は耳環と考えられる。径2.0cmの粘土紐を曲げ径8.3cmの環状に成形している。分量から盾持ち人の耳下に装着されていたものか。

くびれ部西側出土の人物埴輪 (1567～1586)

くびれ部西側の調査区から出土した破片である。

1567～1569は粘土紐を環あるいは弧状に曲げたものである。1567は径2.2～2.4cmの粘土紐を成形しており、器面の一方に剝離痕が確認できる。1568はやや歪んだ弧状をなして残存する。1567とともに耳環の可能性が有る。1569も耳環の可能性を考えたが粘土紐が細く、着衣の結紐にも類似する。

1570・1573は禪表現の小破片である。1573は禪の膝部分と考えられ、幅2.6cmの帯状粘土は足結表現と考えられる。

1572は左上腕部の破片である。径4.5cmの棒状粘土からなる。肘寄りに弱い稜をもってひと回り細くなる。その部分と肩口に赤色塗彩による装飾が加えられている。1463の男子人物と同形の人物の一部を構成していたものと考えられる。

1577は手甲表現の破片である。周縁と内部の×状の区画に細い粘土紐を貼り、赤色塗彩を加えている。

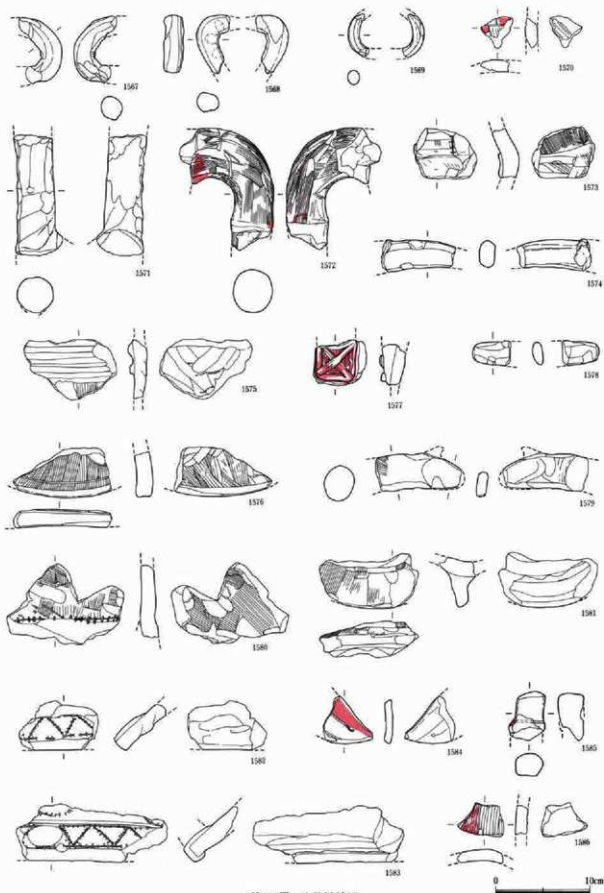
1571も棒状粘土から成り、1572に類似する。人物の腕部分と推定されるが器面の残存が不良なため断定するに至らない。

1578・1579は腕あるいは手の表現された破片である。1579は肘から先が強く彎曲した形状の右腕である。手指は親指を欠損する。1578は親指を除く4本の指をミトン状に一括して表現している。

1574は両端で幅の異なる扁平粘土である。人物の付属品、彎曲する縁部の形状から刀子を想定できようか。

着衣の腰部から裾部の破片も少数出土している。1575は腰部の破片である。2条の突帯が接して廻る。1581は本体から鈿状に短く張り出す。1576は器財の破片の可能性も高い。1582・1583は、1500と同様、双脚立像の上衣の破片である。端部、外面の肥厚部

第4章 出土遺物について



第254図 人物埴輪切

分には細かなビッチの刺突を重ねる鋸歯文が割り付けられている。1583の円形刺離痕は鈴が装着されていたものであろう。

1584は、薄い板状の破片である。下端は尖形を呈し、内区をヘラ描き沈線で細分する。内面は本体と接した痕跡がみられる。男子人物（1515）の冑の鏡に類似する。

1585は、棒状粘土で中位がやや肥厚する。直径は3.0cmを測る。

くびれ部西側出土の人物埴輪（1587～1599）

くびれ部西側の調査区出土の破片である。1587～1596は鈴である。いずれも本体に装着されていたものが刺離した付属品である。形状は側面形が宝珠形に近い形状をなす。中実で、鈴口はヘラ切りにより横一文字に表現されている。1589・1591・1594は肩口をはじめとして器面に赤色塗彩が施される。1589～1591は平面径2.6cm前後と小振りである。高さは2.0～3.2cmを測る。他は直径3.3～3.6cm、高さ3.1～3.6cmである。1463などの男子人物の上衣裾部に装

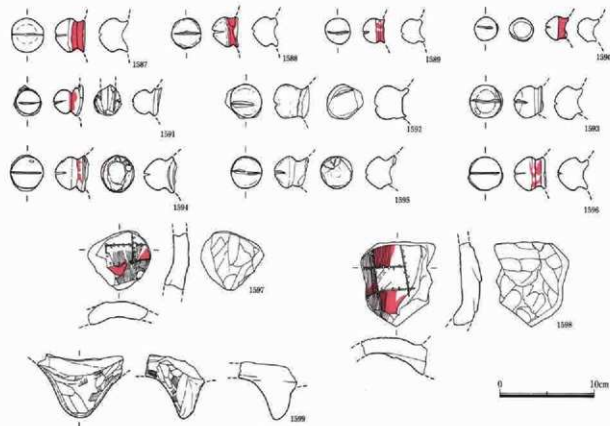
着された鈴に類似する。1587に代表されるよう断面形をみると底面は上げ底を呈し、周縁を整形することにより本体との接合がなされたことが理解できる。これに対し、1591・1592は底面に直線的に伸びる幅2.0cm前後の帯状の粘土紐の一部が残存している。1594・1595の底面には幅0.6cm前後の粘土紐が四方向、八方向から付着している。

1597・1598は禪表現を施された脚部の破片である。タテハケ後刺突を伴うヘラ描きの格子目文を充填する。同一個体の破片であろう。1598は脚下半の破片と考えられ、右端の割れ口には粘土の刺離痕がみられ禪の裾を翼状に表現した板状粘土が接合されていたものと考えられる。

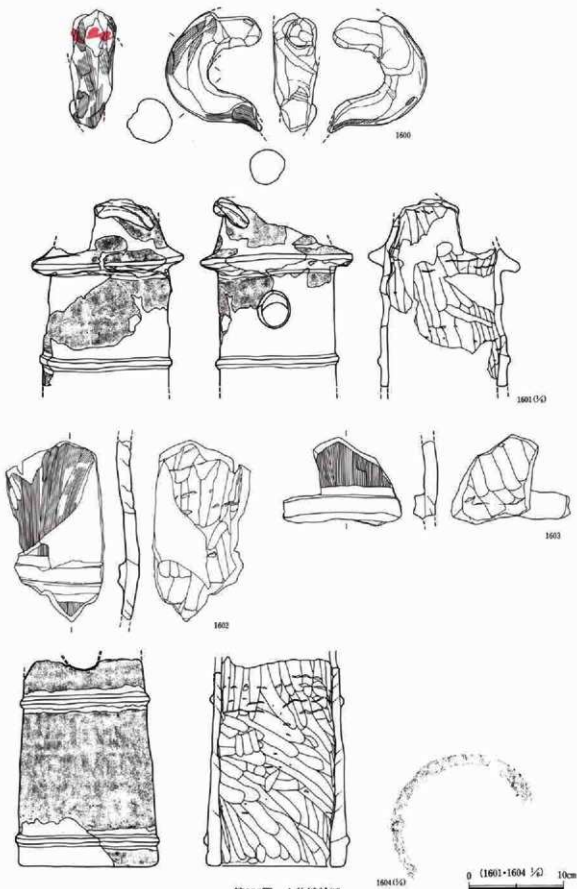
1599は双脚立像の靴の踵を表現したものである。円筒形の脚下端に即して、平面三角形の尖形を呈した粘土突起を接合している。器面にはハケ、ナデを施している。

前方部西側出土の人物埴輪（1600～1604）

前方部西側中段面から出土した破片資料である。



第255図 人物埴輪40



第256図 人物埋輪骨

1. 埴輪

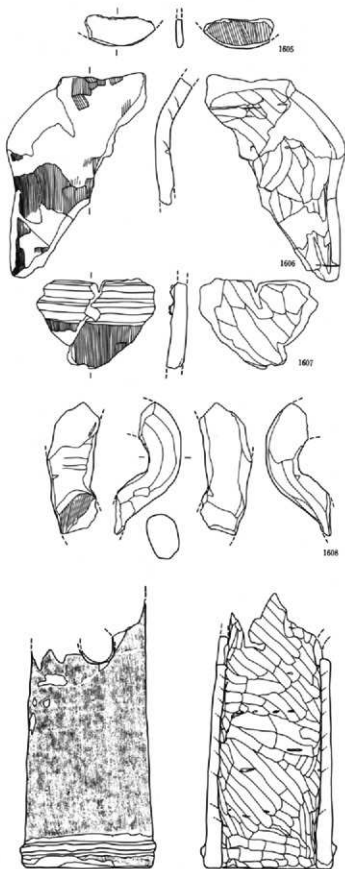
いずれも半身表現の人物像の一部を構成していたものである。

1600は左腕である。胴部に柄状にさしこまれて接合されていたものが肩口から分離してしまったものである。腕を強く彎曲させて成形されている。棒状の粘土も下半は偏平になり、手のひらを胴部に接していたことがうかがえる。指先は欠損している。

1601は胴部下半、上衣の裾から基台部上半の残存である。残高29.7cm、裾部径24.5cm、基台部上位径19.0cmを測る。上衣の裾はスカート状に外反、円筒本体から短く突出する。残存部上位腰部には弧を上に向けた粘土を貼付し刀子の佩用を表現している。基台部は裾部との接合部から13.8cmの位置には突帯をめぐらせ胴部を区画する。この区画内の中位に円形の透孔一対が配置されている。器面の調整は外面はタテハケを充填する。内面はナデ調整が施される。

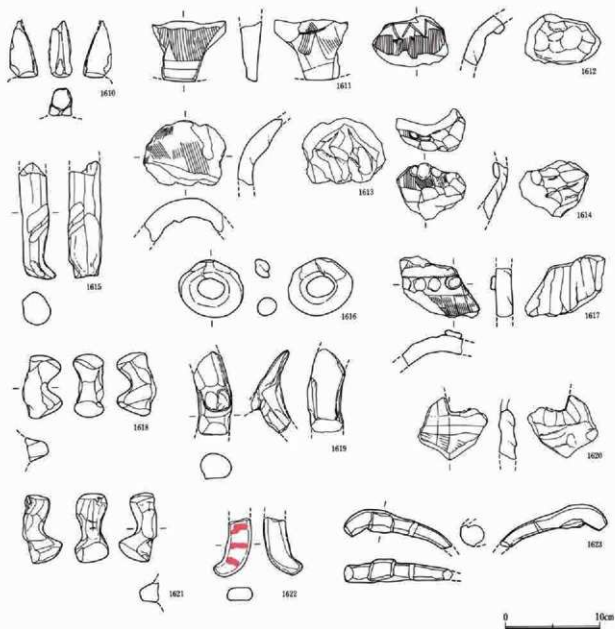
1602・1603は胴部から腰部の大型破片である。ともに器面にはタテハケが施される。同一個体の可能性も考えられるが、着衣腰部に廻る突帯は、1602の断面が幅3.0cm前後のM字形で低い。1603はややその幅を減じ、断面台形状を呈する。ともに腰紐を表現したものと考えられる。

1604は基台部の下半である。原位置に



第257図 人物埴輪(4)

第4章 出土物について



第258図 人物埴輪(7)

樹立の状態で検出された。形象本体の様相は確認できないが、出土位置から人物埴輪の基台部と考えられる。残存高33.1cm、底径21.9cmを測る。上位に向けてわずかにその径を減じている。底面から4.3cm、21.6cmの位置に断面台形の突帯をめぐらせ、胴部第3段目に円形の透孔を配置している。器面は外面がタテハケ後、突帯を貼り付け周辺をヨコナデしている。内面はナナム、あるいはタテ方向にナデをくりかえすが処々に粘土紐の接合痕を残している。

前方部西側出土の人物埴輪 (1605～1609)

前方部西側中段面出土の人物埴輪の破片である。1605は、頸の肥厚を表現するために貼付した顔面の粘土板が剥落したもので、口の切り込みが確認できる。1606は肩上位の破片である。外面はハケメ調整で着衣の表現はみられない。1607は腰部の破片と考えられる。突出度の弱い突帯が近接して2条併行して貼付されている。外面はタテ方向にハケメを施している。1608は左腕である。上位は欠損するが肘を大きく曲げている。手の平は胴部に接しており薄い



第259図 人物埴輪類

作りとなっている。指の表現は欠損のため確認できない。

1609は形象の基台部である。中段面から原状を保持した状態で出土している。前後の関係から半身の人物像の下半と考えられる。残高42.9cm、基底径20.5cmである。上位にむけてややその径を狭めている。底面近くに突帯を1条めぐらしている。残存上位には径5.5cmほどの円形の透孔を一对配している。外面にはタテハケが、内面には斜めヨコ方向のナデが充填されている。

前方部西側出土の人物埴輪 (1610~1623)

前方部西側の調査区出土の人物埴輪の小破片を集成した。1610は鼻である。幅狭いが端正な造作である。1611は帽子の可能性を考えたが、器財埴輪の一部とも考えられる。1612・1613は頭部破片である。1612はハケメ調整の器面に山形のヘラ描き文がみられる。1615は残長12.2cm、径3.2cmの棒状品である。一端はやや偏平につぶれている。下げ美豆良の可能性を考えた。1616はやや横幅を有するリング状の粘土紐で、耳環である。1614・1617は首部周辺の破片



第260図 人物埴輪片

である。ともに径1~1.5cmの粘土粒が連続して貼付され、一連の首飾を装着した表現をとっている。1618・1621は上げ美豆良である。1618は縦6.6cm、径2.0cmの棒状粘土の中位を押し上下端を反り返らせたものである。器面はともに粗粒にナデを加えている。1620は残存上位に切り込みが認められる。部位を特定しなかった。1622は薄い板状品で下端が弧をなしている。1623は腰部に佩した刀子である。全体は強い弧をなしている。柄部の径は約1.5cm、鞘口の金を表現したものか、中位に粘土の貼付がみられる。

前方部西側出土の人物埴輪 (1624~1630)

前方部西側中段面出土の人物埴輪である。1624~1627は胴部から離れた腕部分である。いずれも中実である。1624は右腕である。手のひらを体につけている。指の表現は不明。腕に接して粘土の剥離度が認められることから肩に飲をかっついていた可能性が考えられる。1625は肩部からはずれた左腕である。棒状の粘土が強く彎曲し、手のひらは胴部に接していたと考えられる。指は欠損するが親指を独立、他の4本は一体につくりへら描きで区別していることが確認できる。1626は左腕、1627は右腕である。ともに棒状を呈するが下端は断面偏平となり手のひらを胴部に接していたことが表現されている。指の表現はみられない。

1628は胴部下半の破片である。上衣の裾を表現しており穏やかに外反している。腰には接して2本の突帯がめぐっており、細帯を表現したものと考えられる。

1629は径28×24mmの棒状品である。一端は円形の側面を有するが、もう一端は押圧を受け偏平になっている。人物の付属品と理解した。

1630は胴上位の破片と考えられる。

前方部西北隅出土の人物埴輪 (1631~1642)

前方部西北隅出土の破片である。1631~1637は頭部、顔面の破片である。1638~1640・1642は腕部分である。

1631は、頭部から顔部の右側部分である。右目は上端の切り込みを残す。頭部は高く立ち上がるが輪

子の有無は確認できない。美豆良は、長さ7.2cmの上げ美豆良である。美豆良の後方にはへら状工具による穿孔がなされている。1632は左頬の破片である。口は、横一文字に工具を押し込むように開けている。首には径1.8cmの粘土粒を貼り一連の首飾りを表現している。

1634は目周辺の破片である。眼窩上突起とまぶたの位置にはへら描きによる沈線が施される。1633・1635は顎の一部である。本体に粘土板を貼りたし顎の張り表現している。1636は鼻とその周辺の破片である。鼻孔は刺突により表現されている。1637は側頭部の破片である。本体に貼付された粘土塊は上げ美豆良の下半が残存したものと考えられる。

1638・1639・1642は上腕部の破片である。いずれも端部が枵状を呈し、肩口からはずれたことが確認できる。1640は左腕下半の残存である。指は親指を独立して長く表現、他の4指はグローブ状の成形で個別の表現はなされていない。手のひらは胴部に接していたと考えられる。

男子人物 (1643)

前方部前面(中央部)の中段面から出土した男子人物の半身像である。左手を上方に曲げる姿勢をとっている。右手は腕を折り胸の前にまわしているが、胴部との間には空間を保っている。ただし、腕の付け根と胴部には直接の接点はなく復元形が変わる余地を残している。所々に欠損部があり、また、割れ口の隙間を後補した部分も多いが全体像を把握できた資料である。

頭頂部上の粘土紐までの高さは99.0cm、人物表現部分の高さは約58.0cmを測った。頭部は粘土紐を巻き上げて成形している。顎から上位の長さは22.5cmと長い。内面にはハケメ後ナデを施している。頭頂部には粘土紐の貼付が残存する。飾りが付加されていたのか。

顔は、端正なつくりである。目を木の葉状よりもやや狭く切り込み、口を横一文字に外側から刺突している。鼻は小さいが幅狭く、鼻筋が通っている。鼻孔の表現はない。眼窩上突起は弱い。美豆良は短

第4章 出土遺物について

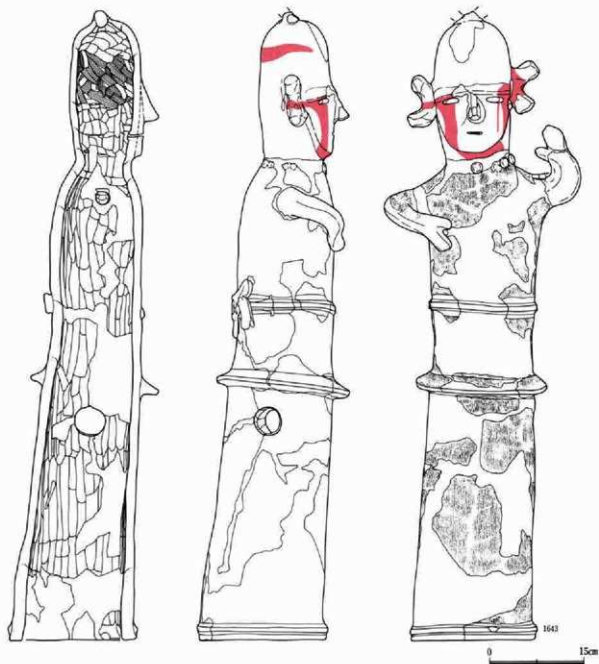
い、いわゆる上げ美豆良である。径3.0cmの棒状の粘土の中位を屈曲させ側頭部に接合、その周囲をナデつけている。美豆良の取り付け位置は左右で大きく異なっている。美豆良の後側には刺突による縦1.5cmの孔が穿たれており、耳の孔を表現したと考えられる。美豆良の下には耳環を付けていたと考えられるが欠落している。

頭部の中位には鉢巻、あるいは被物の端部を表現したと考えられる赤色塗彩が帯状に一周し、これよ

り上位の器面のハケメはナデ消されている。赤色塗彩は側頭部を垂下するものもみられる。この他に、赤色塗彩は顔の眼窩上突起部分とまぶた、頬にもみられる。美豆良の中位にヨコ方向に施された赤色塗彩は美豆良を縛った紐を表現したと考えられる。

首には径1.5cmの粘土粒による首飾りを一連巻いていたが、ほとんどが剝落、欠損していた。

左右の手は中実で、右手は付け根部分が胴部に柄状に差し込まれて接合されている。左肩には幅2.0cm

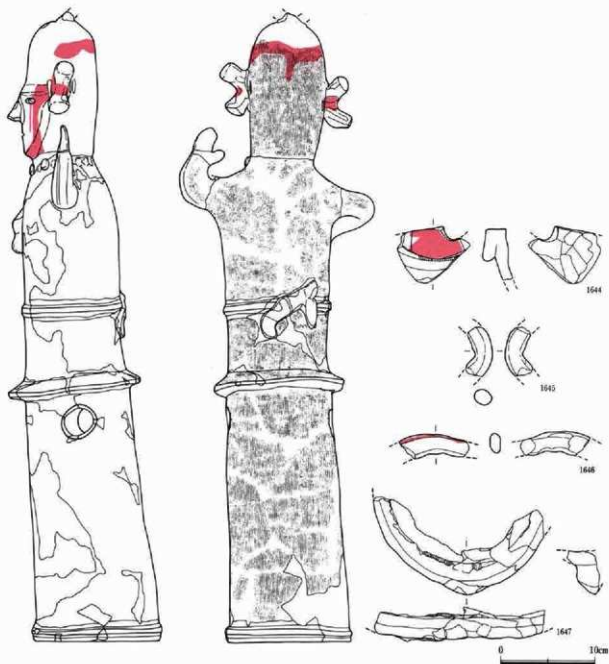


第261図 人物埴輪50

ほどの扁平な粘土の残存と剝離痕がみられる。両手とも扁平なつくりで親指は個別に表現されているが他の4指は区別されずミトン状に表現されている。胴部はその形状に大きな変化はなく、中位で幅16.8cm、奥行15.3cmを測る。特別に着衣の表現も見られず全体にタテ方向のハケメが施される。基台部との境は短く外反し、着衣の裾部を表現している。裾部から上方12.0cmの位置に突帯をめぐらせ紐状の腰帯を表現している。

腰部には粘土貼り付けによる鎌が装着されている。長さ7.2cmの刃部を右下に向け、柄は12.0cmで下端がやや屈曲している。基台部は高さ41.1cmを測る。底面に接して突帯をめぐらす。側面に径6.0cm弱の透孔一対が穿たれている。

基台部から胴部までの成形についてみると、基台部は底面の直径が20.1cm、幅11.0cmの粘土板を基部にし、その上に粘土紐を積み上げている。直径は半身部に向かって徐々にその径を減じている。粘



第262図 人物埴輪(5)

第4章 出土遺物について

土紐の積み上げは6回ほどの工程で肩部まで至っている。着衣の裾部分は本体の円筒成形後に粘土紐を貼付している。

器面の調整は、外面がタテ方向のハケメであるのに対し、内面は基部内面に粘土板作成時の押圧痕を残す他はタテ方向のナデをくり返しおこなっている。調整工程の単位は成形時のそれとほぼ近似している。

頭部成形は、頭頂部に向けて粘土紐の巻上げの径を徐々に減じ、最後、開放部分に頂部に付属する飾り状の粘土塊で閉塞している。

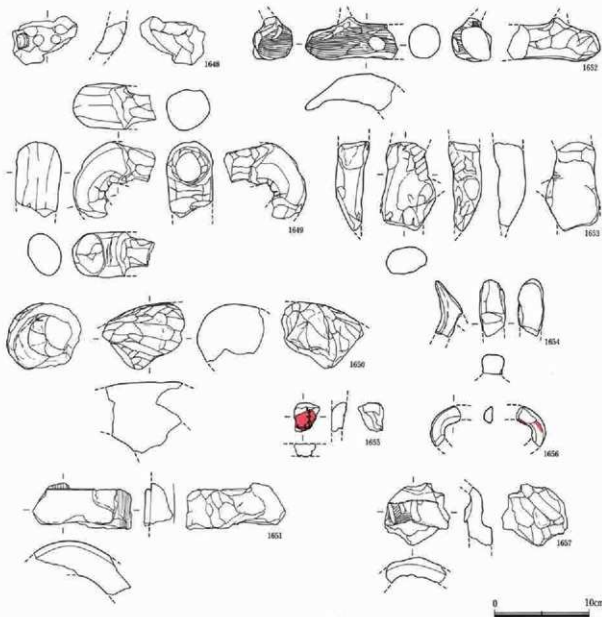
前方部中央（前面）出土の人物埴輪（1644～1647）

前方部中央（前面）出土の破片である。1644は頸部分の破片と考えられる。外面に赤色塗彩を施している。1645は粘土紐を環状に曲げたものと推定され、耳環の一部と考えられる。1646は、赤色塗彩を施し人物に付属する刀子の残片と考えた。

1647は人物半身像の着衣の裾部分と考えたいが、縁辺の一箇所が張り出し、突起状を成すところがやや検討を必要とする点である。

前方部東北隅出土の人物埴輪（1648～1657）

前方部東北隅の調査区出土の破片であり、墳丘中



第263図 人物埴輪50

段から内堀に至る各所からの出土品である。

1648は首部分の破片である。粘土粒の貼付による首飾りが表現されている。1649から1650は腕手の破片である。1649・1650は上腕部の破片である。1649は前面に曲げた腕を表現したものと考えられる。1650は肩口の丸みを肉厚に表現している。1652は左手下半の残存である。独立して表現された親指は欠損している。1653は手のひらから手首までの残存である。手のひらは肉厚で、やや粗雑な感じをいだかせる成形である。

1654は人物が肩にかついだ獣である。内面の剝離は肩の形状に測して丸みをおびている。

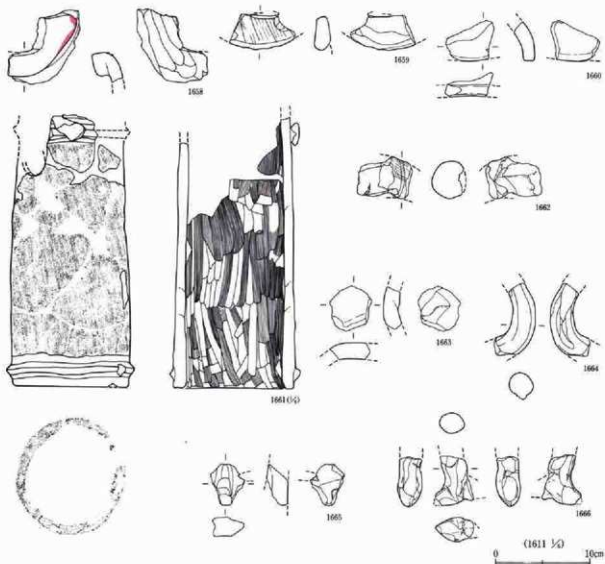
1656は粘土紐をリング状に曲げている。人物の耳

環と考えた。

1651は人物の腰部にめぐら帯と考えた。本体に幅3.4cm、厚さ5mmの粘土帯を巻いている。

前方部東側出土の人物埴輪 (1658~1666)

前方部東側の墳丘各所から出土した資料である。1658・1659・1665は顔面、顎部分の破片である。1665は、鼻と、目元の切り込みが残存していた。1663は頭部破片である。1660は小破片で器種の判定は困難であるが、振り分け髪様の断面と想定した。1664は耳環である。復元径が7.0cm以上におよぶことから盾持ち人に付属した可能性も考えられる。1665は棒状の破片である。図下端が2分されることから美豆良の一部と考えられないか。



第264図 人物埴輪③

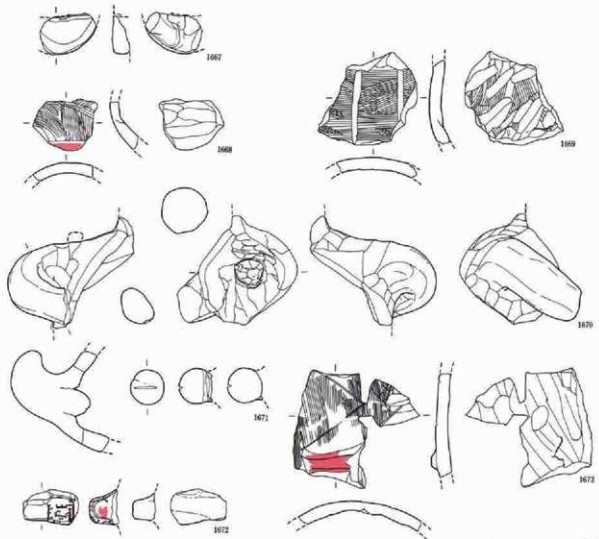
1661は、第三次調査時に前方部東側トレンチ中段で検出したもので、原位置から出土と考えられる。半身の人物像の基台部を中心とした資料である。残存高は42.9cm、器底の直径は18.2cmである。残存部上位に突帯1条をめぐらしている。これは腰に結んだ帯を表現したものと考えられる。また、この突帯に貼付された粘土塊は、残存の様子から腰にさした鎌ではなからうか。近接して馬形埴輪(1757)が出土しており、両者の樹立に一貫性があった可能性も考えられ、本資料がいわゆる「駒引き」の意匠をなしたものであることが想定される。

くびれ部東側出土の人物埴輪(1667~1673)

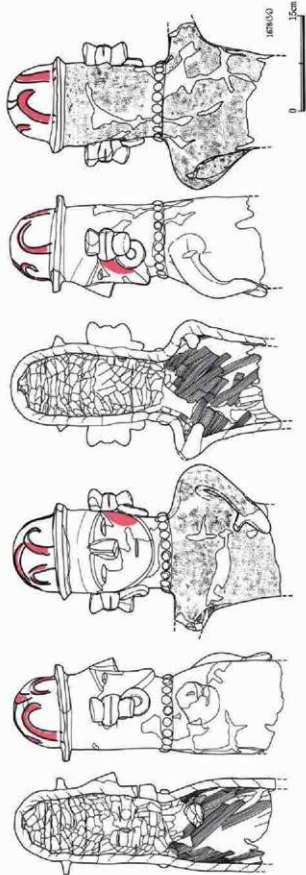
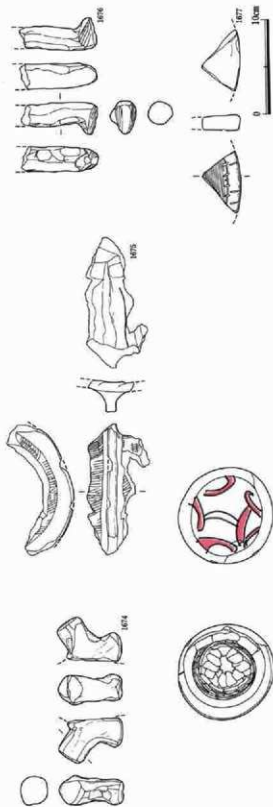
くびれ部東側の各調査区から出土した資料である。1670は肩口・脇から右腕にかけての破片である。

腕は肘を曲げている。手のひらは欠損するが、肩につく剥離痕から鎌の柄を握る表現をしていたと考えられる。くびれ部西側中段に樹立された1530や1531と同様の表現をした男子人物の存在が想定される。腕は他同様、中実で、肩口に柄口にさし込んで胴部と接合している。外面は丁寧にナデを施している。1667は頸の部分である。本体に貼付した粘土板が剥離したものである。

他は、人物埴輪の一部である可能性の考えられる資料である。1668は頭部の、1669は胴部の破片と考えた。外面にハケメを加え、一部ナデを施している。1671は中実の鈴である。馬の付属品の可能性も考えられる。1672は人物が装着した大刀の鞘尻を表現したものと考えたい。角柱状の粘土棒の一端に粘土板



第265図 人物埴輪50



新266号 人物埴輪55

を薄く貼付し、これに刺突文を重ねている。1673は横走する粘土帯とその内側にヘラ描きの鋸歯文状の文様が配されているのが確認できる。

後円部東側出土の人物埴輪 (1674~1677)

後円部東側の調査区、男子人物 (1678) と同一の調査区から出土した資料である。1675は頭部破片と考えられる。本体の円筒に高さ2.0cmほどの粘土紐を突帯状に貼付している。男子人物 (1678) と同様の帽子を被る人物の一部と考えられる。外面はハケム調整が施されている。1674は上げ美豆良である。中位を屈曲させた径3.0cm前後の棒状粘土を側頭部に接着している。1676は棒状粘土で下端がL字状に屈曲する。下げ美豆良と考えられる。1677は外縁が弧をなす破片である。外縁を画すヘラ描き線文に刺突が重ねられている。器財の一部である可能性もある。

男子人物 (1678)

帽子を被る男子像である。くびれ部寄りの後円部東側調査区から出土した。胴部中位以下を欠損するが半身像であったと考えられる。残高42.8cmである。

帽子は高さ8.8cm、鈎は約1.5cmと浅く、その径は約15cmである。頭部本体を成形後これに粘土紐を貼付している。帽子本体にはヘラ描き沈線により蕨手状の文様を5単位配置し、頂部はこれを結ぶ弧状の文様が2単位が描かれている。それぞれの区画内には赤色塗彩が施されている。

顔面は両目、口を切り込む。粘土を貼り、低い鼻梁を表現している。鼻孔の表現は無い。その後、眼窩上位を肥厚させ眉を表現している。顎は間延びし、帽子の鈎までに距離を置いている。左側の頬には赤色塗彩が施される。右側は後補であるが左側同様であったと考えられる。耳の周辺は左側で観察が可能であった。いわゆる上美豆良は上下両端が膨らむ。中位に幅1.0cmの粘土紐を2本貼り、結紐を表現している。美豆良の下端に接して耳環を付けている。外径4.9cm、幅1.7cmの粘土紐を環状にしている。また、美豆良の後方、側頭部には長さ1.5cmのヘラ状工具による刺突あるいは切り込みがみられる。

首には丸玉の首飾りを表現したと考えられる径

1.5cmの扁平な粘土粒の貼付と、その剝離痕が一連をなしている。

胴部は肩がやや張り、腹部に向けて弱くしぼられている。外面にはタテ方向のハケムが重ねられ特段着衣の表現はみられない。

左右の腕は、肩部に柄状の端部を差し込んで接合している。左手は前方に著しく曲げられ、手のひらを胴部に接するまで近づけている。指先は残存していないが、親指だけが分離して表現されていたようである。右手は腕の付け根部分で欠損しているが、その状態からは上方に延びていた可能性がみられる。

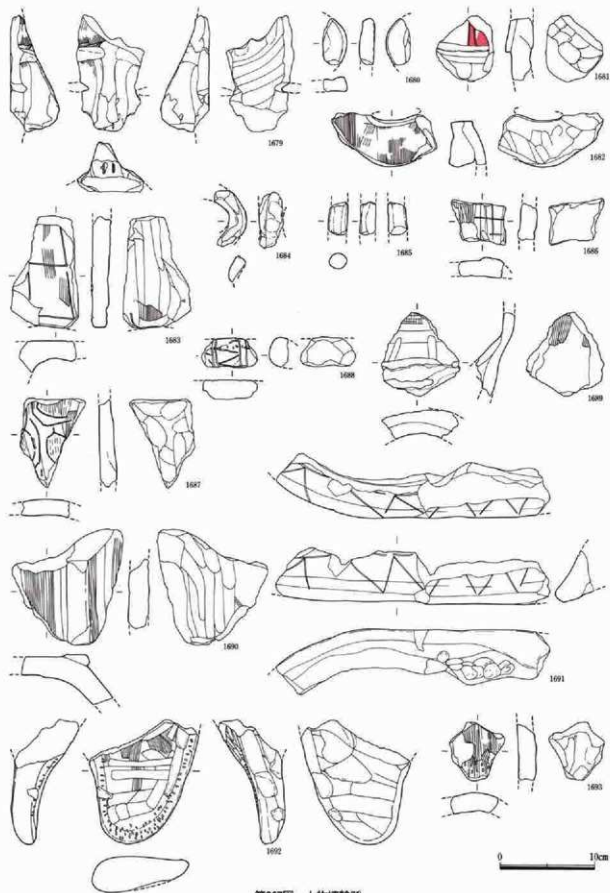
内面の整形は胴部上位にハケムを残すが、下位ではこれをナゲ消している。頭部から首部の内面には2.5cmほどの間隔で粘土紐の接合痕がみられ、帽子の鈎の上下に大きな工程の単位を思わせる痕跡を残す。成形の最後は頭頂部で外面から粘土板を貼り、閉塞している。

後円部東側出土の人物埴輪 (1679~1693)

後円部東側の各調査区出土の資料である。

1679は鼻を中心とした顔面の破片である。鼻は板状で高い。鼻孔は刺突で表現されている。目元と眼窩上位突起との間隔も開き、全体に大形のつくりである。1682は顎の破片である。本体に粘土板を厚く貼り強調している。口は大きく切り込まれている。1684は粘土紐を環状に成形したもので耳の一部と考えた。上記の3点は盾持ち人の破片と考えられる。

1683は禪の下半外側に付くヒレ状の粘土板と考えた。器面に格子目状の文様が配されていたものと考えられる。1686も禪の破片と考えた。ヘラ描きによる格子目文は、一辺1.5cmほどと細かな構成となっている。1687は板状の小破片で、器面に二重の弧線を鱗状に配置している。1693は器面に刺突の施された破片で両者とも着衣の一部である可能性がある。1689は、本体に断面三角形の粘土板を貼り付けており、着衣の裾部の広がりや表現したものと思われる。1691は、着衣の裾部と考えた。器面はヘラ描きによる鋸歯文によって分画されている。外縁の弧線が長円形に延びることが想定されることから、双脚表現



第267図 人物埴輪56

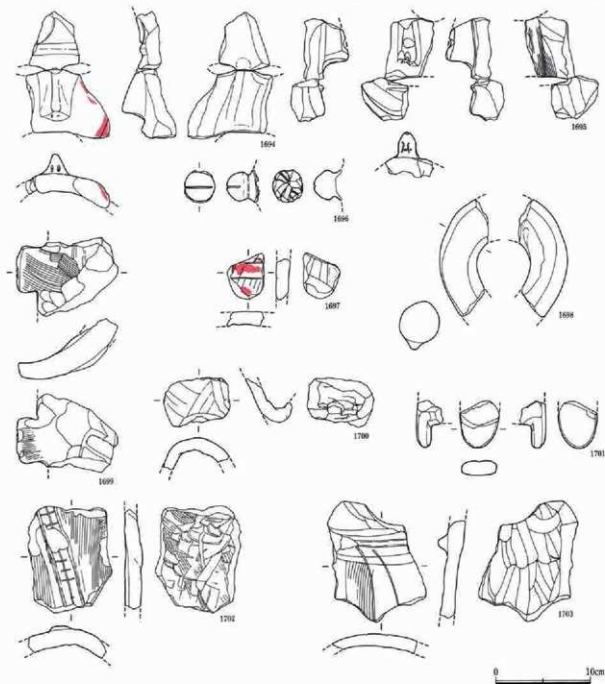
であった可能性が高い。1688は断面かまぼこ形、あるいは円形を呈する棒状品の残片と考えられる。器面は2本1単位のヘラ描き文により分画され、その内区を山形文で細分している。人物に付属する大刀を想定した。

1692は双脚人物の履の表現で、全体の平面形は三角形を呈し、爪先は丸みをおびている。外縁に沿ってヘラ描き線による区画をなし、その中に刺突を連

ねている。注記が正しければ後円部上段からの出土となり、後円部頂頂部から転落した可能性があるが墳丘全体の樹立構成からすると出土位置の誤認の可能性が高い。

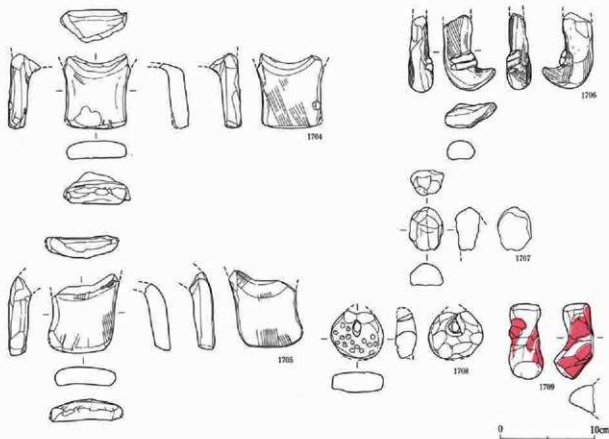
後円部南側出土の人物埴輪 (1694~1703)

後円部南側の調査区から出土した資料である。1694・1695は顔面の残存破片である。1694は鼻が高く鼻筋がとっている。鼻孔は刺突により表現され



第268図 人物埴輪(5)

1. 埴輪



第269図 人物埴輪50

る。眼窩上突起は粘土を貼り、その高まりが明瞭に認められる。頬には赤色塗彩が施されている。額には粘土紐の一部が残存しており、被物か髪表現にかかわるものと思われる。1695は、1694と比較すると全体に小型で端正な顔立ちであったと思われる。鼻は高く、幅が狭い。鼻孔は刺突により表現されている。1697は小破片であるがヘラ描きによる文様が配されており着衣の一部と考えた。1702は人物の胸部破片であると考えられるが、復元径が12.0cmほどと想定されることから髻の矢筒部分の可能性も考えられる。幅2.0cmの粘土帯が斜行して貼付され、器面に線刻が施されている。1703は円筒状を呈する破片である。上位の突帯は断面三角形を呈する。外面には2本1単位の弧線が配されている。これらの特徴から本破片は盾持ち人の胸部上位と考えた。

その他の資料も人物の一部と考えたが、他器種の可能性も充分ある。1696は中実の鈴で本体から剝離したものである。剝離面には細い粘土紐の残存が認

められ帯などに接続していたものと考えられる。1698は腕の残存部と考えられ弧をなしている。1699の端部はその一部が短冊状に突出する。髪形を表現した可能性を考えた。1701は下げ美豆良の下端と考えたが出土位置が後円部埴壇頂部であることを考慮すると家や器財の破片の可能性も検討する必要がある。

中堤および、外堀出土の人物埴輪（1704～1709）

1704～1707は前方部北西、中堤および、外堀出土の破片である。1704・1705は共通した特徴を有する破片である。1704は幅7.1cm、厚さ1.7cmの板状を呈する破片である。図下端は少量の粘土付加し、指先状に仕上げている。図上端は反り返り屈曲するか。

1706は逆J字状を呈する欠損品である。先端は尖っている。中位に幅7mmの粘土紐2本を貼付している。下げ美豆良と髪結の紐を表現したのと考えた。1707は、腕を胸部と接合する際に成形した柄状部分の一部である。

1708・1709は墳丘上からの出土であるが詳細な地点は不明である。1708は粘土紐を径5.6cmほどの円形に曲げたもので中央に小孔が残る。器面には棒状工具の先端による刺突が施されている。人物に付属する柄と考えられないか。1709は上げ美豆良である。

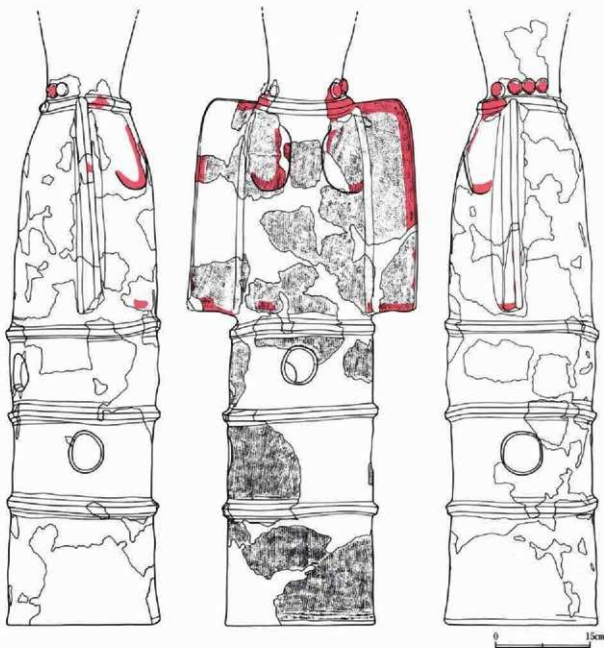
⑧ 人物埴輪一盾持ち人

盾持ち人 (1710)

前方部西側中段面から原位置を保持して出土した。

残存高95.4cmである。基底部から45.9cmは円筒状の基台部で、これに盾面、頭部が続く。頭部から顔面は左側頭の一部を残すだけで大部分を欠損する。

首部には径2.0cm強のボタン状の粘土粒を貼り、一連の首飾りを表現している。その直下には突帯がめぐる。盾面の上端、あるいは人物の上衣の襟元を現したものであろうか。胴部上位は前後に潰れているが、基台部に向かって下がるにつれ張りを増している。盾面は、円筒部本体の左右に縦32.0cm、横8.0cm



第270図 人物埴輪一盾持ち人(1)

1. 埴輪

の翼状の粘土板を貼り付け、側部を表現している。本体とあわせた横幅は盾面下位で36.5cmとなる。下端は突帯をめぐらし、基台部との境をなしている。

盾面上位にはヘラ描き沈線により対向する円弧を配し、赤色塗彩をそわせている。また、盾面の上下両端に赤色塗彩による装飾をおこなっている。

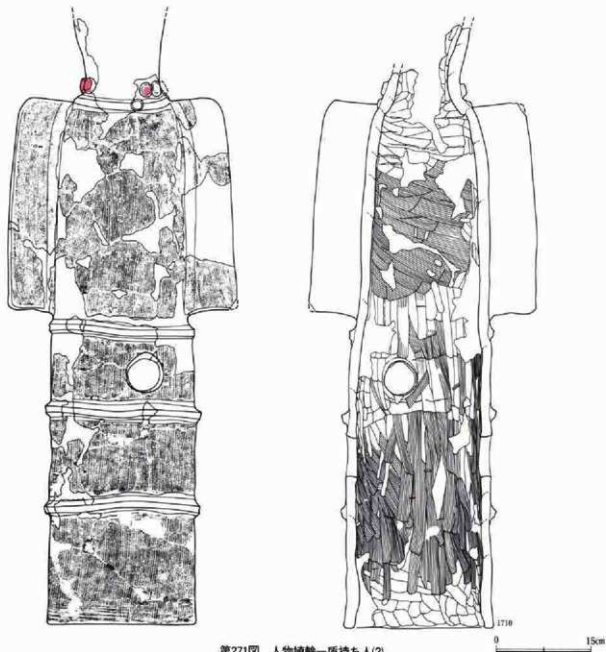
器面の調整は胴部外面がタテ方向のハケメ、盾面の翼状部分はヨコ方向のハケメ後周縁部をナデている。

基台部は高さ45.9cm、底面の径24.3cmで、上位に

い至ってもほぼ同径である。中位に2条の突帯をめぐらし、3段の構成としている。下位から2段、3段目には対向する位置に円形透孔が穿たれている。次に、成整形の様子をみってみる。

基台部最下位の基台粘土板は幅8.9cmを測り、底面の残存部分には粘土板の重ねは認められない。基部の下半部内面には手のひらによると考えられる押圧痕を残している。底面は木目状痕を一部に残すが大半はナデられている。

成形は、粘土拵の接合痕・調整の具合から、残存



第271図 人物埴輪一盾持ち人(2)

第4章 出土遺物について

部分で7段階の作業工程で進行したと想定される。盾面から首部・頭部への移行部分では内面に大きな段差が認められる。

基台部内面は下位の透孔付近まではタテ、あるいはナメ方向のハケメを施す。それより上位は、タテ方向のハケメに部分的にナデを重ねている。

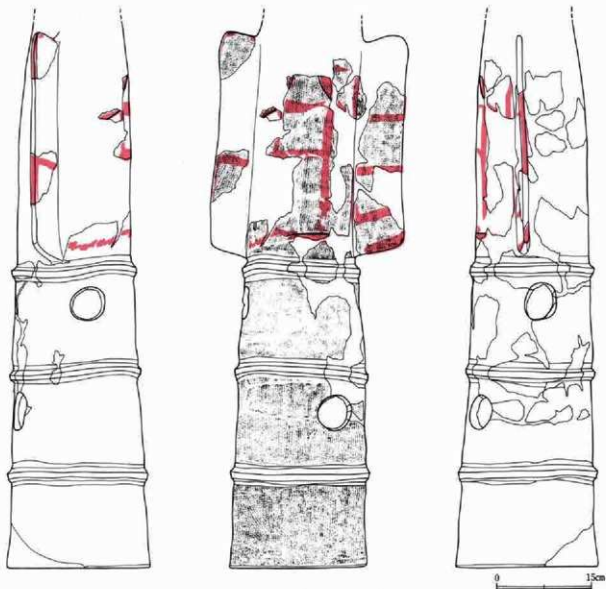
盾面部分の内面はヨコ方向に近いナメハケが施される。ただし、両側部、盾面の翼状部分内側にあたる部分には盾面接合時の器面の乱れを消したと思われるタテ方向のナデが3、4条認められる。上位から首部の内面はヨコ方向のナデ。首部から頭部内面にはタテ方向のナデが施される。

盾持ち人 (1711)

前方面西側中段面から原位置を保って出土した。頭部は欠損する。胴部は突帯により盾面と基台部の区別がなされている。盾面上端までを84.5cmに復元した。

盾面は基台部から継続的に成形された円筒状の本体の左右の側部に横幅約7.5cmの翼状板を貼り付け盾面側部を表現している。大きさは縦36.0cm、幅29.7cmに復元した。

盾面の装飾としては前面上部にヘラ描き沈線により対向する円弧が配され、その内側に赤色塗彩が添っている。盾面中央には縦方向に3本、横方向に

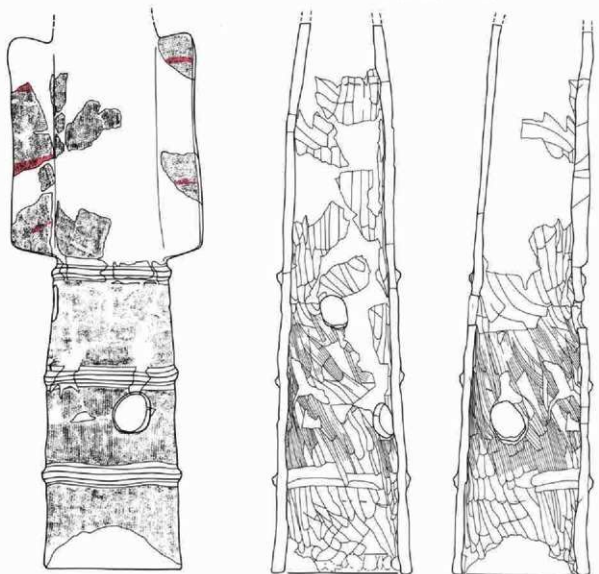


第272図 人物埴輪—盾持ち人(3)

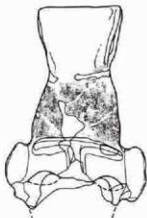
4本、赤色の線が引かれ、全体が一辺6.0cmほどの格子状を呈している。左側の翼状部分では側縁部、下端部を縁どって赤色塗彩が施され、この内側を3条の横線で細分している。塗彩は後面にもおよび、突出部後面にも3条の横線が確認できる。また、盾面と基台部を区画する突帯の前面側にも赤色塗彩が施されている。

基台部は、高さ46.5cm、底面の径は21.9cmを測る。盾面に向けて、ややその径を減じ、最上位では径18.2cmとなる。中位に2条、ほぼ3分割する高さに突帯がめぐる。上位の2段に一つずつ、対向する位置に径5.0～6.4cmの円形の透孔を配している。

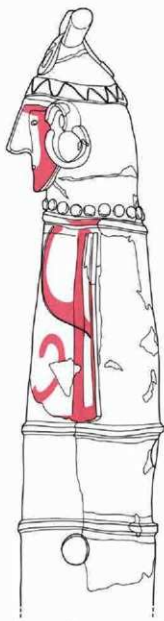
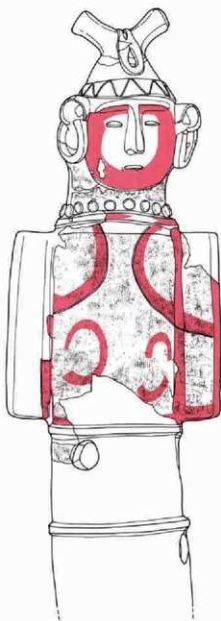
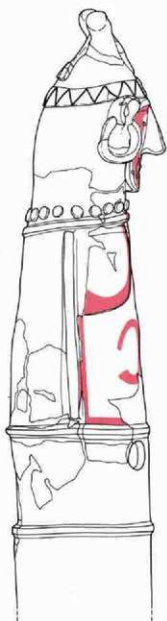
成・整形について述べると、成形は基台部の基部として幅11.0～12.0cmの粘土板を作成することから開始される。基部内面下端には粘土板成形時に付いたと思われる手のひらによる押圧痕が残る。成形は残存部全体を7段階の工程を経て製作している。これより上位はナメタテ方向のナデにより、この押圧痕を消している。第1突帯から上位の透孔まではナメタテ方向の粗いハケメを強く重ねている。盾面部分の内面はタテ方向のナデ調整を施し、首部近くでナメ方向に向きを変えている。両側部には盾面翼状部、接合時に施されたと考えられるタテ方向のナデが4条全体を貫いている。



第273図 人物埴輪一盾持ち人(4)



1712

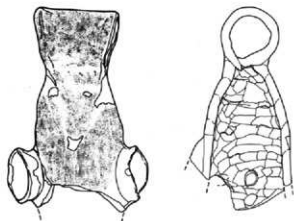


1713

0 15cm

第274図 人物埴輪一盾持ち人(5)

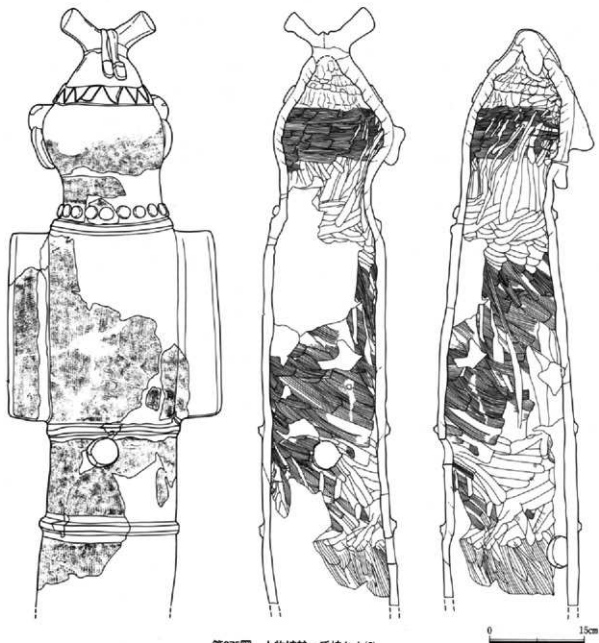
1. 埴輪



外面の調整は基台部はタテ方向のハケメ、盾面の円筒部分がタテ方向、翼状部分がヨコ方向のハケメをそれぞれ施している。なお、ハケメは全体的に2cmの幅に6・7本と粗いハケメであるのに対し、基台部の下から数えて第3段目部分から盾面最下端までには工具が異なり2cmの幅に13本の細いハケメを施文している。

盾持ち人 (1712)

前方部西側から出土した。



第275図 人物埴輪—盾持ち人(6)

第4章 出土遺物について

頭部から顔上半部が残存する。残存高は32.0cm、最大幅は耳の位置で24.0cmを測る。顔は、両目とも上側の切り込み部分で横方向に割れ、以下を欠損する。目は、木の葉状の大きな切り込みであったと考えられる。鼻梁は、付け根の残存状態から高く板状を呈していたと想定される。眼窩上突起も粘土紐を貼り突帯状を呈している。耳はラッパ状に開く。粘土紐を径10.0cmのリング状に貼り付、中央に小孔を穿孔する。目上から頭頂部までの間は長く、眼窩上突起と頭頂部の間は長く間隔を有し、徐々にその径を細めている。頭頂部には長さ15.5cm、径19.0cmの円筒を横方向に乗せている。

成形は下位から順次、粘土紐を巻き上げている。頭頂部には5.0×3.0cmほどを開放したまま残し、ここに円筒部分を接合して閉塞させている。

器面の調整にはハケメが用いられ頭部はケテ方向に細いハケメを施す。頭頂部円筒部分の後面部分には工具の異なる粗いハケメが使用されている。

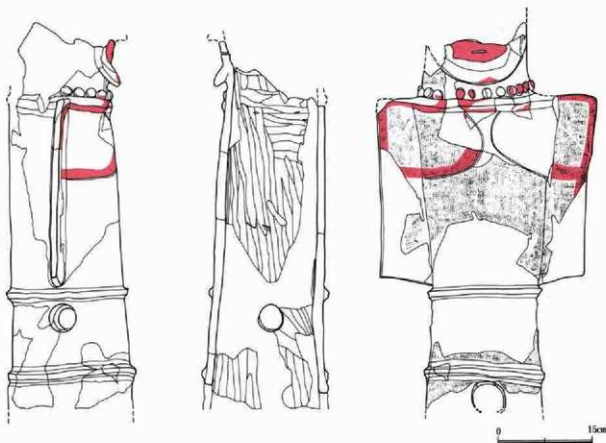
盾持ち人 (1713)

くびれ部西側から出土した。原位置出土ではない。頭部から基台部上半までが残存する。残存高は92.1cmである。

基台部は下半の基底部をはじめとした大半を欠損する。人物部分も盾面の円筒部後面、左右の翼状部分は後補によるところが多い。

頭部は、その頂部から顎までの長さが28.8cm。最大幅は耳の位置にあり、22.2cm、奥行21.0cmを測った。いわゆる笄髷を被っており、頭頂部には中央の棒状粘土がY字状を呈する。飾りの紐が顎側では輪状に、後頭部では端部を2本にして垂下している。額には幅3.0cmの帯が一周し、ヘラ描き沈線による山形文が連続する。被物の端部を表現したと思われる。後頭部はハケメ後上半をナデ消している。

顔面は丸く、大きく作る。特に、顎は粘土板を貼り足して強調している。鼻は異常に高く、かつ薄い。これに続く、眼窩上突起も明瞭である。これに対し、



第276図 人物埴輪一盾持ち人(7)

目は小さく、切り込みは細い。口も横一文字で短く、工具で外面から刺突するようにしてかろうじて穿孔している。顔には目の上端、こめかみから額にかけて赤色塗彩を施している。

耳は、粘土帯を輪状に貼り付けるが穿孔は認められない。直下には径7.5cmと大型の耳環を下げている。首には径1.8cmの粘土粒をやや間隔をあけて貼り付け、丸玉による一連の首飾りを巻いていることを表現している。

首飾りの直下には突帯が一周、着衣の襟元状をなし、人物と盾面の表現を区画している。

盾面は縦32.0cmの長方形を呈していたと想定される。円筒本体の側面に板状の粘土を翼状に貼り付け張り出させている。左側のそれは幅7.0cmである。右側も同様と考え全体の横幅を34.2cmに復元した。

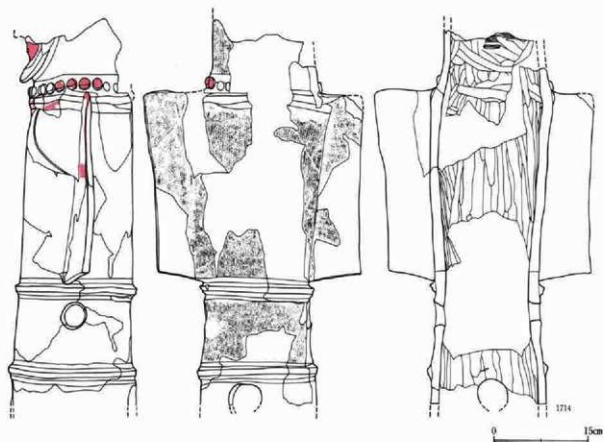
盾面の上下両端および、翼状部分縁辺部は赤色塗彩がなされ縁取りされる。また、円筒部分上半にはへら插きにより内向きに対応する弧線が刻まれ、こ

れに沿って帯状の彩色が施されている。弧の下端は翼状部分にまでおよんでいる。下半部には彩色による渦巻状の文様が左右に並列されている。

盾面の直下を区切るように突帯がめぐり、以下が基台部となるが下半は欠損している。残存部の中位にも突帯が配され、他資料との比較から、更にもう一段突帯が存在することが予想される。各段の構成がほぼ同間隔であるとすれば、基台部の復元高は48.0cmが想定され、全高も約115.0cmとなろうか。径は盾面下端直下で20.1cmを測った。突帯間には前面からやや右側に寄った位置に径5cmの円形の透孔を穿ち、これと90度振って下段の透孔が配されている。

外面の調整はタテ方向のハケメが主体的である。その中で、基台部残存上半以上に2cmの幅に11本の工具が使用されているのに対し、基台部残存下半のそれは2cmの幅に5・6本と異なるものであった。

成形をみると、基台部の残存部から盾面までにはほぼ5段階の工程で到達している。内面の調整もこれ



第277図 人物埴輪一盾持ち人(8)

とほぼ同様のピッチで変化している。基台部中段の突帯位置まではタテ方向に近いナメ方向のハケメを施し、これに部分的にナデが重なる。盾面内側には傾斜の緩やかなヨコ方向に近いナメハケを施す。盾面円筒部の成形は2回の工程で首部に達している。この部分の接合痕はヨコ方向のナデにより消され、これより上位はタテ方向のナデが加えられている。

頭部内面の下半にはヨコ方向のハケメが細く施されているが粘土紐の重なりは明瞭に残存している。上半に至り、径が狭まるとハケメは省略され、指頭による押圧、ナデで接合状況を良好なものとするような努力されている。頭頂部の閉塞には弁帽があたり、Y字の下端を柄状に差し込んでいる。

盾持ち人 (1714)

くびれ部西側の出土であるが原位置出土ではない。

顔面の下半から基台部中位までの残存であるが欠損部分が多い。顔と胴部以下の直接の接合点はない。ただし、出土位置・色調・胎土などから同一個体と判断、図上復元した。首まわりの復元形と盾面上端の形状が1713と比較するとややバランスを欠くことは今後の留意点の一つである。残存高は図上で58.9cmである。口は横一文字で篋状の工具によって外側から刺突し穿孔されている。顎は粘土板を貼り、しゃくれた状態を形造っている。首は太く、径1.5cmの粘土粒を貼り、丸玉の首飾りを一連繋いでいる。首の側部にはタテハケが残るが顎は帯状に赤色塗彩が施されている。顔面は丁寧にナデている。

首飾りの直下には偏平な突帯をめぐらせ、盾面上端を画している。

盾面は、円筒部と、その側面に左右に張り出した翼状の部分からなることは他の資料と同様である。縦長の四角形に表現されており、縦30.0cm、上端の横幅36.0cmで復元した。盾面と基台部との間も突帯がめぐり両者を区画している。

盾面の装飾であるが上端辺左右両側縁を赤色で縁取っている。また、中央の円筒部上位にはヘラ描き

による弧状の沈線とこれに沿った赤色の帯が描かれている。基台部は下部が欠損しており全容を把握することはできないが中位に突帯をめぐらせ上下2段が残存する。

外面はタテハケを施し、上段は側面に、下段は前後に径約4.0cmの円形の透孔が配されている。

内面の調整は基台部から盾面の中位までにタテ方向の、残りの上位にヨコ方向のナデを施している。

前部西側出土の盾持ち人 (1715~1727)

前部西側の調査区出土の資料である。1720は顔面の破片である。通例の人物の顔面と比較しても特別の大きさを感じさせないが、出土位置から盾持ち人と推定した。鼻は剥落している。目・口とも小さく開けている。1726は大きな造作の顎の破片である。口の切り込みの一部が残存する。

1715は、両目の目頭と眼窩上突起が残存する。鼻は剥離している。赤色塗彩が施される。

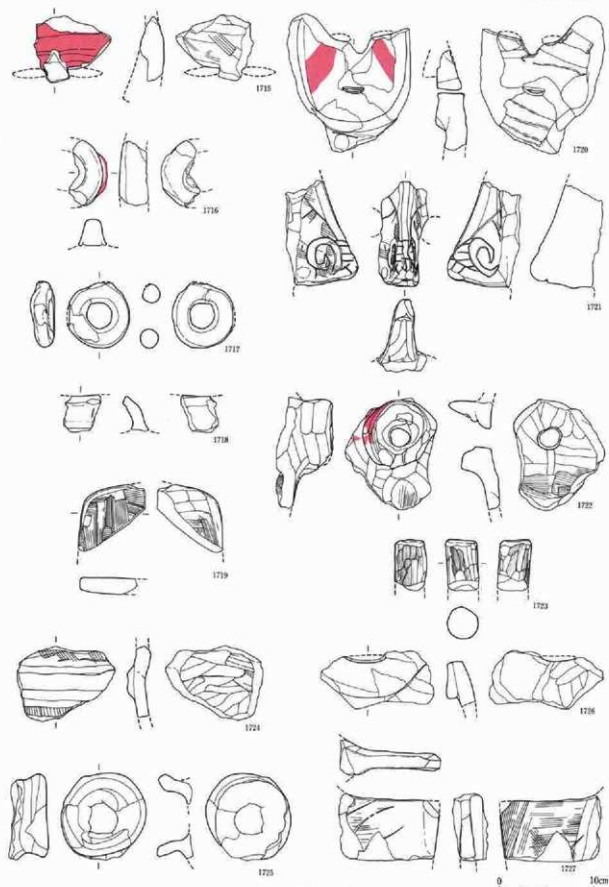
1716・1717は粘土紐を環に成形した部位である。1717は耳環であるが1716は耳の可能性もあるか。1722は顔面部の破片である。耳は径6.5cmの環状に表現され下端が球状を呈する。耳環は剥落した痕跡が認められる。1718はラッパ状を呈する耳の一部である。1725も頭部から剥落した耳である。径9.0cmを測る。

1721は鼻である。板状粘土を成形し、高い鼻筋を表現する。器面にはヘラ描きによる渦巻文や弧線を組み合わせた文様が施されている。鼻孔は刺突により小さく表現されている。1723は、径3.3cmの棒状品の破片である。弁帽の一部か。1719・1727は盾面の一部か。

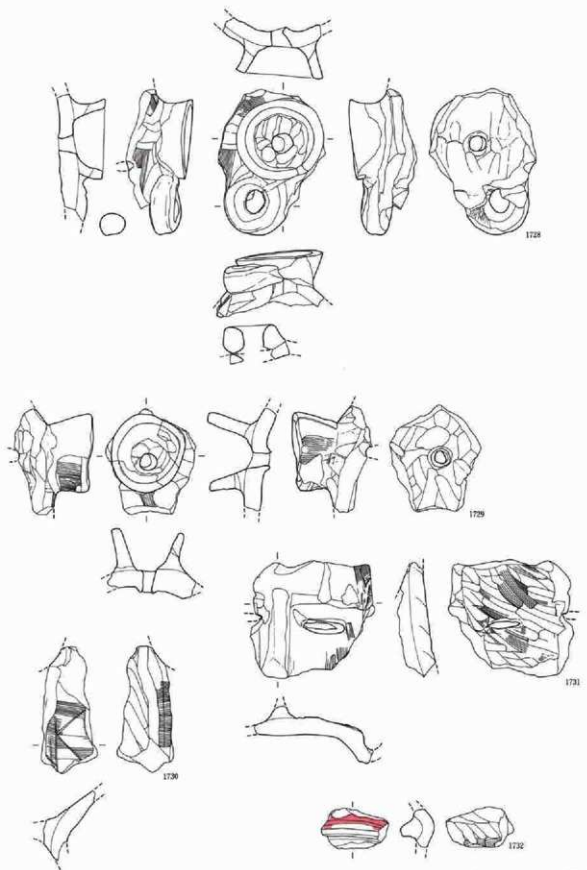
くびれ部東側出土の盾持ち人 (1728~1732)

くびれ部東側の調査区出土の資料である。ただし、1731は出土地点不明である。1728は側頭部破片で端部はいずれも欠損しているがラッパ状を呈した耳とその取付けた耳環がみられる。耳の中央には径1.6cmの小孔が穿たれている。1729も側頭部の破片である。耳は1728同様ラッパ状に外反する。外端の径は7.2cmを測る。中央に径2.0cmの穿孔が認められる。1730は

1. 埴輪



第278図 人物埴輪一盾持ち人(9)



第279図 人物埴輪一盾持ち人10

盾面の一部である。タテ方向のヘラ描き沈線で区画、その内側に鋸歯文を配している。

1731は、左目を中心に残存する顔面の破片である。大型の顔面は扁平で高い鼻がついていてと考えられる。左目は長く木の葉状に開けられている。眼窩上隆起も強調されている。

⑨ 動物埴輪

本古墳出土の動物埴輪は馬形埴輪と鳥形埴輪が確認された。馬形埴輪は、個体の復元を行った1733・1745・1757・1762を中心に事実記載を行う。次に墳丘各部位ごとに資料を掲載した。

馬形埴輪 (1733)

前方部西北隅中段面から出土した飾り馬である。欠損部が多く、1745をはじめとした他事例を参考に首部以下を復元した。頭部については残念ながら残存する破片がほとんど無く、復元状態を検討することができなかった。復元は、脚下端からたて髪の上位までの高さが143.6cm、たて髪から尻尾の先端までが112.4cmの長さとなった。

復元作業は胴・腹部内面の調整状況を図化するために、胴部下半の接合を優先させ、図化終了後、4本の脚の位置を決定、付け根部分と胴部の接合に進んだ。脚部は、下端を中心に残存しており、中位部分は細片化が著しく後補の部分が多い。胴部から尻尾の復元は難波をきわめた。胴部下半と背中部分との間に直接接合関係のある部位の残存が少なく、背中や尻尾の外形曲線が上手に仕上げられなかった。調整に努めたが原形は背中にまだ幾分影を有する余地が残された。腰部を横位にめぐる鬃も本来は整然とした状況を呈していたと考えられるが復元ではやや歪みを生じてしまった。鞍の前輪と首部、たて髪部分との接合にも検討を重ね、調整を加えたにもかかわらず頭が真正面に向かなかった。最終的にはやや歪みを伴うものの原形も頭部が右方向を向いていたものと判断し、現状のように作業を終了させた。

たて髪は、頭部の上に厚さ1.5cmの粘土板を垂直に立てている。幅18.0cmの弧状を成す。外縁部寄りの3.0cmほどは肥厚し、縁取られ、厚さを2.2cmに増し

ている。この部分には頂点を前方に向けヘラ描きの山形文が連続的に配されている。左側面では10単位を確認した。

この山形文は、2本1単位を基本とするもので刺突を重ねている。内区には赤色塗彩が施されている。この文様はたて髪の外に手綱、胸繫、尻繫の各所に同様の図柄として多様されている。

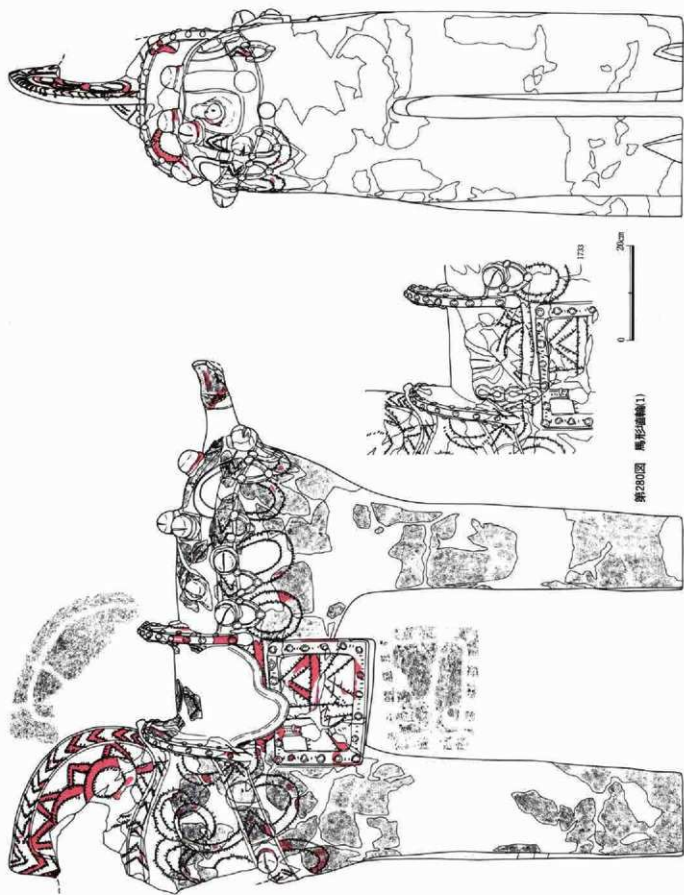
たて髪の下半、本体部分には手綱の位置から立ち上がる藤手文と、これに接続する山形文によって構成された文様によって充填される。この文様も2本1単位のヘラ描き文で刺突を伴っている。

首部には手綱が横行する。これは本体に薄い粘土体を貼付して成形するもので、帯の幅は一定でなく顎寄りでは3.3cmを測り、鞍寄りではこれを減じている。器面の文様は、鞍方向に頂部をもつ山形文である。首部下半から胸にかけては、ハケメ調整後藤手状の文様が施されている。前面胸繫の中央から下位2.0cmの位置に推定径4.0cmの透孔が存在していたと考えられる。

胸繫は幅6.0cmの粘土帯を貼付している。端部は鞍前輪の下端爪先に装着されている。径6.0cm、高さ5.0cmの鈴が合計5箇所に装着されており、うち3個が原位置に復された。鈴は中空の構造で、鈴口は正面から切り込まれているが貫通せず、中央の小孔のみ胴部本体まで貫通している。尻繫に装飾された鈴も形状規模とも同様である。鈴と鈴の間には頂点を右に向けた山形文が配されていた。

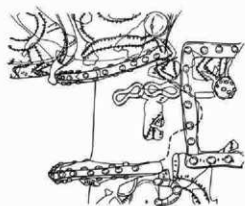
胸繫下位の胴部には、帯下端から下向するヘラ描きの2重の弧が配されている。4単位であったか。

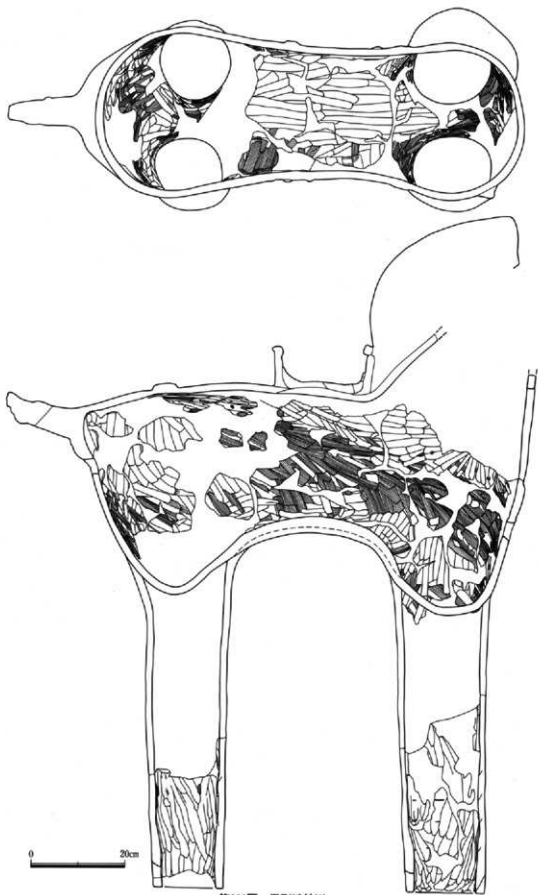
鞍部は前輪、後輪、鞍褥、下鞍障泥、鐙の各部分が表現されている。鞍は、胴部本体に22.0cmの間隔で2枚の粘土板を立て前輪、後輪としている。厚さは1.5cmである。いずれも残存箇所は少ないが前輪は高さ6.5cm、最大幅32.0cmである。爪先からほぼ垂直に立ち上がり、高い山をもつ弧を描くものである。胴部本体に対し、後方に傾斜して取り付けられている。縁部は外周を覆う覆輪を表現するため若干の肥厚部分をもち、内外および、上方の3方向から径1.0





第281圖 馬形輪(2)





第262図 馬形埴輪(3)

cmの豆粒大の粘土粒を貼付し、鋲頭を表現している。海金具、磯金具などの細い区別は表現されていないが器面には文様が表現されている。

居木の表現はなされていない。

後輪は中央での高さが8.5cm、最大幅31.0cmを復元した。外周部分の表現は前輪と同様である。外面尻側には鞍金具の装着を表現したと考えられる半円形の粘土板貼付とヘラ描きの弧状文様が加飾されている。

鞍褥は、左右の中央部分が舌状の端部を呈している。ここは、胴部本体とは別の粘土板を2枚重ねにする構造を取っていた。残存状態が不良なため全面が同様の構造をなしていたのかは判断しがたかった。縁部は形状に則して縁取り状の肥厚部分を設け内部に刺突を充填している。器面全体には蕨手文を基礎としたヘラ描き文で文様構成されていたようである。

障泥は左側が縦20.0cm、横26.0cmの四角形をなし、下位の3分の1ほどが胴部から離れ垂下している。四周を幅3.0cmほどに肥厚させ縁取り、刺突を連ね、鞍の装飾と同様、豆粒大の粘土粒を間隔を開けて貼付し新留表現をしている。内区は2本1単位の直線が4区分し、この内側に頂点を上位に向けた山形文をそれぞれ配している。中央、前輪寄りには幅2.0cmの粘土帯が垂下し、その先端に径4.0cmのボール状の剝離痕が付いている。これは壺鐙を表現したものである。右側のそれは残存している。杓子形を呈するもので踏込部のくりこみが口を開けている。帯は力革を表現したかのように刺突が加えられているが鐙の構造全体からすれば軸部を表現したもののようにも思われる。上半の粘土帯の延長線上には鞍褥に隠れて外側からはみえないが、8の字状を呈した粘土帯が2個縦位に貼付されている。兵庫鐙を表現したものである。右側は残存が不良であるが縦21.0cm、横26.0cmに復元できる。文様構成は左側とほぼ同様である。

尻尾周辺は胴部からやや突出する傾向にあったようである。尻尾は尻との直接の接点はないが長さ

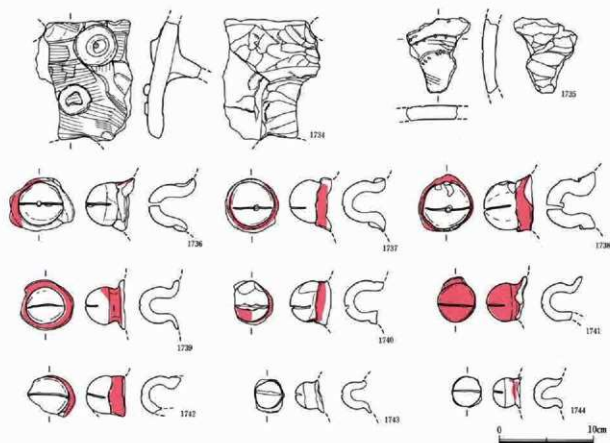
10.0cmが残存していた。先端は先細りせず棒状を呈している。断面は長円形で、基部寄りの長径が5.7cmを測る。尻尾を整えるための飾り紐の表現と思われる帯状の粘土が貼付されヘラ描き文が付加されている。

背中から尻部にかけては尻鞆の装着表現がなされている。鞆の幅は7.0cm、胴部本体からは0.5cmほどの肥厚である。鞆は背中の中雲珠を中心に各方面に延びていたと思われるが、雲珠を表現する破片が残存せず具体的な構造を明らかにできなかった。背中から側面に向かって垂下する短い繫はその先端に鈴が装着されている。同様に短い繫が後輪方向に延び、やはり先端に鈴が装着されていたようである。また、背中から尻尾を巻き込んで周回する繫は尻尾の斜下位で後述の横方向の繫と合流一体表現となっている。

胴部側面には後輪爪先から尻尾の下位におよぶ繫が延びている。繫は約7.0cmの間隔を開け、一側面で4箇所ずつ鈴が装飾され、その間の器面には鞍方向に頂点をもつ山形文で加飾されている。

この帯の下端には粘土帯がモール状に付き、3箇所粘土粒が重ねて貼付されている。更に、この下位には2本1単位の半球状の文様が粘土帯と同方向でヘラ描きされ、胴部器面を飾っている。左側面では4単位が確認できる。

脚部は底面から30~50cmが4本とも良く残存しているが、これより上位、腹部付け根との接合部分までは多数の細片が存在していたものの復元することは困難であった。左後脚は部分的な残存ながら下端から付け根近くまで残存していた。この部分と他の資料を参考に後補した結果、前脚の付け根までが62.0cm、後脚の付け根までが61.0cmに復元できた。また、前後脚間は、その中心距離が前後左右とも59.0cm、左右は前脚27.0cm、後脚23.0cmである。脚部の太さは残存部分を観察する限りでは大きな変化はみられない。やや前足が太い。下端の径は左前脚で44.0cm、右前脚40.0cmである。器内の厚さは2.0cm前後である。脚部下端後側には踵を表現した高さ6.0~8.0cmほどの縦長の三角形の切り込みが施されている。



第283図 馬形埴輪(4)

脚部の外面は全体にタテ方向のハケメが充填されている。成形は下端の15.0cmほどを基部成形し、その後は順次、粘土紐の巻き上げをおこなっている。内面にはタテ方向のナダが施されるが、粘土紐の接合痕が処々に残存していた。脚部付け根の内面にはナナメタテ方向のハケメとナダが混在して残存していた。腹部は横断面が箱形を呈し、脚部を結ぶ前後はアーチ状をなしている。中央部分は厚さ4.0cmと器肉が厚く、補強が図られている。内面調整は前後方向のナダが施され、両側面寄りには側面に続くハケメが認められた。胴部側面にはタテ方向の調整痕が認められる。これは胴部成形が脚部のそれと同様、横方向に粘土を積み上げていたことを想像させる。

脚部上半の調整は鞍部分内面が尻方向にやや上がるナナメヨコ方向のハケメがみられ、これが背中付近まで続いている。尻部分はナナメタテ方向のナダが多用されている。首部分の内面は頭部方向に向けてヨコあるいはナナメタテ方向のナダが確認でき

た。

前方部西北隅出土の馬形埴輪 (1734~1744)

前方部西北隅中段から出土した形象埴輪の破片資料の中で、1733の馬形埴輪と特徴の類似する資料を掲載したが、全てが同一個体と確定をしたわけではない。1734は左側頬骨部分の破片である。板状粘土の成形により頬骨を表現している。面整は幅2.4cmの粘土帯を十字に貼付し、交点に径4.8cmの円形の円形板による辻金具が表現されている。残存部左下位の径3.4cmの円環は引手壺を表現したものである。1715は刺突を伴う二重の円弧文が認められる破片で馬形埴輪の胴部文様の一部と考えられる。1736以下は鈴である。いずれも本体から剥落した痕跡が認められる。1736~1738は形状、規模の類似する資料で原形は1733の馬体を飾っていたものである。径4.5~5.1cm、高さ4.5~5.2cmを測る。側面は半球形を呈し、直径に比較して器高を有する形状である。中空であるが鈴口全体が内面に切り込みがおよぶことなく、

中央に開いた小孔のみ貫通している。基部には粘土紐がめぐり赤色塗彩で加飾されている。1739・1741も中空の鈴である。1736と比較して一まわり小型である。鈴口はヘラ切りで表現するが内面まで切り込んでいない。1740・1742は、1739とほぼ同規模を有する。基部に貼付された粘土紐の存在が1739と異なる点である。1743・1744も中空成形であるが更に小型で、直径2.8~3.0cm、高さ3.0~3.2cmを測るものである。赤色塗彩が施される点も他と共通している。

馬形埴輪 (1745)

飾り馬である。前部東北隅中段面から出土した。4本の脚部は埴丘上の原位置に樹立された状態で検出された。頭部から首部の遺存状態は悪いが、破片資料を胎土、色調の特徴から胴部と同一個体であるものを選別、他事例を参考にして後補、一体として復元した。復元後の各計測値はたて髪までの高さ132.4cm、鼻先から尻尾の端部まで132.0cmである。

頭部は左下顎、左耳周辺、右下顎の口先寄りの破片が確認されただけでその他は全て後補である。頭部の成形は内面の観察から、円筒状の本体を製作、これに板状の頬骨を接合したことが確認される。下顎の下面、首の付け根寄りには焼成前の穿孔がなされている。口先は円筒状に開放されていたと思われ、側面からみると下顎の丸みを粘土板を斜めに切り込むことにより表現している。

目は、工具で切り込まれた後、指先で調整されている。切り込みの周囲には膨らみをもたせ写実観を出している。

耳は、筒状に成形したものを頭頂部に穿孔して差し込んでいる。

面髻は幅3.5cmの粘土帯を貼り付けて、厚さ3mm前後に肥厚させている。口先寄りには鼻骨が「 \cap 」字状に装着され、下顎寄りと項革との接点部分の2箇所にて径3.5cmの円形の付属品が剥落した痕跡が認められる。辻金具が表現されていたと考えられる。目の後方には頸革が首の付け根方向に垂下する。頬革は鼻革との接点から横方向に延び、円形の剝離痕を2箇所残し、頸革と交差、項革となってたて髪の下端に

続いている。頸革との交点および、そこからたて髪寄りの途中に1箇所、円形の剝離痕が認められる。頬革の先端にはその痕跡から環状鍍板が装着されていたものと想定される。引手の金具は、長さ24.0cmを測り、粘土紐の両端をS状に曲げて環状の壺を表現している。

たて髪は厚さ1.5cmの粘土板を貼り付け、顔寄りにはL字状に一段高くなっていたと考えられる。縁辺部には押圧による弱いかえりをつけ、断面T字状のたて髪の形状を踏襲したなごりがみられる。残存部の高さは17.2cmである。両側面は頭部から縁辺部にかけてハケメを施した上に、外周径8.0cmの二重円文をヘラ描きする。残存状態から左右ほぼ同位置に最低2箇所ずつ配されていたと考えられる。

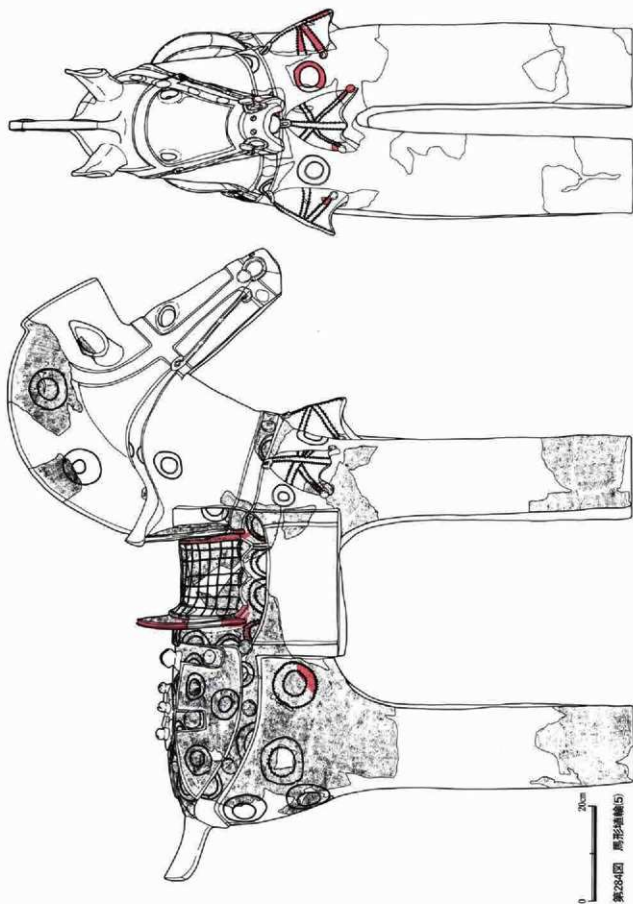
首は、鞍に近い部分の破片が1片残存したのみである。手綱は幅4.0cmの粘土帯で表現され、一部がたて髪にかかっている。

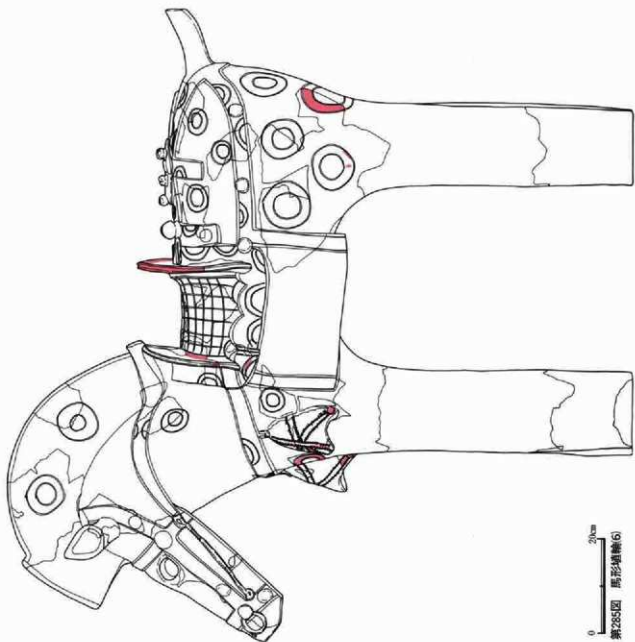
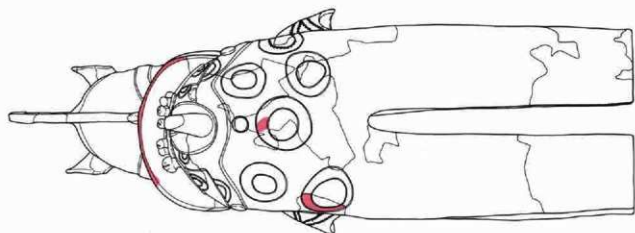
器面には横方向のハケメ後、上下方向に対向する半円形の文様をヘラ描きしている。首部本体の器面にはたて髪同様二重円文のヘラ描きがみられる。

胸部分も後補が多く、前面から右側部にかけて胸繫部分と左側部に装着された馬鐔周辺が残存しただけである。胸繫は幅4.0~5.0cmの粘土帯を貼り付けて表現される。残存資料から区画内に赤色塗彩を施す二重の半円形文様が3箇所ヘラ描きされ、その間に円形の剝離痕が3箇所観察できる。

馬鐔は胸繫に3個装着されている。左側部の残存状態が良好であった。長さ15.0cm、下端の幅は10.0cmである。鐔身の形状は下端の左右が弧を描き、中央が尖っている。外面の文様は、縦方向に2本1単位の刺突を伴うヘラ描き沈線で2分し、さらに斜行する対角線で6区画に分けている。沈線内に赤色塗彩を施している。馬鐔の上辺には粘土紐の付属が認められ、胸繫から垂下した時の紐あるいは環を表現している。下辺の両端には径1.8cmの円形のボタンが貼り付けられる。

この馬鐔の左右の体部にはたて髪部分と同様、内側を赤色塗彩した二重円文がヘラ描きされており、

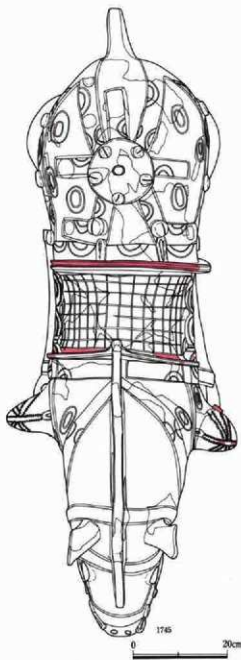




0 20cm
第295図 馬形埴輪(6)

3個の馬蹄と障泥の間に合計4箇所施文されていたと想定できる。

鞍本体は、馬体本体と同一の粘土帯から成形されている。この上に部分的に粘土帯を貼り重ね、鞍褥、鞍、下鞍、障泥の各部分が表現されている。下鞍は各縁辺とも小さな段をなし、障泥の上にかげられている。四隅がやや丸みをおびている。左右の各縁には2本1単位の弧状の文様がヘラ描きされ、内側は赤色塗彩される。右側の下端のそれは4単位が配さ



第286図 馬形壺輪7)

れ刺突を伴っている。

鞍金具は横幅17.0cm、高さ8.0cmを測る。三日月形の前輪と後輪が、厚さ1.5cm前後の粘土板を胴部に対して直立からやや後方に傾きぎみに取り付けて表現される。両者の間隔は18.0~20.0cmである。ともに器面にはハケメ調整がなされ、縁辺部と、鞍褥と接する基部に赤色塗彩が施されている。鞍褥は後輪寄りが強く反り返っている。下端は波形に凸凹し、下鞍との間には明瞭な段差をなし敷物の厚さを表現している。全体に格子目状の沈線を配し、下端の凸部分に弧線を加えている。

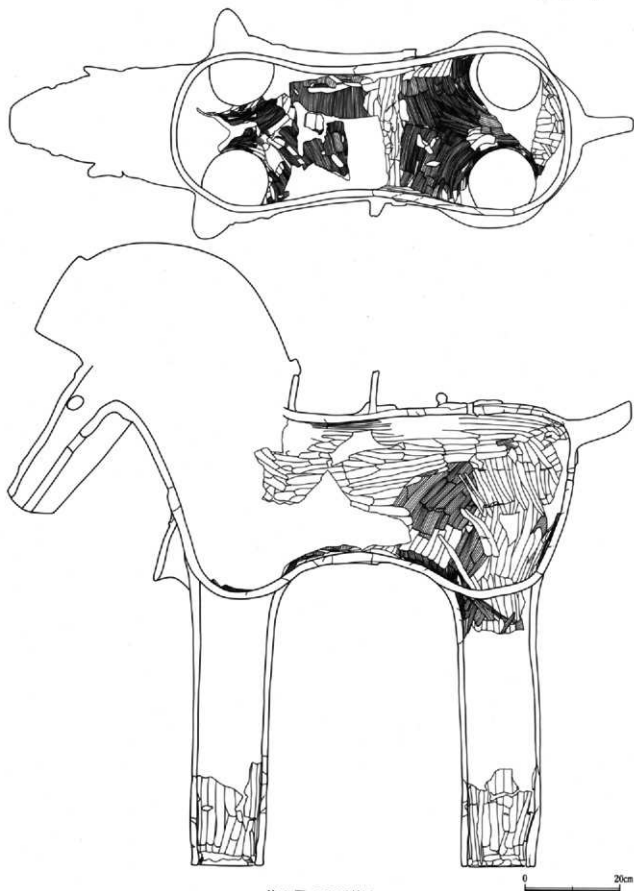
鞍褥の前輪寄りには2本の細い粘土紐が縦位に垂下し鍔紐を表現しているが、鍔本体部分は欠落している。

障泥は下鞍の前縁、後縁にあわせて表現されている。側縁に幅3.0cmの粘土帯を貼って肥厚させ区画をなすが、下端は欠損し、全体の状況は不詳である。

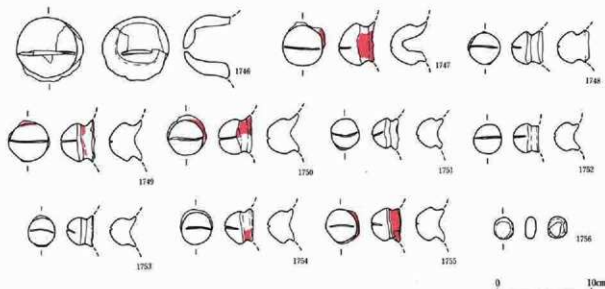
背中の中央には雲珠が表現されている。これは直径14.0cmほどの薄い円形の粘土板の周縁寄りに、径2.5cmほどの鈴を装着したものと考えられる。円板の中央には現在、径2.0cmの小孔が開孔しているがこの部分には大型の鈴が装着されていたと想像される。

尻繫は、雲珠から各方向面に7本延びている。繫の幅は4.0cm、厚さは0.4cmほどである。2本は後輪に向かって延びている。後輪の後方にはU字状の粘土紐が付き、鞍金具によりこの2本の繫を装着したことを表現している。この2本は枝分かれし、下鞍の縁辺に沿って短く垂下している。端部には鈴が装飾されている。雲珠から左右の側面に向かっては短い帯が垂下する。端部には鈴が付いていたと想定される。斜め後方に延びる繫は尻尾を巻いて周回する。また、この2本の繫の間にも尻尾の方向に短い帯が付いている。

胴部側面を横断する繫は、下鞍の後縁辺下端の隅から出発し、後半は尻尾の下位で雲珠から延びた繫と合流している。繫には2本1単位の半円形のヘラ描き文が配されている。また、円形の刺突痕は同一地点からの出土状況から1746~1755のような鈴が装



第287図 馬形埴輪(8)



第288図 馬形埴輪(9)

着されたものと考えられるが原状に復するものは少数であった。右側の繫には3箇所で径3.0cmのボタン状の粘土板の貼り付けとその間に2本1単位の半円形のへら描き文が配されることが確認される。

胴部側面の繫と雲珠に連結された繫の間隙、馬体の表面には左右、3箇所ずつに二重円文がへら描きされている。また、この横行する繫の下位の馬体にも右側面に2個、左側面に3個、尻面に5個(うち1個は推定)の合計10個の二重円文が配されている。右側面のへら描き文には刺突が重ねられている。上位のそれは直径6.0cm、下位のそれはやや大きく10.0cm前後であった。

尻尾は欠失しているが、胴部との接合基部は中空の状態であったと考えられる。

尻尾の下位には径3.6cmの透孔が施されている。胴部の穿孔はこの1箇所のみである。

脚部は、腹部との接合部から下位に約3.0cmが残存する。下端は底面から20.0cm余の残存である。この間については細片が多数存在するものの原形に復するまでには至らず、後補によった。脚部の復元は付け根までを前脚57.0cm、後脚56.0cmとした。前後の脚間には心距離が左側58.0cm、右側59.0cm、左右が前脚24.0cm、後脚23.0cmである。左前脚は成形の自重によりやや内彎ぎみに変形している。脚部の太さ

は上下ともほぼ一定で直径15.0~16.0cm前後である。跡を表すくり込みは認められず、小型の形象埴輪の基台状を呈していた。性別は確認できないが後脚の股間に刺痕痕があることから雄と考えられる。

脚部の外面は全体にタテ方向のハケメ調整が施されている。内面は底面から約10.0cmまでを基部成形し、その後は粘土紐の巻き上げを行っている。内面にはタテ方向のナデが残る。このナデは脚上半にまでおよんでいたと想定されるが、胴部との付け根部分にはハケメ調整を残している。

腹部は前後にアーチ状をなしている。器内の厚さは2.4cm、脚部や背中と比較してやや肉厚である。前後の脚部のほぼ中央には、内面で幅8cmほど器面が左右方向に帯状に肥厚する部分が認められ、前後の脚部を接続し腹部を成形する際の補強が図られたことが確認できる。ただし、内面の整形をみると周囲がハケメ調整であるのに対し、この部分には左右方向のナデが施されており、この部分の成形が腹部成形完了後及び割れ等が生じたために必要にせまられておこなわれた可能性も考えられる。

内面の調整は、腹部が中央から左右方向に向けてハケメが充填され、胴部側面の調整はハケメとナデが認められるが、工具は粘土紐の積み上げと直交、あるいは交差する方向に動いている。腹部成形後、

胴下半部は脚部成形と同様、ヨコ方向に粘土を積み上げており、尻部寄りでは背中から下方15.0cmあたりまで水平方向に輪積み痕が残っている。調整は、その高さまでがタテ方向のハケメ後、その後、部分的にナデ調整が加えられている。これよりも上位は尻割から鞍側に向けてヨコ方向のナデが施されている。ここは調整が丁寧で粘土紐の接合痕が確認できないが背中部分の成形が通例のように粘土紐を胴部下半の上に左右方向にブリッジ状にかけわたしていたことが想定される。ただし、同じ胴部でも鞍部分の内面では鞍部との接点から立ち上がったところではハケメが認められるがヨコ方向に施されナデの範囲が尻部より下位にまでおよんでいる。

胴部の残存部分には最後に閉塞したと思われるような粘土の貼り付けはみられない。

前方部東北隅出土の馬形埴輪 (1746~1756)

1746~1756は馬形埴輪 (1745) と同一の調査区出土の資料であり、胎土や焼成の色調から1745の付属品と考えられる。1746~1755は鈴である。1756は径6.3cmの大型品で断面半球形を呈する中空の造作である。1747は径4.3cmの規模である。基部のしぼられた宝珠形を呈する。これも中空である。1748以下は径2.9~3.7cmを測る。形状は1747と同様である。中実で鈴口をへら切りによって表現する。1753を除き赤色塗彩が施されている。1756は繫の飾りである。

前方部東側出土の馬形埴輪 (1757)

前方部東側中段面から出土した。

頭部から左側胸部にかけて残存している。鞍の前輪部分と頭部は直接の接点は無いが、引手の痕跡が認められるため髪と頭の位置関係を考慮し作図した。残高は54.1cm、残長は73.0cmである。

頭部は、口先から耳の付け根までの距離が33.0cmである。円筒状に成形され、両下端には粘土板を貼り付け頬骨を表現している。顎部には桃実状の隆間が設けられていたと考えられる。

目は、幅4.0cm、横長の孔を穿ち、外側に高まりを設け、まぶたの膨らみを写実的に表現している。切り抜き後、その周縁をナデている。口は線状の切り

込みを入れ簡略化している。鼻は、径1.8cmの円孔が横並びに配されている。鼻孔は外側からの刺突による穿孔である。たて髪は、高さ11.0cm前後と推定され、断面T字形の板状を呈している。先端、額部分には板状の粘土板を付して飾っている。これには粘土紐が2条重なる。

馬装は粘土紐の貼付により長径8.5cmの環状鏡板付轡が表現され、引手から頸部の手綱へと続いている。面繫は、鏡板から鋸留を施した立間を表現したと思われる長さ4.2cm、幅3.6cm方形板を経て、頬革が延び、顎革との交点には半球状の辻金具が付けられている。顎にも板状の辻金具の表現があり、鼻筋方向に垂下品があったことが認められる。繫にはへら描きにより山形状の文様による装飾が加えられている。

胸繫は幅5cmほどの粘土板を貼り付け面繫と同様山形状にへら描きを重ねている。前方部分には刺刺痕があり、馬鐸あるいは鈴などの付属品が付けされていたと考えられる。

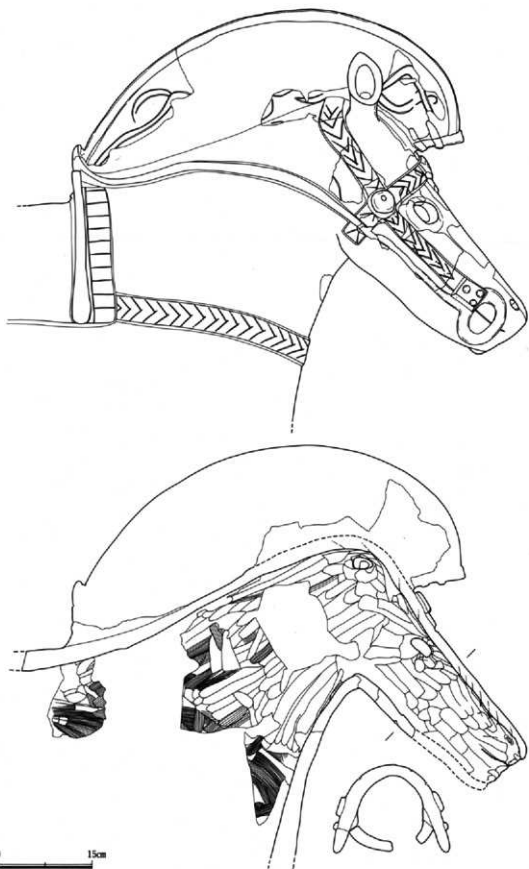
鞍は前輪左側が残存し、鞍の外に延びた下鞆が表現されていた。前輪は、厚さ1.5cmの粘土板を本体に直立させ、表面にハケメを施すだけのものの一部に赤色塗彩が残っていたが簡易なものであった。

外面の調整は、各繫や付属品の接合部分にナデが重ねられている他は各方向のハケメ調整が施されていただけである。ただ、たて髪、頭部～頸部にはへら描き文様が各所に配されている。

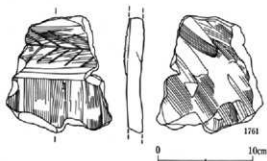
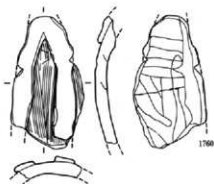
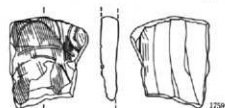
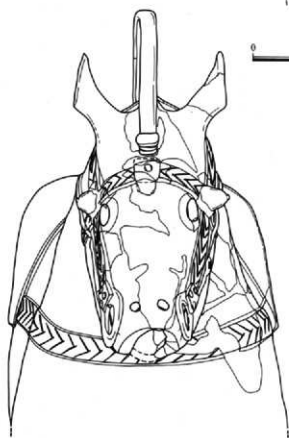
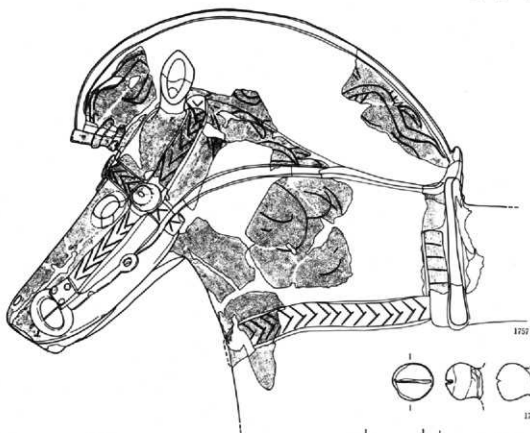
たて髪は、両面ともハケメの上に2本1単位の波状文からなる文様をへら描きしている。

頭部から頭部も2本1単位の弧線を重ね、鱗状または蕨手状の文様を配している。

粘土紐の接合状況を見ると成形は胸、首部から頭頂部、口・鼻先へと粘土紐が巻き上げられたことが観察できる。作業単位としては前面は胸部と頭部の境と背面の鞍前輪と頭部の境を結んだところ大きな休止痕としての接合痕を残す。首部は、頭部の傾きを延長した部分の下位までが作業単位となっている。頭頂部と、頭部から鼻先までの部分との境にも



第289図 馬形埴輪10

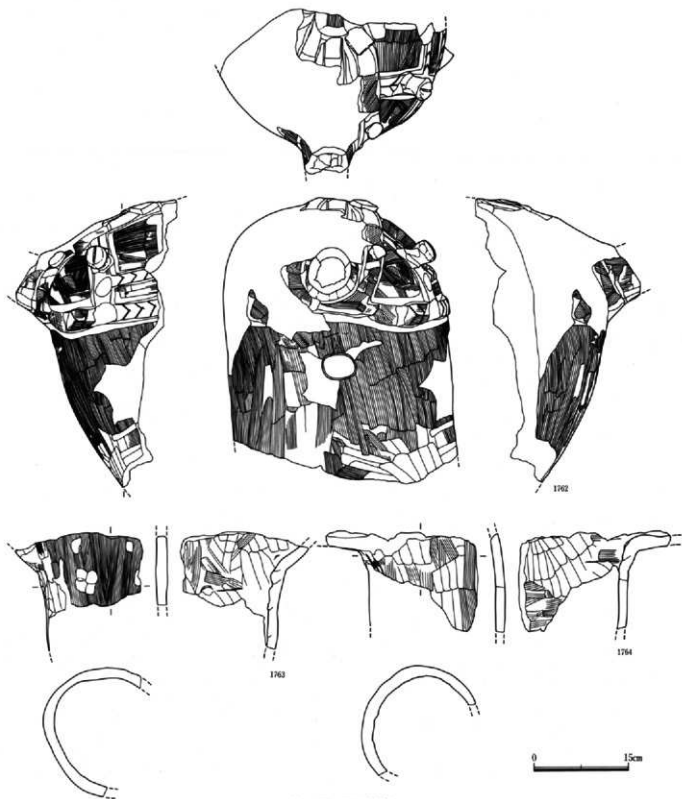


第290図 馬形埴輪(1)

第4章 出土遺物について

作業単位の区分が存在したと思われるが、接合痕はナデ消されている。内面の調整は胸部付近にハケメを残す。これより上位は粘土紐の接合痕と直交方向

にナデが重ねられている。耳の接合は頭部に穿孔後その面をナデ、そこに筒状の耳を挿入し外面から圧着していた。



第291図 馬形輪輪辺

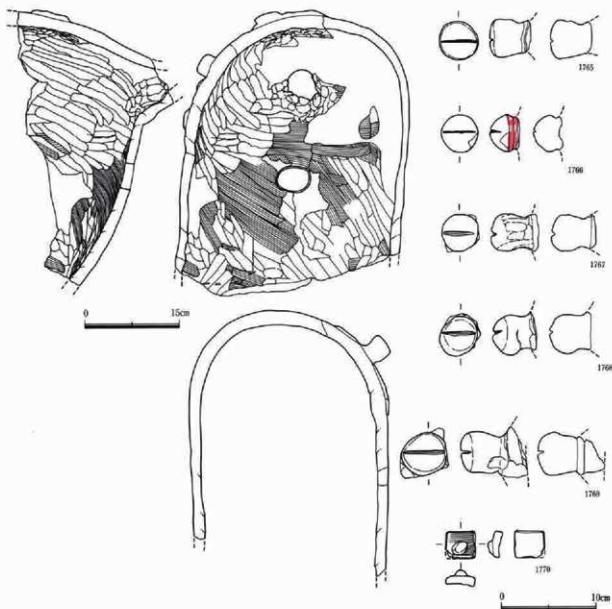
前方面東側出土の馬形埴輪 (1758~1761)

1757と近接して出土した破片で1757と同一個体をなす可能性が高い。1758は中実の鈴である。1759は胴部破片と考えられ、タテ方向のハケメの上に2本1単位のヘラ描き沈線を重ねている。1760は彎曲する器面に2本の粘土紐が貼られている。1761は幅5.0cmの粘土帯が貼付される繋を表現したと考えられるが、1757のそれがくの字であるのに対し、矢羽根状のヘラ描き文様が施されている点がやや異なる。

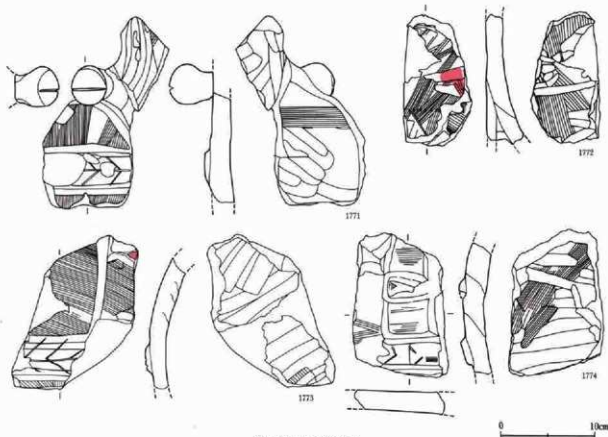
馬形埴輪 (1762)

尻部から後脚への移行部分までの破片である。前

方部東側から出土した。残存高は45.0cmである。尻は背中から股間の間が長くとられている。尻尾は付け根部分では中空に成形されている。これより先に中実の部分が接合されると思われる。尻尾の下には横5.5cm、縦4.0cmの透孔が穿たれている。背中には環状の雲珠が表現され、四角の留金具がつく。中央には透孔あるいは鈴が装着されたものと考えられる。尻繋は雲珠から尻尾の下位をめぐるものと後輪から背中の横位をめぐる繋装着されている。また、この2本を垂直に連結するもの、横方向に杖状に延びるものが表現されている。背中进行位にめぐると



第292図 馬形埴輪(13)



第293図 馬形埴輪16

のには、くの字状のヘラ描き沈線の文様が施される。垂直方向の繫には中央をヘラ描きの垂線で分割、これに山形の文様を重ねている。繫の幅は3.3~3.8cm、厚さ0.7cmである。

繫の交点には高さ4.3cm、径2.8cmの鈴が装着されている。また、径4cmほどの円盤状の粘土板を裝飾している。

成形・調整は外面にハケメを残している。胴部下半の作成は粘土紐を横位に並べて板状に造っていると思われるが、中位に亀裂が生じたのであろうか、後から粘土をなすりつけて補修を加えた痕跡が残る。

脚部からのつながりは胴部との接合部分に明瞭な接合痕を残している。胴部下半は横方向に粘土紐を回した状況が認められ、その上にナナメ方向のハケを重ねている。尻部近くではやや垂直方向に近づいたナナメ方向のナデがくり返されている。

前方部東側出土の馬形埴輪 (1763~1774)

1762と近接して出土したが直接の接点がなく個体

識別が困難であった。

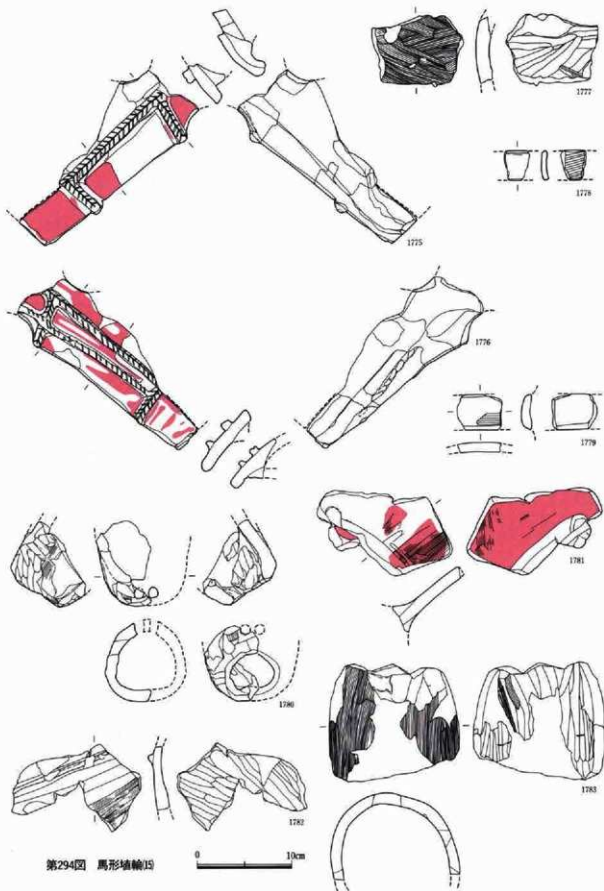
1763・1764は脚部の破片でいずれも胴部の付け根、股間に近い位置の破片である。2片とも1762に類似するが直接の接合点が見出せなかったものである。1763は径20.5cm、1764は径19.0cmで外面にタテハケを施している。

1765~1769は、馬本体に装着していた鈴である。いずれも中実で、ヘラ状工具により鈴口が表現されている。1766・1768はその形状が宝珠形であるのに対し、1765・1767・1769は、最大径の位置が上位にある無花果状である。1762の背中右側の繫上の鈴と同形である。

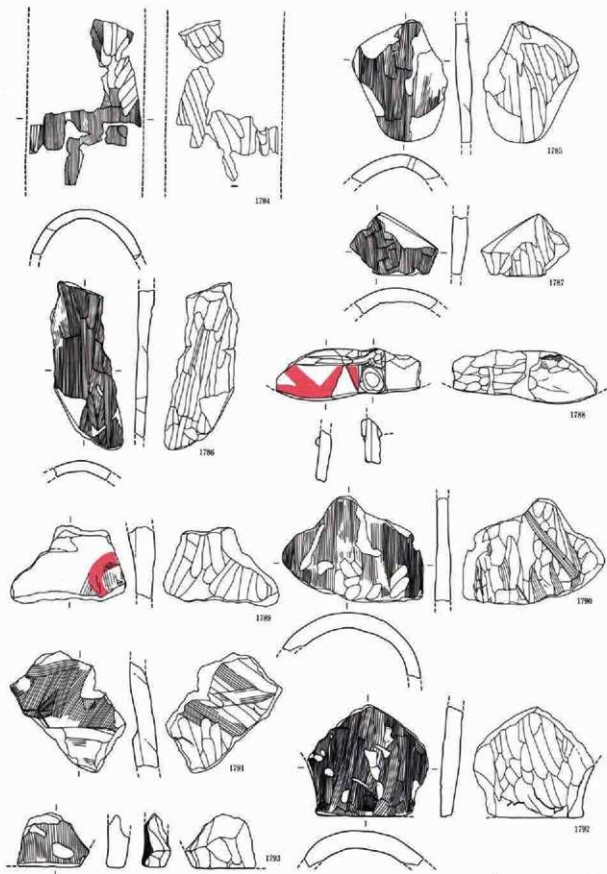
1770は、雲珠に接続する留金具と考えられる。一辺2.7cm、中央に豆粒状の粘土粒を置き銚頭を表現している。

1771・1773・1774は、繫の表現がみられ脚部破片と考えられる。1771・1773の文様は矢羽根状である。1771には平面径4.0cmの鈴が接続する。1774は、図中の横位方向の繫にくの字状の文様がみられる。

1. 埴輪



第294図 馬形埴輪15



第295図 馬形埴輪(6)

1772は、彎曲する本体に粘土板を貼り厚みをもたせ平滑な面を造り出している。刺突による列点文と山形のヘラ描き文が施されている。

前方部西側出土の馬形埴輪 (1775~1787)

前方部西側に設定した調査区出土の破片である。

1775は頭部・顔面、左側の頬骨周辺の破片である。残存長は33.3cmである。円筒状の本体に板状の粘土板を接合していた部分はずれたものである。上端の割れ口には口、目の切り込みの一部が残存している。口はヘラ状工具による切り込みが鼻草のところまでおよんでいる。面繫は鼻草、顎草を幅18~20mmの粘土紐を貼り付けて表現している。これは他の馬装と比較して幅の狭いものである。各草にはヘラ描き沈線により矢羽根状の文様が刻まれている。轡、引手の金具・辻金具の表現は特になく、手綱の表現もなく、1776と左右一対をなすのであれば片手綱であった可能性もある。外面に赤色塗彩が施されている。

1776は、頭部・顔面、右側の頬骨周辺の破片である。残存長は34.4cmである。円筒状の本体の側面に板状の粘土を接合している。目、口の切り込みの一部を残す。下端は顎草から頸部寄りにくりこみがみられる。面繫は鼻草、顎草を幅8mmの粘土紐を貼り付けている。各草はヘラ描き沈線により矢羽根状の文様を施されている点は1775と同様であるが施文は乱雑である。轡や辻金具の表現がないことは1775と同様であるが、頬草の下位には、幅11mmの粘土紐により手綱が表現されて、斜方向にヘラ描きの刻みが施されている。外面には赤色塗彩が施されている。1775と同一個体と考えられる。

1780は口先部分である。右側部分が残存していた。筒状に成形した本体部分には側面に剝離痕がみられ、頬骨の粘土板が接合していたと考えられる。上位には径17mmの鼻孔が残存する。内面は粘土紐による成形痕を粗雑なナデにより消している。

1781は、たて髪の一部と考えられる板状の破片である。下位は両側から粘土を貼りたし補助をしている。器面の調整は両面ともハケメを施している。1782は、断面三角形の紐状の粘土が貼り付くもので頸部

をめぐる手綱を表現したものと考えた。

1777は馬の胴体、腹部の破片と考えられる。内面に粘土を貼りたし補強している。

1778・1779は、馬装の一部と考えたが断定するにはいたらなかった。1778は幅31mmの板状粘土の破片で本体から剝離した痕跡がみられる。馬装の繫を表現したと考えた。

1779は断面台形状の薄い粘土板で、厚さ1.0cmを測る。本体から剝離しており、繫の一部と推定された。表面にハケメを施すが器面が粗れ消えかけている。

1783~1787は脚部の破片である。胎土・色調、器面に黒色の付着物がみられる点が共通しており、一個体をなしていたと考えられる。外面の調整はタテハケ、内面はナデである。

1783は、径20.6cm、1784は径17.5cmの規模が考えられる。

前方部北西隅出土の馬形埴輪 (1788~1793)

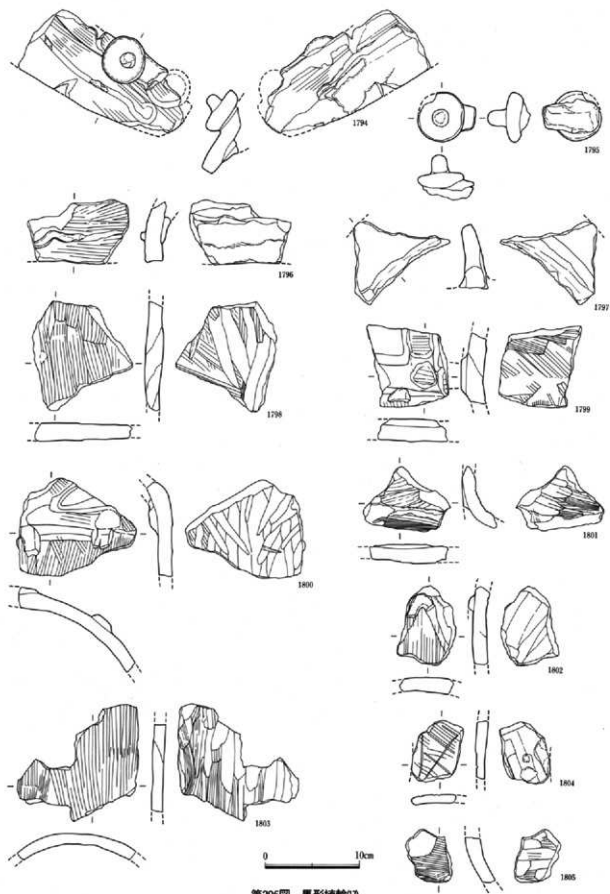
前方部北西隅の調査区から出土した資料である。

本調査からは1733が出土しているがこれとは別個体をなすものと考えられる。1788は顔の破片で左側頬骨部分である。幅3.0cmの面繫の下端には円形の剝離痕がみられる。鈴が装着されていたか。また、引手が貼付され手綱と連結する側の引手壺が表現されている。1789・1791は胴部破片と考えられる。幅4.0cmの粘土帯は繫の一部と考えられる。その他、1790以下は足の破片と考えられる。1790は径16.0cmに復元される。1792・1793は蹄を表現した切り込みの一部が認められる。

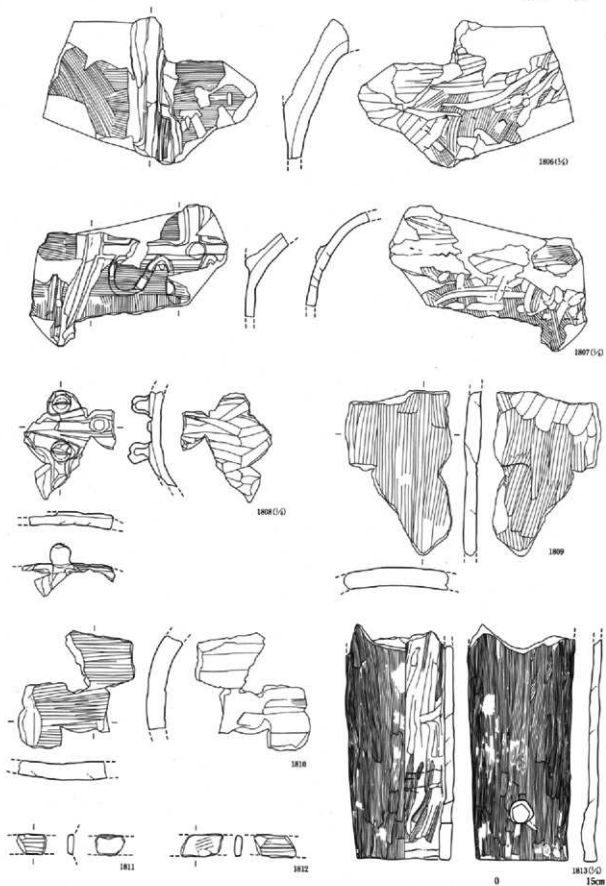
前方部中央(前面)出土の馬形埴輪 (1794~1829)

前方部中央(前面)の調査区から出土した資料である。1794から1812は史跡整備時に1トレンチ中段面から出土した資料で、復元することが困難であったが、器面を調整するハケメの状況、やや明るい調子の色調、焼成のやや軟調な状況などから同一個体を構成していたものとする。1813も他と同一地点からの出土であるが、焼成後の焼成がやや異なる資料である。

1794は右側顔下部の破片である。本体に貼付した



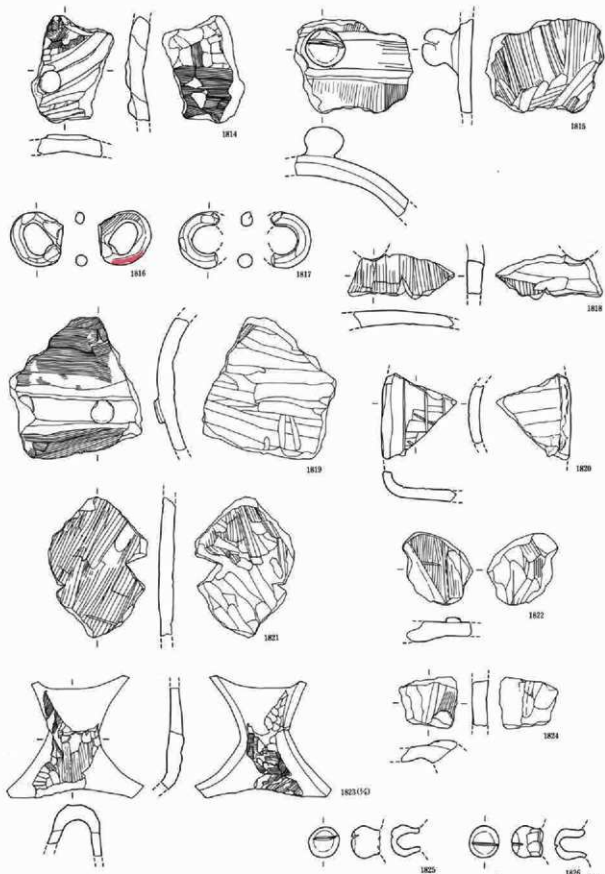
第296図 馬形埴輪(7)



第297圖 馬形埴輪13

(1809~1812 1/4)

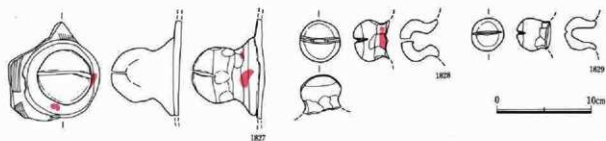
第4章 出土遺物について



第298図 馬形埴輪(1)

(1823/4)

0 10cm



第299図 馬形埴輪20

頬骨表現の粘土板が剥落したものである。口は粘土板に切り込みを入れて上顎との境をつくっている。面繫は幅2.5cmの粘土帯を貼付、中位に円形粘土板を重ねた仕具として、繫の先端には環状鏡板の剥離痕が認められる。引手は粘土紐の端部をS字状に曲げ壺を成形している。1795は仕具部分の残存である。円形板の中央に乳頭状の突起を貼付している。1796も顔面の破片である。1797は鞍金具の破片である。やや後斜している。1798から1810は胴部破片である。1806は首から鞍の前輪の大型破片である。前輪は基部を残して欠損しており全体形状を知り得なかった。鞍本体は鞍褥が剥落している。鞍褥は1804・1820にみられるようなヘラ描き文様で飾られていたと考えられる。前輪寄りに垂下する2本の粘土紐は籠に連結する力革であろう。1801の残存部下端にみられる剥離痕は障泥の剥落した跡であろう。1807は鞍後輪から背中にいたる大型破片である。後輪に接して2本の粘土紐が垂下している。後輪からは胴部を横位にめぐる尻繫が幅2.0cmの粘土帯で表現される。この繫は途中で背中を越える繫と接続する。接合点には剥離痕がみられ鈴が貼付されたか。1799も同様の破片である。横走する繫には粘土紐がモール状に貼付され馬体を飾っている。1800・1802にも同様の表現がみられる。1808は尻に近い背中部である。雲珠は欠損しているがそこから放射状に伸びたと考えられる尻繫が表現されている。中央の繫は尻尾に向かって伸びている。その両脇の繫は尻尾を巻いて一本になると考えられる。鈴が装着されている。1811・1812は繫の一部である。

1813は中段面からの出土でほぼ原位置を保っていると考えられる。残高37.1cm、底径14.0～15.0cmの

円筒状をなす。形象埴輪の基台部とみることもできるが、底面から上方7.0cmに円形の透孔1孔を穿っていることから馬の脚部の1本と考えた。

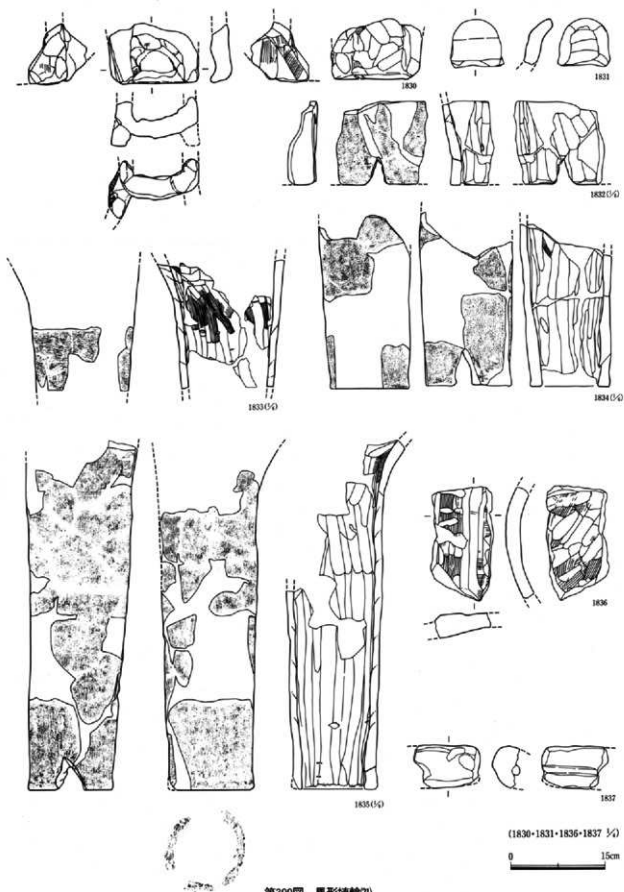
1814は頭部左側面の破片である。目の切り込みの一部と幅2.5cmの面繫、その下位に横走する手綱が残存する。1815は胸繫部分の破片である。幅4.5cmの帯に径4.0cmの鈴を装着している。1816・1817は環状鏡板付轡を表現したものと考えたが1816は輪籠の香受部の、1817は人物の耳環の可能性も考えられる。1820は鞍褥の破片である。1818は小孔が穿たれている。1819は、円形貼付粘土を重ねる繫が表現されている。いずれも胴部破片である。1823は股間の破片である。1822は、垂下する粘土帯と、器面に施されたヘラ描き沈線が認められることから障泥の一部と考えた。1824も類似する破片である。1825から1829は鈴である。出土状況から馬体に装着されていたものと判断したい。いずれも中空で鈴口をヘラ状工具により刻んでいる。1825・1828は赤色塗彩がみられた。1825・1826・1829は、1808に装着されるものと同規模である。1827は径5.7cmと大型である。胸繫、あるいは雲珠装着の位置につけられたものか。

前部東北隅出土の馬形埴輪 (1830～1838)

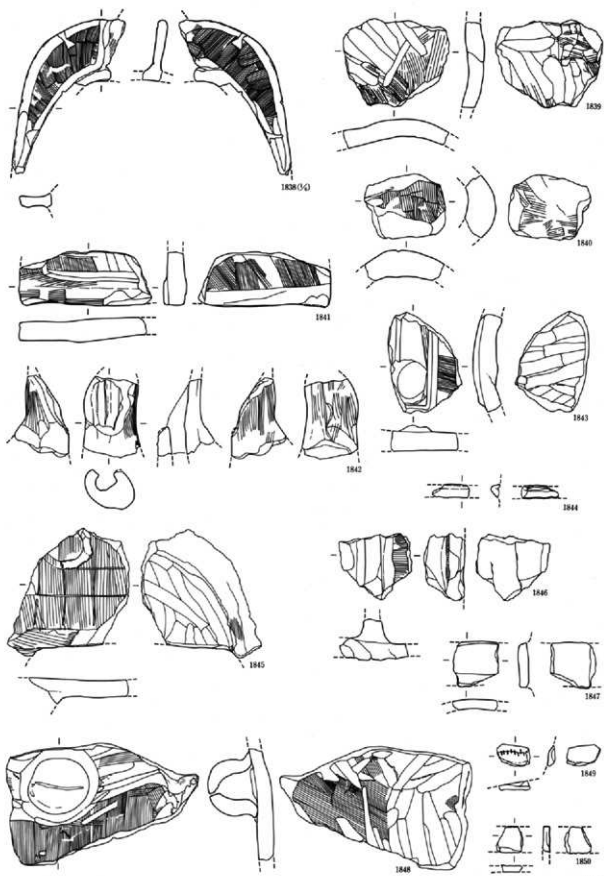
1836を除いて第三次調査時に前部東北隅から出土した破片である。調査区は1745と同一であるが胎土・焼成の特徴から別個体をなすものである。

1830は頭部破片で下顎の先端が表現されている。顔本体は、円筒状に成形され、下端をやや平坦に整えられている。両側面には頬骨の張りを表現した粘土板の一部やその剥離痕が認められる。馬装については確認できない。

1831は中空成形の鈴で下端の径が5.3cmに復元で



1. 埴輪



第301圖 馬形埴輪(2)

(1838) 0 10cm

きる。馬体に装着されたものと考えた。

1832～1835は脚部である。1835の残存が比較的良好である。1835は底部、蹄から胴部付け根近くまで残存している。上端は強く彎曲している。蹄の切り込みの位置から前脚であることがわかる。右側の可能性が高い。残高は55.0cmで1733・1745などの法量と比較するとやや小型である。底径は13.4cmで上下において直径に大きな変化はみられない。底面から約10.0cmほどまでを基部として成形、徐々にその径を増して、その後、5回ほどの製作単位を経て付け根部分までを作成している。各小単位ごとに外面の接合に若干の歪みが生じている。底面近くに高さ4.8cmの三角形の切り込みを入れ蹄を表現している。調整は外面がタテハケ、内面は下位～中位にタテ方向のナデを施すが、付け根近くではヨコ方向のハケメとなっている。1833は上位の破片である。1834も1835と同様、底径13.5cmに復元される。底面から約10.0cmほどを基部として成形している。1822も蹄の表現がみられる破片で底径13.0cmが推定される。1836は胴部破片と考えられ、彎曲する。幅3.6cmの粘土帯は繫を表現すると考えられる。1837は断面楕円形に近い棒状品が半載状態になっている。中央、やや片寄った位置に貫通孔がある。尻尾の破片と考えたい。

1838は鞍の前輪右側部分の破片である。厚さ15mm前後の三日月形の板状粘土板を胴部に対しやや後方に倒して接合している。上位残存端部にたて鑿との接合痕が残されている。

墳丘各所出土の馬形埴輪 (1839～1850)

墳丘各所からの出土資料である。1839・1841・1847は前方部埴頂部、1848は、後門部埴頂部から上段出土の注記があり、注記内容の再検討、器種の検討が必要となろうか。1839・1840は胴部破片と考えた。1841は、縁部が帯状に肥厚しており障泥の破片の可能性を考えたが、家や器材の一部として検討することも必要か。1843は繫を表現したものか。1842は、耳と想定したいが外面の一部に弱い稜を有する点がやや異質である。1844は引手の表現を、1847・1850は繫の破片であろうか。1845は前方部北側外堀内出

土である。鞍の障泥の一部と考えた。ハケメ調整の器面上にはへら描き沈線による格子目文と輪籠の剥落痕が認められる。内面には胴・脚部との接合痕が顕著に認められる。1848は胸部の破片と考えられる。横走する粘土帯は胸鞆で径6.3cmの中空成形の鈴が装着されている。

鳥形埴輪 (1851～1854)

出土した形象埴輪の中で鳥と確認できたものは1851～1854の4点である。出土位置は、1851が前方部東北隅中段面、1852が後門部埴頂部、1853がくびれ部東側、1854が前方部前面である。

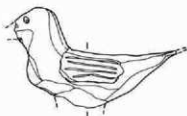
1851は小型品で中実である。嘴、尻尾の先端を欠損する。長さ8.5cm、残高5.3cm、翼部分での厚さ3.2cmである。目は、左右とも棒状の工具による刺突により表現される。胴部の背面は、直線的に尻尾へと移行し、尻尾でわずかに反る。胴部の両側面には薄い粘土を貼り、翼を表現し、この内側にへら描き沈線を平行させ、羽毛を描いている。尾羽は薄く仕上げられ、扇形に開く。ここにもへら描き沈線を加えている。

腹部には剝離痕が認められる。このことと小型の中実品であることから本体に付属していたものと考えられる。

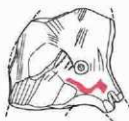
嘴を欠損することから細かな種類を確定することは困難と思われる。

1852は、鶯の頭部破片である。頭部で欠損しており、残存部分の中実である。残存高5.1cm、残存幅6.9cm、下端の厚さは2.0cmである。偏平な形状を呈し、頂部は欠損している。目は、円形竹管の刺突により表現されている。嘴も先端が欠損するが上下に分割され尖っている。肉垂は、粘土を貼り付け膨らみを表現している。

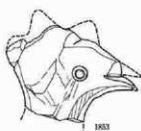
1853は、鶯の頭部破片である。頭部で欠損している。1852と同様残存部分の中実である。残存高5.1cm、残存幅6.9cm、頭部の厚さ3.3cmである。割れ口の状況から頭頂部にはのこぎり状の鶏冠が表現されていたものと考えられる。目は竹管の刺突によっている。嘴はへら状工具で上下に切り分けられている。上嘴



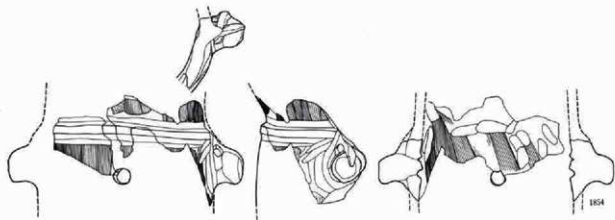
1851



1852



1853



1854



第302圖 鳥形埴輪

は欠損する。

1854は、鳥の足部が表現されている。鳥本体は全て欠損するが止木と考えられる。横方向に突出した棒状粘土をつかむ3本の足指が認められる。止木の直上には突帯が1条周回する。これより下位は円筒状の基台部となると考えられ、直径は約18.0cmが想定される。止木と直交方向、突帯下端から1.5cmの位置に小径の透孔が配されている。

⑩ 形象埴輪の基台部

墳丘各所出土の形象埴輪の基台部（1855～1879）

1855～1879はいずれも形象埴輪の基台部を構成していたと考えられるが、本体の器種は明らかにできなかった資料である。24点を掲載した。この他に、くびれ部西側中段面出土の1533・1604、前方部西側中段面出土の1609も直接本体との接点がなく種別を特定できないが、前後に人物埴輪の樹立がみられることから人物の基台部として前項に登載してある。

円筒形を呈するものが多数である中、1858は横断面形状が長円形を呈していた。同様の形状を呈する基部はいずれも人物埴輪の双脚立像であった。前方部東北隅から出土したものであるが原位置を確認することはできない。下半部の破片で、残存は長径34.8cmを測り、短径は25cm前後が想定できる。基底面からの残長14.3cmであった。基底面から2.8cmの高さに突帯1条がめぐり、側面には円形の透孔が配されている。調整は、内外面ともタテ、あるいはナメタテ方向のハケメである。

上記以外の基台部の形状は、いずれも円筒形を呈し、基底面に向かって徐々にその径を増すものと、径が一定で大きな変化を有さないもの2種類に大別される。

突帯は、基底面間近に1条めぐると、全く無いものの2種が大半をしめる。

基底面に突帯のめぐるとは1860・1863・1868・1870・1873・1879、それと前述の1858である。いずれも外面タテハケ、内面ナメタテ方向のナデによる器面調整がなされている。1864は弧状を成す横断面に縦方向の粘土の貼り付けが認められる。1866は横断

面が平坦な面をなしている。破片であるため全体形状は不明であるが長円形の断面を有していたものと考えられる。突帯の位置は基底面から16.2cm離れている。1860は基底面から14.5cmの位置に円形の透孔が配されている。1868は、残高36.9cm、基底部の突帯から25.5cmの間隔を開けて第2突帯がめぐると。

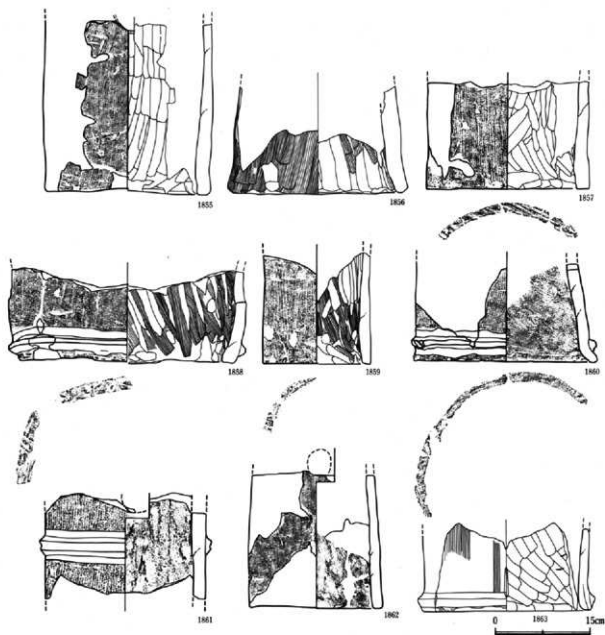
基底面に突帯のめぐらない資料では1855が基底面から10.0cm、1862・1876が底面から17.0cmの位置に円形の透孔が配されていたことが知れる。この他に1856が径19.2cm、1874が底径19.0cm、1875が底径20.5cm、1877が径14.0cmに復元できた。

1879はくびれ部西側の墳丘下段面から出土しており原位置は不明である。器財埴輪、その中でも本体が高さを有しない胴や帽子などの器種の基台部と考えられる。全径の2分の1から3分の2の残存である。残高78.8cmの高さの中に基底面間近の1条を含め6条の突帯がめぐらされる。各段の割付は基底部2.3cm、胴部第1段が12.5cmであった。以下、第2段が13.7cm、第3段14.3cm、第4段14.3cm、第5段13.8cmと続き、第6段が8.7cmで欠損している。これに本体が接合すると半身表現の人物像や盾形埴輪と均衡のとれた高さが得られるものと考えられる。基底部径は22.4cmに復元された。胴部径もほとんどその大きさに変化がなく、残存部最上位の復元径は19.5cmである。

胴部第4段目と5段目には幅1.0～1.4cmのスリット状の透孔が配置されている。各段とも対向する位置に一对の存在が想定される。両段の透孔はほぼ90度振れた位置にある。第3段以下には配されていないと思われる。

外面の調整はタテハケを充填後、断面台形の突帯を貼り付け、この上下にヨコナデを加えており、円筒埴輪の調整と同様の製作行程がとられている。胴部1段相当の長さで工具が動いており突帯と突帯の間に工具の出発点の痕跡はみられない。

成形と内面の調整であるが、基部の粘土板の高さは12.0cmで、右を上して重ねている。この上に粘土紐を積み上げているが、作業は外面に突帯をめぐ



第303図 形象埴輪の基台部(1)

らず高さまでを一単位として進行していったことが器面に生じた歪みや調整の変化から想定される。特に第3突帯の貼付位置の内面には接合による大きな歪みが生じている。内面の調整は下端の4cmほどに基部製作時の押圧痕を残しているが全体的にはハケメの上にナダを施すものである。一部に胴部第3段の内面のようにハケメのみで終了させている部分もみられる。

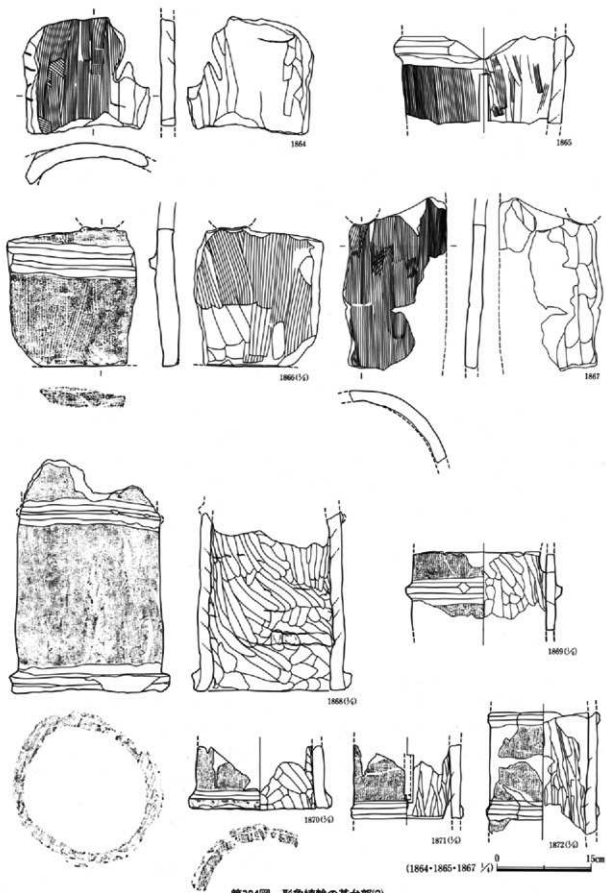
本資料と同様の形状を呈する透孔をもつ例として後円部南側(後方)出土の1865と、後円部墳丘部～上

段出土の1871がある。ともに透孔の部分で破損しているが、1865は復元径17.2cm、1871は復元径17.3cmと細みの円筒形で復元された。調整は、外面はタテハケ、内面はナダ、ハケメである。後円部墳丘部～上段出土である1872も透孔はみられないが出土位置、復元径17.3cmなど1871と共通することから同一個体、あるいは類似する形状であったと考えられる。

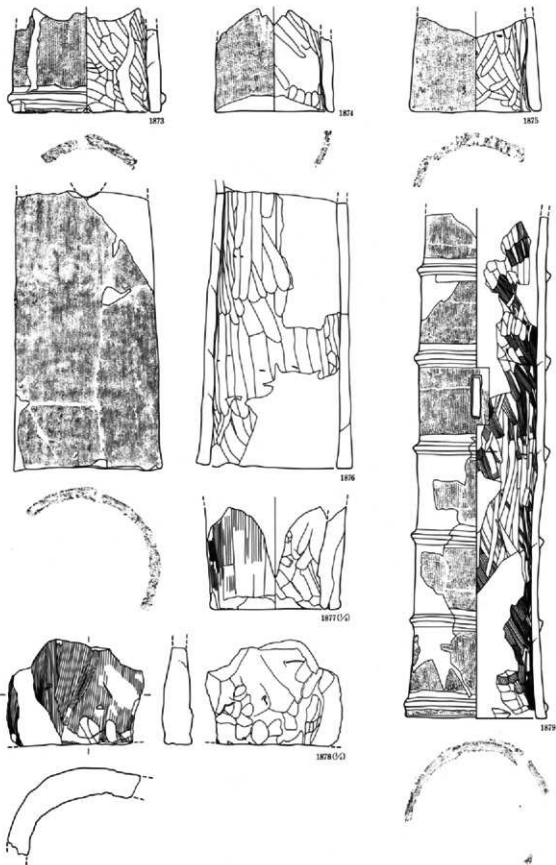
① 器種不明の形象埴輪

前方部西北隅出土器種不明の形象埴輪

(1880～1903)



第304図 形象埴輪の基台部(2)



第305図 形象壇輪の基台部(3)

1880・1896は馬の脚部が形象の基台部の一部と考えられる。1881は外縁が弧状をなす器財か。1882は中位に鈴を貼付する。1883は人物の着衣の裾部分であるか。1884・1886は器財の一部か。1885は外面に幅2.5cmの粘土帯を貼付する。1887は2本の帯の貼付が認められる。繫を表現したものであろうか。1888は平板な破片で透孔が穿たれている。1890はヘラ描き沈線、刺突が施されている。1890は天地不明であるが沈線が放射状に施されている。1891～1894・1897・1898は器財か。外面に1891は山形、1893・1984・1897は弧状の、1899は直線の沈線がみられる。1895は幅1.2cmのリング状を呈する。1898は刺突が列をなす。1900は外面に幅は狭いが突出度の高い突帯が貼付される。1901は残存部上位に弧状の周縁が残存する。器面の一部に刺突文がみられ赤色塗彩も施されている。1902は靱の矢筒下位側面にみられる翼状突起に類似する。1903は乳頭状の粘土塊である。

前方部中央（前面）器種不明の形象埴輪

(1904～1921)

1904の本体は不定径の筒状をなすと考えられる。外面に粘土板を貼付、これをヘラ描き沈線で細分している。1908も残存部の形状が縦頭の円錐状を呈し、径の変化が一定でない。同地点から止木をつかんだ鳥の足を表現した資料が出土していることからこの2者も鳥の体部を表現したものでか。1905は彎曲する破片で器面にヘラ描き沈線が施されている。1906も沈線施文の破片である。1907は三日月形の板状破片である。器面は表裏両面ともに矢羽根状の文様をヘラ描きする。1909は緩やかに彎曲する大型破片で、突帯は断面三角形である。横断面が長円形あるいは方形を呈する。1910は隅が鈍角に屈曲する小破片である。1911は板状の破片である。1912は彎曲する本体の内に断面三角形の突帯を付けて補強しているか。1913はラッパ状に開くものと思われる。1914～1916は外面に沈線が施された小破片である。1920は小径の円筒状を呈する。1921は本体に付属した棒状粘土である。1917は縦・横断面とも弧状を呈し強く内彎している。器面には平行する3本の

ヘラ描き沈線の他に付属品の剝離した痕跡が認められる。1919も器面に1917同様のヘラ描き沈線が施されている。外形は小径で強く内彎するもので側部に高さ1.7cmの薄いヒレ状の突起が付くことが特異である。

前方部東側出土器種不明の形象埴輪

(1922～1937)

1922は、本体から鈎状に張り出す。縁部は弧状をなしている。外面はヘラ描き沈線により細分されている。1923・1925・1928は板状の破片である。1923は突帯状の、1925は帯状に粘土が貼付される。1926は外面に赤色塗彩を施した小破片である。1924は外面に弧状のヘラ描き沈線がみられる。1927は、径2.6cmのボタン状を呈する粘土板である。1929は小径の円筒状を呈する破片である。馬の脚部あるいは形象基台部と考えられる。1930は円筒状の本体から鈎状に張り出す。1931は、小径の破片で、外面に帯状の貼付品が剝離した痕跡が認められる。1932は、幅2.6cmの帯状の破片である。1936は紐状の残片である。1933は鋸歯文が2段認められる小破片である。1935も本体に貼付された繫状の粘土帯に鋸歯文が施されている。1934・1937は突出度の高い突帯がめぐるので、1937は2条が近接している。

前方部頂頂部出土器種不明の形象埴輪

(1938～1944)

1938は隅をなす本体に板状の粘土を貼付、これの一端を延長して幅3.9～4.3cmの粘土帯が突出している。外面の一部には赤色塗彩が施されている。家あるいは器財の一部か。1939は本体から水平方向に突出する板状品である。1942も器内が厚く、大径の本体から板状部分が延びる。1940は外縁が弧状をなす。1941は彎曲する棒状の粘土である。1943は板状破片の器面に剝離痕、ヘラ描き沈線が認められる。

くびれ部東側出土器種不明の形象埴輪

(1947を除く1945～1951・1961・1962・1964)

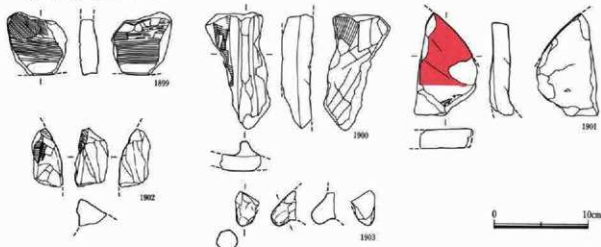
1945は板状の小破片である。1946は人物の頭部破片か。1948は円筒状を呈する。外器のハケメが波状や弧状をなしている。1949は縁辺にヘラ描きによる

1. 埴輪



第306図 器種不明の形象埴輪(1)

第4章 出土遺物について



第307図 器種不明の形象埴輪②

線刻と刺突が連なる。1950の平面は、先端が木の葉状に尖る。1961は、径5.0cm前後に復元できる本体の側面にプロペラ状の板が2枚、水平方向に接合する。家形埴輪の棟頂部にみられる煙突状の飾りが想起される。1962はへら描き沈線に刺突を連ねている。1964は形象の基台部破片と考えられる。小径の円筒でスリット状の透孔が確認できる。

鞍部墳頂部出土器種不明の形象埴輪

(1952~1954)

1953は幅4.4cmの繫状の粘土帯で本体から剝離している。1954は板状の破片で外縁が木の葉あるいは三角形状を呈する。沈線による文様が配されている。

後円部東側出土器種不明の形象埴輪

(1955~1960・1963・1965・1966)

1955は外面に弱い突帯が貼付される小破片である。赤色塗彩が施される。1956は幅6.4cmの繫状を呈し、外面に円形の剝離痕の一部が認められる。本体から剝離した付属品である。1957は薄い板状の破片で弧線の内側に赤色塗彩が施される。1958・1959は外面に突帯を貼付する。1959は小径で筒状を呈し、器面に2重の弧線を配し、内側に刺突を施す。1960は円筒状の破片、形象の基台か馬の一部であろう。1963は残存部の一端がほぼ直角に屈曲しているか。双脚人物の基台部上面の破片か。1965は外面に刺突を伴うへら描き沈線が施文されている。1966は突出度の高い突帯が貼付され、透孔の一部が残存する。

後円部墳頂部から上段出土器種不明の形象埴輪

(1969を除く1967~1974)

1967は板状破片である。1968は付属品で幅4.0cmの繫状を呈し器面を矢羽根状の文様と赤色塗彩で加飾している。1970はL字状に屈曲する破片、1971は幅3.7cm板状破片である。1972は家の廻廊突帯の隅部分に類似する。1973は小径の本体に鈴を伴う粘土紐がめぐる。人物の足結あるいは鳥の一部などが想定される。1974は外面に赤色塗彩を施す帯状破片である。

後円部南側出土器種不明の形象埴輪

(1976~1983)

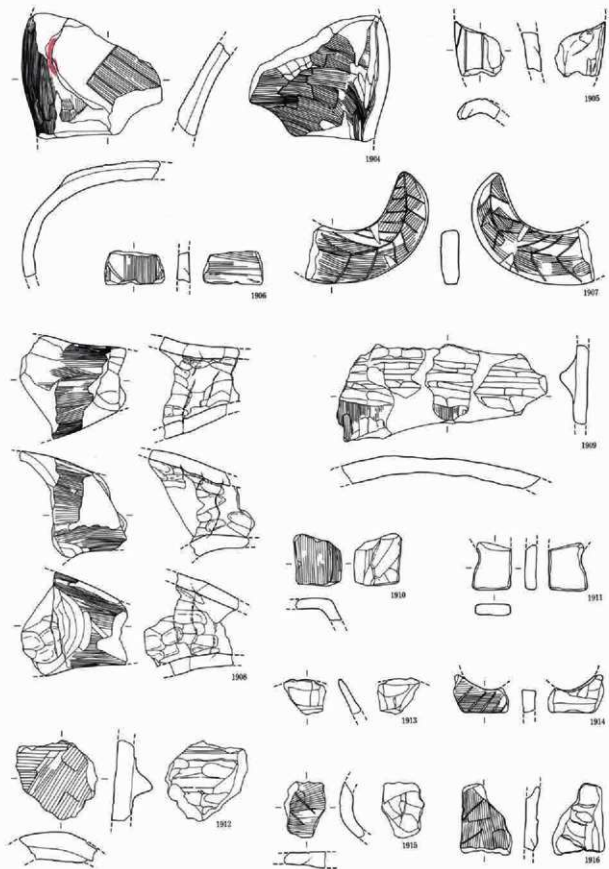
1980・1982はくびれ部西側寄りからの出土である。1976は透孔の一部を残す。1976は盾の破片か。1978も板状破片である。1977は本体から厚さを有する板状部分が水平方向に張り出している。1981も厚みのある板状品である。1979は帯状の粘土板にボタン状の粘土を貼付している。三輪玉の表現か。1983は両面にへら描き文が施されている。1980は棒状の欠損品である。1982は幅4.0cm前後の薄い環状品である。

後円部墳頂部から上段出土器種不明の形象埴輪

(1984~2017)

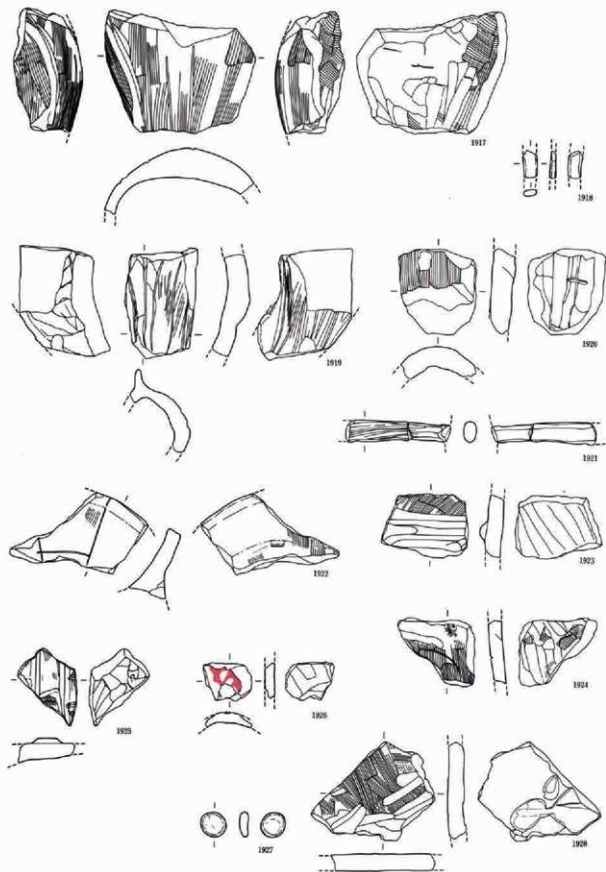
1984は板状破片で透孔の一部が残存する。横断面方形の基台部と考えられる。出土位置を勘案すると家の一部か。1985も板状破片で器面に平行の沈線が施される。図示上位には剝離痕がみられる。1986は舌状を呈する。板状の粘土を包みこむように粘土板を巻きつけて本体を延ばしている。上面に太い沈線

1. 埴輪



第308図 器種不明の形象埴輪(3)

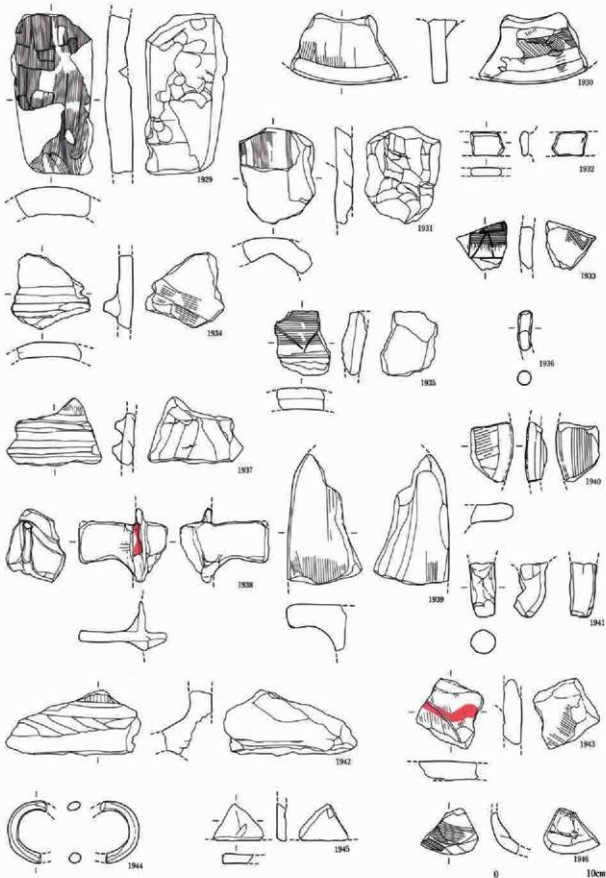
第4章 出土遺物について



第309図 器種不明の形象埴輪(4)

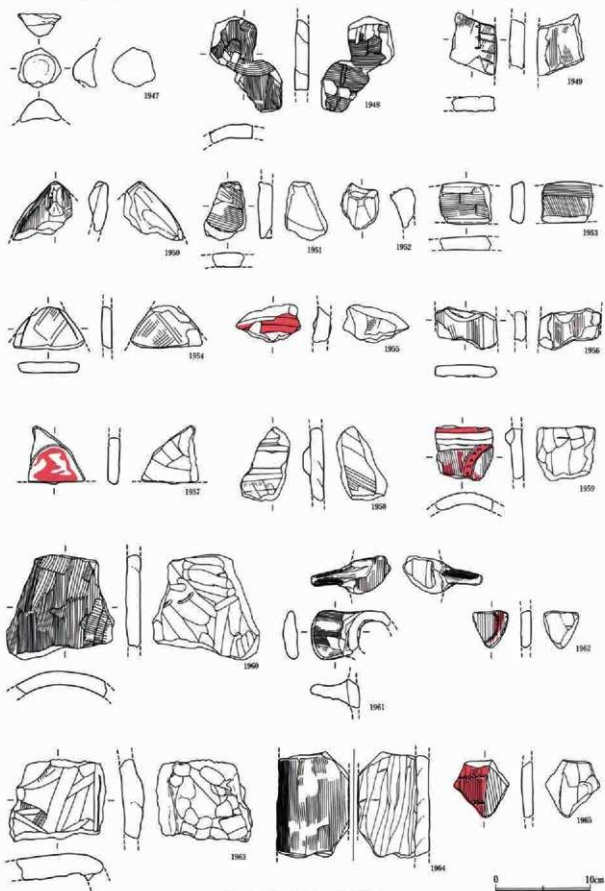
0 10cm

1. 埴輪



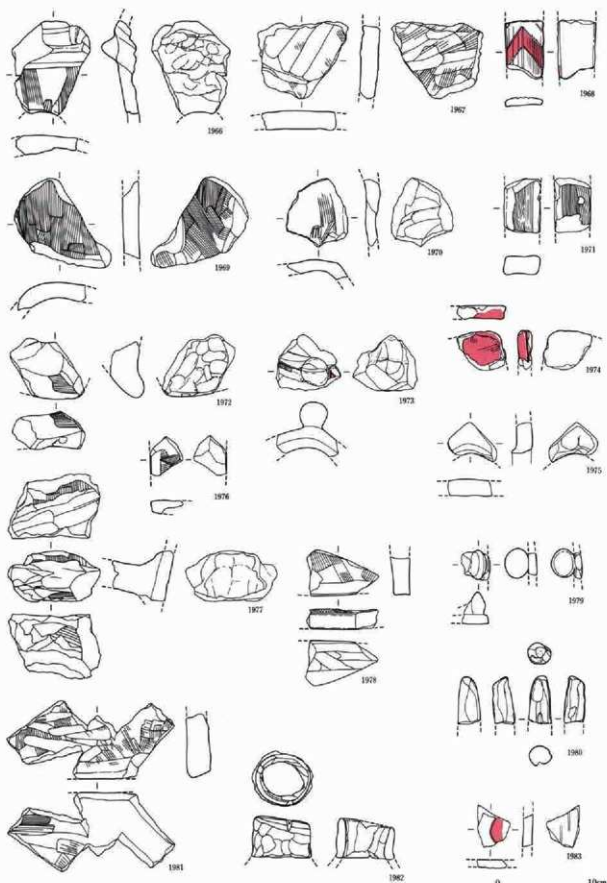
第310図 器種不明の形象埴輪(5)

第4章 出土遺物について



第311図 器種不明の形象埴輪(6)

1. 埴輪



第312図 器種不明の形象埴輪(7)

による平行線文が施される。1987は幅9.8cmの板状品で両側縁部は高まりをもつ。器面の中位にも粘土を貼付、ステップ状の段にしている。2012は同一個体であった可能性が高い。1988は、山形に屈曲する断面形を呈する。外面は沈線により直線文で細分した区画内に頂部を越える斜格子状の文様、齧歯文を施す。内面の焼成状況からはこの破片が本体に付属していた可能性もうかがえる。

1989は板状破片で、縁部の一部が丸くくりこまれている。片面はヘラ描き沈線による施文がなされ赤色塗彩が加えられている。同様の破片に2016がある。1990も板状破片である。一面は沈線により細分、短冊状の文様構成がみられる。1991は幅は6.6cmの板状破片である。沈線が斜行、区画内に赤色塗彩が施される。1992は径の一定した棒状品である。1993はくびれ部東側出土の1961と同様の形状である。径6.0cm前後の小径の本体から水平方向にプロペラ状の粘土板が張り出している。1994はヘラ描き文のある小破片である。1995はS字状の付属品である。1996は巴の足状を呈する粘土板である。表裏にヘラ描き線文が施されている。1998は幅4.0cmの板状破片である。1999は弧状の周縁部を有する破片である。側縁部に沿って沈線をめぐらし、内区には齧歯文を配しており、内行する区画内には赤色塗彩が施されている。小孔の存在が確認される。2000～2003はいずれも板状品の破片である。1997も類似する破片である。2003は後円部西側の周堀に転落していた。表裏両面に綾杉状の文様がヘラ描きされている。2002の片面は中央寄りに粘土を貼り足し厚層させている。2004～2006・2009は板状の破片であるが粘土の貼付や赤色塗彩などが施されている。2007は筒状を呈する。2008は先端の尖る棒状品で基部は本体に接続している。同形の資料に2017があり、こちらは先端が彎曲、フック状を呈している。2010は帯状品の破片である。径3.5cmの円形の剝離痕が認められる。大刀の勾金の可能性がある。2011は付属品で沈線文が施される。2013は器面に不定方向の沈線が多数施文されている。2014の小口の一端はU字状にくりこまれている。

後円部西側出土器種不明の形象埴輪

(2018～2027・2029)

2018・2021・2026は板状破片である。2020は残高7.5cmの木の葉状をした資料で一面に葉脈状のヘラ描きが施されている。2025も同様の形状をなすが2020と比較して小型、やや薄い粘土板である。細分された区画を一つおきに赤色塗彩している。2019は人物の腕を肩口に接合するように棒状粘土を柄状に本体にさしこんでいる。一部に沈線が施される。2022～2024は彎曲する粘土紐である。人物に付属するか。2027は径5.0cmほどの筒状を呈する。人物の着衣の袖口の破片か。2029は薄い粘土板を2枚重ねる。

器種不明の形象埴輪 (2053)

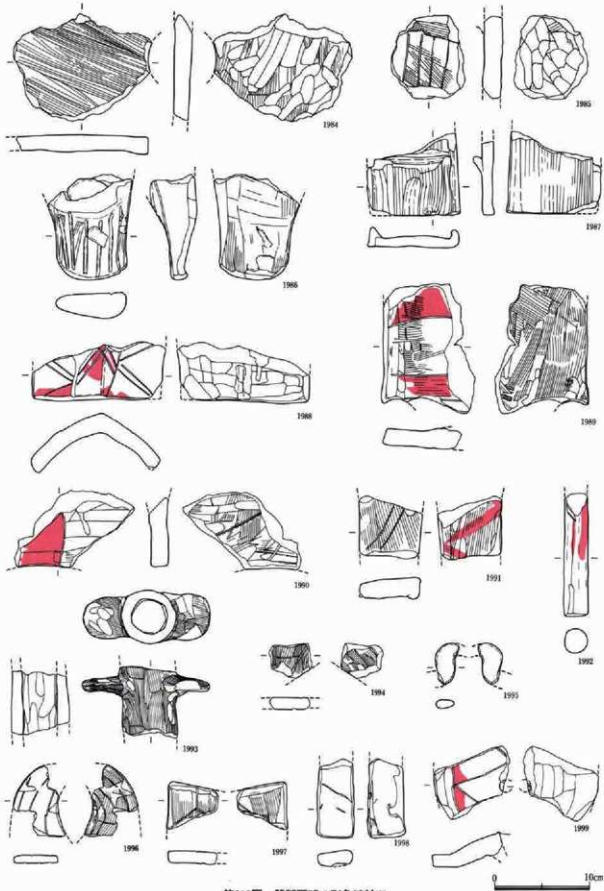
くびれ部西側の調査区出土であるが、原位置は保たれていない。

上位の本体部分の大半が欠損しており、具体的な器種を想定することが困難であるが器財の柄の可能性がある。本体部分は上位に向けて徐々にその径を狭め、突帯から高さ7.0cmほどでくびれている。その後、袋状に広がるものと考えられるが、その部分に縦方向のヘラ描きの沈線が施されている。

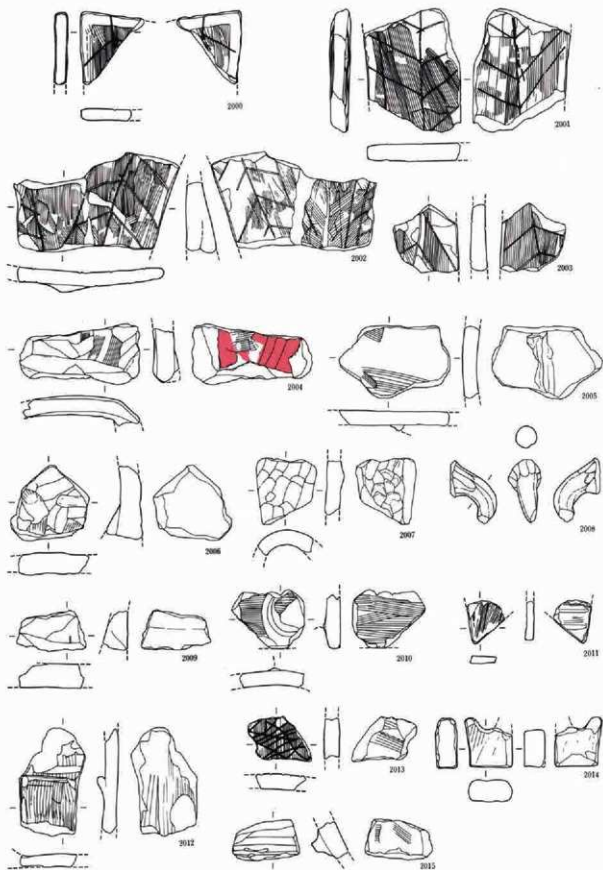
基台部は、上位に幅6.5cmの間隔を開けて2本の突帯がめぐる。突帯の張り出しは高いものの、その貼り付けは極めて粗雑である。突帯間の胴部には径4.3×3.0cmの横長円形の透孔一対が対向方向に穿たれている。突帯以下の基台部形状は底面から29.0cmに最小径をもち、裾広がりに底面に向かうもので全体のバランスという点からはやや不安定な印象をおぼえるものである。底径は16.5cmである。

外面の調整は基本的にはハケメを施しているが、基台部、透孔周辺、本体下部と3回の工具を使い分けが行われている。基台部と形象本体は2cm幅に16本、突帯間の器面は2cm幅に9本のハケメである。内面には粗雑なナデ調整がなされるが、上半部は粘土紐の接合痕が消しきれず、指頭による押圧のようなナデの痕跡が認められる。成形では基部の粘土板の高さが6cmと他の器種と比較して低く、これを右を上重ねていたことが底面の観察からわかる。

1. 埴輪



第313図 器種不明の形象埴輪(8)



第314図 器種不明の形象埴輪(9)

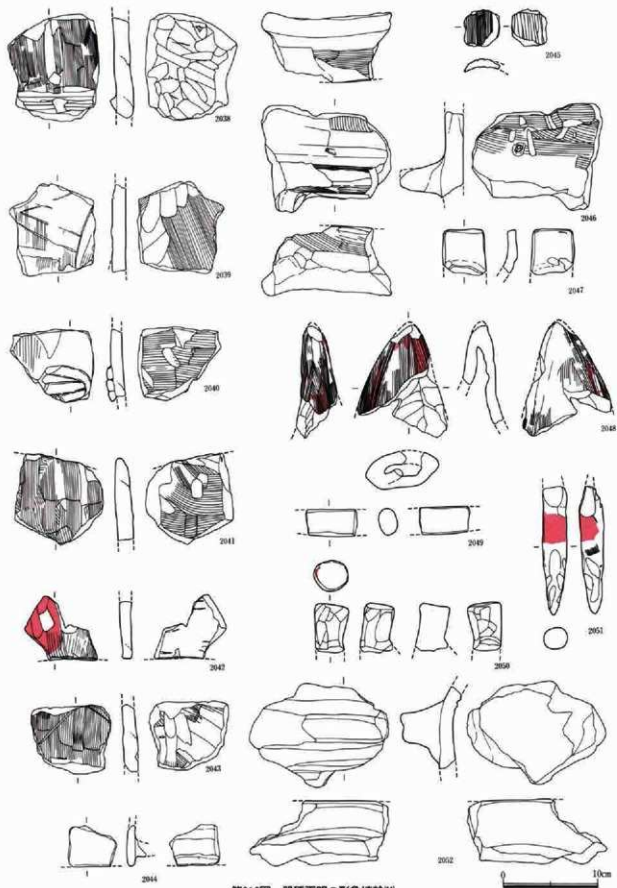
0 10cm

1. 埴輪



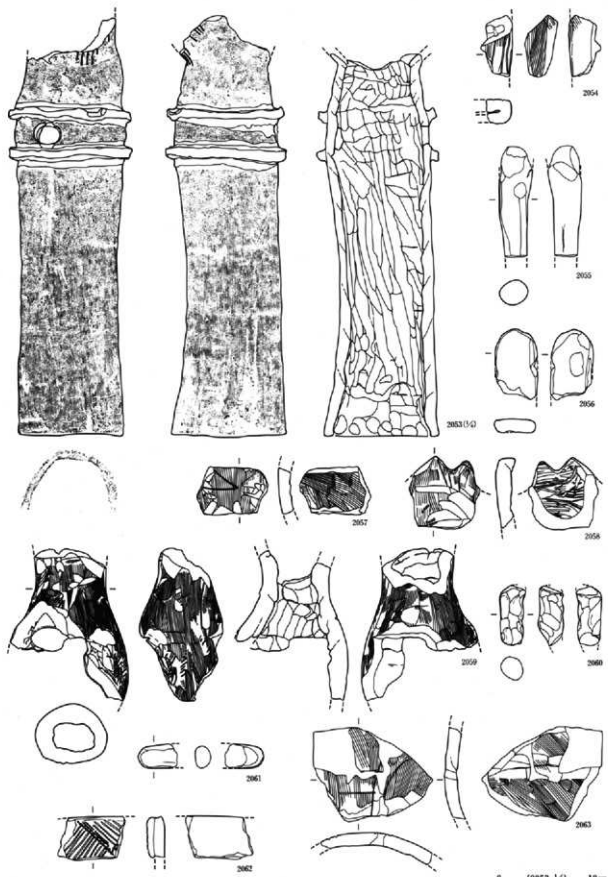
第315図 器種不明の形象埴輪①

第4章 出土遺物について



第316図 器種不明の形象埴輪Ⅰ

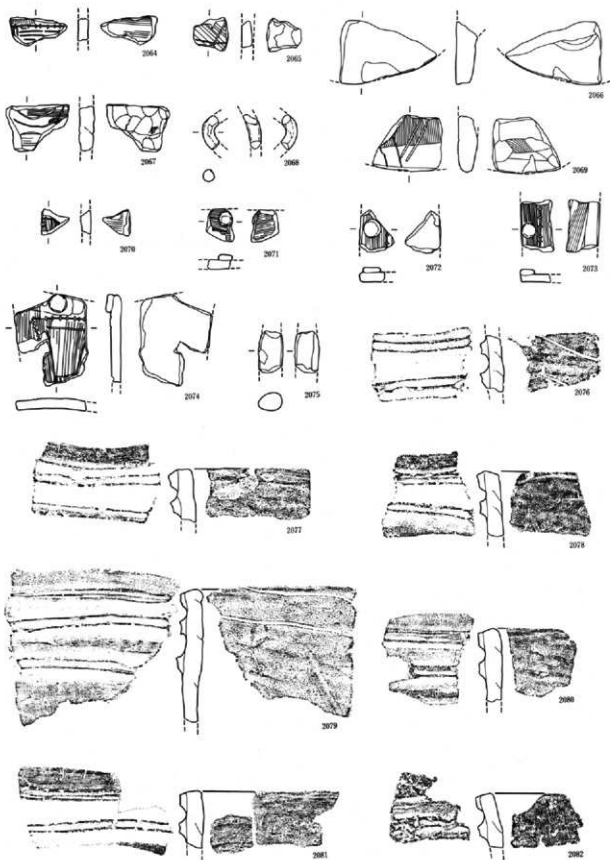
1. 埴輪



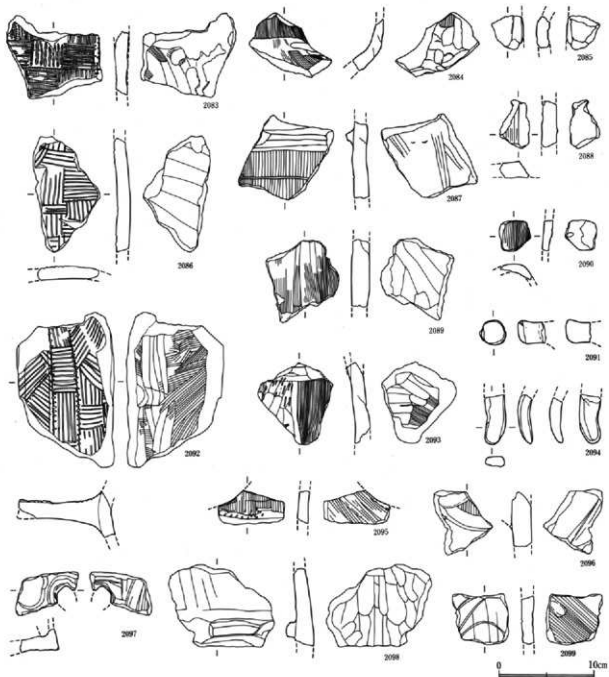
第317図 器種不明の形象埴輪12

0 (2053 1/2) 10cm

第4章 出土遺物について



第318図 器種不明の形象埴輪片



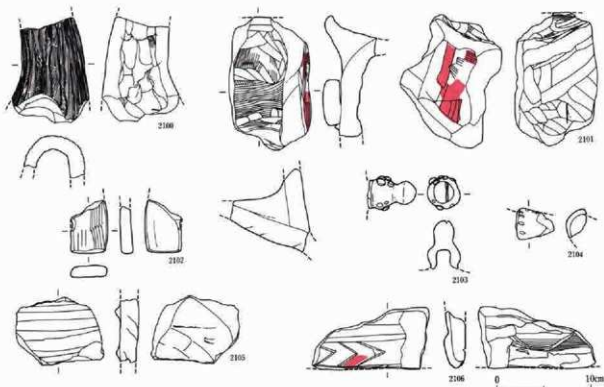
第319図 器種不明の形象埴輪14

くびれ部西側出土器種不明の形象埴輪

(2028・2030～2082)

一部、2049・2052と鞍部墳頂部出土の資料も含まれている。2030・2033・2034は薄い板状の付属品である。2030は2028のような形状であったか。2031はヘラ描きの沈線に刺突を重ねている。2035は円筒状の本体に幅3.5cmの帯状の突帯がめぐる。2036は棒状品である。2037は先端の尖る袋状品である。渦巻文

が両面に配されている。2038は形象の基部になろうか。突帯が貼付されている。2039は板状の破片で、器面に弧線とこれに接続する2本1単位の歯文がみられる。器財か。2040は本体に貼付する粘土紐が3本残存する。結びを表現したものか。2041・2043は板状の破片である。2043には斜行する沈線が認められる。2042は本体に貼り付く薄い粘土板である。沈線がみられ赤色塗彩も施される。2044・2045は本



第320図 器種不明の形象埴輪15

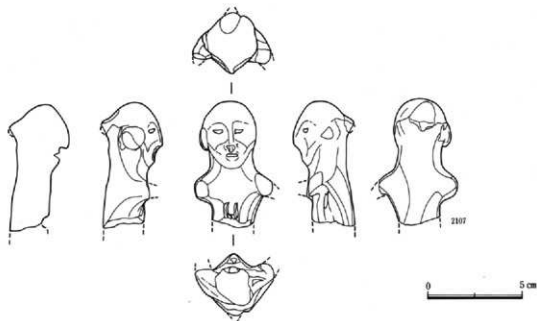
体に貼付した粘土板である。2046・2052は大型が予想される本体に、水平方向に板状突帯が延びる。2046は内面に一箇所に途中まで穿たれた小孔がみられる。2047は幅4.5cmの板状品である。家の屋根飾りか。2048は粘土板を巻き角状に成形している。2049は断面楕円形の棒状品の破片である。2050・2051・2055は棒状品である。2051は径2.5cmで一端は尖っている。一部に赤色塗彩が認められる。2054は粘土板を箱形に合わせている。外面の一面に沈線が平行する。2056は薄い板状品、一端は小判状に丸みをもつ。2057・2058・2063は器形がやや彎曲する板状破片である。2057・2063には線刻がみられる。2059は図上端が山形を呈する。2059は筒あるいは袋状を呈するが径は一定しない。断面形も長円形を基礎とするが精美な形状でない。2060は本体内部に用いられた補強材である。2061は一端が先尖りして取束する。2062は本体端部に粘土帯を貼付、肥厚させた面に鋸歯文を基本としたヘラ描き文がみられる。2064・2065・2070～2074は同一個体が細片となったものであろう。2072・2073は前方部西側中段寄りの出土である。

厚さ8mmの薄い板状品で本体に付属するものであるが全体形状は不明である。外縁に沿ってヘラ描き沈線を2重にめぐらし外側の区画線には刺突を重ねている。また、周縁には円形浮文を貼付している。2066・2069は弧状の縁部を有する板状破片である。2069は2本1単位のヘラ描き文がみられる。2068は粘土紐の残片である。2075は棒状粘土の破片である。2076～2082は円筒状を呈する破片である。2082は内堀北西隅、中堤寄りからの出土である。口縁部の先端直下に2条の突帯を近接して貼付するもので、2079は、さらに、7.3cmの間隔を置き3条目の突帯がめぐる。口縁部の先端は面が丸みをもち、丁寧なナデが加えられる。2076・2079は内面にヘラ描きがみられる。

前方部西側出土器種不明の形象埴輪

(2083～2099)

2083・2086は板状の破片である。外面に縦・横方向のヘラ描き沈線を交互に引き並べ、一辺約3.0cmの四角形を構成、網代状の文様を表出している。2092は円筒状の本体から翼状に板状部分が張り出してい



第321図 小像

る。表面は、刺突を伴う縦線により3分面された文様帯をさらに細分、平行する沈線により鋸歯文、格子状の文様をつくり出している。施文の工具は2083・2086と類似する。いずれも器財の一部をなすか。2084は本体から筒状部分が突出する破片である。2085は盾持ち人の耳か。2087・2089・2093・2095・2098は板状の破片である。2087は突帯の下位にヘラ描き沈線が施される。2089は基台部破片か。2093・2094は器面の一部にヘラによる刺突で充填される部分を有する。2098は突帯貼付の破片である。器面をナデている。2088は家の格子状飾りの一部であるか。2090は彎曲著しい小破片である。2091は小型の鈴ほどの規模であるが鈴口の切り込みがみられない。2094は下端が爪の先状の形状を呈している。2096・2099は供に小破片である。2096は弧状に帯がめぐっている。2099は弧状をなすヘラ描き沈線が残存する。

出土地点不詳器種不明の形象埴輪 (2100~2106)

2100は筒状を呈する破片であるがその径は一定しない。ハケメ調整の器面を一方向の沈線により細分している。2101は本体に帯状粘土を貼付するものであるが粘土板の屈曲、延長方向が複雑である。2102は幅3.8cmの付属品である。2103はひょうたん状の球体を呈した付属品である。上位球の先端には鈴口様

の切り込みが施される。下位球には粘土粒が貼付される。2104は棒状粘土に薄い粘土板を重ねた小破片で、周縁に刺突を重ねている。人物付属の刀子の破片か。2105は板状の破片で断面三角形の突帯が2条貼付されている。2106の下縁部外面は幅3.3cmが帯状に肥厚する。この部分には山形文が配されている。

⑫ 小像 (2107)

下半は欠損している。残高は6.8cmである。頭部の長さは3.4cm、最大径は2.9cmを測る。

中実である。頭部には髪表現はなく、坊主頭様である。後頭部に粘土が突起し端部は欠けている。目は、先端が尖った工具により刺突が加えられ、やや横長に開けられている。鼻は粘土をつまみ上げて鼻筋をとおしている。口は、目と同様の工具により刺突を行い、その上から上唇に縦長の刺突を加えることにより、兔唇状になっている。側頭部には扁平な粘土を貼り付けているが耳を表現したものか。右側のそれが顕著である。両手は先端が欠失するが腕を水平方向に曲げていたようにも思われる。胴部の規模は横2.3cm、厚さ2.1cmである。腹部にも縦長の刺突2個が並列している。器面は全体に磨滅しており、ハケメ等の調整痕は確認できない。全体の様相からでは人物を表現したものとは断定しがたい。

2. 土器類

墳丘出土の土器

古墳の築造にかかわると考えられる土器類としては須恵器・土師器が出土している。確認できる器種は、須恵器が、杯蓋・身、高杯、罎、横瓶、提瓶、大甕である。土師器は杯がある。

須恵器の出土は、後円部墳頂部とその周辺に集中している。ここから、須恵器の杯蓋杯・高杯・罎・横瓶・提瓶・大甕が出土している。いずれの器種も複数個体が出土しているが横瓶、提瓶、大甕の一部を除き大多数が破片の状態である。

須恵器の大甕2186は、前方部墳頂部南側から鞍部墳頂部を中心に、前方部上位段丘の広範囲から破片が出土している。その中のいくつかは中段面まで転落しているものもあるが、出土状態からは鞍部寄りの前方部墳頂部に原位置があったものと考えられる。ほぼ同位置から横瓶2138も出土している。

後円部墳頂部と前方部墳頂部の須恵器の出土状況から、この2地点は、古墳築造後、墳丘上に意図的に土器が配置された場所であったことが理解できる。

また、横瓶のうち2144は、表土下1.4mの墳丘盛土中から検出されており、石室構築後、後円部上位段丘の造営の過程で埋置されたものと考えられる。

土師器は、杯が出土している。2207は杯身で、前方部東側上位段丘部分からの出土である。残存状態が完形に近いものであることから、墳丘盛土内に混入したものと考えがたく、古墳の築造年代を理解するための指標となり得るものと考えられている。この他に2209の杯身が前方部東北隅から出土している。

以下、器種ごとにその特徴を記していく。

須恵器の杯蓋は、破片が多く、全体形状を知る個体は無かった。口径は、14～17.4cmが推定される。口縁部の先端は薄く尖り、天井部へ変換点には弱い稜を伴う。天井部は、2115にみられるように回転を伴うヘラケズリが稜のところまで施されている。

杯身も全体形状を知ることはできない。受け部が

弱く水平方向に突出するものである。口径は14cm前後である。2113～2117は無蓋の高杯の杯部破片か。

高杯の脚部は、いずれの個体も長脚で、上下2段に、ヘラ切りによる幅の狭い縦長の透孔を3方向に配するものである。上下段の透孔の間には2条の沈線が施されている。下段の透孔の下端に接して沈線がめぐる。2129は1条、2128は2条である。2130・2135はめぐらない事例である。

端部は、下方に折れ、先端は尖るものが多数であるが、2128のように上方に反り返るものもある。2127は器面にカキメを残し、他と器面の調整方法が異なる。透孔下の沈線も施されない。

2119・2118は、胎土が細かく、良好で、焼成は堅緻である。

2136・2137は罎の破片と考えられる。口縁部外面にナメタテ方向のナデを施す。胎土は良好であるが焼成はややあまく、高杯の2118・2119・2131とは異なる。

横瓶は、横穴式石室内からは出土していない器種である。2138・2144は、器形、カキメの調整方法とも類似している。内面はアテメをナデ消している。胎土中の黒色鉱物が発泡して器面上に付着している。形状は、子持村中ノ峯古墳、吉井町長根安坪古墳群11号墳出土資料に比して丸みをおびている。器高と横幅の比率は1:1.09である。2139は、胴部を塞いだ粘土板がはずれている。形状は、2138・2144に比べて細めで横長である。カキメの施し方、胎土も前二者とは異なっている。外面は、タタキの上に間隔を開けたカキメを、内面には強いアテメを残している。2140～2142は、口縁部の破片である。瓶類の口縁部と考えられるが、胴部の残存する個体との識別は困難であった。

2143の器種は特定しがたいが、壺の肩部破片と考えられる。

提瓶2145は、口縁部が欠損し、取っ手の位置も不明である。外面には同心円状のカキメが施される。

大甕は、墳丘各所から出土しているが、出土量が多いが全体形状を想定できる資料は2186のみで他は

破片である。2186も大型破片による図上復元であるが、口径24.6cm、胴径40.2cm、器高49.8cmが推定できる。資料化しえたものは口縁部～頸部破片だけで15個体以上を数えるが、胴部、底部も含めた個体識別は困難であり、個体数の確定は成しえなかった。

口縁部は、立ち上がりの角度、先端の断面形状、施文などにそれぞれ特徴があり、バラエティー豊かな状況が見られる。多数は2146のように先端の面が外側を向く断面形状をとるが、2148は先端が内側に返るものであり、2151・2152・2186は、先細りとなり終息する形状である。外面の施文は、2本沈線による区画線による区画内に波状文を充填するもので、2186は4段の区画内に波状文が配されている。頸部を特徴づけるものに補強帯がある。2153・2156・2158・2161・2186に認められる。胴部の器面調整は、外面がタテ、あるいはナナメタテ方向のタタキメを施した後これをナゲ消している。内面は、同心円状、あるいは青海波文状のアテメが残されている。

土師器の杯2207は、口径11cmと小径である。外面の稜は弱く、口縁部は弱く外傾して立ち上がる。2209も外面に弱い稜を有するが、口縁部の立ち上がりは短い。

周堀出土の土器

周堀部分では史跡整備時に外堀東北隅に設定した27・28トレンチから集中して出土したほか、後円部南東方向、内堀外縁の立ち上がり部分に設定した31トレンチの堀底から土師器杯2206が、前方部東側周堀内から土師器杯2208が出土している。2206は、口縁部が底部との境に明瞭な稜を有し、直立ぎみに立ち上がる形状をなすものである。2208は外面の稜が弱くなっている。

27・28トレンチからは須恵器杯蓋、杯身、台付壺、長頸壺、大甕の破片と第331図の土師器杯・甕が出土している。須恵器大甕を除き、その年代は観音山古墳の築造時期よりも新しく、7・8世紀のものと考えられる。

須恵器では、2187・2190が杯蓋で、ともに大径のリング状のつまみが付くものである。2188の杯は口

径13.8cmを有し、底部を回転を伴う糸切り、ヘラ切り後、周縁部のみヘラ調整を施している。

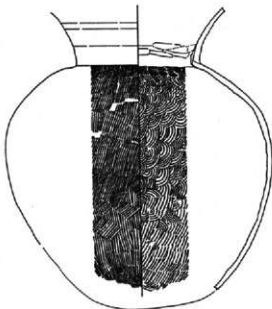
2191・2192は、台付長頸壺の破片である。

大甕は、2202のように頸部に補強帯を貼り付けた口縁部破片が出土している。2189・2194は外面に丁寧なナゲ調整が施された個体である。胴部の調整は外面にタテ方向のタタキメ、内面に下位から上位に向けてアテメを施している。2193・2197・2198・2220・2203の胴部破片は、外面のタタキメが疑似格子状を呈するものである。この破片と同様の特徴を有する大甕(第322図)が、高崎市教育委員会の調査により検出されている。同一個体の可能性が高いこの甕の量目は、残高60cm、胴部最大径55.6cmとされている。

土師器は、2112～2217の杯が出土している。いずれも、口縁部が内彎しながら斜め上方に立ち上がる形状である。2217は復元径、20.2cmの大径である。2215壺は口縁部から底部の破片を図上で復元したものである。器肉は薄く、外面を斜めヨコ方向にヘラ削りしている。

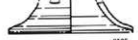
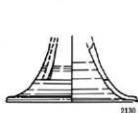
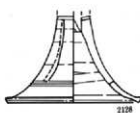
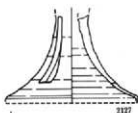
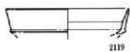
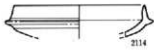
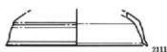
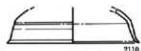
墓域3出土の遺物

2218は須恵器の高台付碗である。高台部は欠損する。口径13.7cm、残高4.7cmを測る。口縁部は、外反して立ち上がるが下位はややこける。底部は、糸切



第322図 外堀出土の須恵器(高崎市教育委員会調査時出土)

第4章 出土遺物について

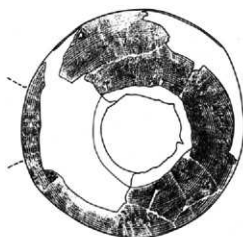
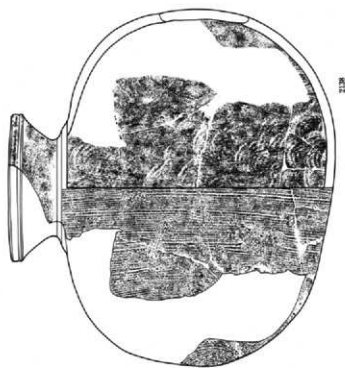
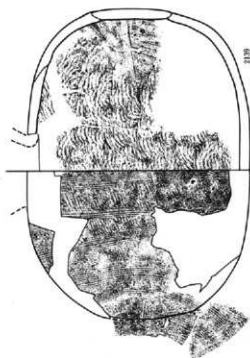
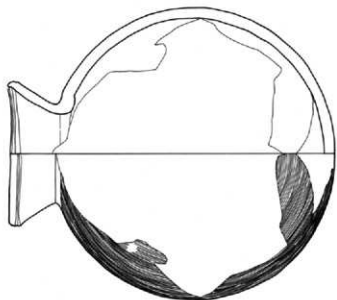
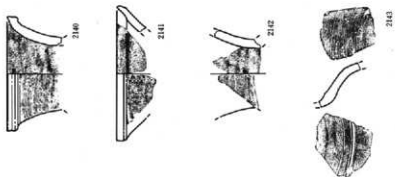


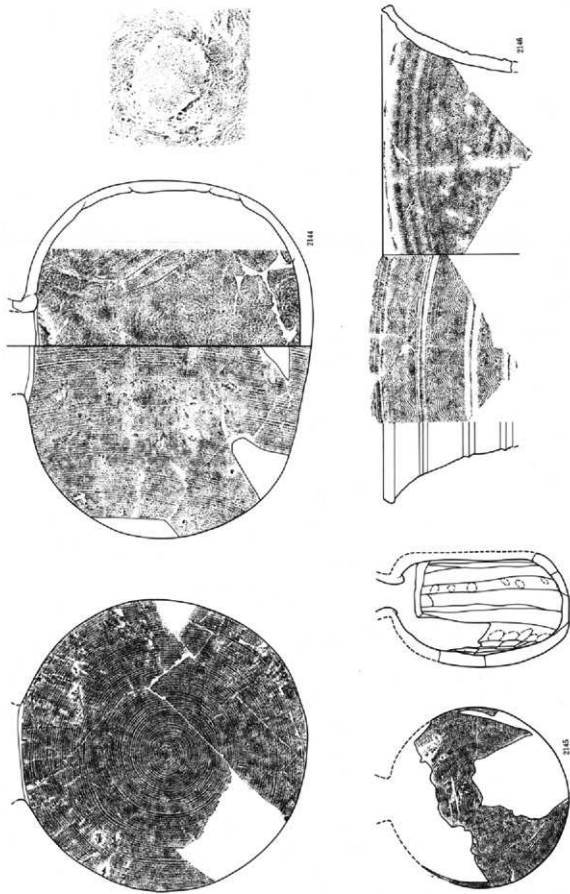
第323図 須恵器(1)

2. 土器類

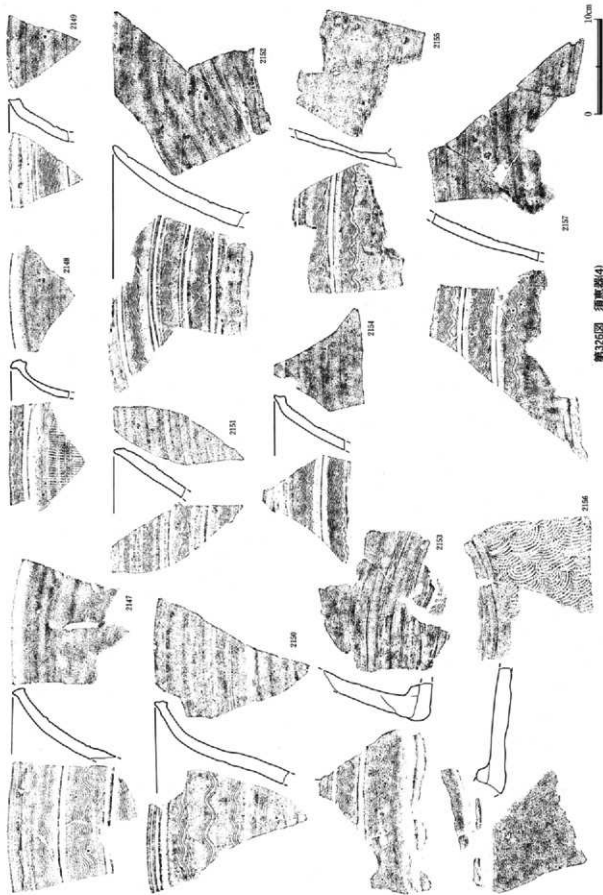


第324図 須恵器(2)

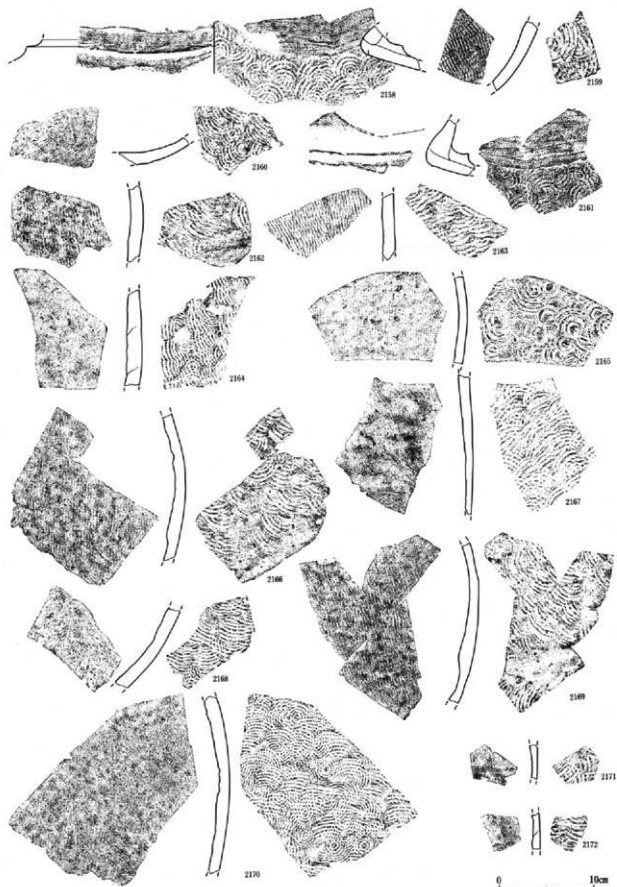




第325図 須賀器(3)

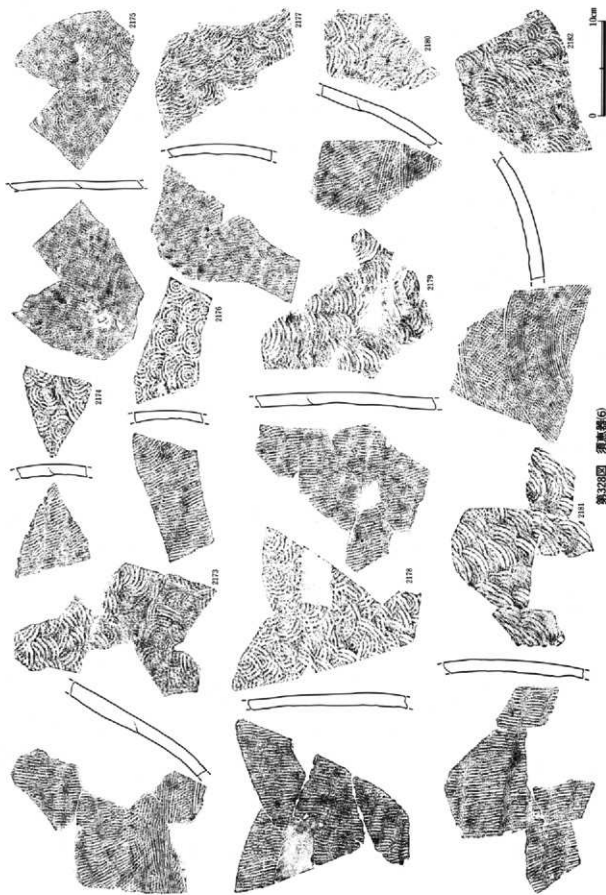


第325図 須恵器(4)



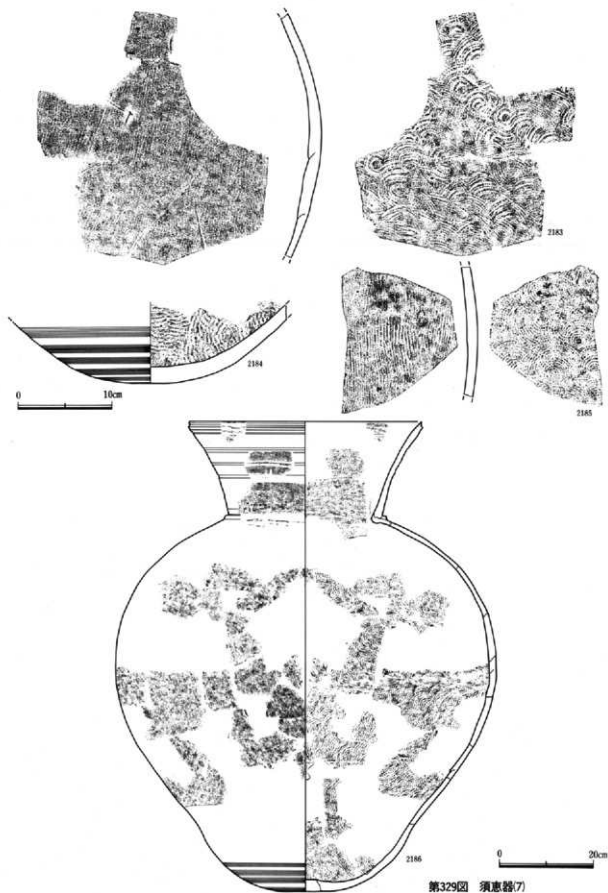
第327図 須恵器(5)

2. 土器類

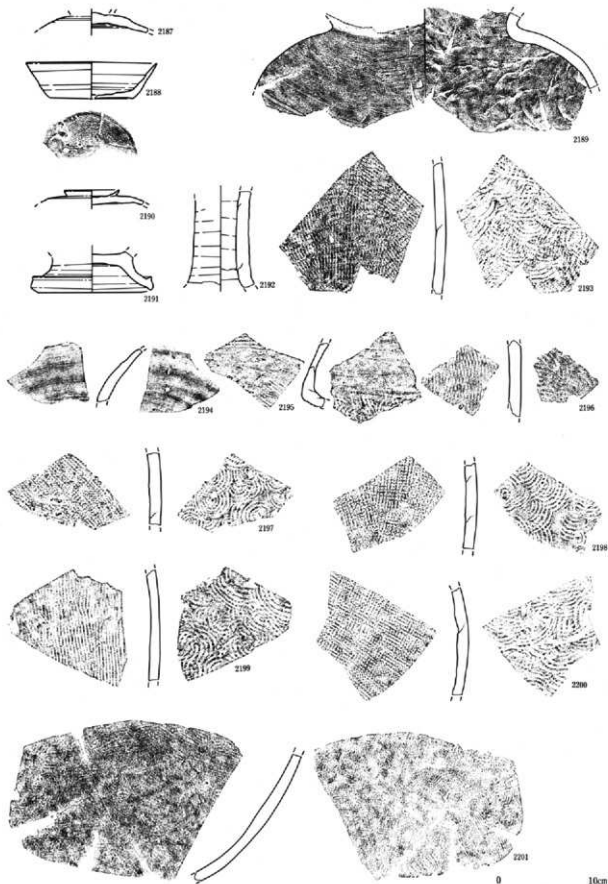


第228回 須恵器(6)

第4章 出土遺物について

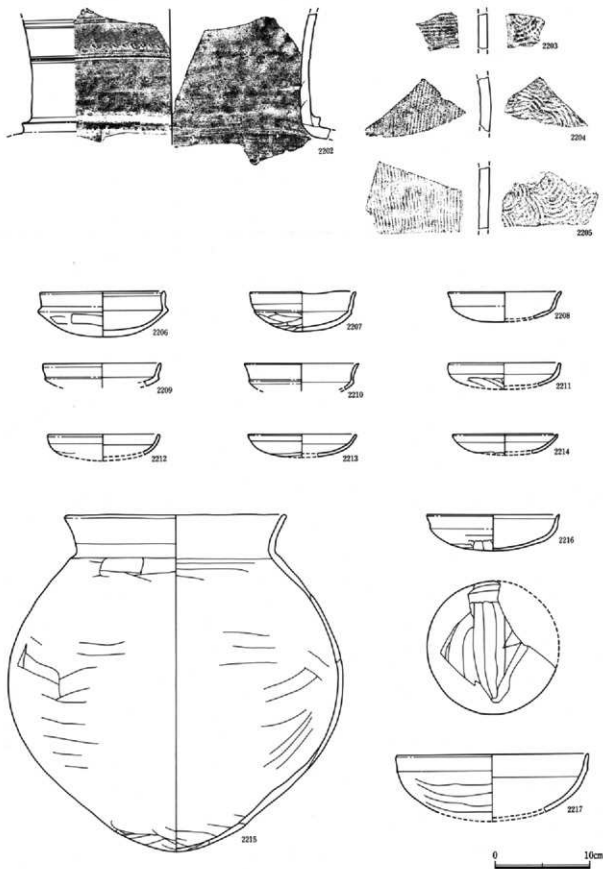


第329図 須恵器(7)



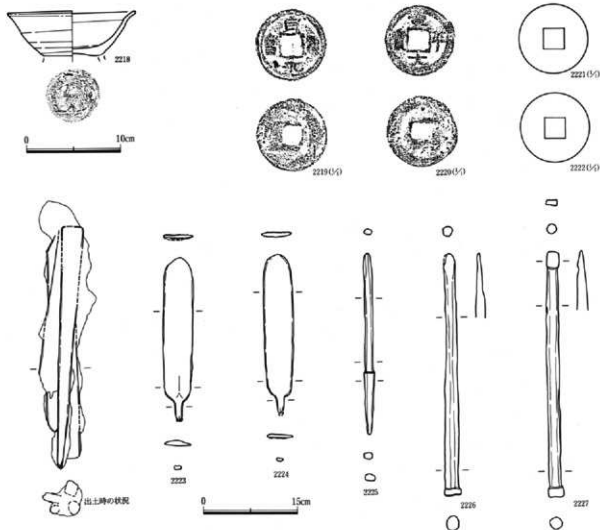
第330回 須恵器(8)

第4章 出土遺物について



第331図 須恵器(9)・土師器

2. 土器類



第332図 墓3 出土遺物

り後に高台を付している。焼成は還元焰で、あまい焼き上がりである。

2223～2227の5個体は用途不明の鉄製品である。左側の図は出土時の状況をX線透過写真から図化したものである。錆化、鉄塊状を呈しており、出土当初は、4個体の製品と考えられていたものである。

2223と2224は、柳葉状を呈する扁平な板状製品である。2223は、全長12.8cm、横幅2.4cm、下端の茎状部分の長さは1.4cmを測る。2224は、全長12.5cm、横幅2.4cm、下端の長さ1.3cmを測る。ともに片面に弱い影らみを有している。2225は全長14.2cmの棒状品である。図の上端から9.4cmのところに環状の段をもち、両端とも尖っている。断面形はやや角の丸い四角形を呈する。2226と2227も棒状を呈する。2本と

も先端を盤状に尖らせたものであるが、やや細部が異なっている。基礎は平坦で、軸部の断面形は、現状では円形となっているが、出土当初の所見では断面四角形を呈していたとの見方もある。全長は、2226が19cm、2227が19.3cmである。

これらの遺物と共に土域内から4枚の銅銭が出土している。紐で一つに綴じた痕跡が認められた。このうちの2枚の鑄造銘が判読できた。2219は貞観永宝(鑄年870年)で径1.85mmを測る。2220は寛平大宝(鑄年890年)で径1.85mmを測る。他の2枚は遺存状態が極めて不良であったが地金の状態、直径が同じであるところから類似する時期の鑄造と考えられる。2218の須恵器高台付碗の示す年代観は10世紀中頃を中心とした頃と考えられる。これは古銭の鑄造

第4章 出土遺物について

された年代を測らないことから、墓塚3の築造は、この須恵器の年代観をもって比定したいと考える。

3. その他の時代の出土遺物

観音山古墳の周辺は、高崎市教育委員会による綿貫遺跡における調査成果にみられるように古墳時代前期以降、奈良・平安時代に至るまで長期間居住域にあてられていたことが知られる。観音山古墳の調査においても、古墳構築と直接かかわりの無い出土遺物も多数出土しているがそれらは古墳構築前後の古墳をとりまく環境と関係するものと考えられる。

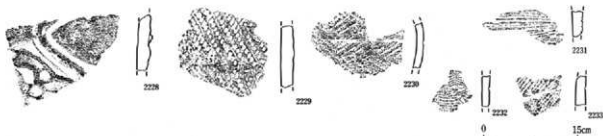
ここではその中から、縄文土器、奈良・平安時代の土器、中世の陶磁器・軟質陶器、石造物について報告をおこなう。

縄文時代の土器は6片を提示した。他に縄文

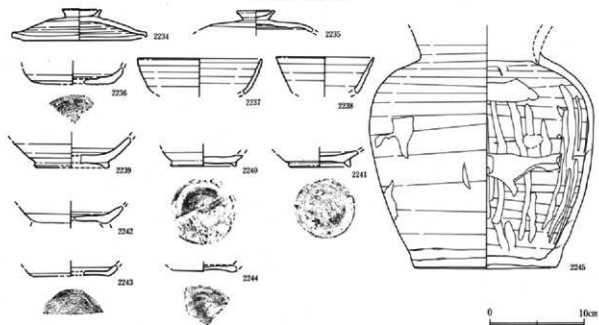
時代の遺物と考えられる打製石斧が3点出土している。

2228は、器肉が厚い。隆帯の両側に沈線を沿わせ、円形刺突文を重ねている。後期、畑之内Ⅱ式の土器と考えられる。2229は、R Lの縄文を施文している。中期、加曾利E式の土器である。2230はL Rの縄文を施文する。胎土中に繊維を含む。2231は半截竹管による条線を横位に施す。胎土中に繊維を含んでいる。縄文前期、黒浜式土器と考えられる。2232は器肉が薄く、櫛状工具による条線を充填する。2233は横行する沈線を挟んでL Rの縄文を施文する。

2234～2245は、いずれも須恵器で奈良・平安時代の所産と考えられる。2234・2235は蓋である。2234は口径14.4cmを測る。器高が低く、天井部にリング状のつまみを付している。2235は古墳時代の有蓋高



第333図 縄文土器



第334図 平安時代以降の土器

3. その他の時代の出土遺物

杯の可能性も考えられる。2236は杯の底部破片と考えられる。2237・2238は杯、あるいは碗の口縁部小破片である。器面にロクロ痕を残している。2239～2242は高台付碗である。いずれも焼成の状態は悪い。底部は回転糸切り離して、高台は断面三角形の付高台である。2245は平底の短頸壺であるが、口縁部を欠損する。残存胴部は3/4、胴部最大径23.8cm、底径15.7cmである。内外面とも器面の粗れが著しく、特に内面は焼きはぜ状に剝離している。くびれ部東側の中段面、円筒頸輪の内側から出土しており、この時期に墳丘が別途利用されたためであろうか。

2246から2266の土器は中世の時期の所産と考えられる。

2246～2255は軟質陶器である。2246～2249は内耳銅あるいは鉢の破片と考えられるが、器高が判然としないため詳細な区別はできない。胎土中に雲母の混入が顕著である。2248は底部がやや丸みを有している。2249も底部破片であるが平底である。

2250～2255は土師質土器皿である。2250がくびれ部東側からの出土した他はいずれも後円部西側・南側の墳丘上から出土している。2252は他と胎土がやや異なり、皿の中では精選されている。他も精選されているが赤色土粒を含む点が共通している。色調は2253がやや灰黄色みをおびる。この種の皿においては底部の糸切りの回転方向が右回転糸切りとなっていることが多数であるが、今回提示した資料では2253が右回転である。2250・2254は内面に炭化物が付着している。

2256～2266は陶磁器である。

2256は青磁碗の口縁部破片である。外面にクテ方向のクシメが認められるが連弁の削り出しは判然としない。龍泉窯系である。

2257～2266は、焼き締め陶器で常滑産である。器肉が厚く、大壁の破片と考えられる。

この他に陶磁器の破片としては近世～近代の陶磁器片が墳丘裾部に掘削された溝、墳丘上の表土層から多数出土している。

2267～2273は石造物である。板碑は墳丘の各所から出土している。後円部墳丘頂部にあたる石室上部の調査区から2270が、後円部南側の1トレンチ、2H-20区内からは2267が出土した。前方部東北隅の中段面では第III次調査の時点で小礫を敷き詰めた石敷遺構が検出されたが、ここから2268の破片が出土している。この他に後円部墳頂部から南東方向に設定した20トレンチの中段面、くびれ部西側下段丘、11トレンチZ-16区内、拡張1区などから小破片が出土している。

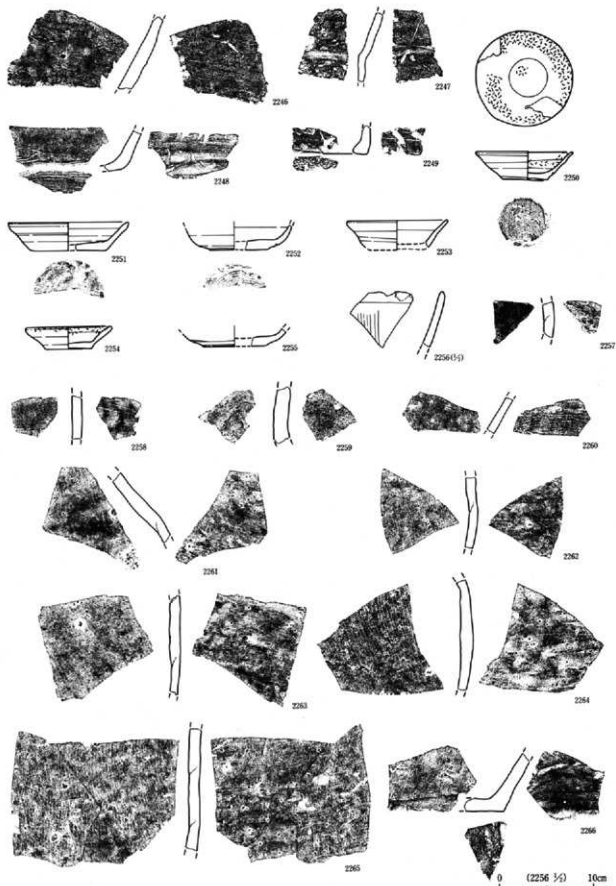
ここでは2267～2271の大型破片を提示したが、全体形状を想定できるものは下部の一部を欠損する2268で、残高48.4cm、幅16.1cm、厚さ2cmを測る。2267も同様に小型で残高50.1cm、幅17.5cmである。2269～2271はやや大型で、2269の幅は24.5cmである。石材は何れも緑泥片岩製である。頂部は山形で、その角度は116～135°である。二条線や枠線等は施されず、形骸化が進行していることが解る。2267～2269には種子を表現した梵字とその下に記された蓮座が認められる。種子は判然としないがキリークが刻まれていると考えられる。花瓶や造立年代、その他の文字も刻まれていないようである。

2273は五輪塔の空風輪で単独で出土している。角閃石安山岩製である。全体が砲弾形を呈し、くびれ部が風輪の上部から空輪の下部へと垂直に立ち上がり接続している。上端は突出すると思われるが先端は欠損している。幅と器高の比率は1.6以上でありあまり古い時期にさかのぼらないものと考えられる。

2272は、安山岩製で石造物の礎石と考えられるが単独の出土である。側面に蓮弁が5葉刻まれている。

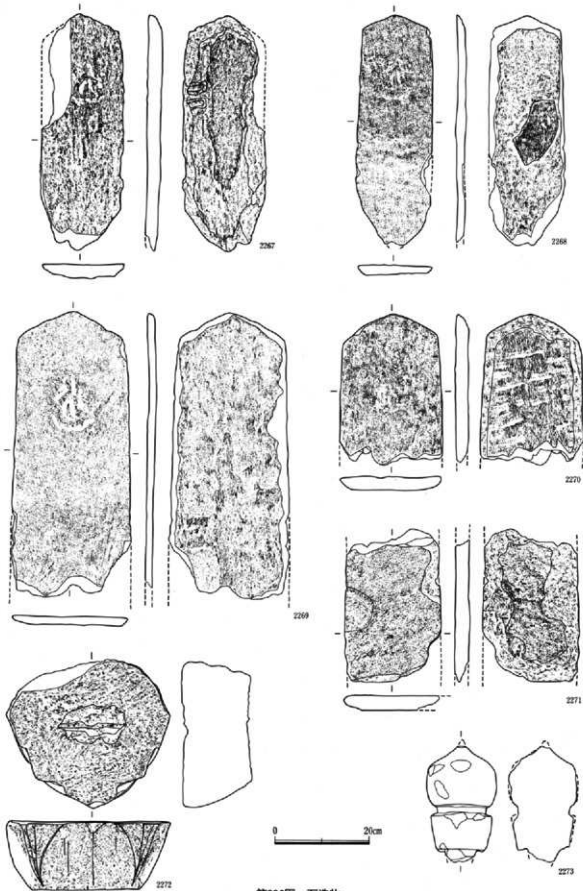
注1 高崎市教育委員会『給貨遺跡』1985年

第4章 出土遺物について



第335図 軟質土器・陶磁器

3. その他の時代の出土遺物



第336図 石遺物

第5章 分析

1. 縮観観音山古墳等顔料試料分析結果報告

東京国立文化財研究所 朽津信明

(1) はじめに

縮観観音山古墳出土の試料では、従来から赤色顔料が塗布されているものがあることが指摘されていたが(群馬県立歴史博物館、1979) それに関する分析は行われていなかった。また、赤色顔料以外にも、他の色の顔料も用いられていたのではないかと言う指摘がなされている試料もあるが、それについては、その顔料の存在自体がはっきりしない状態であった。ここでは、縮観観音山古墳出土の試料のうち、赤色顔料がはっきり確認される埴輪において、その赤色顔料を特定することとともに、それ以外の顔料の存在の有無を確認する目的で分析を行ったので、その結果を報告する。

(2) 試料

まず、観音山古墳出土の埴輪のうち、赤色顔料の存在が明瞭に確認できる試料1474から、装飾の印刻の溝部分に入り込んでいた赤色顔料をカッターにて微量採取し、同古墳出土の試料1450においては、肉眼的に赤色が濃く見える部分を同様に採取した。赤色顔料以外の顔料が存在すると言われている試料では、同1505について、赤色顔料の上に黒色物質が付着しているように見える部分のそれぞれにおいて、両面テープを表面に貼り付けることによって微量採取した。試料採取位置については、第337に示す。なお、肉眼観察においては、赤色顔料、そして表面に付着したように見える黒色物質以外の彩色物質は見られず、また黒色物質の分布域は、文様とは無関係で、表面を不規則に覆うようなものであった。

また、同古墳の試料と比較検討する目的において、西長岡南遺跡(藤根・古橋、1997)出土の埴輪片と、

塚廻り古墳(群馬県教育委員会、1980)出土の埴輪において、赤、白、黒の顔料がそれぞれ用いられていると考えられる部分から、同様に両面テープにて微量試料を採取した。

(3) 分析方法

採取試料は、実体顕微鏡で試料観察を行った後、元素分析をX線分析顕微鏡で行い、代表的なものについては鉱物分析を微小X線回折によって行った。また、一部試料については、低真空型の走査型電子顕微鏡に付随するエネルギー分散型X線マイクロアナライザー(EPMA)を用いても、元素分析を行った。X線分析顕微鏡は、佛細場製作所のXGT-2000を用い、50kV、1mAの条件で、走査型電子顕微鏡は、佛日本電子のJSM-5800LVを用い、加速電圧25kVの条件でEDAX社のDX4によって元素分析を行った。X線回折装置は、マックスサイエンス社のM18XHF-SRAを用い、200kV、40mAの条件で100 μ m コリメーターで、CrK α 線を用いて鉱物分析を行った。

(4) 結果

実体顕微鏡の結果、観音山古墳からの試料においては、赤色顔料と黒色物質以外に彩色を持つ物質は見られず、また試料1505における黒色物質は、赤色物質の表面に付着するように存在しており、上下関係が明白であった。

分析結果は、第8表に示す。

赤色顔料で見ると、観音山古墳の試料1474において、明瞭に赤鉄鉱が検出された他、それ以外の試料でも、赤色部分からはいずれも元素分析で明瞭に鉄が検出され、水銀が検出される試料は一切なかった。観音山の試料の黒色部分からは、元素分析でいずれもマンガンが多量に検出されたが、それ以外の試料の黒色顔料部分からは、マンガンは全く検出されず、

EPMAで炭素と思われるピークが検出された。白色顔料では、塚廻り古墳のものではカルシウムが主成分で、鉱物として明瞭に石膏が検出されたが、西長岡南の試料ではカルシウムは乏しく珪素とアルミが主成分であり、鉱物としては粘土鉱物らしきピークが見られたに過ぎな

かった。いずれの試料でも、それ以外で彩色を示しそうな特別な元素は、全く観察されなかった。

(5) 考察

少なくとも、観音山古墳の試料1474に関しては、赤鉄鉱が検出されており、またそれ以外の不純物も見あたらなことから、赤色顔料として、「鉄の酸化物を発色の主要因とする赤色顔料」と朽津(1995)が定義する意味で、かなり純粋な「ベンガラ」が使われていると言える。また、それ以外の試料についても、赤色の部分からは、少なくとも元素分析で見られる限りにおいては類似した結果が得られていることから、いずれも同様に「ベンガラ」が用いられている可能性が極めて高いと考えられる。

次に、観音山古墳の黒色物質からは、元素分析によって顕著なマンガンが検出されたので、この色はマンガン酸化物に起因する黒色であると判断される。もちろん、九州の装飾古墳などでは、マンガン酸化物が人為的な黒色顔料として装飾に用いられた例も記載されている(山崎, 1952)が、観音山古墳の場合には、装飾文様とは無関係に表面に付着して観察されるその黒色物質の産状から、人為的に施されたと言うよりは、埋蔵環境の下で付着したものである可能性の方が高いと考えられる。自然の環境下でマンガン系の黒色物質が文化財表面に付着してしまう例は、北海道のフグッペ洞窟や福島県の清戸迫横穴などでも観察されており(朽津・三田, 1997)、観音山古墳出土の埴輪においても、同様な状況なのではないかと考えられる。なお、必要があれば、技

第8表 分析結果一覧

試料	番号	色	主要元素	主要鉱物	解釈
観音山	1474	赤	Fe	赤鉄鉱 (Fe ₂ O ₃)	ベンガラ
	1450	赤	Fe		ベンガラか?
	1505	赤と黒	Mn, Fe		ベンガラと土中の汚れ
		無(黒)	Mn		土中の汚れ
西長岡南		赤	Fe		ベンガラか?
		白	Si, Al	粘土鉱物?	白土か?
		黒	C?		炭素か?
塚廻り		赤	Fe		ベンガラか?
		白	Ca, S	石膏 (CaSO ₄ · 2H ₂ O)	石膏
		黒	C?		炭素か?

術的には他の部分に影響を及ぼすことなく黒色物質を取り除いて、下の文様をはっきりとさせることは可能であるが(朽津・三田, 1997)、その必要があるかどうかには、慎重な議論が必要であると思われる。なお、赤色顔料が見あたらな部分の試料からは、マンガン以外の目立った元素は見あたらず、赤以外の彩色があった痕跡は確認されなかつたことになる。

一方、比較試料として検討した西長岡南と塚廻りの黒色顔料については、マンガンは検出されず、上述のものとは異なる物質である。その成分は、EPMA分析から見ると炭素系の物質である可能性が考えられるが、それ以上のことは現段階では言及できない。しかし、こうしたものは、その産状からも人為的に施された黒色の彩色であると判断され、少なくとも観音山古墳の黒色物質とは区別して考えるべきものであろう。

次に白色顔料について、まず塚廻りのものからは石膏が検出されたが、これについては様々な解釈が可能であり、現段階では何とも言えない。と言うのは、一般に奈良時代以前の白色顔料としてカルシウムを主成分とする物質が用いられている例はあまり知られていないため(山崎, 1987)、当初顔料ではない部分を試料とした可能性、すなわち、試料の保存処置の際に用いられたであろう石膏が検出されている可能性も考えられる。しかしながら、(朽津, 1997 a, b)の文献のように、もともとは炭酸カルシウム(胡粉または石灰質物質)が用いられていたものが、後に埋蔵環境の下で石膏に変質した可能性も即座に否

定はできず、また、当初から顔料として石膏が用いられていた可能性についても、現段階では完全に否定することはできない。これについては、別途慎重な考察が必要だろう。一方の西長阿南の白色顔料については、カルシウムは乏しく、元素分析や鉱物分析の結果からすると、現段階では白色の粘土(白土)が用いられ可能性が高いと考えられる。白土は虎塚古墳などでも使用が記載されている(江本、1993)ことから、奈良時代以前の白色顔料としてその存在は妥当である。なお、同遺跡の白色顔料については、分析によりカルシウムが検出されたことから、石灰質物質の使用を推定した報告がなされているが(藤根・古橋、1997)、今回の試料では、それと整合する分析結果は得られなかった。これについては、同遺跡では、白土と石灰質物質と言う複数の白色顔料が用いられていた可能性も考えられなくはないものの、試料採取場所が異なると考えられることから、いずれかの試料が、当初顔料ではなく、埋蔵環境または発掘後の調査の際に、付着または塗布された物質である可能性も考える必要がある。むしろ、既存の報告における分析結果については、当該者でない筆者は何とも言及できる立場にはないが、この白

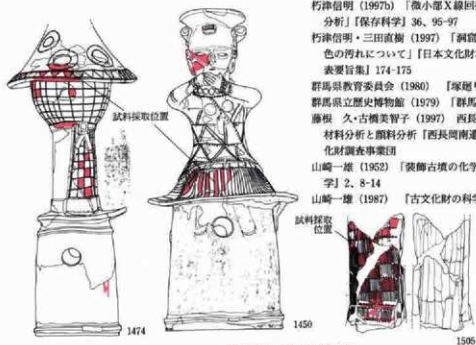
色顔料については、別途慎重に検討を行う必要があるだろう。

(6) まとめ

- ①綿貫観音山古墳出土の埴輪では、赤色顔料としてかなり純粋な「ベンガラ」が用いられていたことが確認された。
- ②同埴輪で観察される黒色物質は、埋蔵環境で付着した物質と判断され、赤色以外の彩色顔料は確認されなかった。
- ③比較のために行った西長阿南遺跡と塚廻り古墳の試料では、いずれも黒色顔料として炭素系の物質が用いられていると推定されるが、白色顔料としては、西長阿南では白土が用いられていると考えられるものの、塚廻りのものははっきりとはわからなかった。

引用文献

江本義理 (1993) 「文化財をまもる」アグネ技術センター
 朽津信明 (1995) 「吉佐山根1号墳及び穴沖1号横穴墓における赤色顔料」『平川II遺跡・吉佐山根1号墳・穴沖横穴墓群』一般国道9号(安来道路)建設予定地内 埋蔵文化財調査報告書10、143-150、鳥根県教育委員会
 朽津信明 (1997a) 「X線分析顕微鏡を用いた文化財試料の分析」『保存科学』36、91-94
 朽津信明 (1997b) 「微小部X線回折を用いた文化財試料の分析」『保存科学』36、95-97
 朽津信明・三田直樹 (1997) 「洞窟遺跡などで観察される黒色の汚れについて」『日本文化財科学会第14回大会研究発表要旨集』174-175
 群馬県教育委員会 (1986) 『塚廻り古墳群』
 群馬県立歴史博物館 (1979) 『群馬のはにわ』
 藤根 久・古橋美智子 (1997) 西長阿南遺跡出土埴輪胎土の材料分析と顔料分析『西長阿南遺跡I・II』群馬県埋蔵文化財調査事業団
 山崎一雄 (1952) 『藤原古墳の化学的研究』『古文化財の科学』2、8-14
 山崎一雄 (1987) 『古文化財の科学』思文閣出版



第337図 試料の採集位置

2. 埴輪の胎土材料

藤根 久・古橋美智子 (パレオ・ラボ)

(1) はじめに

観音山古墳の調査において、円筒埴輪や形象埴輪が出土した。これらの埴輪胎土は、肉眼観察により片岩類の大型砂粒を含むもの、白色の針状物（骨針化石）を含むもの、黒色の鉱物粒子を含むもの、雲母類を多く含むものなど、含まれる粒子などの胎土に違いが見られる。

一般的に、縄文土器や弥生土器などでは、高温焼成されていないため、材料粘土の起源を指標する珪藻化石や骨針化石などの微化石類が含まれていることが多く、海成粘土や淡水成粘土（湖沼成や沼沢地成など）など土器の材料粘土の起源を知ることができる（例えば、車崎ほか、1996）。また、胎土中には砂あるいは数mmの礫を含むことから、これら砂粒の特徴記載により、砂粒組成あるいは混和材の特徴について検討することが可能である。埴輪は、埴輪窯により比較的高温で焼成されるものの、壁が厚く内部の胎土中には、微化石類や砂粒など、材料の特徴を保存していることが多い。こうした粘土や砂粒の違いは、制作地の違いのほか、製作集団の違いなどを示すものと思われる。

ここでは、観音山古墳出土埴輪の胎土材料について、材料粘土および混和する砂粒等について検討した。

(2) 試料と方法

ここでは、観音山古墳出土埴輪13点と比較参考とした七興山古墳および不動山古墳出土埴輪各1点である（第9表）。

各埴輪は、次の手順によって偏光顕微鏡観察用の土器薄片を作成した。

① 試料は、岩石カッターなどで2×3cm程度の大きさに整形し、恒温乾燥機により乾燥させ、平面を作成した後エポキシ系樹脂を含浸させ固化処理した。

② これらは、精密岩石薄片作製機やガラス板などを用いて研磨し、平面を作成した後スライドグラスに接着した。

③ 固化後、精密岩石薄片作製機を用いて切断し、ガラス板を用いて厚さ0.02mm前後の薄片を作成した。仕上げとして研磨剤を含ませた布板上で琢磨し、コーティング剤を塗布した。

各薄片試料は、偏光顕微鏡下300倍で各分類群ごとに同定・計数した。同定・計数は、100 μ m格子目盛を用いて任意の位置における約50 μ m (0.05mm) 以上の

第9表 検討した埴輪試料

No	報告書No	種類	古墳	胎土の内眼的特徴
1	0818	円筒埴輪	観音山古墳	片岩大型砂粒
2	0762	円筒埴輪	観音山古墳	砂粒少ない
3	0487	円筒埴輪	観音山古墳	大型砂粒少ない
4	0600	円筒埴輪	観音山古墳	大型砂粒少ない
5	0783	円筒埴輪	観音山古墳	大型砂粒少ない
6	0518	円筒埴輪	観音山古墳	大型砂粒
7	—	円筒埴輪	観音山古墳	片岩大型砂粒
8	0025	円筒埴輪	観音山古墳	大型砂粒少ない
9	0603	円筒埴輪	観音山古墳	片岩大型砂粒
10	0766	円筒埴輪	観音山古墳	大型砂粒少ない
11	2010	形象埴輪(大刀)	観音山古墳	大型砂粒少ない
12	0538	円筒埴輪	観音山古墳	黒色鉱物多量
13	0197	円筒埴輪	観音山古墳	片岩大型砂粒
14	—	円筒埴輪	七興山古墳(藤岡市)	片岩大型砂粒
15	—	円筒埴輪	不動山古墳表採(高崎市)	大型砂粒少ない

第5章 分 析

鉱物や複合鉱物類(岩石片)あるいは微化石類(50 μ m前後)を対象とし、微化石類と石英・長石類以外の粒子が100個以上になるまで同定・計数した。また、この計数とは別に薄片全面について微化石類(放射虫化石、珪藻化石、骨針化石)や大型粒子あるいは特徴的な粒子等の特徴も観察・記載した。

(3) 各堆輪の特徴

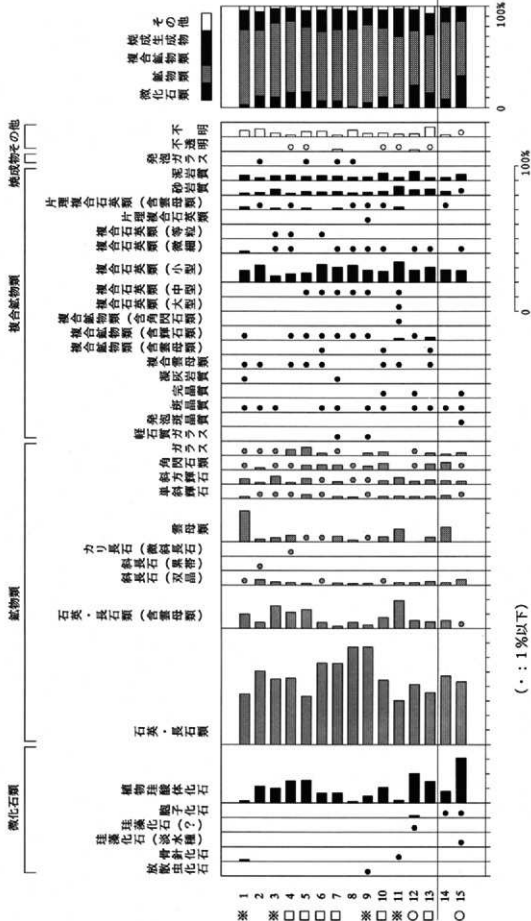
堆輪粘土中の粒子組成は、任意の位置での粒子を分類別に計数した(第10表、第11表)。また、計数さ

れない微化石類や鉱物・岩石片を記載するために、プレパラート全面を精査・観察した。以下では、粒度分布や0.1mm前後以上の鉱物岩石片の組成あるいは計数も含めた微化石類などの記載を示す。なお、不等号は概略の量比を示し、二重不等号は極端に多い場合を示す。

№1: 50~100 μ mが多い(最大粒径3.2mm)。石英・長石類(含雲母類)、複合石英類)片理複合石英類(含雲母類)、雲母類、複合石英類(微細)、砂岩質、複合鉱物類(含輝石類)、凝灰岩質(珪晶質)、細粒単

第10表 堆輪粘土中の粒子組成一覧表

分類群	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	
微化石類																
放射虫化石	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	
骨針化石	3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2	—	—	—	—	
珪藻化石(淡水種)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2	
珪藻化石(?)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2	—	—	—	
胞子化石	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	5	—	1	1	
植物珪酸体化石	3	36	28	47	38	21	22	4	20	32	4	65	35	22	157	
鉱物類																
石英・長石類	73	158	124	142	81	174	180	244	274	134	64	134	85	128	220	
石英・長石類(含雲母類)	21	13	43	35	32	13	5	15	10	23	41	18	11	15	4	
斜長石(双晶)	2	12	6	6	3	3	5	4	5	2	4	6	6	5	20	
斜長石(累帯)	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
カリ長石(微斜長石)	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
雲母類	45	6	8	14	1	2	13	5	4	11	19	—	8	28	—	
単斜輝石	3	1	2	2	7	2	5	4	1	5	4	5	4	6	3	
斜方輝石	8	4	15	4	10	1	6	3	1	8	10	7	7	7	11	
角閃石類	2	5	1	1	8	11	11	2	11	14	—	1	10	14	14	
ガラス	1	2	2	13	14	5	1	—	7	8	—	2	4	3	10	
複合鉱物類																
軽石質ガラス	—	—	—	—	—	—	1	—	2	—	—	—	—	—	—	
発泡珪晶質	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
珪晶質	1	1	1	—	—	3	1	—	1	1	—	2	1	1	2	
完晶質	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	2	—	—	1	
凝灰岩質	1	—	—	—	—	—	2	—	—	—	—	—	—	—	—	
複合雲母類	2	2	—	1	1	1	—	—	—	1	1	—	2	—	—	
複合鉱物類(含雲母類)	—	—	—	—	—	1	—	—	—	1	—	—	2	—	—	
複合鉱物類(含輝石類)	1	—	—	2	2	2	2	2	1	—	3	3	5	—	—	
複合鉱物類(含角閃石類)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	
複合石英類(大型)	—	—	—	—	2	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	
複合石英類(中型)	—	—	—	—	2	2	1	1	1	—	1	—	—	—	—	
複合石英類(小型)	17	37	12	18	16	38	34	43	34	23	30	27	25	23	41	
複合石英類(微細)	3	—	2	1	—	—	1	1	1	1	—	1	1	—	3	
複合石英類(等粒)	—	—	1	1	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
片理複合石英類	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	
片理複合石英類(含雲母類)	4	2	3	2	3	—	4	2	3	2	4	—	—	1	—	
砂岩質	3	6	11	4	6	7	8	6	9	8	13	12	10	7	3	
泥岩質	8	6	9	12	7	11	10	9	11	16	5	21	5	6	22	
焼成生成物																
発泡ガラス	—	3	—	—	2	—	1	2	—	—	—	—	—	—	—	
その他																
不透明	—	—	—	1	2	—	5	—	—	3	1	4	1	—	—	
不明	9	17	7	4	9	12	4	17	10	8	4	7	16	4	4	
総ポイント数	210	312	275	311	244	310	322	364	408	302	212	324	238	271	509	



第11表 増殖胎土中の粒子組成ダイアグラム [粘土の起源 (肥料番号左の記号)]
 ※: 海成粘土 (放射虫化石などの出現)、○: 淡水成粘土 (淡水種硅質化石などの出現)
 □: 水成粘土 (骨斜化石などの出現)、無記号: その他粘土 (酸化石類を伴わない)

斜輝石、放射虫化石(3個体)、珪藻化石(海水種 *Coscinodiscus* 属/*Thalassiosira* 属)、骨針化石多産、植物珪酸体化石

No 2 : 50 μ m前後が多い(最大粒径3.7mm)。片理複合石英類(含雲母類) > 石英・長石類 > 複合石英類 > 複合石英類(微細)、砂岩質、凝灰岩質、角閃石類、単斜輝石、焼成生成物(発泡ガラス)、胞子化石、植物珪酸体化石

No 3 : 50~150 μ m前後が多い(最大粒径2.1mm)。片理複合石英類(含雲母類) > 複合石英類、複合石英類(微細)、砂岩質、凝灰岩質(斑晶質)、複合鉱物類(含輝石類)、角閃石類、単斜輝石、放射虫化石(1個体)、胞子化石、植物珪酸体化石

No 4 : 50~100 μ m前後が多い(最大粒径1.2mm)。片理複合石英類(含雲母類) > 複合石英類、複合石英類(微細)、凝灰岩質(完晶質)、複合鉱物類(含輝石類)、単斜輝石、角閃石類、骨針化石、植物珪酸体化石

No 5 : 50~100 μ m前後が多い(最大粒径2.5mm)。片理複合石英類(含雲母類) > 複合石英類、複合石英類(微細)、砂岩質、複合鉱物類(含輝石類)、斑晶質、凝灰岩質、単斜輝石、角閃石類、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石

No 6 : 30~100 μ m前後が多い(最大粒径2.6mm)。片理複合石英類(含雲母類) > 複合石英類、複合石英類(微細)、斑晶質、砂岩質、複合鉱物類(含輝石類)、凝灰岩質、単斜輝石、角閃石類、軽石型ガラス、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石

No 7 : 50~100 μ m前後が多い(最大粒径2.1mm)。片理複合石英類(含雲母類) > 複合石英類(微細)、複合石英類、砂岩質、複合鉱物類(含輝石類)、凝灰岩質、単斜輝石、角閃石類、骨針化石、植物珪酸体化石

No 8 : 50~100 μ m前後が多い(最大粒径2.2mm)。片理複合石英類(含雲母類) > 複合石英類(微細)、複合石英類、複合鉱物類(含輝石類)、角閃石類、凝灰岩質、焼成生成物(発泡ガラス)、珪藻化石(陸域指標種群 *Hantzschia amphioxys*)、植物珪酸体化石

No 9 : 30~100 μ m前後が多い(最大粒径2.1mm)。片理複合石英類(含雲母類) > 複合石英類(微細)、複合

石英類、泥岩質、大型単斜輝石、角閃石類、凝灰岩質、焼成生成物(発泡ガラス)、放射虫化石(1個体)、骨針化石、植物珪酸体化石

No 10 : 30~100 μ m前後が多い(最大粒径1.8mm)。片理複合石英類(含雲母類) > 複合石英類(微細)、複合石英類、複合雲母類、泥岩質、凝灰岩質、斑晶質、単斜輝石、角閃石類、珪藻化石(*Eumotia* 属)、骨針化石、植物珪酸体化石

No 11 : 50~150 μ m前後が多い(最大粒径1.6mm)。片理複合石英類(含雲母類) > 複合石英類(微細)、複合石英類、砂岩質、泥岩質、凝灰岩質、単斜輝石、放射虫化石(8個体)、珪藻化石(海水種 *Coscinodiscus* 属/*Thalassiosira* 属)、骨針化石多産、植物珪酸体化石

No 12 : 50~100 μ m前後が多い(最大粒径2.0mm)。複合石英類(微細)、砂岩質、泥岩質、斑晶質、完晶質、凝灰岩質、複合石英類、単斜輝石、斜長石(累帯)、角閃石類、珪藻化石(淡水種 *Cymbella* 属/*Pinnularia* 属、*Melosira* 属)、胞子化石、植物珪酸体化石

No 13 : 50 μ m前後が多い(最大粒径2.6mm)。片理複合石英類(含雲母類) > 複合石英類(微細) > 砂岩質、凝灰岩質、複合鉱物類(含輝石類)、単斜輝石、斜長石(双晶)、角閃石類、骨針化石、植物珪酸体化石

No 14 : 30~50 μ m前後が多い(最大粒径4.0mm)。複合石英類(微細) > 泥岩質、片理複合石英類(含雲母類)、複合石英類、凝灰岩質、単斜輝石、角閃石類、胞子化石、植物珪酸体化石

No 15 : 30~100 μ m前後が多い(最大粒径1.5mm)。砂岩質、複合石英類(微細) > 斑晶質、複合石英類、凝灰岩質、単斜輝石、角閃石類、珪藻化石(*Eumotia* 属)、胞子化石、植物珪酸体化石多産

(4) 粘土材料による埋輪胎土の分類

検討した埋輪胎土中には、その薄片全面の観察から、放射虫化石や珪藻化石あるいは骨針化石などの微化石類が検出された。微化石類の大きさは、放射虫化石が数百 μ m、珪藻化石が10~数百 μ m、骨針化石が10~100 μ m前後、植物珪酸体化石が10~50 μ m前後で

ある。一方、砕屑性堆積物の粒度は、粘土が約3.9 μ m以下、シルトが約3.9~62.5 μ m、砂が62.5 μ m~2mmである(地学団体研究会・地学事典編集委員会編、1981)。これら微化石類は、砂質堆積物中では少ないことから、土器胎土の材料粘土中に含まれるものと考えられる。こうした理由により、その材料粘土の起源を知るために有効な指標になるものとする。なお、植物珪酸体化石は、堆積物中に含まれていること、土器製作場では灰質が多く混入する可能性が高いなどから、他の微化石類のように粘土の起源を指標する可能性は低いと思われる。

検討した堆積胎土は、微化石類により、a) 海成粘土を用いた胎土、b) 淡水成粘土を用いた胎土、c) 水成粘土を用いた胎土、d) その他粘土を用いた胎土、に分類された。以下では、分類された胎土について述べる。

a) 海成粘土を用いた胎土 (No1, No3, No9, No11)

これらの胎土中には、放射虫化石や海水種珪藻化石 *Coccosinodiscus* 属/*Thalassiosira* 属が含まれる。また、水域に棲息する海綿動物の骨格をなす骨針化石も含まれる。

藤岡から富岡地域には、前期および中期中新世(地質時代の中新世は約520~2,330万年前)の富岡層群が分布している(松丸1977)。この富岡層群は、下位層から牛伏層・小幡層・井戸沢層・原田篠層・庭谷層・吉井層・板鼻層に区分され、有孔虫化石の産出から小幡層・井戸沢層・原田篠層・庭谷層・吉井層は粘土層を挟む海成層であることが知られている(松丸1977)。なお、放射虫化石の記述がないため、その産出層等については不明であるが、浮遊生の有孔虫化石が産出するため放射虫化石が含まれる可能性は高いと思われる。

b) 淡水成粘土を用いた胎土 (No12, No15)

これらの胎土中には、淡水種珪藻化石 *Eunotia* 属あるいは *Pinnularia* 属または *Cymbella* 属が含まれる。また、水域に棲息する海綿動物の骨格をなす

骨針化石も含まれる。

c) 水成粘土を用いた胎土 (No4~No7, No10, No13)

これらの胎土中には、水域に棲息する海綿動物の骨格をなす骨針化石あるいは不明種珪藻化石が含まれる。

d) その他粘土を用いた胎土 (No2, No8, No14)

これら胎土中には、材料粘土の堆積環境を指標するような微化石類は含まれていない。微化石類を含まない堆積物としては、断層粘土(藤根・小坂、1997)や風化成粘土あるいは段丘堆積物の礫層直上に堆積する粘土層などがある。

(5) 砂粒による分類

ここで設定した分類群のうち、50 μ m以上の複合鉱物類(岩石片類)は構成する鉱物や構造的特徴から設定した分類群であるが、地域を特徴づける源岩とは直接対比できない。これは、対象とする岩石片が細粒で岩石名を決定するのに必要な大きさがないことが原因である。このため、示される土器胎土中の鉱物、岩石片の岩石学的特徴は、地質学的状況(遺跡周辺の地質など)に一義的に対応しない。

ここでは、比較的大型の砂粒についての記載をもとに、母岩となる岩石を推定した。

岩石の推定は、泥岩質や砂岩質あるいは複合石英類(微細)が堆積岩類、複合石英類(大型)や複合鉱物類(含輝石類・含角閃石類・含雲母類)が深成岩類、ガラスがテフラ、斑晶質や完晶質が火山岩類、片理複合石英類などが片岩類にそれぞれ推定した。

その結果、対象とした胎土中の砂粒は、大きく4タイプに分類された。Aタイプは、片岩類や堆積岩類を主体とする砂粒から構成され、少ないもの凝灰岩類やテフラを伴う。Bタイプは、堆積岩類と火山岩類あるいは凝灰岩類を主体とする砂粒から構成され、少ないもののテフラを伴う。

堆積試料No12とNo15は、Bタイプに分類され堆積岩類や火山岩類あるいは凝灰岩類の砂粒から構成さ

れ、片岩類を特徴的に含むAタイプに分類された埴輪とは明確に区別される。

桜井ほか(1993)は、筑川流域における石器石材の研究の一環として、合流する現河川の露種等の調査を行っている。この結果を見ると、南牧川が合流する地点より上流部では、片岩類は全く見られないと同時に安山岩などの火山岩類の割合が高い。一方では、鮎川のように圧倒的に片岩類の礫からなる河川も存在する。こうした現河川において見られる特徴は、これら埴輪胎土として少なからず反映するものと考えられる。なお、堆積岩類とした砂粒は、顕微鏡下における特徴であり、変成度の低い片岩類と思われる。

(6) 埴輪胎土の特徴とその他の特徴

検討した埴輪試料は、粘土の起源が2タイプに分類され、砂粒の組成が2タイプに分類された。粘土の起源と砂粒組成の関係注目すると、放散虫化石な

どを含む海成粘土や骨針化石を含む水成粘土あるいはその他の粘土を用いた埴輪では、例外なく砂粒組成は片岩類や堆積岩類からなるAタイプである。一方、埴輪試料№12および№15は、粘土が淡水成であると同時に砂粒は火山岩類や堆積岩類あるいは凝灰岩類からなるBタイプである(第12表)。海成粘土や水成粘土あるいは微化石類を含まないその他粘土を用いた埴輪は、粘土の起源が異なるものの、砂粒組成が良く似ていることから、砂粒組成の特徴を示す地域で、かつ起源の異なる粘土を産する地域であることが予想される。こうした材料面の検討から、対象とした埴輪は、2群に区分される。この2群は、製作域を示すと同時に製作集団の違いをも示す可能性が高い。このうち、砂粒組成によりAタイプとした埴輪試料は、材料粘土に違いが見られることから、砂粒組成が示す地域の集団の違いを示すことも考えられる。

骨針化石は、試料№1と№11に多いものの、他の

第12表 埴輪胎土中の粘土および砂粒の特徴

№	報告書№	古墳、種類	粘 土		砂 粒		その他の特徴
			分類起源(微化石類)	分類	推定岩石組み合わせ		
1	0618	観音山古墳円筒	※ 海成(放散虫、珪藻、骨針化石)	A	片岩類、堆積岩類(凝灰岩類、テフラ)	雲母類多量、骨針化石多産	
2	0762	観音山古墳円筒	その他	A	片岩類、堆積岩類(凝灰岩類、テフラ)		
3	0487	観音山古墳円筒	□ 水成(骨針化石)	A	片岩類、堆積岩類(凝灰岩類、テフラ)		
4	0600	観音山古墳円筒	□ 水成(骨針化石)	A	片岩類、堆積岩類(凝灰岩類、テフラ)		
5	0783	観音山古墳円筒	□ 水成(骨針化石)	A	片岩類、堆積岩類(テフラ、凝灰岩類、火山岩類)		
6	0518	観音山古墳円筒	□ 水成(骨針化石)	A	片岩類、堆積岩類(テフラ、凝灰岩類)		
7	—	観音山古墳円筒	その他	A、	片岩類、堆積岩類(テフラ、凝灰岩類)		
8	0025	観音山古墳円筒	※ 海成(放散虫、珪藻、骨針化石)	A	片岩類、堆積岩類(凝灰岩類)		
9	0603	観音山古墳円筒	□ 水成(骨針化石)	A	片岩類、堆積岩類(凝灰岩類、テフラ)		
10	0766	観音山古墳円筒	※ 海成(放散虫、珪藻、骨針化石)	A	片岩類、堆積岩類(テフラ、凝灰岩類、火山岩類)		
11	2010	観音山古墳円筒	※ 海成(放散虫、珪藻、骨針化石)	A	片岩類、堆積岩類、凝灰岩類		
12	0538	観音山古墳円筒	○ 淡水成(珪藻化石)	B	堆積岩類、火山岩類(凝灰岩類、テフラ)		
13	0197	観音山古墳円筒	□ 水成(放散虫、珪藻、骨針化石)	A	片岩類、堆積岩類、凝灰岩質(テフラ)		
14	—	七興山古墳円筒	その他	A	堆積岩類、片岩類、凝灰岩質(テフラ)		
15	—	不動山古墳円筒	○ 淡水成(珪藻化石)	B	堆積岩類、火山岩類、凝灰岩質(テフラ)		

試料では少ない。また、雲母類を多く含む胎土では、片岩類を比較的多く含むことから、片岩類起源の雲母類と推定され、材料としては大きな違いを示すものとは考えられない。

以上のように、埴輪胎土の材料について検討することは、埴輪の形質などとともに制作地域あるいは製作集団の特徴などを反映していることが考えられる。

引用文献

- 地学団体研究会・地学事典編集委員会編 (1981) 『増補改訂地学事典』 平凡社 1612p.
- 藤根 久・小坂和夫 (1997) 『生駒西麓 (東大阪市) 産の縄文土器の胎土材料—新層内物質の可能性—』 『第四紀研究』 36(1) 55-62
- 車崎正彦・松本 亮・藤根 久・菱田 量・古橋美智子 (1996) 『埴土・埴胎土の材料—粘土の起源を中心に—』 『日本考古学協会第62会総会研究発表要旨』 日本考古学協会 153-156
- 松丸国照 (1977) 『関東山地北縁～北東縁の新第三系の層序』 『地質学雑誌』 83-4 213-225
- 板井美枝・井上昌美・関口博幸 (1993) 『群馬県における石器石材の研究1]—桐川流域における石器石材の調査—』 『研究紀要11』 1-14 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団